

Oracle® Application Server 10g

リリース・ノート

10g (9.0.4) for Microsoft Windows

2007 年 10 月

部品番号 : B13838-13

Oracle Application Server 10g リリース・ノート, 10g (9.0.4) for Microsoft Windows

部品番号 : B13838-13

原本名 : Oracle Application Server Release Notes, 10g (9.0.4) for Microsoft Windows

原本部品番号 : B13749-14

Copyright © 2003, 2007, Oracle. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかる目的で使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万がかかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしました、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle、JD Edwards、PeopleSoft は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他 の名称は、他社の商標の可能性があります。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることができます。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行（製品またはサービスの提供、保証義務を含む）に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしました、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

目次

はじめに	xix
マニュアルでの記載内容について	xx
最新情報の入手について	xx
対象読者	xx
このマニュアルの構成	xxi
関連文書	xxii
表記規則	xxiii
1 概要	
リリースに関する最新の情報	1-2
このドキュメントの目的	1-2
オペレーティング・システムの要件	1-2
動作要件	1-2
ライセンス情報	1-2
『Best Practices』	1-2
第I部	
2 全体	
本リリースでサポートされない機能	2-2
Oracle Content Management SDK リリース・ノート	2-2
3 日本語環境での使用上の注意	
既知の障害および注意事項	3-2
一般的な問題	3-2
Oracle Wallet Manager (OWM) 付属のVeriSignのルート証明書について	3-2
Oracle Application Server 10g (9.0.4) Admin and Development Client インストールの表示上の問題	3-3
ユーザー名が日本語の場合、Windows ネイティブ認証が使用できない (Bug 3291014)	3-3
DataDirect JDBC ドライバの使用について	3-3
日本語版オンライン・ヘルプ	3-3
コンポーネントに関する問題	3-3
OracleAS Forms Services	3-3
OracleAS Toplink	3-4
OracleAS Portal	3-4
OracleAS Discoverer	3-4
Oracle Reports	3-5

OracleAS Personalization	3-5
Oracle Application Server ProcessConnect	3-5
Oracle Application Server Single Sign-On	3-6
CD Pack に同梱されるパッチの適用について	3-6
Oracle Application Server Patch Set Release の適用について	3-6
Application Server のクローニング機能について	3-6
OracleAS Single Sign-On のアップグレードのためのパッチ	3-6
ドキュメントの修正および補足事項	3-7
ExcelVersion 作業環境に記載される不要な設定値	3-7

第 II 部 Oracle Application Server に関する一般的な問題

4 インストール、移行およびアップグレードに関する問題

インストール開始前の問題	4-2
ホスト名の制限	4-2
ドメイン名の制限	4-2
環境変数数の制限	4-2
環境変数 ORACLE_HOME をインストール前に設定しない	4-2
インストールに関する問題	4-2
Oracle Application Server 10g よりも先行させる Oracle9i Application Server 9.0.2 のインストール	4-3
再関連付けを実行する前に必要なデータの移行	4-3
ドメイン名が付加されていないコンピュータでの Configuration Assistant の障害	4-3
Microsoft Windows 2003 で Database Configuration Assistant が起動されない	4-4
staticports.ini ファイルの使用に関する追加情報	4-4
データベース登録の前のパッチの適用	4-4
RepCA を使用してカスタマ・データベースに Application Server Metadata Repository をインストールした後の追加手動構成	4-4
Oracle Database 10g のインストールでナレッジ・ベースを手動でインストールする必要がある場合	4-5
access_setup.bat ファイル用の .jre ロケーションの修正	4-5
Windows Oracle RepCA リリース 9.0.4.0.1 使用時の ORACLE_HOME の設定	4-6
エラー・メッセージのヘルプ情報が表示されない	4-6
Oracle Internet Directory スーパー・ユーザーとしてログインするとレルム値が使用されない	4-6
Oracle Application Server のコンポーネントで動作確認されている Intel Xeon プロセッサ	4-6
Oracle Certificate Authority Configuration Assistant	4-7
追加のデータベース・オプションの要件	4-7
インストール完了後の問題	4-7
staticports.ini ファイルを使用して HTTP SSL ポートを構成するときの注意	4-7
Microsoft Windows 上での OracleAS コールド・フェイルオーバー・クラスタ環境で必要なパッチ	4-7
「サービスの依存関係」に関する説明	4-7
アップグレードに関する問題	4-8
アップグレード実行前に Oracle Internet Directory リリース 9.0.2 を手動で無効化する	4-8
Metadata Repository のアップグレードに必要なデータベース・パッチ	4-8
Oracle9iAS 9.0.2 または 9.0.3 中間層のアップグレード	4-8
OracleAS Infrastructure 9.0.2 を 9.0.4 にアップグレードするための前提条件	4-9
既存の Reports サーバー（インプロセス・サーバーを含む）のアップグレード	4-9
ドキュメントの誤り	4-10
オプション：大規模な OC4J の更新のための JVM メモリーの増加	4-10
OracleAS Repository Creation Assistant (OracleAS RepCA) CD-ROM の名前に関する説明	4-10

『Oracle Application Server 10g アップグレード』でのパス・ロケーションの誤り	4-10
非対話のレスポンス・ファイルの例のパラメータの誤り	4-11
アンインストール手順: 中間層のアンインストール時には Oracle Ultra Search エントリを削除しない	4-11
データ・ソースの構成に関する情報の誤り	4-11
起動プロセス・リストの順序の誤り	4-11
OracleAS Metadata Repository を作成する前にファイルを移動する	4-11
『Oracle Application Server 10g アップグレード』の項名の誤り	4-12
『Oracle Application Server 10g インストレーション・ガイド』の管理者 (ias_admin) リセット・ パスワード参照の誤り	4-12
Java Runtime Environment (JRE) 1.4 の Oracle Ultra Search のインストールに関するドキュメントの 記載内容の誤り	4-13

5 管理およびセキュリティに関する一般的な問題

サポートされるネットワーク機能	5-2
OPMN に関する問題	5-2
ドキュメントの誤り	5-2
DCM に関する問題	5-2
DCM は明示的に停止しない	5-3
管理に関するその他の問題	5-3
その他のサービス機能	5-3
Microsoft Windows NT 上の DHCP およびホスト名	5-4
高可用性 Identity Management の構成	5-4
ホスト名の変更前に削除する必要のあるファイル・ベースのクラスタおよびファームのインスタンス	5-5
ドキュメントの誤り	5-5
「Metadata Repository リスナーの停止」手順のスペルの誤り	5-5
「Infrastructure サービスの変更」のコマンドの誤り	5-5
LDAP ベースのレプリカのステップの誤り	5-6
OracleAS Backup and Recovery Tool を使用するオプションの誤り	5-6

6 コア・ドキュメント

ドキュメントの誤り	6-2
『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』内の例の誤り	6-2
JServ サーブレット・エンジンのポート変更でのプロシージャの誤り	6-2
Identity Management の Oracle HTTP Server (SSO) ポートの変更	6-2
サポートされないレプリケーション・ベースの識別管理トポロジ	6-3

7 Oracle Application Server アクティブ・フェイルオーバー・クラスタに関する問題

一般的な問題と回避策	7-2
Oracle Ultra Search クローラを使用するためのデータベース・インスタンスの構成	7-2
ロード・バランサのフェイルオーバー	7-2
インストール・ホスト上でのみ有効な DAS	7-2
OracleAS Single Sign-On での障害を防止するための JDBC パッチのインストール	7-3
手動によるファイルの同期	7-3

第 III 部 J2EE、Web Services およびインターネット・アプリケーションに関する問題

8 Oracle Application Server Web Services

一般的な問題と回避策	8-2
HTML XML ウィザードの実行	8-2
ドキュメントの誤り	8-2
J2EE アプリケーションでの XML または HTML ストリームの消費 - HTML XML ウィザード	8-2
WSDL Analyzer についての参照部分の無視	8-2
デモのリンクの誤った記載	8-2

9 Oracle Application Server Forms Services

一般的な問題と回避策	9-2
Windows での CPU 使用率と応答時間の監視	9-2
事前起動の Forms プロセス使用時における Enterprise Manager に関する既知の問題	9-2
904 BI-Forms で同じマシンの 902 インフラストラクチャを使用すると SSO 動的リソース作成に失敗する問題	9-2
Graphics が 64 ビット Database に対して失敗する問題	9-3
ドキュメントの誤り	9-3
Enterprise Manager のオンライン・ヘルプ	9-3

10 Oracle Application Server Containers for J2EE の問題

構成に関する問題と回避策	10-2
OPMN によるデフォルトの CORBA SSL クライアント・ポートの割当が適切に行われない	10-2
ライブラリの共有と使用	10-2
ライブラリの共有	10-2
無効または不要なライブラリ要素によるパフォーマンスの低下	10-2
EJB JAR ファイル内にデプロイされたカスタム・ユーザー・マネージャ	10-3
起動クラスと停止クラスに関する考慮事項	10-3
OC4J での JDK の使用	10-3
サポートされる JDK バージョン	10-3
JDK 1.4 から JDK 1.3 へのソース・コードの移行	10-4
JDK 1.3 から JDK 1.4 へのソース・コードの移行	10-4
OC4J デモのダウンロード	10-4
OC4J 構成ファイルの編集後に表示される警告メッセージ	10-4
OC4J オブジェクト名にはシングルバイトの英数字のみ使用可能	10-5
J2EE アーカイブのデプロイ時のリモート・ファイル・システムからの権限に関する問題	10-5
Oracle Application Server 10g では JDK 1.3.1.05 以上が必要	10-5
Tomcat Examples の削除	10-5
JSP、タグ・ライブラリおよび関連デモに関するリリース・ノート	10-5
パッケージに含まれないクラスを起動できない	10-6
OC4J 起動時における SAX ドライバの設定	10-6
JSP ojspc の問題	10-7
debug オプションは ojspc の出力に影響を与えない	10-7
/WEB-INF/lib や /WEB-INF/classes ディレクトリには .java ファイルを含めない	10-7
JESI タグに関するリリース・ノート	10-7
JESI タグに対する条件付き処理が不要	10-7
JESI personalize タグで一重引用符を追加	10-7
インクルードされたページ内に fragment タグを配置可能	10-7

複数の control タグまたは template タグが使用可能	10-8
template タグの開始タグと終了タグの外側にレスポンス出力がない	10-8
明示的な ESI マークアップは JESI タグで使用しない	10-8
タグ・ライブラリ・ディスクリプタは WEB-INF の下に配置	10-8
OC4J の実行中にタグ・ライブラリ JAR ファイルを /WEB-INF/lib に追加	10-8
ローカル・クラスを最初に検索	10-8
java.lang.ClassFormatError: (切り捨てられたクラス・ファイル)	10-9
サーブレットに関するリリース・ノート	10-9
パッケージに含まれないクラスを起動できない	10-9
開発時にクラス名別のサーブレット起動が可能	10-9
<orion-web-app> の一部の属性が使用不可	10-10
EJB に関するリリース・ノート	10-10
クライアント・リクエストにポート番号を含める必要性	10-10
MDB トランザクション・タイムアウト	10-10
MDB onMessage() メソッドでの JMS 用 JMS 接続の作成と解放	10-10
orion-ejb-jar.xml ファイル変更時の考慮事項	10-11
EJB の静的ロック	10-11
ping タイムアウトによる OC4J インスタンスの終了	10-11
EJB に関するその他のリリース・ノート	10-12
OC4J サービスに関するリリース・ノート	10-12
JNDI に関するリリース・ノート	10-13
JNDI クラスタリング: サポート外のクライアントからのバインド値	10-13
IIOP 相互作用の JDK バージョンを混在させない	10-13
Java Object Cache (JOC) に関するリリース・ノート	10-13
JOC 構成で javacache.xml を使用	10-13
OC4J データソースに関するリリース・ノート	10-13
エミュレートされていないデータソースで必要な Java 対応データベース	10-13
Oracle JMS のリリース・ノート	10-14
Oracle 8.1.7 OCI データベース・ドライバで操作する Oracle JMS の使用	10-14
デフォルト・アプリケーション用サードパーティの JMS プロバイダは OC4J の再起動を停止する	10-14
OracleAS JAAS Provider に関するリリース・ノート	10-14
OracleAS JAAS Provider での 9.0.4 Oracle Internet Directory Server の使用	10-14
ドキュメントの誤り	10-15
『Oracle Application Server Containers for J2EE サーブレット開発者ガイド』の誤り	10-15
『Oracle Application Server Containers for J2EE JavaServer Pages 開発者ガイド』の誤り	10-15
『Oracle Application Server Containers for J2EE ユーザーズ・ガイド』の誤り	10-15
『Oracle Application Server Containers for J2EE サービス・ガイド』の誤り	10-16
ssoInfo デモのログイン・ユーザー名の変更	10-16
サード・パーティ製データベースに対して修正された JDBC 接続文字列	10-17
SSL 構成に関する訂正	10-18
LDAP の location 属性を jazn.xml または orion-application.xml に設定しない	10-18
「Oracle Internet Directory で SSL を使用するための JAAS Provider の構成」の構成例の訂正	10-18
「キャッシングの構成 (LDAP ベース・プロバイダのみ)」の構成例の訂正	10-19
Oracle Application Server 10g とともにインストールされる JDK1.4	10-19

11 Oracle HTTP Server

一般的な問題と回避策	11-2
Oracle Application Server Single Sign-On Wallet はサポートされていない	11-2
OC4J プラグインのスタンドアロンとコア・インストールでの使用方法	11-2

mod_oc4j と mod_jserv を同時に使用する際の制限	11-2
OSO プラグインを使用するためのファイル権限の変更	11-2
mod_oprocmgr の有効化	11-2
構成に関する問題と回避策	11-3
Oracle HTTP Server (1.0.2.2.x) を Oracle Application Server (9.0.4.x) で使用できない問題	11-3
mod_plsql 構成ファイルの手動による編集	11-3
無効な mod_plsql 構成ファイルが Oracle Enterprise Manager インタフェースに表示されない問題	11-3
FastCGI ソケット・パスの長さエラー	11-3
ポート・トンネリングまたは mod_oc4j での SSL を使用可能にした後に Oracle HTTP Server が起動しない問題	11-4
mod_jserv を使用可能にする場合の ApJServManual 設定情報	11-4
ドキュメントの誤り	11-4
メトリック・ベースのロード・バランシングに関する追加情報	11-4
IIS 用の匿名アクセスの構成	11-4
Sun ONE での OC4J プラグインの構成の手順における誤り	11-5
プロキシ・プラグインを使用するための Sun ONE リスナーの構成の手順における誤り	11-5
Oracle ではサポートされていないモジュールの記述の誤り	11-6

12 Oracle Application Server TopLink

一般的な問題と回避策	12-2
新しいパッケージ名	12-2
API の変更	12-2
OracleAS TopLink の例	12-3
BEA WebLogic 8.1 Service Pack 1 での EJB QL 解析と JSP 実行	12-3
EJB QL 解析	12-3
JSP 実行	12-3
XML パーサーの依存性	12-3
OC4JXML パーサーの依存性	12-3
Crimson XML パーサーの問題	12-3
UTF-8 エンコードの例外	12-4
SAXParseException のエラー・メッセージ	12-4
OracleAS TopLink の使用：右から左へ記述する言語を使用する Web クライアント	12-4
データベースとの通信が失われた後はキャッシュ済の文の実行に失敗する問題	12-4
OracleAS TopLink を IBM WebSphere 5.1 とともに使用	12-4
クラスタリングを使用した検出機能の使用	12-4
OracleAS TopLink Mapping Workbench	12-5
Oracle Database の指定	12-5
以前のバージョンからのプロジェクトの移行	12-5
Microsoft Windows と ATI ビデオ・カードでの JDK の問題	12-5
マッピングされたネットワーク・ドライブの Windows XP での使用	12-6
JAWS の使用	12-6
アイコン・サイズ	12-6
大規模なクラスパスの参照	12-6
ソース・コードの生成	12-6
複数レベルの結合	12-6
サポートされない JRE	12-7
無効な警告メッセージ	12-7
配列型属性の不適切な set メソッド	12-7
式ビルダーでの取消しによって問合せが変更される問題	12-7

主キー・フィールドへの複数のマッピングが OracleAS TopLink Mapping Workbench での ejb-jar.xml ファイルの生成方法に影響を与える問題	12-7
コード生成されたプロジェクト・クラスでは式のすべての型の文字列値を使用	12-7
デフォルト以外のロケールの使用	12-8
ドキュメントの誤り	12-8
OracleAS TopLink の Web クライアントの構成	12-8
OracleAS TopLink Mapping Workbench のチュートリアル	12-8
『Oracle Application Server TopLink Mapping Workbench ユーザーズ・ガイド』	12-9

第 IV 部 Oracle Application Server Portal の問題

13 Oracle Application Server Portal

構成に関する問題と回避策	13-2
「Portal サービスの監視」リンクが動作しない	13-2
「Portal の Web Cache 設定」ページが正しく動作しない	13-3
oc4j.properties に手動で設定する必要のある oracle.http.configfile プロパティ	13-3
Federated Portal Adapter を SSL に関連付けるリライト規則の誤り	13-3
同一ホスト上の 2 つの Oracle HTTP Server にログインする際の問題	13-4
OracleAS Web Cache の SSL を使用可能にしているサイトでの OracleAS Portal ターゲットの監視	13-4
UI に関する問題と回避策	13-5
相対リンクが絶対リンクに変換される	13-5
ポートレットをページに追加するときの問題 - プロバイダの登録の失敗	13-6
Oracle9iAS Portal 9.0.2.6 からアップグレードした場合の余分なパースペクティブ・ページ・テンプレート	13-6
新しいバージョンの作成時にカスタム属性がデフォルト値に戻る	13-7
OmniPortlet、シンプル・パラメータ・フォーム、Web クリッピング・ポートレットに関する問題と回避策	13-7
ブラウザ要件	13-7
(OmniPortlet) インストール後に OmniPortlet プロバイダの更新が必要	13-7
(OmniPortlet) 「ニュース・レイアウト・スクロール」タイプが Netscape 4.79 でサポートされていない	13-7
(OmniPortlet) 書式化された数値がチャートで表示されない	13-8
検索に関する問題と回避策	13-8
検索エラー - 「ページ・グループ ID が存在しません。」(WWS-30641)	13-8
最大戻り値が機能しない	13-8
Netscape 4.79 を使用した検索結果の保存に関する問題	13-8
結果属性が表示されない	13-9
Oracle Text の有効化 / 無効化によるパースペクティブ選択への影響	13-9
検索結果ページに複数の検索ポートレットが配置されている場合の問題	13-9
パースペクティブを共有オブジェクトに昇格した場合の検索結果への影響	13-9
ページ・グループまたは検索属性が多数選択された場合に発生する問題	13-9
PDK に関する問題と回避策	13-9
OracleAS PDK の最新バージョン	13-10
WSRP および JSR 168 のサポート	13-10
NLS に関する問題と回避策	13-10
Oracle Text の検索の制限 (テキスト・ファイルおよび HTML ファイル)	13-10
Netscape 7.0 を使用した場合の BiDi の配置に関する問題	13-11
Excel/SYLK 形式のレポートを Microsoft Excel で開く場合の問題	13-11
ダブルバイトの空白キーで検索キーワードを区切れない	13-11
BiDi 言語ではテキスト入力が常に右から左に行われる	13-11

URL アイテムに関する ISO-8859 以外の Web ページの制限	13-11
ASCII 以外の文字に関する制限	13-11
共有タイプ・オブジェクトが英語以外のページ・グループに表示されない	13-12
Oracle Ultra Search ポートレットのヘルプ・ページに関する問題	13-12
OracleAS Portal でサポートされない一部のデータベース・キャラクタ・セット	13-12
ドキュメントの誤り	13-12
ドキュメントの誤り	13-12
アイテム / ポートレットのプロパティの編集	13-13
保留中のアイテムの編集	13-13
最新バージョンのイメージの参照	13-13
リスト・ビューでの作業	13-13
非公開アイテムのセクションに関する記述の誤り	13-14
アイテム・レベルのセキュリティとページ・キャッシュ	13-14
ユーザー・プロファイルのヘルプの誤り	13-14
カスタム検索結果の表示スタイルの定義	13-14
ページ・ポートレットへの背景色または背景イメージの適用	13-14
エラー・メッセージ WWC-40018 が誤って WWC-40019 と記述されている	13-14
JSR 168 ポートレットの登録	13-15
追加文書	13-15
パブリック・ユーザーはアイテム・レベルのセキュリティが有効であるページを検索できない	13-15
ログ・レジストリ・レコードのデータが不正確	13-15
新規プロバイダへの権限付与	13-15
カスタム属性に対する一意な名前の使用	13-15
WebDAV クライアントで期限切れアイテムが期限切れ後も表示される	13-16
Portal スマート・テキストおよび Portal スマート・リンク・アイテム	13-16
検索設定の変更を有効にするためにキャッシュの失効が必要	13-16

14 Oracle Ultra Search

一般的な問題と回避策	14-2
Oracle Ultra Search URL ステータス・コード	14-2
Oracle Application Server 10g へのアップグレード	14-3
Oracle Ultra Search および OracleAS Portal	14-3
データ・ソースに制限アクセスを使用する場合のセキュリティに関する考慮事項	14-3
データベース・キャラクタ・セット変更後の Oracle Ultra Search の再構成	14-4
マルチバイト名を使用したデータソースのクロールが失敗する	14-4
ISO-2022-JP キャラクタ・セットのデータのクロールが失敗する	14-4
すべてのデータベース・キャラクタ・セットが Oracle Ultra Search でサポートされていない	14-5
不具合	14-5
Oracle Ultra Search バックエンドのカスタマ・データベース・インストール	14-6
Oracle Application Server Repository Creation Assistant を使用したインストール	14-6
wk0setup を使用した手動インストール	14-6
データベース・キャラクタ・セット変更後のバックエンドの再構成	14-7
ドキュメントの誤り	14-8
全般的な訂正	14-8
セキュア検索	14-8
セキュアな Oracle Ultra Search インストールの構成	14-8
Oracle Application Server による Oracle Ultra Search Middle-Tier のインストール	14-9
Oracle HTTP Server および OC4J とともに Oracle Ultra Search Middle-Tier を構成する場合	14-9
ultrasearch.properties ファイルの編集	14-10

Oracle Ultra Search のバックエンドをリモート・クローラ・ホストで構成する場合	14-10
Oracle Ultra Search セキュリティ・モデル	14-11
リモート・クローラ・プロファイル	14-11

15 Oracle Application Server Syndication Services

ドキュメントの誤り	15-2
ファイルおよび WebDAV コネクタの増分更新に関する注意	15-2

第 V 部 Oracle Application Server Wireless の問題

16 Oracle Application Server Wireless

一般的な問題と回避策	16-2
マルチチャネル・ゲートウェイの使用	16-2
パフォーマンスの最適化と JSP ファイルの変更	16-3
メッセージのトランスポート	16-5
マルチバイトのユーザー名は Jabber ではサポートされない	16-5
ドライバ名の変更	16-5
プッシュ SOAP の URL	16-5
一部の MXML メッセージでのイメージの破損	16-5
通知の早期配信	16-6
XHTML および XForms	16-6
XHTML/XForms の非同期サポート	16-6
XForms で「戻る」ボタンを使用する際のエラー	16-6
XForms を使用したラジオ・ボタン、チェック・ボックスおよび選択リストの表示	16-6
XForms を使用したフォーム送信	16-6
Customization Portal でのデバイス妥当性チェック用にローカライズされた音声メッセージのエラー	16-7
再作成された SSO ユーザーが使用できない機能	16-7
シグネチャ獲得フォーム・コントロールの使用	16-7
Oracle Application Server Wireless と Web Cache の統合	16-7
Oracle Application Server Wireless と Oracle Portal の統合	16-7
Oracle Application Server Wireless の log.xml ファイルは NLS をサポートしない	16-7
POST メソッドはすべての言語でサポートされているわけではない	16-7
システム環境変数 (IAS_HOME) の大 / 小文字区別	16-7
モデル・オブジェクトの変更はアプリケーション全体には伝播されない	16-8
Web クリッピングのヘルプ・ページの制限	16-8
無効なユーザー・アカウント	16-8
Web クリッピングの出力が異なる言語で表示される場合がある	16-8
日本語文字列によるショート・メッセージの送信を避ける	16-8
韓国語文字でメッセージを保存できない	16-8
構成に関する問題と回避策	16-9
10g の 64 ビット・データベースで Configuration Assistant が Wireless に対してハングする	16-9
Oracle Application Server Wireless のスタンドアロン・インスタンス名にはシングルバイトの英数字のみ使用	16-9
OID に基づくアプリケーション・エンティティでの潜在的な競合	16-9
OC4J_Wireless	16-10
Oracle Application Server Wireless ホスト名の更新	16-10
Oracle Application Server Workflow の統合	16-11
OracleAS Wireless の不正なサイト URL	16-11

Openwave プラグインを使用した新規デバイスまたはシミュレータの検出	16-11
Oracle Application Server Wireless と Oracle Internet Directory の統合	16-11
Studio ツールおよび Customization ツールにログインできない	16-12
ドキュメントの誤り	16-12
ユーザーのロケールの決定	16-12
UNIX ポートの記述	16-12
Oracle Application Server Wireless Tool でのアカウント番号	16-13
MXML タグの用語集	16-13
音声アプリケーション用の Oracle Application Server Wireless の構成	16-13
オーディオ・パラメータの場所	16-13
Grammar.jsp	16-13
ドライバ属性	16-13
Jabber の例	16-14
チューニングに関する追加情報	16-14
更新された URL	16-14
Web サービスの使用	16-14
CMG MMS ドライバ	16-15
必要なサード・パーティ製ソフトウェア	16-15
クラス名	16-15
構成	16-15
追加構成	16-15
カスタマイズにおいてユーザー・パスワードを変更できない	16-16
既存のユーザーを追加してもエラーが発生しない	16-16
ユーザー・グループ更新時のエラー・メッセージ	16-16
デバイスの検索結果が更新されない	16-16
ロケーション検索でロケーション名が返されない	16-16

第 VI 部 キャッシュに関する問題

17 Oracle Application Server Web Cache

一般的な問題と回避策	17-2
セキュリティ	17-2
圧縮されたコンテンツが現在はブラウザに表示されない	17-2
エンド・ユーザーのパフォーマンス監視によって監視されるページの Cookie および JavaScript	17-2
パフォーマンスの低下とメモリー	17-2
ディスク領域とサービスの中断	17-3
HTTP 通信の変更の影響	17-3
範囲リクエストに対するレスポンス動作の変更	17-4
構成に関する問題と回避策	17-4
設定の開始方法	17-4
構成に関する一般的な誤り	17-5
ポートの競合	17-5
ラージ・オブジェクトのキャッシュ	17-6
chgpghost.sh 実行前にキャッシュをクラスタから削除する	17-6
アップグレード時におけるキャッシュ・クラスタ・メンバー間での失効リクエストの送信	17-6
セッションと複数の Cookie のバインド	17-7
Internet Explorer ブラウザにおけるキャッシュ操作の成功メッセージに関する再ロードの問題	17-7
Windows に固有の問題	17-7

Windows NT ワークステーション上の同時ユーザー数	17-7
webcache.xml の XML 解析エラーがイベントビューアに表示される	17-7
ドキュメントの誤り	17-7
root 権限による webcached の実行	17-7
オリジナル・サーバーのダミー Wallet	17-8

第 VII 部 ビジネス・インテリジェンスに関する問題

18 Oracle Application Server Discoverer

一般的な問題と回避策	18-2
動作要件	18-2
Discoverer Plus 終了時の内部エラー (Bug 3168973)	18-2
OracleAS Discoverer Plus とインターネット・ブラウザの組合せによってポップアップを使用できない (Bug 2932434)	18-3
Netscape v7.0 ブラウザでの OracleAS Discoverer Plus の起動 (Bug 2916131)	18-3
Excel にエクスポートする際の Microsoft Internet Explorer v6.0 の起動エラー (Bug 3114083)	18-3
NT での OracleAS Discoverer Plus と Sun Java Plug-In 1.4.1 の実行に関する障害 (Bug 2917867)	18-3
Microsoft Internet Explorer での HTTP 1.1 プロトコルと圧縮データの問題 (Bug 3106890)	18-3
Netscape 4.7 ブラウザを使用する OracleAS Discoverer Viewer に有効なフォント・サイズ (Bug 3113325)	18-4
Netscape 4.x での OracleAS Discoverer の使用に関する制限事項 (Bug 3182331)	18-4
Web キャッシュ接続をオーブンできないエラー (WWC-40019) (Bug 2960099)	18-4
Jinitiator 1.3 でトルコ語ロケールの OracleAS Discoverer Java Plus を起動できない (Bug 3231114)	18-5
英語以外の環境において、エクスポート後のセーブ・ファイルを再度開くと、Microsoft Excel が ハングもしくはエラーが表示される (Bug 2878213)	18-5
ボタンが表示されない、または英語のテキストで表示される (Bug 3083171)	18-5
英語以外の環境において英語テキストが表示される (Bug 3229690)	18-5
再実行できない一部の OracleAS Discoverer Configuration Assistant のコマンド (Bug 3491457)	18-5
OracleAS Discoverer Java Plus および OracleAS Discoverer Viewer での CORBA プロトコル・エラー・メッセージ (Bug 3541028)	18-5
OracleAS Discoverer のメモリ不足の場合に必要なレジストリ変更	18-6
構成に関する問題と回避策	18-6
Plus のトランSPORTが HTTPS の場合は常に HTTPS URL の使用が必要 (Bug 3024208)	18-6
インストール後の OracleAS Discoverer の構成でのエラー (Bug 3206792)	18-6
有用な情報	18-7
Oracle Discoverer 3.1 からのアップグレード	18-7
End User Layer 表の手動による編集	18-7
スケジュールされたワークブックのみを実行できるエンド・ユーザーによる問合せのリフレッシュ	18-7
HWOnline ファイルの利用	18-8
書式設定: 軸ラベルのフォント・サイズ	18-8
スケジューリングと集計	18-8
パフォーマンスを改善する OracleAS Discoverer Portlet Provider の追加構成パラメータ	18-8
Oracle Discoverer EUL Command Line for Java のコマンドによる Oracle Discoverer レジストリ変数の 設定	18-9
Oracle Discoverer のその他のレジストリ変数	18-10
OracleAS Discoverer Viewer のカスタマイズの移行	18-10
Oracle Discoverer EUL Command Line for Java の実行 (UNIX のみ)	18-10

OracleAS Discoverer と Real Application Clusters (RAC) / 透過的アプリケーション・	18-11
フェイルオーバー (TAF)	18-11
不要になった XWindow ディスプレイ	18-11
ドキュメントの誤り	18-12
Discoverer Portlet Provider を OracleAS Portal に登録するときに必要な追加手順	18-12
configuration.xml ファイルの構成設定の訂正	18-12
Oracle Discoverer EUL Command Line for Java のコマンド実行に関する構文例での '-jar' の欠落	18-12
規定されている EUL のリリース要件 5.1 は正しくは 5.0.2	18-12
ShowExpiredRunsOnExit 作業環境に表示される誤ったデフォルト設定	18-13
ユーザー・レベルの作業環境を 1.0.2.2 から 9.0.4 へアップグレードするためのコマンドの誤り	18-13

19 Oracle Reports

一般的な問題と回避策	19-2
Oracle Application Server での rwconverter ヘルプの表示	19-2
OLAP Server 問合せの作成	19-2
OPMN 管理の Reports Server での Graphics 6i の埋込みレポートの実行	19-2
Web への簡単なマトリックス・レポートの実行	19-2
JServ が構成されていると OracleAS Reports Services のデモが機能しない	19-2
構成に関する問題と回避策	19-3
負荷が高いマシンでの Reports Server の構成	19-3
Oracle Enterprise Manager に Windows サービスとして登録された Reports Server の起動	19-4
Reports Queue Manager を使用した管理者ログインの変更	19-4
PDF ファイルまたはプリンタへのグラフ出力のイメージ解像度の改善	19-4
Oracle Reports の Java 仮想マシンに対する値の指定	19-5
OID でのリソース作成時の Oracle Reports と Oracle Portal の統合エラーの解決	19-5
管理に関する問題と回避策	19-6
Reports Server 情報に対する Enterprise Manager のアクセスの認証	19-6
OracleAS Portal でのアイテム・リンクとしてのレポートの実行	19-7
NLS 固有の問題と回避策	19-8
マルチバイト・エンコーディングの JSP レポートのオープン / 実行	19-8
マルチバイトのオブジェクト型データにアクセスするレポートの実行	19-8
ヨーロッパ以外の言語での Oracle Enterprise Manager の画面の表示	19-8
ドキュメントの誤り	19-9

20 Oracle Application Server Personalization

一般的な問題と回避策	20-2
正確な製品名	20-2
「拡張」ボタンで「404 ファイル未検出」メッセージが表示される	20-2
ID 順ソートおよびタイプ順ソートが動作しない	20-2
パフォーマンスとデータ・サイジング	20-2
MOR 一時領域	20-3
SSL モード	20-3
MTR 参照が異なる場合に発生する RE パッケージの配布での障害	20-3
RE セッションがアクティブな場合に発生する RE パッケージの配布での障害	20-3
構成に関する問題と回避策	20-5
OracleAS Personalization に対する SSL の構成	20-5
ネイティブ・キャラクタ・セットの制限	20-6
未選択の Personalization がコンポーネント構成オプションに表示されない	20-6

RAC での作業には SID ではなく SERVICE_NAME の使用が必要	20-7
英語以外のロケールで構成スクリプトを起動できない	20-7
管理に関する問題と回避策	20-7
JDBC ドライバ	20-7
顧客データベース	20-8
パスワードの制限	20-8
混在できないデータベース言語とブラウザ言語	20-8
OracleAS Personalization のホーム・ディレクトリ	20-8
変更された OP MTR の列	20-8
OracleAS Personalization の高可用性	20-8
ドキュメントの誤り	20-8
『Oracle Application Server Personalization ユーザーズ・ガイド』の誤り	20-8
プログラマーズ・ガイドの 9.1.1 ~ 9.1.2 項のコード・サンプルの欠落	20-9
プログラマーズ・ガイドの B.3.2 項のコード・サンプルの欠落	20-9

第 VIII 部 E-Business 統合の問題

21 Oracle Application Server ProcessConnect

テクノロジ・アダプタに関する問題と回避策	21-2
Oracle Database アダプタ : ポートの値	21-2
Oracle Database アダプタ : 表定義の変更	21-2
Oracle Database アダプタ : ネイティブ・イベント作成時の XML 解析エラー	21-2
Oracle Database アダプタ : 同じ表名のスキーマを使用した相互作用の作成	21-2
ファイル /FTP アダプタ : Microsoft FTP サーバーがサポートされていない	21-3
8.1.7 アプリケーション (spoek) データベースを使用した Advanced Queuing アダプタ	21-3
アダプタおよび変換時の NullPointerException エラー	21-3
Oracle HTTP アダプタおよび Internet Information Server	21-4
アプリケーション・アダプタに関する問題と回避策	21-4
インストール時のライセンス登録	21-4
インストーラで CLASSPATH が正しく設定されない	21-4
Tuxedo 用の統合アダプタに関する問題と回避策	21-6
Oracle Connect の問題	21-6
Oracle Connect へのメタデータのインポート	21-6
モデリング・ツールとユーザー・インターフェースに関する問題と回避策	21-6
管理タブのハング	21-6
OC4J_ProcessConnect インスタンスの起動、停止および再起動	21-7
セッション・タイムアウト	21-7
Netscape のポップアップ・ウィンドウに関する問題	21-7
ユーザー・インターフェース操作の速度が遅い	21-8
複数ユーザーによる同一オブジェクトの更新	21-8
D3L 使用時の契約の検証に関する問題と回避策	21-8
デプロイに関する問題と回避策	21-8
別のメタデータ・リポジトリへの ProcessConnect 中間層の再関連付け	21-9
サポートされていない XSD 構成メンバーに関する問題と回避策	21-9
ワイルドカード要素を含む complexType	21-9
ネストされた置換グループ	21-11
匿名メンバーのカーディナリティ	21-12
type="xs:anySimpleType" のメンバー	21-13

その他の既知の問題	21-14
-----------------	-------

22 Oracle Workflow

構成に関する問題と回避策	22-2
Oracle Application Server および Oracle E-Business Suite の Oracle Workflow	22-2
Oracle Workflow コンポーネントのバージョン	22-2
Oracle Workflow Manager の構成	22-2
Workflow Configuration Assistant のサイレント・モードでの実行	22-3
LDAP ポート	22-6
ecxutils.jar に関するエラー	22-6
インストール後に行う Workflow ディレクトリ・サービス実装の変更	22-7
Oracle Database ユーザーから Oracle Internet Directory への変換	22-7
Oracle Internet Directory から Oracle Database ユーザーへの変換	22-8
Oracle Workflow への言語追加時のエラー	22-9
管理に関する問題と回避策	22-9
Java ベースの Workflow Notification Mailer	22-9
ドキュメントの誤り	22-10
データベース・アクセス記述子	22-10
DBMS_LDAP パッケージ	22-10

第 IX 部 管理とセキュリティに関する問題

23 Oracle Internet Directory

一般的な問題と回避策	23-2
Oracle Internet Directory データベースのシャットダウン時または接続に失敗した場合の OIDMON の動作	23-2
SSL 対応および非 SSL 対応の両 LDAP ポートでリスニングできる Oracle ディレクトリ・サーバー・インスタンス	23-2
不完全なバルク・ロード操作からの回復	23-2
Oracle9i Database Server リリース 9.2 に対して実行するディレクトリ・サーバーでプラグイン機能がサポートされない	23-2
ref 属性に値が設定されていると ROOT DSE を変更できない	23-3
中断されたバルク・ロード操作のロールバック	23-3
構成に関する問題と回避策	23-3
リリース 9.0.2 からのアップグレード後に必要なグループ・コンテナに対する ACL ポリシーの設定	23-3
Oracle Internet Directory が重複した authpassword ベリファイアを生成する	23-4
インストール時にルート DSE 直下の DN をデフォルトの識別管理レルム DN として選択しないこと	23-4
部分レプリケーションでは依存しているネーミング・コンテキストを変更できない	23-4
ファンアウト・レプリカに対する Oracle Application Server Single Sign-On のデプロイ	23-4
パスワード・ポリシーによる要求時に Oracle Internet Directory セルフ・サービス・コンソールを使用してパスワードを変更する	23-5
部分レプリケーションから除外できない必須属性	23-5
完全に指定されていないアクセス権が「アクセス権付与」になる	23-5
パスワードのヒントを本番 Oracle Internet Directory に移行できない	23-5
Oracle Internet Directory ユーザー編集時の「Constraint Violation」エラー	23-6
アップグレードに関する問題とアップグレードの準備作業	23-6
アップグレード前に参照する Oracle Metalink Note	23-6
認証前のパスワードの変更またはリセット	23-6

アップグレード前の Oracle Internet Directory のパスワードの確認	23-6
リエンタントでないアップグレード手順	23-7
orcladmin ユーザーがデフォルトのレルムに存在している必要がある	23-7
レプリカのアップグレード後の変更ログ・エントリのページ	23-8
管理に関する問題と回避策	23-8
部分レプリケーションでネーミング・コンテキストのルート・エントリを変更する ldapmoddn を 処理できない	23-8
特権ユーザー・アカウントのロック解除	23-9
Real Application Cluster またはラックマウント・モードでのディレクトリ・レプリケーションおよび Directory Integration and Provisioning Server インスタンスの再起動	23-9
Oracle Internet Directory のサーバーを起動できるのは Oracle Internet Directory ソフトウェアを インストールしたオペレーティング・システム・ユーザーのみ	23-9
ODS データベースのユーザー・パスワードは oidpasswd ツールによってのみ変更可能	23-9
Oracle ディレクトリ・サーバーを SSL モードでのみ使用すると Application Server Control で ポート・ステータス情報が表示されない	23-9
oidctl フラグ引数が原因でレプリケーション・サーバーが起動に失敗することがある	23-10
ドキュメントの誤り	23-10
init\$ORACLE_SID.ora のパラメータは、データベース起動時に自動的にロードされない	23-10
Oracle Internet Directory による 1 つのサーバー・インスタンスでの SSL モードと非 SSL モードの サポート	23-10
属性を除外するためのコンテンツ・ルールがこのリリースではサポートされていない	23-10
StopOdiServer.sh ツールの構文	23-11
自動ポートストラップ用のレプリカの構成についての追加情報	23-11
表 A-37 「プロビジョニング・サブスクリプション・ツールのパラメータ」の誤り	23-11
『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』の補足事項	23-12
『Oracle Internet Directory アプリケーション開発者ガイド』の「Oracle Internet Directory サーバー・ プラグインの開発」の章の誤り	23-12
レプリケーションの章は『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』の付録を参照すること	23-12

24 Oracle Delegated Administration Services

一般的な問題と回避策	24-2
パスワード・ポリシーによる要求時に Oracle Internet Directory セルフ・サービス・コンソールを 使用してパスワードを変更する	24-2
リリース 9.0.2 および 9.0.4 で Oracle Delegated Administration Services の構成権限でレルムの値を 編集できない	24-2
メンバーが指定されていないロールが「ユーザーの作成」および「ユーザーの編集」の 「ロールの割り当て」セクションに表示されない	24-2
グループ所有者が同じセッションで作成されたグループを編集できない	24-2
Oracle Internet Directory を再起動すると DAS セッション・エラーが返される	24-3
構成に関する問題と回避策	24-3
個別のホストへの Oracle Delegated Administration Services のデプロイ	24-3
デフォルトのレルム管理者に必要な構成権限がない	24-3
Oracle Delegated Administration Services を構成して 9.0.2 から 9.0.4 にアップグレードされた Oracle Internet Directory のインストールに対して実行	24-3
Oracle Internet Directory リンクのアクセス時の OracleAS Single Sign-On ログイン・エラー	24-4
管理に関する問題と回避策	24-4
Oracle Internet Directory セルフ・サービス・コンソールの「Unified Messaging Voicemail PIN」 フィールドのラベルの誤り	24-4
特権ユーザー・アカウントのロック解除	24-4

1 つの DNS ドメインで Oracle Delegated Administration Services を、別の DNS ドメインで OracleAS Portal を実行	24-5
ドキュメントの誤り	24-5
オンライン・ヘルプに誤って記載されている識別管理レルムの編集方法	24-5
「ロールの構成」画面のオンライン・ヘルプが表示されない	24-5

25 Oracle Directory Integration and Provisioning

構成に関する問題と回避策	25-2
Directory Integration and Provisioning Assistant を使用する前にプロパティ・ファイルにエンコードを指定	25-2
Oracle Directory Manager による Directory Integration プロファイルの作成時に ACI が正しく設定されない	25-2
デフォルトの識別管理レルムの位置をサード・パーティ・ディレクトリ・ドメインにあわせる	25-3
Directory Integration and Provisioning Server のインストール後のステータス	25-3
2 つの Oracle Internet Directory プラグイン機能が、Oracle Internet Directory リリース 9.2 からアップグレードした後サポートされない	25-3
管理に関する問題と回避策	25-4
Real Application Cluster またはラックマウント・モードでのディレクトリ・レプリケーションおよび Directory Integration and Provisioning Server インスタンスの再起動	25-4
Real Application Clusters および Directory Integration and Provisioning Service の使用	25-4
Windows 同期化レルムで必要なユーザー・スキーマ	25-4
選択したオブジェクト・タイプの Active Directory から Oracle Internet Directory への同期化	25-5
Oracle Internet Directory から Active Directory へのパスワードの同期化	25-5
特殊文字を含むグループ名を Microsoft Active Directory と同期化できない	25-5

26 Oracle Application Server Certificate Authority

構成に関する問題と回避策	26-2
OracleAS Single Sign-On 登録時に誤った URL が表示される	26-2
Netscape ブラウザを使用する場合のエラー・メッセージ	26-2

27 Oracle Enterprise Manager

一般的な問題と回避策	27-2
同一ホスト上での複数のアプリケーション・サーバーの管理時に複数のブラウザ・ウィンドウを使用	27-3
OC4J メトリックを収集するための Oracle HTTP Server の実行	27-3
仮想ホストに IP とポートの複数の組合せは入力できない	27-3
OracleAS Web Cache 管理ポート用プロトコルと統計ポート用プロトコルの一致	27-3
JAZN 構成時にサポートされないパス情報	27-3
OC4J アプリケーションのデプロイ時に発生する参照エラー	27-4
OC4J の「セキュリティ」ページでユーザーを追加した後は OC4J の再起動が必要	27-4
ブラウザ・ウィンドウに表示される「SMISession has been invalidated」エラー	27-4
地域および言語オプション設定と NLS_LANG パラメータ	27-5
新規作成した仮想ホストのアクセス・ログがログ・ビューアで使用できない	27-5
ログ・ビューアでの XML ログ・ファイルの表示に関する問題	27-5
Oracle Application Server 9.0.2 または 9.0.3 の削除後に発生する Oracle Application Server 10g Application Server Control に関する問題	27-5
Application Server Control のパフォーマンス・ノート	27-6
Internet Explorer および Netscape Navigator 7.0 でのデプロイ・パフォーマンス	27-6
大規模な OC4J アプリケーションのデプロイの問題	27-6

エージェントのメモリー・エラー	27-6
追加のパフォーマンス・ノート	27-7
Oracle HTTP Server リスナー・ポートが重複してリストされる	27-7
プロパティを Oracle Application Server クラスタ内の OC4J インスタンスに適用した際に誤解を招く おそれのあるエラー・メッセージ	27-7
アプリケーション・サーバー・インスタンスの Metadata Repository を変更した際の不明な Oracle ホーム・エラー	27-7
コマンドラインから実行した管理タスクが Application Server Control のページに反映されない	27-8
Internet Explorer 5.5 を SSL モードで使用した場合の問題	27-8
OracleAS ProcessConnect または Oracle Workflow コンポーネント用のスキーマ・パスワードの変更は サポートされない	27-8
Infrastructure のインストールで Home インスタンスはデフォルトで使用不可	27-8
スタンダロン・バージョンの OracleAS Forms Services および OracleAS Reports Services の 「Infrastructure」ページの使用	27-8
HTTP Server の拡張プロパティを Netscape Navigator で編集するときのエラーと制限	27-9
Enterprise Manager を使用して WAR アプリケーションを再デプロイする際の回避策	27-9
ログ・ファイルのタイムスタンプが正確でない	27-9
「Web Cache 管理」ページへのリンク時にページが表示されないエラー	27-10
Oracle Application Server 10g (9.0.4) を使用するコンピュータでの Enterprise Manager Grid Control 10.1.0.2 Management Agent の削除	27-10
OC4J インスタンスの追加時または削除時のエラー	27-11
Application Server Control において OracleAS Web Cache を管理および機能監視するための Cookie の有効化	27-11
Macintosh ブラウザを使用してパフォーマンス・チャートを表示する際および Identity Management を 構成する際の問題	27-11
Macintosh ブラウザを使用する際の進捗ページの問題	27-12
ログ・ページからのデータのポスト	27-12
ドキュメントの誤り	27-12
setupinfo.txt ファイルの位置の誤り	27-13

はじめに

この章には次の項目があります。

- マニュアルでの記載内容について
- 最新情報の入手について
- 対象読者
- このマニュアルの構成
- 関連文書
- 表記規則

マニュアルでの記載内容について

Oracle Application Server 関連マニュアルは、英語版を翻訳しているため、マニュアル内で参照されている情報には、日本では提供されていないものも含まれます。また、操作手順などを示すスクリーンショットは英語版と日本語版が混在します。

- インターネット URL
- マニュアル名
- ソフトウェア名

最新情報の入手について

日本オラクルでは、インターネット開発者向けのあらゆる技術リソースを、24 時間 365 日提供するコミュニティ・サイト OTN-J (Oracle Technology Network Japan) を運営しています。

OTN-J では、最新の技術情報、オンライン・マニュアル、ソフトウェア・コンポーネントなどを、無料で入手できます。

<http://otn.oracle.co.jp/>

また、最新のセキュリティ情報については、以下のサイトを参照してください。

<http://otn.oracle.co.jp/security/>

対象読者

『Oracle Application Server 10g リリース・ノート』は、Oracle Application Server 10g のすべての利用者向けに書かれています。

マニュアル内にある外部 Web サイトへのリンクの利用について このマニュアルには、オラクル社が所有または管理していない他の企業や組織の Web サイトへのリンクが記載されている場合があります。オラクル社では、このような Web サイトの利用に関する評価も代弁も行いません。

このマニュアルの構成

このドキュメントには次の章があります。

第1章「概要」

第I部

第2章「全体」

第3章「日本語環境での使用上の注意」

第II部「Oracle Application Server に関する一般的な問題」

第4章「インストール、移行およびアップグレードに関する問題」

第5章「管理およびセキュリティに関する一般的な問題」

第6章「コア・ドキュメント」

第7章「Oracle Application Server アクティブ・フェイルオーバー・クラスタに関する問題」

第III部「J2EE、Web Services およびインターネット・アプリケーションに関する問題」

第8章「Oracle Application Server Web Services」

第9章「Oracle Application Server Forms Services」

第10章「Oracle Application Server Containers for J2EE の問題」

第11章「Oracle HTTP Server」

第12章「Oracle Application Server TopLink」

第IV部「Oracle Application Server Portal の問題」

第13章「Oracle Application Server Portal」

第14章「Oracle Ultra Search」

第15章「Oracle Application Server Syndication Services」

第V部「Oracle Application Server Wireless の問題」

第16章「Oracle Application Server Wireless」

第VI部「キャッシュに関する問題」

第17章「Oracle Application Server Web Cache」

第VII部「ビジネス・インテリジェンスに関する問題」

第18章「Oracle Application Server Discoverer」

第19章「Oracle Reports」

第20章「Oracle Application Server Personalization」

第VIII部「E-Business 統合の問題」

第21章「Oracle Application Server ProcessConnect」

第22章「Oracle Workflow」

第IX部「管理とセキュリティに関する問題」

第23章「Oracle Internet Directory」

第24章「Oracle Delegated Administration Services」

第25章「Oracle Directory Integration and Provisioning」

第26章「Oracle Application Server Certificate Authority」

第27章「Oracle Enterprise Manager」

関連文書

リリース・ノート、インストレーション・マニュアル、ホワイト・ペーパーまたはその他の関連文書は、OTN-J (Oracle Technology Network Japan) の Web サイトから無償でダウンロードできます。OTN-J を使用するには、オンラインでの登録が必要です。次の URL で登録できます。

<http://otn.oracle.co.jp/membership>

OTN-J のユーザー名とパスワードをすでに取得している場合は、次の OTN-J Web サイトの文書セクションに直接接続できます。

<http://otn.oracle.co.jp/document/index.html>

表記規則

この項では、このマニュアルの本文およびコード例に使用されている表記規則について説明します。ここで説明する内容は、次のとおりです。

- [本文の表記規則](#)
- [コード例の表記規則](#)
- [Microsoft Windows オペレーティング・システム環境での表記規則](#)

本文の表記規則

本文中には、特別な用語が一目でわかるように、様々な表記規則が使用されています。次の表に、本文の表記規則と使用例を示します。

表記規則	意味	例
太字	太字は、テキスト内で定義されている用語、用語集に記載されている用語、またはその両方に該当する用語を示します。	この句を指定することにより、索引構成表が作成されます。
固定幅フォントの大文字	固定幅フォントの大文字は、システムによって指定される要素を示します。この要素には、パラメータ、権限、データ型、Recovery Manager キーワード、SQL キーワード、SQL*Plus またはユーティリティ・コマンド、パッケージとメソッド、システム指定の列名、データベース・オブジェクトおよび構造体、ユーザー名およびロールが含まれます。	この句は、NUMBER 列にのみ指定可能です。 データベースをバックアップするには、BACKUP コマンドを使用します。 USER_TABLES データのディクショナリ・ビューの TABLE_NAME 列を問い合わせます。 DBMS_STATS.GENERATE_STATS プロシージャを使用します。
固定幅フォントの小文字	固定幅フォントの小文字は、実行可能ファイル、ファイル名、ディレクトリ名およびユーザー指定要素のサンプルを示します。これらの要素には、コンピュータ名、データベース名、ネット・サービス名および接続識別子、さらにユーザー指定のデータベース・オブジェクトおよび構造体、列名、パッケージおよびクラス、ユーザー名およびロール、プログラム・ユニットおよびパラメータ値が含まれます。 注意: プログラム要素の中には、大文字と小文字が混在して使用されているものもあります。これらの要素については、表示されているとおりに入力してください。	sqlplus と入力し、SQL*Plus を開きます。 パスワードは、orapwd ファイルに指定されています。 データファイルおよび制御ファイルを /disk1/oracle/dbs ディレクトリにバックアップします。 department_id、department_name および location_id 列は、hr.departments 表内に存在します。 QUERY_REWRITE_ENABLED 初期化パラメータを true に設定します。 oe ユーザーで接続します。 JRepUtil クラスによってこれらのメソッドが実装されます。
固定幅フォントの小文字のイタリック	固定幅フォントの小文字のイタリックは、プレースホルダまたは変数を示します。	parallel_clause を指定できます。 old_release.SQL を実行します。old_release は、アップグレード前にインストール済みのリリースを示します。

コード例の表記規則

コード例では、SQL、PL/SQL、SQL*Plus またはその他のコマンドライン構文が示されます。この中では、次の例のように、固定幅フォントが使用され、通常の本文とは区別して表示されます。

```
SELECT username FROM dba_users WHERE username = 'MIGRATE';
```

次の表に、コード例に使用される表記規則と使用例を示します。

表記規則	意味	例
[]	大カッコはオプションの項目を示します。大カッコ自体 <code>DECIMAL (digits [, precision])</code> は入力しないでください。	
{ }	中カッコは、カッコ内の項目のうちの1つを指定する必要があることを示します。中カッコ自体は入力しないでください。	<code>{ENABLE DISABLE}</code>
	縦線は、大カッコまたは中カッコ内の選択肢を示します。これらのオプションのうちの1つを入力します。縦線自体は入力しないでください。	<code>{ENABLE DISABLE}</code> <code>[COMPRESS NOCOMPRESS]</code>
...	水平の省略記号は、次のどちらかを示します。	
	<ul style="list-style-type: none">コード中で、例に直接関係のない部分が省略されていること。コードの一部が繰返し可能であること。	<code>CREATE TABLE ... AS subquery;</code> <code>SELECT col1, col2, ... , coln FROM employees;</code>
.	縦方向の省略記号は、コード中で、例に直接関係のない行が何行か省略されていることを示します。	
その他の表記	大カッコ、中カッコ、縦線および省略記号以外の記号は、表示されているとおりに入力してください。	<code>acctbal NUMBER(11,2);</code> <code>acct CONSTANT NUMBER(4) := 3;</code>
イタリック体	イタリック体のテキストは、特定の値を指定する必要のあるプレースホルダまたは変数を示します。	<code>CONNECT SYSTEM/<i>system_password</i></code> <code>DB_NAME = <i>database_name</i></code>
大文字	大文字で表記されている部分は、システムによって指定される要素を示します。ユーザーが定義する用語と区別するために、これらの用語は大文字で表記されます。用語が大カッコで囲まれている場合を除いて、表示されている順序およびスペルのとおりに入力します。ただし、これらの用語には大文字・小文字の区別がないため、小文字で入力しても構いません。	<code>SELECT last_name, employee_id FROM employees;</code> <code>SELECT * FROM USER_TABLES;</code> <code>DROP TABLE hr.employees;</code>
小文字	小文字で表記されている部分は、ユーザーが指定するプログラム要素を示します。たとえば、表、列またはファイルの名前を示します。	<code>SELECT last_name, employee_id FROM employees;</code> <code>sqlplus hr/hr</code> <code>CREATE USER mjones IDENTIFIED BY ty3MU9;</code>
	注意： プログラム要素の中には、大文字と小文字が混在して使用されているものもあります。これらの要素については、表示されているとおりに入力してください。	

Microsoft Windows オペレーティング・システム環境での表記規則

次の表に、Microsoft Windows オペレーティング・システム環境での表記規則とその使用例を示します。

規則	意味	例
ファイル名およびディレクトリ名	ファイル名およびディレクトリ名は大 / 小文字が区別されません。特殊文字の左山カッコ (<)、右山カッコ (>)、コロン (:)、二重引用符 ("")、スラッシュ (/)、縦線 () およびハイフン (-) は使用できません。円記号 (¥) は、引用符で囲まれている場合でも、要素のセパレータとして処理されます。Windows では、ファイル名が ¥¥ で始まる場合、汎用命名規則が使用されていると解釈されます。	c:¥winnt"¥"system32 は C:¥WINNT¥SYSTEM32 と同じです。
Windows コマンド・プロンプト	Windows コマンド・プロンプトには、カレント・ディレクトリが表示されます。コマンド・プロンプトのエスケープ文字はカレット (^) です。プロンプトは、現在作業中のサブディレクトリを示します。このマニュアルでは、コマンド・プロンプトと呼びます。	C:¥oracle¥oradata>
特殊文字	Windows コマンド・プロンプトで二重引用符 ("") のエスケープ文字として円記号 (¥) が必要な場合があります。丸カッコおよび一重引用符 (') にはエスケープ文字は必要ありません。エスケープ文字および特殊文字の詳細は、Windows オペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。	C:¥>exp scott/tiger TABLES=emp QUERY=¥"WHERE job='SALESMAN' and sal<1600¥" C:¥>imp SYSTEM/password FROMUSER=scott TABLES=(emp, dept)
HOME_NAME	Oracle ホームの名前を表します。ホーム名には、英数字で 16 文字まで使用できます。ホーム名に使用可能な特殊文字は、アンダースコアのみです。	C:¥> net start OracleHOME_NAMETNSListener
ORACLE_HOME および ORACLE_BASE	Oracle8i より前のリリースでは、Oracle コンポーネントをインストールすると、すべてのサブディレクトリが最上位の ORACLE_HOME の直下に置かれました。ORACLE_HOME ディレクトリの名前は、デフォルトでは次のいずれかです。 <ul style="list-style-type: none"> ■ C:¥orant (Windows NT の場合) ■ C:¥orawin98 (Windows 98 の場合) <p>このリリースは、Optimal Flexible Architecture (OFA) のガイドラインに準拠しています。ORACLE_HOME ディレクトリ下に配置されないサブディレクトリもあります。最上位のディレクトリは ORACLE_BASE と呼ばれ、デフォルトでは C:¥oracle です。他の Oracle ソフトウェアがインストールされていないコンピュータに Oracle9i リリース 2 (9.2) をインストールした場合、Oracle ホーム・ディレクトリは、デフォルトで C:¥oracle¥ora90 に設定されます。Oracle ホーム・ディレクトリは、ORACLE_BASE の直下に配置されます。</p> <p>このマニュアルに示すディレクトリ・パスの例は、すべて OFA の表記規則に準拠しています。</p>	ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥rdbms¥admin ディレクトリへ移動します。

1

概要

この章では、Oracle Application Server 10g リリース・ノート 10g (9.0.4) の概要について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- リリースに関する最新の情報
- このドキュメントの目的
- オペレーティング・システムの要件
- 動作要件
- ライセンス情報
- 『Best Practices』

リリースに関する最新の情報

このドキュメントの内容は発行時点での正確な情報です。オラクル社では、ソフトウェアをリリースした後、リリース・ノートを定期的に更新します。リリース・ノートの最新情報および補足情報は、次の Oracle Technology Network Japan (OTN-J) の Web サイトからアクセスできます。

<http://otn.oracle.co.jp/document/index.html>

このドキュメントの目的

このドキュメントには、Oracle Application Server 10g (9.0.4) のリリース情報が記載されています。 Oracle Application Server 10g (9.0.4) とそのドキュメントに記載された機能との違いについて説明しています。

このドキュメントは次の各部に分かれています。

- Oracle Application Server に関する一般的な問題
- J2EE、Web Services およびインターネット・アプリケーションに関する問題
- Oracle Application Server Portal の問題
- Oracle Application Server Wireless の問題
- キャッシュに関する問題
- ビジネス・インテリジェンスに関する問題
- E-Business 統合の問題
- 管理とセキュリティに関する問題

製品をインストールする前、または製品を使用して作業を行う前に、このドキュメントの内容に目を通しておくことをお薦めします。

オペレーティング・システムの要件

Oracle Application Server のインストールおよび構成を正しく行うためには、インストールを開始する前に必要なハードウェアおよびソフトウェアを揃えておく必要があります。オペレーティング・システム要件の詳細は、『Oracle Application Server 10g インストレーション・ガイド』を参照してください。

動作要件

Oracle Application Server 10g (9.0.4) の動作要件に関する最新情報は、次のサイトを参照してください。

<http://www.oracle.co.jp/products/system/index.html>

ライセンス情報

Oracle Application Server 10g (9.0.4) のライセンスに関する情報は、次のサイトを参照してください。

<http://www.oracle.co.jp/products/price/index.html>

『Best Practices』

オラクル社では、『Best Practices』というホワイト・ペーパーを提供しています。このドキュメントには、Oracle Application Server の開発およびデプロイに関する一般的な手法、一般的な誤り、製品の使用例などが記載されています。

このホワイト・ペーパーは、OTN-J の Web サイトで入手できます。

<http://otn.oracle.co.jp/document/index.html>

第Ⅰ部

2
全体

本リリースでサポートされない機能

本リリースでは、以下の機能はサポートされません。よって、以下の機能に関するドキュメント上の関連記述も一切無効です。インストールされる関連ファイルやツールのご利用もサポートされません。

- Oracle Application Server InterConnect
- Oracle Application Server ProcessConnect
- アクティブ・フェイルオーバー・クラスタ
- OC4J スタンドアロン
- Oracle Enterprise Manager を使用したパッチのダウンロード
- Oracle Application Server の Oracle ホームのクローニング
- Oracle Application Server Portal における仮想プライベート Portal の設定と管理

Oracle Content Management SDK リリース・ノート

Oracle Content Management SDK に関する追加情報は『Oracle Content Management SDK リリース・ノート』を参照してください。

3

日本語環境での使用上の注意

既知の障害および注意事項

一般的な問題

Oracle Wallet Manager (OWM) 付属の VeriSign のルート証明書について

Oracle Wallet Manager (OWM) にはあらかじめ VeriSign のルート証明書が「信頼できる証明書」としてはいっています。以下の証明書の有効期限は、2004年1月8日8:59:59（日本時間）までになっております。

信頼できる証明書	有効期限
Class 2 Public Primary Certification Authority	2004年1月8日8:59:59（日本時間）
Class 3 Public Primary Certification Authority	2004年1月8日8:59:59（日本時間）

これらの証明書を使用する場合は、有効期限の新しい証明書に置き換える必要があります。

[置き換え方法]

以下は、有効期限の新しい上記、ルート証明書を Oracle Wallet へ設定する手順になります。

1. 以下の VeriSign サイトにアクセスをしてルート証明書を取得します。
<http://www.verisign.com/support/roots.html>
2. 取得された roots.zip ファイルを展開し、以下の 2 つのファイルを取り出し、Oracle Wallet のあるマシンに配置します。

```
"VeriSign - Thawte Combined Roots/VeriSign_Roots/Pca2ss_v4.b64"
"VeriSign - Thawte Combined Roots/VeriSign_Roots/Pca3ss_v4.b64"
```
3. Oracle Wallet Manager を起動します。
4. メニューの「Wallet」-->「開く」から使用している Oracle Wallet を開きます。
5. 「操作」-->「信頼できる証明書のインポート」を実行し、「証明書の貼り付け」か「証明書を含むファイルを選択」のどちらかを選択します。
 - 「証明書の貼り付け」の場合はテキストエディタで 2. で取り出したファイルをそれぞれ開き、カットアンドペーストで画面上に貼り付けます。
 - 「証明書を含むファイルを選択」の場合は 2. で配置したファイルの位置を指定します。
6. 2004年1月8日8:59:59（日本時間）で有効期限の切れる「Class 2 Public Primary Certification Authority」と「Class 3 Public Primary Certification Authority」を「操作」-->「信頼できる証明書を削除」を選択して削除します。
7. 追加された 2 つの証明書を確認し、以下のように有効期限が設定されていれば設定完了です。この Oracle Wallet をメニューの「Wallet」-->「保存」により元の位置で保存してください。
 - Class 3 Public Primary Certification Authority
 有効期限：
 2028年8月2日8:59:59（日本時間）

証明書 MD5 メッセージ・ダイジェスト：

10:FC:63:5D:F6:26:3E:0D:F3:25:BE:5F:79:CD:67:67

証明書 SHA1 メッセージ・ダイジェスト：

74:2C:31:92:E6:07:E4:24:EB:45:49:54:2B:E1:BB:C5:3E:61:74:E2

- Class 2 Public Primary Certification Authority

有効期限 :

2028年8月2日 8:59:59 (日本時間)

証明書 MD5 メッセージ・ダイジェスト :

B3:9C:25:B1:C3:2E:32:53:80:15:30:9D:4D:02:77:3E

証明書 SHA1 メッセージ・ダイジェスト :

67:82:AA:E0:ED:EE:E2:1A:58:39:D3:C0:CD:14:68:0A:4F:60:14:2A

Oracle Application Server 10g (9.0.4) Admin and Development Client インストールの表示上の問題

Oracle Application Server 10g (9.0.4) Admin and Development Client をインストールする際に、Oracle Universal Installer の「インストールする製品選択」画面では、「Oracle10g Database Client」という項目が表示されます。これは表示上の誤りであり、正しくは「Oracle Database Client」です。

インストール作業では、Oracle Database Client と読み替えて進めてください。

ユーザー名が日本語の場合、Windows ネイティブ認証が使用できない (Bug 3291014)

Active Directory のユーザー名に日本語を使用している場合、Windows ネイティブ認証を使用することはできません。

DataDirect JDBC ドライバの使用について

DataDirect JDBC ドライバは製品メディアには含まれていません。Oracle Technology Network Japan からダウンロードしてください。

<http://otn.oracle.co.jp/software/index.html>

使用方法については、『Oracle Application Server Containers for J2EE サービス・ガイド』を参照してください。

日本語版オンライン・ヘルプ

Oracle Application Server 10g (9.0.4) JP Update CD には、日本語版オンライン・ヘルプが収録されています。

収録されているヘルプの一覧およびインストール方法については、<CD-ROM>\help\readme.htm を参照してください。

コンポーネントに関する問題

OracleAS Forms Services

Forms で正しく処理できないマルチバイト CLOB データ

(3148851 および 1480307) Forms アプリケーションからマルチバイトの CLOB データのレコードをフェッチすると、FRM-40505 エラー・メッセージが表示されます。

Forms Developer の埋込みフォント

(2972738) Forms アプリケーション上のテキストで、Builder からフォント設定ができないものがあります。

たとえば、次のような場所があります。

- ウィンドウのタイトル
- コンソール行

- 「問合せ取消」ダイアログ
- LOV ウィンドウの検索ボックス
- フィールドのヘルプ・ダイアログ

これらのオブジェクトに使用されるフォントは明確ではなく、場合によっては（たとえばコンソール行やヘルプ・ダイアログ）、値が Forms アプレットにハードコード化されていることもあります。コンソールやフィールド・ヘルプ・ダイアログでハードコード化されるフォントは 12pt Sans Serif です。

右マウス・クリック時に起動しない When-Mouse-Click トリガー

(3208500) ユーザーがアイテムを右クリック（Windows の第 2 ボタンまたは UNIX の第 3 ボタンでクリック）すると、when-mouse-click トリガーが起動しません。

マルチバイト環境における構成

マルチバイト環境では、以下の設定を行うことをお勧めします。

- NLS_LANG 環境変数の設定
通常、default.env 環境ファイルまたはユーザー個別の環境ファイルで指定します。ユーザー個別の環境ファイルを使用する場合は、その環境ファイル名を envFile パラメータで指定する必要があります。
- defaultcharset (Forms 構成パラメータ) の設定
Forms 構成ファイル (formsweb.cfg) で指定します。

これらに関する詳細は、『Oracle Application Server Forms Services 利用ガイド』第 4 章 4.3 および 4.10 を参照してください。

OracleAS Toplink

日本語版オンラインヘルプでの検索機能について

Netscape 4.7x では、OracleAS TopLink 10g (9.0.4) の日本語版オンラインヘルプのトピック検索の機能が使用できません。

TopLink インストールに含まれる JRE について

Windows 版の OracleAS TopLink インストールには、Mapping Workbench および Sessions Editor の実行用に Sun JRE 1.4.2 が含まれています。

OracleAS Portal

Portal で表示される「リージョン」と「領域」について

OracleAS Portal で表示される「リージョン」と「領域」とは同義語として認識ください。

OracleAS Discoverer

ユーザー定義テンプレート・ダイアログの日本語表記に関する問題

ユーザー定義関数作成時にテンプレートを利用される場合、ユーザー定義関数テンプレート・ダイアログにおいて、適切でない日本語表現が、複数存在しています。ユーザー定義関数テンプレート利用時は、ヘルプおよびドキュメント『Oracle Application Server Discoverer Plus ユーザーズ・ガイド』を参照の上ご利用ください。

なお、ダイアログの日本語表記に関する修正は、次回 OracleAS Discoverer パッチ・リリースにおいて、反映される予定です。

Discoverer Plus/Viewer エクスポートされたファイルの文字エンコーディングに関して

Discoverer Plus/Viewer にて外部ファイル形式 (Excel 形式を除く) にてエクスポートした場合、文字エンコーディングとして [UTF-8] が指定されていることに、注意してください。

日本語 (マルチバイト・キャラクタ) を適切に表示するには、対応アプリケーション側の文字コードの指定として、[UTF-8] が指定されている必要があります。

OracleAS Discoverer Java Plus でエクスポートした ASCII 以外の名前のワークシートが Microsoft Internet Explorer v6.0 で自動的にオーブンされない (Bug 3231091)

OracleAS Discoverer Java Plus でエクスポートした ASCII 以外の名前のワークシートは、Microsoft Internet Explorer v6.0 で自動的にオーブンされません。

エクスポートしたシートを保存してからオーブンする必要があります。

Oracle Reports

マルチバイト環境における構成

マルチバイト環境で Reports を動作させるためには以下の構成が必要になります。

- PDF 出力のための設定

『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』第 6 章 6.5 の記述に従い、uifont.ali ファイルの設定を変更します。

Enterprise Manager によるジョブ表示のステータス情報の文字化け

Enterprise Manager から Reports Server の過去のジョブ・リストを参照できますが、ジョブのリストのステータス部分が文字化けして表示されます。同様の情報は、Reports Servlet の showjobs コマンドからも参照できます。

DESFORMAT=delimiteddata 使用に関する制限

DESFORMAT=delimiteddata は、Portal に登録されたレポートとしては実行できません。DESFORMAT=delimiteddata で使用する場合には、Portal への登録はしないでください。

OracleAS Personalization

スケジュールの作成およびデプロイが終了しない (Bug 3335423、3346563)

Oracle Application Server Personalizationにおいて、Oracle Database 10g (10.1.0) を使用する場合、スケジュールの作成およびデプロイが終了できません。これは、パッチを適用することで回避できます。

インストール方法については、Oracle Application Server 10g (9.0.4) JP Update CD の
 <CD-ROM>/personalization/3335423/README.txt
 <CD-ROM>/personalization/3346563/README.txt
 を参照してください。

Oracle Application Server ProcessConnect

アウトバウンドメッセージのエンコーディングについて

アウトバウンドメッセージのエンコーディングは、常に UTF-8 となります。

HTTP アダプタでのマルチバイトの扱いについて (Bug 3263237)

マルチバイト文字を扱う相互作用を定義する際は、content-type を「application/xml」または「application/octet」指定してください。content-type を「text/plain」と指定した場合、データが正常に扱われないことがあります。

電子メールアダプタでのマルチバイトの扱いについて (Bug 3260786)

マルチバイト文字を扱う相互作用を定義する際は、content-type を「xml attachment」または「binary attachment」と指定してください。content-type を「regular」または「text attachment」と指定した場合、データが正常に扱われないことがあります。

電子メールアダプタで添付ファイルがある際の注意点 (Bug 3215714)

添付ファイルがある場合、ヘッダーの文字コード情報が失われます。

Oracle Application Server Single Sign-On

ユーザー名が日本語の場合、Windows ネイティブ認証が使用できない (Bug 3291014)

Active Directory のユーザー名に日本語を使用している場合、Windows ネイティブ認証を使用することはできません。

CD Pack に同梱されるパッチの適用について

Oracle Application Server Patch Set Release の適用に関して

Oracle Application Server Patch Set Release はほとんどすべてのコンポーネントに対する修正を含みます。

Patch Set Release の適用に関しては、Oracle Application Server Patch Set Release CD-ROM に含まれるリリース・ノートを参照してください。

Application Server のクローニング機能について

クローニング機能を使用して、既存の Application Server インスタンスをコピーし、同じ構成を持つクローン・インスタンスを作成することができます。クローニング可能な Application Server のインストールタイプは、「J2EE and Web Cache」のみです。クローニングのためのパッチは Oracle Application Server 10g (9.0.4) JP Update CD の <CD-ROM>/cloning/3678691 にあります。クローニング機能の詳細については、OTN-J (Oracle Technology Network Japan) にある次のホワイト・ペーパーを参照してください。

<http://otn.oracle.co.jp/products/index.html>

『Oracle Application Server 10g (9.0.4) クローニングホワイト・ペーパー』

クローニング機能についての補足情報は、KROWN#87370 「[OracleAS9.0.4] クローニング・パッチ適用についての補足情報」を参照してください。ブラウザで以下の URL へアクセスして確認することができます。

[http://support.oracle.co.jp/open/owa/external_krown2.show_text?c_document_id=87370&c_criterion="](http://support.oracle.co.jp/open/owa/external_krown2.show_text?c_document_id=87370&c_criterion=)

クローニング・パッチの適用には OPatch を使用します。OPatch は Oracle Application Server 10g (9.0.4) JP Update CD の <CD-ROM>/opatch にあります。OPatch のインストールについては、<CD-ROM>/opatch/README.txt を参照してください。

OracleAS Single Sign-On のアップグレードのためのパッチ

『Oracle Application Server 10g リリース 1 (1.0.2.2.x) から 10g (9.0.4) へのアップグレード』で記述されているパッチ (3498669) は JP Update CD の <CD-ROM>/sso/3498669 に含まれています。

アップグレードの詳細は、パッチの中に含まれるドキュメント ssoupg_1022-904.pdf を参照してください。

ドキュメントの修正および補足事項

ExcelVersion 作業環境に記載される不要な設定値

『Oracle Application Server Discoverer 構成ガイド』の 8.8 項「Discoverer ユーザー作業環境のリスト」では、ExcelVersion の有効な値として、"Excel2000" と説明が記載されていますが、有効な値は、"Excel97" になります。

なお、この設定値は、1 シートにエクスポートされる行数を指定するもので、特定の Excel バージョンに関する情報を含んでいるわけではありません。

- Excel95 では、1 シート 16384 行に制限されています。
- Excel97 では、1 シート 65536 行に制限されています。

第II部

Oracle Application Server に関する一般的な問題

第II部では、Oracle Application Server に関する一般的な問題について説明します。ここでは、複数のコンポーネントに共通する問題などについて説明します。内容は次のとおりです。

- 第4章「インストール、移行およびアップグレードに関する問題」
- 第5章「管理およびセキュリティに関する一般的な問題」
- 第6章「コア・ドキュメント」
- 第7章「Oracle Application Server アクティブ・フェイルオーバー・クラスタに関する問題」

4

インストール、移行およびアップグレードに関する問題

この章では、Oracle Application Server のインストール、移行およびアップグレードに関する問題とその回避策について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- [インストール開始前の問題](#)
- [インストールに関する問題](#)
- [インストール完了後の問題](#)
- [アップグレードに関する問題](#)
- [ドキュメントの誤り](#)

インストール開始前の問題

この項では、インストール開始前の問題について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- ホスト名の制限
- ドメイン名の制限
- 環境パス変数の制限
- 環境変数 ORACLE_HOME をインストール前に設定しない

ホスト名の制限

ホスト名は 255 文字以下に制限されます。

ドメイン名の制限

OracleAS Metadata Repository をインストールする際、リポジトリのグローバル・データベース名の入力を求められます。通常の形式は `sid.domainname` です。グローバル・データベース名の `domainname` の部分には "-" 文字を含めることはできません。

データベース・ドメイン名は、ホスト・ネットワーク・ドメイン名と一致する必要はありません。したがって、ホスト・ネットワーク・ドメイン名には "-" 文字を含めることができます。

環境パス変数の制限

環境パス変数は 1023 を超えないようにしてください。1023 を超えると、Oracle Application Server 10g のインストールに失敗します。

環境変数 ORACLE_HOME をインストール前に設定しない

環境変数 `ORACLE_HOME` は、Oracle Application Server 10g のインストール前に設定しないでください。

インストールに関する問題

この項では、インストールに関する問題について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- Oracle Application Server 10g よりも先行させる Oracle9i Application Server 9.0.2 のインストール
- 再関連付けを実行する前に必要なデータの移行
- ドメイン名が付加されていないコンピュータでの Configuration Assistant の障害
- Microsoft Windows 2003 で Database Configuration Assistant が起動されない
- staticports.ini ファイルの使用に関する追加情報
- データベース登録の前のパッチの適用
- RepCA を使用してカスタマ・データベースに Application Server Metadata Repository をインストールした後の追加手動構成
- Oracle Database 10g のインストールでナレッジ・ベースを手動でインストールする必要がある場合
- access_setup.bat ファイル用の .jre ロケーションの修正
- Windows Oracle RepCA リリース 9.0.4.0.1 使用時の ORACLE_HOME の設定
- エラー・メッセージのヘルプ情報が表示されない
- Oracle Internet Directory スーパー・ユーザーとしてログインするとレルム値が使用されない
- Oracle Application Server のコンポーネントで動作確認されている Intel Xeon プロセッサ
- Oracle Certificate Authority Configuration Assistant
- 追加のデータベース・オプションの要件

Oracle Application Server 10g よりも先行させる Oracle9i Application Server 9.0.2 のインストール

Oracle Application Server 10g (9.0.4) と同じホスト上に Oracle9i Application Server 9.0.2 をインストールする場合は、9.0.2 をインストールしてから 9.0.4 をインストールしてください。

再関連付けを実行する前に必要なデータの移行

インストールに次の作業が含まれている場合を考えてみます。

- コンピュータ 1 に OracleAS Metadata Repository をインストールします。
- コンピュータ 2 に Oracle9iAS Infrastructure Identity Management コンポーネントをインストールし、コンピュータ 1 の OracleAS Metadata Repository に関連付けます。
- コンピュータ 3 に Oracle Application Server Middle-Tier をインストールし、コンピュータ 2 の Identity Management インストールとコンピュータ 1 の OracleAS Metadata Repository に関連付けます。
- コンピュータ 4 に OracleAS Metadata Repository を追加インストールします。

このインストール構成に従うことで、Oracle Enterprise Manager を使用して、コンピュータ 2 の Identity Management コンポーネントとコンピュータ 3 の Oracle Application Server Middle-Tier を、コンピュータ 4 の OracleAS Metadata Repository に再関連付けできます。

ただし、Oracle Enterprise Manager で再関連付けを実行する前に、コンピュータ 2 とコンピュータ 3 のデータをコンピュータ 4 に移行する必要があります。

ドメイン名が付加されていないコンピュータでの Configuration Assistant の障害

yourcompany.com などのドメイン名が付加されていないコンピュータに Oracle Application Server をインストールすると、次の製品のインストール時に Configuration Assistant で障害が発生する可能性があります。

- OracleAS Infrastructure 10g: Oracle Internet Directory Configuration Assistant で障害が発生します。
- Business Intelligence と Forms、および Portal と Wireless のインストール・タイプ: OracleAS Portal Configuration Assistant で障害が発生します。

これらの各インストールでは、TNS リスナーによるサービス名の解決ができないため、Configuration Assistant で障害が発生します。

この Configuration Assistant の障害を回避する手順は、次のとおりです。

- OracleAS Infrastructure 10g のインストールの場合は、次の手順を実行します。

1. `sqlnet.ora` ファイルで、`NAMES.DEFAULT_DOMAIN = ..` のようなエントリを検索して、コメント・アウトします。

```
#NAMES.DEFAULT_DOMAIN
```

2. `tnsnames.ora` ファイルで次のような SID エントリを検索します。

```
ASDB .. =
(DESCRIPTION =
(ADDRESS_LIST =
(ADDRESS = (PROTOCOL = TCP)(HOST = iwinrea08)(PORT = 1521))
(CONNECT_DATA =
@(SERVICE_NAME = asdb.us.oracle.com)))
```

3. `ASDB..` = エントリから余分な「..」を削除します。

4. Oracle Internet Directory Configuration Assistant を再試行します。

- OracleAS Portal Configuration Assistant で障害が発生する Business Intelligence と Forms および Portal と Wireless のインストール・タイプの場合は、次の手順を実行します。

1. `sqlnet.ora` ファイルで、`NAMES.DEFAULT_DOMAIN = ..` のようなエントリを検索して、コメント・アウトします。

```
#NAMES.DEFAULT_DOMAIN
```

2. OracleAS Portal Configuration Assistant を再試行します。

Microsoft Windows 2003 で Database Configuration Assistant が起動されない

Oracle Application Server 10g のインストール中に Database Configuration Assistant (DBCA) を実行すると、DBCA にインストールの進行状況を示すウィンドウが表示されます。

Microsoft Windows 2003 で DBCA のインストール進行状況を示すウィンドウが表示されない場合は、DBCA が実行されていないことを表します。

次の手順で DBCA を実行してください。

1. Oracle Universal Installer の Configuration Assistant のスクリーンで「Stop」をクリックし、DBCA を停止します。
2. 「再試行」をクリックして、DBCA を再起動します。

staticports.ini ファイルの使用に関する追加情報

Oracle Application Server 10g のインストールに `staticports.ini` ファイルを使用する場合は、次の点に注意してください。

- `staticports.ini` ファイルでポートを指定する場合、指定されたポートのすべてがコンピュータ上で使用されていないことを確認する必要があります。次の Microsoft Windows コマンドを使用すると、使用中のポートのリストを取得できます。
`C:\Windows\system32\netstat.exe`
- `staticports.ini` ファイルでポートを指定するときは、指定するポートと同じポートが複数のコンポーネントで使用されていないことを確認する必要があります。

データベース登録の前のパッチの適用

OracleAS RepCA を使用して SSL モードで Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録する場合は、最初にパッチ 3143899 をデータベースに適用する必要があります。データベースのリリースが 9.2.0.4 の場合はこのパッチが必要です。

パッチのインストール手順は、パッチに付属する `readme` ファイルを参照してください。

RepCA を使用してカスタマ・データベースに Application Server Metadata Repository をインストールした後の追加手動構成

Repository Creation Assistant (RepCA) を使用して、OracleAS Portal リポジトリなどの Application Server Metadata Repository をカスタマ・データベースにインストールした場合は、ORASSO_PS スキーマ用のインフラストラクチャ・データベースに接続できるように、SQL*Net の設定を手動で構成する必要があります。

この構成を実行しないと、OracleAS Single Sign-On (SSO) 管理ポートレットの使用時に OracleAS Portal でエラーが表示されます。

エラーの原因は、外部アプリケーション機能用の ORASSO_PS スキーマに接続するために OracleAS Portal で使用される DB リンクです。DB リンクは、Application Server Metadata Repository の格納先のデータベース・ホームに構成されている SQL*Net 設定を使用して解決されます（この場合、ポート・スキーマ (Application Server Metadata Repository の一部) は別のスタンダードアロン・データベースにインストールされます）。

回避策として、次の場所にある sqlnet.ora ファイルを手動で更新してください。

```
$ORACLE_HOME/network/admin/
```

これは、Application Server Metadata Repository がインストールされているデータベース・ホームにあります。次のように、NAMES DIRECTORY PATH エントリに LDAP を追加します。

```
NAMES.DIRECTORY_PATH= (LDAP, TNSNAMES, ONAMES, HOSTNAME)
```

Oracle Database 10g のインストールでナレッジ・ベースを手動でインストールする必要がある場合

次の状況では、ナレッジ・ベースを Companion CD から手動でインストールする必要があります。

- 新規 Oracle Database 10g に OracleAS Portal をインストールする前
- Oracle Database 10g で実行されるように既存の OracleAS Portal リポジトリをアップグレードした後
ナレッジ・ベースがインストールされていない場合は、Oracle Text の「テーマと要旨を使用可能にする」オプションを選択して OracleAS Portal を検索したときに、次のエラーが表示されます。

```
Error: The file could be not filtered. (WWS-32024)
```

ナレッジ・ベースの手動インストールの必要性は、メッセージの原因と処置には記述されていません。

access_setup.bat ファイル用の .jre ロケーションの修正

Oracle Application Server の disk1\install\win32\access_setup.bat ファイルは、インストール CD に存在しない .jre ファイルのことを指しています。

.jre ファイルのロケーションを修正するために、パッチ 3577025 をダウンロードする必要があります。パッチ 3577025 は、パッチを当てた access_setup.bat ファイルです。

Oracle Application Server をインストールする前に、必ず次の手順を全て実行して、パッチを当てた access_setup.bat ファイルをインストールしてください。

1. パッチを当てた access_setup.bat ファイルを、コンピュータ上のハード・ドライブにインストールします。

ここでは、C:\ ドライブをハード・ドライブとします。

2. DOS コマンドのウィンドウを開きます。

3. ディレクトリを CD-ROM ドライブに変更します。

ドライブ D:\ が Oracle Application Server インストール・ディスクを格納している CD ドライブであれば、ディレクトリを DOS コマンドウィンドウで D:\install\win32 と変更します。

4. 次のコマンドで、パッチを当てた access_setup.bat ファイルを実行します。

```
C:\access_setup.bat
```

既にアクセスブリッジをインストールしている場合は、JAWS スクリーン・リーダーを OFF にしてから上記のコマンドを実行します。

5. ディレクトリを C:\windows\system32 に変更して、javaaccessbridge.dll ファイルおよび windowsaccessbridge.dll ファイルが存在しているかどうかを検証します。

6. JAWS スクリーン・リーダーを一度 OFF にして、再起動します。

7. Oracle Application Server をインストールします。

Oracle Application Server をインストールした後に、必ず次の手順を全て実行して、パッチ 5906196 をインストールおよび使用してください。

1. パッチを当てた `access_setup.bat` ファイルを、コンピュータ上の `C:\inst\disk1\install\win32` にダウンロードします。
パッチを当てた `access_setup.bat` のダウンロードによって、Oracle Application Server のインストール時の既存の `access_setup.bat` が上書きされます。
ここでは、`C:\` ドライブをハード・ドライブとします。
2. Windows Explorer の場合は、ファイルを `C:\inst\disk1\install\win32\access_setup.bat` にダウンロードし、ダブルクリックしてファイルを実行します。
3. ディレクトリを `C:\windows\system32` に変更して、`javaaccessbridge.dll` ファイルおよび `windowsaccessbridge.dll` ファイルが存在しているかどうかを検証します。
4. JAWS スクリーン・リーダーを一度 OFF にして、再起動します。
5. Oracle Application Server をインストールします。

Windows Oracle RepCA リリース 9.0.4.0.1 使用時の ORACLE_HOME の設定

Oracle RepCA リリース 9.0.4.0.1 を使用するときは、`ORACLE_HOME` を指定する必要があります。たとえば、

`E:\oracle\product\10.1.0\db\`

は、次のディレクトリのかわりになります。

`E:\oracle\product\10.1.0\`

エラー・メッセージのヘルプ情報が表示されない

OracleAS RepCA のインストールの際に、Oracle Managed Files ディレクトリの画面でディスク・グループを選択せずに「次へ」をクリックすると、エラー・メッセージが表示されます。このエラー・メッセージの表示で「ヘルプ」をクリックしても、ヘルプ情報が表示されません。「ヘルプ」ボタンをクリックした場合、Java エラーが生成されます。

Oracle Internet Directory スーパー・ユーザーとしてログインするとレルム値が使用されない

OracleAS RepCA で、複数レルムを含む Oracle Internet Directory にスーパー・ユーザー (`cn=orcladmin`) としてログインすると、レルム値が使用されません。これは、スーパー・ユーザーがレルムに属さないためです。レルム値が使用されるのは、単純名を使用してログインする場合のみです。

Oracle Application Server のコンポーネントで動作確認されている Intel Xeon プロセッサ

Intel Xeon プロセッサは、Oracle Application Server で動作確認されています。ただし、インストール時の前提条件チェックが、Xeon プロセッサを使用するコンピュータで失敗します。この前提条件チェックの失敗は無視して、Oracle Application Server のインストールを続行してください。

Oracle Certificate Authority Configuration Assistant

『Oracle Application Server 10g インストレーション・ガイド』の表 B-1 には、Oracle Certificate Authority (OCA) Configuration Assistant についての説明がありません。

OCA Configuration Assistant は、認証の目的で Oracle Single Sign-On に統合されている、自己署名された認証局を構成します。

OCA Configuration Assistant を使用するには、まず Oracle Internet Directory、OracleAS Metadata Repository、Repository API、OracleAS Single Sign-On を構成しなければなりません。

OCA Configuration Assistant のログ・ファイルは次の場所にあります。

ORACLE_HOME¥cfgtoollogs¥configtools<time.stamp>.log

追加のデータベース・オプションの要件

『Oracle Application Server Repository Creation Assistant ユーザーズ・ガイド』の 1.4.6 項「データベース・オプション」の表 1-7「必要なデータベース・オプション」にリストされた必要なオプションに加えて、Oracle XML DB も含める必要があります。必要なオプションをすべて使用しないと、OracleAS RepCA は正しく動作しません。

インストール完了後の問題

この項では、インストール完了後の問題について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [staticports.ini ファイルを使用して HTTP SSL ポートを構成するときの注意](#)
- [Microsoft Windows 上での OracleAS コールド・フェイルオーバー・クラスタ環境で必要なパッチ](#)
- [「サービスの依存関係」に関する説明](#)

staticports.ini ファイルを使用して HTTP SSL ポートを構成するときの注意

staticports.ini ファイルを使用して HTTP SSL ポートを構成した場合、一部のコンポーネントで指定した SSL ポートを利用するように構成されません。インストール後の作業として、『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』で説明されている手順に従い SSL を有効にします。

Microsoft Windows 上での OracleAS コールド・フェイルオーバー・クラスタ環境で必要なパッチ

OracleAS Infrastructure 10g をインストールし、Oracle Application Server 中間層を OracleAS コールド・フェイルオーバー・クラスタ環境に関連付けた後は、インフラストラクチャおよび中間層インスタンスにパッチ 3473782 (ARU 5648660/PSE 3536966) を適用する必要があります。このパッチを適用しないと、コールド・クラスタ環境でのフェイルオーバーが失敗します。

パッチは、Oracle MetaLink からダウンロードできます。

<http://metalink.oracle.com>

インストール手順については、パッチに付属する README を参照してください。

「サービスの依存関係」に関する説明

このリリース・ノートでは、『Oracle Application Server 10g インストレーション・ガイド』の 12.4 項「サービスの依存関係」について明確に説明しています。

OracleAS Infrastructure 10g と中間層を同一のコンピュータにインストールしてあり、中間層が同一のコンピュータ上にある OracleAS Infrastructure 10g を使用している場合、Microsoft Windows で、中間層の ProcessManager サービスの前に、OracleAS Infrastructure 10g の ProcessManager サービスが開始されていることを確認する必要があります。確認を行うには、レジストリ・エディタを使用してサービスの依存関係を設定する必要があります。

サービスの依存関係を設定した後は、変更を有効にするためにコンピュータを再起動する必要があります。

アップグレードに関する問題

この項では、アップグレードに関する問題について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- アップグレード実行前に Oracle Internet Directory リリース 9.0.2 を手動で無効化する
- Metadata Repository のアップグレードに必要なデータベース・パッチ
- Oracle9iAS 9.0.2 または 9.0.3 中間層のアップグレード
- OracleAS Infrastructure 9.0.2 を 9.0.4 にアップグレードするための前提条件
- 既存の Reports サーバー（インプロセス・サーバーを含む）のアップグレード

アップグレード実行前に Oracle Internet Directory リリース 9.0.2 を手動で無効化する

Oracle9iAS Infrastructure リリース 9.0.2 を Oracle Application Server10g リリース 9.0.4 にアップグレードすると、アップグレード前の Windows サービスは、リリース 9.0.2 TNS Listener とリリース 9.0.2 データベースを除き、無効化されます。アップグレード後にコンピュータを再起動しても、これら 2 つのリリース 9.0.2 のサービスは 9.0.4 のサービスに干渉しません。

ただし、Oracle Internet Directory リリース 9.0.2 のサービスは手動で無効化する必要があります。

Oracle Internet Directory リリース 9.0.2 を無効化する手順：

1. 「コントロールパネル」アプレットを起動します。
2. Oracle [ORACLE_HOME_NAME] InternetDirectory_[SID] を選択します。
ORACLE_HOME_NAME は、Infrastructure リリース 9.0.2 のインスタンスを表し、SID はリリース 9.0.2 の Oracle ホームに関連付けられた SID を表します。
3. 「Services Menu Bar」で「Action」をクリックしてから、「プロパティ」をクリックします。
4. 「Startup Type」フィールドのドロップダウン・メニューから「Disable」を選択します。
5. 「OK」をクリックします。
6. コンピュータを再起動します。

これで、Oracle Internet Directory リリース 9.0.2 のサービスが無効化されました。

Metadata Repository のアップグレードに必要なデータベース・パッチ

『Oracle Application Server 10g アップグレード』に記載されているように、Metadata Repository を Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) から Oracle Application Server 10g (9.0.4) にアップグレードするときは、データベース・パッチ・セット 9.0.1.5 (ARU 6018157) を適用する必要があります。

パッチ・セットは、Oracle MetaLink からダウンロードできます。

<http://metalink.oracle.com>

インストール手順については、パッチに付属する README を参照してください。

Oracle9iAS 9.0.2 または 9.0.3 中間層のアップグレード

Oracle9iAS 9.0.2 または 9.0.3 を Oracle Application Server 10g (9.0.4) へアップグレードする場合、ソース・インスタンス内の Oracle9iAS 9.0.2 または 9.0.3 Oracle Enterprise Manager (Enterprise Manager) ではなく、デフォルトの管理用の Oracle9iAS 9.0.2 または 9.0.3 Oracle Enterprise Manager のプロセスを停止する必要があります。

たとえば、同じホストに Oracle9iAS 9.0.2 Infrastructure および Oracle9iAS 9.0.2 中間層がある場合、9.0.2 Infrastructure の Oracle Enterprise Manager が管理用 Enterprise Manager になります。この場合、アップグレード時に Oracle9iAS 9.0.2 Infrastructure Enterprise Manager を停止します。

OracleAS Infrastructure 9.0.2 を 9.0.4 にアップグレードするための前提条件

コンピュータ上に複数の Oracle9iAS インスタンス (9.0.2x または 9.0.3) が存在する場合、インスタンスを 9.0.4 にアップグレードする際は、そのコンピュータ上のすべてのインスタンスが同じアクティブな Oracle Enterprise Manager を共有するため、注意が必要です。

アクティブな Oracle Enterprise Manager が含まれるインスタンスをアンインストールしないようにする必要があります。

複数の Oracle9iAS インスタンスが存在するマシンでインスタンスをアップグレードする前に、次の手順を実行します。

1. アクティブな Oracle Enterprise Manager が含まれる Oracle9iAS インスタンスを判別します。

`/var/opt/oracle/emtab` ファイルの `ACTIVE_EMD_HOME` エントリを確認します。

2. アップグレードするインスタンスにアクティブな Oracle Enterprise Manager が含まれる場合、アクティブな Oracle Enterprise Manager を残りのインスタンスに切り替えます。

残りのインスタンスに Oracle9iAS 9.0.3 のインスタンスがある場合、アクティブな Oracle Enterprise Manager をそのインスタンスに切り替えます。そうでない場合は、次のコマンドを使用して Oracle9iAS 9.0.2x のインスタンスに切り替えます。

`prompt> ORACLE_HOME/bin/emctl switch home`

これによって、アクティブな Oracle Enterprise Manager が含まれる別の Oracle9iAS インスタンスを選択するためのダイアログが表示されます。

もう 1 つの方法として、`-silent` 引数を使用して、新しいアクティブな Enterprise Manager Web サイトが常駐する Oracle ホームのパスを指定することもできます。

`prompt> ORACLE_HOME/bin/emctl switch home - silent <remaining_oracle_home>`

これでインスタンスを 9.0.4 にアップグレードできます。

既存の Reports サーバー（インプロセス・サーバーを含む）のアップグレード

この手順は、Reports サーバー（インプロセス・サーバーを含む）を OPMN で管理している場合のみ必要です。

OracleAS Upgrade Assistant によって、Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) の構成が Oracle Application Server 10g (9.0.4) にアップグレードされます。ただし、OracleAS Upgrade Assistant では既存の Reports サーバー（インプロセス・サーバーを含む）の識別子要素はアップグレードされません。

したがって、OracleAS Upgrade Assistant を使用して既存の Reports サーバー（インプロセス・サーバーを含む）をアップグレードした後、次の手順を実行します。

1. 次のアップグレード先 10g (9.0.4) Oracle ホームで `rwserver.template` ファイルを探します。

`DESTINATION_ORACLE_HOME/reports/conf/rwserver.template`

2. `rwserver.template` ファイルをテキスト・エディタで開き、識別子要素をコピーします。

3. 識別子要素を対応する Reports サーバー構成ファイルにコピーします。

既存の識別子要素が `<server>.conf` ファイル（インプロセス・サーバーを含む）に存在する場合は、Oracle Application Server 10g (9.0.4) の `rwserver.template` ファイルにおいて `<identifier>` 要素でこれらのエントリを置き換えます。

たとえば、アップグレードした後 `<server>.conf` とインプロセス・サーバーの内容は次のようになる場合があります。

`<identifier confidential="yes" encrypted="no">scott/tiger</identifier>`

Oracle Application Server 10g (9.0.4) の rwserver.template ファイルにおいて識別子要素でファイルの内容を置き換えた後、<server>.conf とインプロセス・サーバーの内容は次のようにになります。

```
<identifier confidential="yes" encrypted="yes">
EDB1Kn+HEmSn5v/74CCkOGN3MAkctPxzTuPZW/AWQAPb1sOPEb0tQKeS/PlyXkqmkQ==
</identifier>
```

注意： ここに記載した内容は例です。必ず、Oracle Application Server 10g (9.0.4) の rwserver.template ファイルから識別子要素をコピーしてください。ここに記載した内容を入力しないでください。

ドキュメントの誤り

この項では、ドキュメントの誤りについて説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [オプション：大規模な OC4J の更新のための JVM メモリーの増加](#)
- [OracleAS Repository Creation Assistant \(OracleAS RepCA\) CD-ROM の名前に関する説明](#)
- [『Oracle Application Server 10g アップグレード』でのパス・ロケーションの誤り](#)
- [非対話のレスポンス・ファイルの例のパラメータの誤り](#)
- [アンインストール手順：中間層のアンインストール時には Oracle Ultra Search エントリを削除しない](#)
- [データ・ソースの構成に関する情報の誤り](#)
- [起動プロセス・リストの順序の誤り](#)
- [OracleAS Metadata Repository を作成する前にファイルを移動する](#)
- [『Oracle Application Server 10g アップグレード』の項名の誤り](#)
- [『Oracle Application Server 10g インストレーション・ガイド』の管理者 \(ias_admin\) リセット・パスワード参照の誤り](#)
- [Java Runtime Environment \(JRE\) 1.4 の Oracle Ultra Search のインストールに関するドキュメントの記載内容の誤り](#)

オプション：大規模な OC4J の更新のための JVM メモリーの増加

『Oracle Application Server 10g アップグレード 10g (9.0.4)』では、3.2.2 項のオプション：大規模な OC4J の更新のための JVM メモリーの増加の説明において、JavaVM プロパティが <destination_MT_OH>/ias/upgrade/Oc4jPlugin.cfg ファイルに存在すると記載していますが、正しくは <destination_MT_OH>/upgrade/Oc4jPlugin.cfg ファイルです。

OracleAS Repository Creation Assistant (OracleAS RepCA) CD-ROM の名前に関する説明

『Oracle Application Server 10g インストレーション・ガイド』では、OracleAS RepCA CD-ROM を "OracleAS RepCA and Utilities" CD-ROM と表記しています。ただし、CD-ROM 本体には、"Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant and Utilities" と表記されています。

『Oracle Application Server 10g アップグレード』でのパス・ロケーションの誤り

『Oracle Application Server 10g アップグレード』の 3.8.4.4.1 項「ユーザー作成のプロバイダ、ポートレット、プロバイダ・グループ」の手順 3 で、次のパス・ロケーションに誤りがありました。

```
<source_MT_OH>/j2ee/OC4J_
Portal/applications/jpdk/jpdk/WEB-INF/PORTLETBLDGTOOLS/provider.xml
```

正しいパスは、次のとおりです。

```
<source_MT_OH>/j2ee/OC4J_
Portal/applications/jpdk/jpdk/WEB-INF/providers/PORTLETBLDGTOOLS/provider.xml
```

非対話のレスポンス・ファイルの例のパラメータの誤り

『Oracle Application Server 10g インストレーション・ガイド』の D.5.1.3 項「Portal and Wireless」に示したファイルの、次のファイル・パラメータは誤りです。

```
szl_RepositoryUserInput={"domain.com:1521:iasdb:iasdb.domain.com"}
```

正しくは次のとおりです。

```
szl_RepositoryUserInput={"hostname.domain:1521:iasdb:iasdb.domain"}
```

アンインストール手順：中間層のアンインストール時には Oracle Ultra Search エントリを削除しない

『Oracle Application Server 10g インストレーション・ガイド』の C.1.8 項「Oracle Internet Directory からの Oracle Ultra Search エントリの削除」に示されている手順は、OracleAS Infrastructure をアンインストールする場合にのみ実行してください。この手順は、中間層をアンインストールする際には実行しません。

データ・ソースの構成に関する情報の誤り

『Oracle Application Server 10g WebLogic からの移行』の、「アプリケーション・サーバーでのデータソースの構成」の項には、pooled-location パラメータの説明がありますが、これは誤りです。正しくは ejb-location パラメータとなります。

『Oracle Application Server 10g WebSphere からの移行』の第 6 章「JDBC アプリケーションの移行」には、pooled-location パラメータの説明がありますが、これは誤りです。正しくは ejb-location パラメータとなります。

起動プロセス・リストの順序の誤り

『Oracle Application Server 10g インストレーション・ガイド』の 9.1.8 項「ノード 2: OracleAS Infrastructure 10g サービスの開始」では、起動プロセスは次の順番でリストされています。

- Oracle<OracleHomeName>ASControl
- Oracle<OracleHomeName>ClientCache
- Oracle<OracleHomeName>ProcessManager
- Oracle<OracleHomeName>TNSListener
- OracleService<SID>

正しくは、次のようにになります。

- OracleService<SID>
- Oracle<OracleHomeName>TNSListener
- Oracle<OracleHomeName>ProcessManager
- Oracle<OracleHomeName>ClientCache
- Oracle<OracleHomeName>ASControl

OracleAS Metadata Repository を作成する前にファイルを移動する

OracleAS Metadata Repository をインストールする前に、いずれかのノードのローカル・ディスクにデータベースをインストールした場合は、OracleAS Metadata Repository の可用性を高める前にいくつかのファイルを移動する必要があります。次のファイルを、表領域をインストールした共有ディスクに移動してください。

- ORACLE_HOME\$\db\$\init.ora
- ORACLE_HOME\$\oradata\$\ORACLE_SID\$\control01.ctl
- ORACLE_HOME\$\oradata\$\ORACLE_SID\$\control02.ctl

- `ORACLE_HOME/oradata/ORACLE_SID/control03.ctl`
- `ORACLE_HOME/oradata/ORACLE_SID redo01.log`
- `ORACLE_HOME/oradata/ORACLE_SID redo02.log`
- `ORACLE_HOME/oradata/ORACLE_SID redo03.log`

『Oracle Application Server 10g アップグレード』の項名の誤り

『Oracle Application Server 10g アップグレード』の 5.4.1.5 項「推奨されるパフォーマンス拡張タスク」の項名には誤りがあります。5.4.1.5 項は、正しくは「アップグレード・タスクの要件」となります。5.4.1.5 項に記載された手順は最後まで完了しなければなりません。完了しないと、Oracle Identity Management のインスタンスは正常に動作しません。

『Oracle Application Server 10g インストレーション・ガイド』の管理者 (ias_admin) リセット・パスワード参照の誤り

『Oracle Application Server 10g インストレーション・ガイド』の第 5 章、5.8 項「ias_admin ユーザーとそのパスワードの制限」で、管理者 (ias_admin) パスワードのリセット手順について『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』を参照するようにとの指示がありますが、これは誤りです。

`ias_admin` パスワードのリセット手順は次のとおりです。

1. Oracle Application Server インスタンスをインストールしたユーザーとしてログインします。
2. Application Server Control を停止します。

UNIX システムの場合、アプリケーション・サーバー・インスタンスの Oracle ホームに次のコマンドを入力します。

```
ORACLE_HOME/bin/emctl stop iasconsole
```

Windows システムの場合、「サービス」コントロール・パネルを使用して Application Server Control サービスを停止します。

3. 次のファイルを見つけてテキスト・エディタで開きます。

```
ORACLE_HOME/sysman/j2ee/config/jazn-data.xml
```

4. `ias_admin` ユーザーに対する資格証明プロパティを定義する行を見つけます。

`jazn-data.xml` のセクションの例を次に示します。暗号化された `credentials` エントリは太字で示されています。

```
<realm>
  <name>enterprise-manager</name>
  <users>
    <user>
      <name>ias_admin</name>
      <credentials>{903}buG01UsQqTq0nQjdaKQRECL1kbs192mP</credentials>
    </user>
  </users>
</realm>
```

5. 暗号化されている既存のパスワードを新しいパスワードと置き換えます。

パスワードは、次に示すように感嘆符で始めてください。

```
<credentials>!mynewpassword123</credentials>
```

`ias_admin` ユーザーのパスワードは次の規則に従う必要があります。

- 英数字 5 文字以上。
- 少なくとも 1 文字は数字。
- 30 文字未満。

- データベース・キャラクタ・セットの英数字、アンダースコア (_)、ドル記号 (\$)、またはシャープ記号 (#) のみを使用。
- アルファベット文字で始め、数字、アンダースコア (_)、ドル記号 (\$) またはシャープ記号 (#) は使用不可。

関連項目： Oracle Application Server 10g インストレーション・ガイド』の
「ias_admin ユーザーとそのパスワードの制限」

6. Application Server Control を開始します。

再起動後、Application Server Control は新しい管理者 (ias_admin) パスワードを使用します。
このパスワードは、暗号化形式で jazn-data.xml ファイル内に格納されます。

Java Runtime Environment (JRE) 1.4 の Oracle Ultra Search のインストールに関するドキュメントの記載内容の誤り

Oracle Application Server のアップグレード・ガイドの 4.4.3.3 項にある「Java Runtime Environment (JRE) 1.4 のインストールと、JRE 1.4 を使用する Oracle Ultra Search の構成」の手順 9 には、"`<new java execution path>`" の用語の定義が記載されています。

用語（またはプレースホルダ）は次のような定義になります。

```
<JRE 1.4 directory>¥jre¥1.4.1¥bin¥java -ms16m -mx256m -Djava.library.path=<source_Infra_OH>¥lib
```

ライブラリ・パスはソース Oracle ホームを指す必要があり、インストール先の Oracle ホームを指してはいけない点に注意してください。

5

管理およびセキュリティに関する一般的な問題

この章では、Oracle Application Server の管理およびセキュリティに関する問題について説明します。
この章の内容は次のとおりです。

- サポートされるネットワーク機能
- OPMN に関する問題
- DCM に関する問題
- 管理に関するその他の問題
- ドキュメントの誤り

サポートされるネットワーク機能

表 5-1 に、Microsoft Windows オペレーティング・システムでサポートされるネットワーク機能を示します。

表 5-1 サポートされるネットワーク手続き

機能	サポート
DHCP を使用したホストでの Oracle Application Server のインストール	可能
ネットワークから切り離されたホストでの Oracle Application Server のインストール	可能
Oracle Application Server Middle-Tier インスタンスを含んでいるホストに対するホスト名の変更	可能 『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』を参照してください。
Oracle Application Server Middle-Tier インスタンスを含んでいるホストに対する IP アドレスの変更	可能 『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』を参照してください。
Oracle Application Server Infrastructure を含んでいるホストに対するホスト名の変更	不可
Oracle Application Server Infrastructure を含んでいるホストに対する IP アドレスの変更	可能 『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』を参照してください。

注意: `change hostname/ip` スクリプトを実行するため、`instance`、`sys` および `system` のパスワード長は 10 文字以下にする必要があります。パスワード長が 11 文字以上で `change hostname/ip` スクリプトを実行する場合は、スクリプトを実行する前にパスワードを 10 文字以下に変更する必要があります。

OPMN に関する問題

この項では、OPMN の問題について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- ドキュメントの誤り

ドキュメントの誤り

『Oracle Process Manager and Notification Server 管理者ガイド』の記載に次のような誤りがあります。

- 『Oracle Process Manager and Notification Server 管理者ガイド』の第 4 章「`opmn.xml` の一般的な構成」では、`<ipaddr>` の説明に `<local>` 属性が記載されています。`<ipaddr>` に `<local>` 属性は使用できません。
- 「Oracle HTTP Server の構成」では、`opmn.xml` のための `id="start-mode"` のデフォルト値は `ssl-enabled` と記載されていますが、これは誤りです。デフォルト値は `ssl-disabled` です。

DCM に関する問題

この項では、DCM の問題について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- DCM は明示的に停止しない

DCM は明示的に停止しない

アクティブな DCM クライアントを使用しているときは、`opmnctl stopall` または `dcmctl shutdown` を使用して DCM デーモンを明示的に停止しないでください。DCM を明示的に停止した場合は、DCM クライアントを再起動する必要があります。

管理に関するその他の問題

この項では、管理に関するその他の問題について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [その他のサービス機能](#)
- [Microsoft Windows NT 上の DHCP およびホスト名](#)
- [高可用性 Identity Management の構成](#)
- [ホスト名の変更前に削除する必要のあるファイル・ベースのクラスタおよびファームのインスタンス](#)

その他のサービス機能

Oracle Application Server 10g では、次のような他のサービス機能を使用できます。

- Oracle Application Server 10g Middle-Tier および Infrastructure のサーバー・インスタンスは、Microsoft Windows の「スタート」メニューのショートカットを使用して起動および停止できます。「スタート」→「プログラム」→「*instance_name*」→「Start *instance_name*」の順に移動するか、または「スタート」→「プログラム」→「*instance_name*」→「Stop *instance_name*」の順に移動します。
たとえば、*instance1* を起動する場合は、「スタート」→「プログラム」→「*instance1*」→「Start *instance1*」の順に移動します。
- Oracle Application Server Middle-Tier、Identity Management または Identity Management と OracleAS Metadata Repository のインストールは、各インストール・タイプの ProcessManager サービスを使用して起動および停止できます。Windows の「サービス」コントロール・パネルにアクセスする手順は、次のとおりです。
 - **Windows NT の場合:** 「スタート」→「設定」→「コントロールパネル」を選択し、「サービス」をダブルクリックします。
 - **Windows 2000 の場合:** 「スタート」→「プログラム」→「管理ツール」→「サービス」を選択します。
 - **Windows 2003 の場合:** 「スタート」→「管理ツール」→「サービス」を選択します。
 - **Windows XP の場合:** 「スタート」→「すべてのプログラム」→「管理ツール」→「サービス」を選択します。
 「サービス」コントロール・パネルに ProcessManager サービスが (Oracle<OracleHomename>ProcessManager) と表示されます。
- OracleService を停止することで、Infrastructure のインストール・タイプの Oracle Application Server サービスを起動および停止できます。Windows の「サービス」コントロール・パネルにアクセスする手順は、次のとおりです。
 - **Windows NT の場合:** 「スタート」→「設定」→「コントロールパネル」を選択し、「サービス」をダブルクリックします。
 - **Windows 2000 の場合:** 「スタート」→「プログラム」→「管理ツール」→「サービス」を選択します。
 - **Windows 2003 の場合:** 「スタート」→「管理ツール」→「サービス」を選択します。
 - **Windows XP の場合:** 「スタート」→「すべてのプログラム」→「管理ツール」→「サービス」を選択します。
 「サービス」コントロール・パネルに OracleService サービスが (Oracle<OracleHomename>OracleService) と表示されます。

- 複数の Windows サービスが OracleAS Infrastructure 10g インストールの一部として作成されます。サービスが適切な順序で起動および停止されるように、複数サービス間での従属関係が作成されます。

注意： サービスをグループとして起動および停止できるサービス間の従属関係は、使用しているコンピュータを Oracle Application Server 10g のインストール後に再起動すると使用可能になります。

関連項目： 同じコンピュータ上に Infrastructure と Middle-Tier がある場合の従属関係の設定方法は、『Oracle Application Server 10g インストレーション・ガイド』を参照してください。

Microsoft Windows NT 上の DHCP およびホスト名

DHCP を使用する Windows NT コンピュータに Oracle Application Server をインストールする場合は、インストレーション・ガイドに記載されているように、最初にループバック・アダプタをインストールする必要があります。使用している DHCP サーバーが IP アドレスに加えてホスト名も割り当てている場合、インストーラはこのホスト名をローカルに定義されたホスト名のかわりに使用することがあります。

インストーラが、必ずローカルのホスト名を使用するようにするために、次の 2 つのオプションがあります。

- オプション 1: インストーラを OUI_HOSTNAME パラメータで起動します。このパラメータは、使用的ホスト名を指定します。

```
prompt> setup.exe OUI_HOSTNAME=myhostname.mydomain.com
```

- オプション 2: インストーラを実行する前に、C:\winnt\system32\drivers\etc\hosts ファイルに次のフォーマットで行を追加します。

```
IP_address hostname.domainname hostname
```

この行は、ファイルのローカルホスト行の後にくる必要があります。

IP_address を、ループバック・アダプタの IP アドレスに置き換えます。これは、非ルータブルな IP アドレスである必要があります。

ホスト名およびドメイン名を、適切な値に置き換えます。

例：

```
10.10.10.10 mycomputer.mydomain.com mycomputer
```

すでに Oracle Application Server をインストール済の場合は、『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』に記載されている change IP/hostname プロシージャを使用して、ホスト名を変更できます。

高可用性 Identity Management の構成

ラックマウント / マルチコンピュータの高可用性 Identity Management の構成の概念および実装に関するドキュメントが、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』および『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』で参照できます。

ラックマウントの Identity Management のインストールおよび構成に関しては、ホワイト・ペーパー『ID 管理の可用性を高める配置例：ラックマウント型の ID 管理』に単一ソースとしてまとめられています。これを参照するには、次の URL にアクセスしてください。

<http://otn.oracle.co.jp/products/index.html>

このホワイト・ペーパーには、ラックマウント / マルチコンピュータ構成を実装するために必要な手順に関する更新された詳細情報が含まれています。

将来のリリースでは、ラックマウント / マルチコンピュータ構成がインストール・オプションとしてサポートされる予定です。

ホスト名の変更前に削除する必要のあるファイル・ベースのクラスタおよびファームのインスタンス

ファイル・ベースのクラスタの一部である中間層インスタンスのホスト名またはIPアドレスを変更する前に、次のコマンドを使用してクラスタおよびファームからインスタンスを削除する必要があります。

```
dcmctl leaveCluster
dcmctl leaveFarm
```

ホスト名またはIPアドレスを変更した後で、インスタンスをクラスタおよびファームに戻します。

インスタンスをクラスタに戻すには、次のコマンドを使用します。

```
dcmctl joinCluster -cl <clustername>
```

インスタンスをファームに戻すには、次の手順を実行してください。

- ファーム内にすでに存在するインスタンス内で次のコマンドを実行します。
dcmctl getRepositoryID
- ファームに戻したいインスタンス内で次のコマンドを実行します。
dcmctl joinFarm -r <repositoryID>

ドキュメントの誤り

この項では、管理およびセキュリティに関するドキュメントの既知の誤りについて説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [「Metadata Repository リスナーの停止」手順のスペルの誤り](#)
- [「Infrastructure サービスの変更」のコマンドの誤り](#)
- [LDAP ベースのレプリカのステップの誤り](#)
- [OracleAS Backup and Recovery Tool を使用するオプションの誤り](#)

「Metadata Repository リスナーの停止」手順のスペルの誤り

『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』の 5.6.1 項「Metadata Repository Net リスナー・ポートの変更」の「手順 2 : Metadata Repository リスナーの停止」は、次のコマンドになっていました。

```
lscnrctl stop
```

正しくは、次のようにになります。

```
lsnrctl stop
```

「Infrastructure サービスの変更」のコマンドの誤り

『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』の第 8 章「Infrastructure サービスの変更」の 8.6.4 項「手順」に誤りがあります。

- 作業 2 の手順 6 のコマンドライン

```
ORACLE_HOME/bin/rman target cmdfile=BACKUP_DIR/cold_backup.rcv > BACKUP_
DIR/log_files/backup.log
```

正しくは、次のようにになります。

```
ORACLE_HOME/bin/rman target / cmdfile=BACKUP_DIR/cold_backup.rcv >BACKUP_
DIR/log_files/backup.log
```

- 作業 3 の手順 5 のコマンドライン

```
prompt> ORACLE_HOME/bin/rman cmdfile=BACKUP_DIR/restore.rcv > BACKUP_DIR/log_
files/restore.log
```

正しくは、次のようにになります。

```
prompt> ORACLE_HOME/bin/rman / cmdfile=BACKUP_DIR/restore.rcv >BACKUP_DIR/log_files/restore.log
```

- 作業 5 の手順 6 の末尾に次の説明が必要です。

その他の古い db_name インスタンスはすべて (instance_name を除いて) 新しい db_name に更新してください。特に、古い db_name を含むディレクトリ・パスを更新する必要があります。

LDAP ベースのレプリカのステップの誤り

『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』の F.2 項「LDAP ベースのレプリカのインストールとセットアップ」で、作業 6 のステップ 19 に「検証手順:DIP が正しく設定されていることを確認します。」とあります。ステップ 19 では、Application Server Control コンソールで、「ディレクトリ統合」ページにナビゲートするように指示されています。

これは誤りで、実際には、Oracle Internet Directory のホームページに進み、「ディレクトリ統合」をクリックする必要があります。

OracleAS Backup and Recovery Tool を使用的するオプションの誤り

『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』の第 12 章、12.4 項「OracleAS Backup and Recovery Tool の構成方法」の手順 3 では、Microsoft Windows 動作環境で実行する次のコマンドについての記載があります。

```
(Windows) perl bkp_restore.pl -m backup_cold
```

これは誤りで、正しくは次のコマンドを実行します。

```
(Windows) perl bkp_restore.pl -m configure
```

6

コア・ドキュメント

この章では、Oracle Application Server のコア・ドキュメントに関する問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- [ドキュメントの誤り](#)

ドキュメントの誤り

この項では、ドキュメントの誤りについて説明します。この項の内容は次のとおりです。

- 『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』内の例の誤り
- JServ サーブレット・エンジンのポート変更でのプロシージャの誤り
- Identity Management の Oracle HTTP Server (SSO) ポートの変更
- サポートされないレプリケーション・ベースの識別管理トポロジ

『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』内の例の誤り

表 12-3 「Oracle Application Server Backup and Recovery Tool のモードと引数」で、-u オプションを使用した `restore_db` の例には誤りがあります。-u の書式は MM/DD/YYYY_hh:mm:ss です。この例の 7/26/2003_13:45:06 は、正しくは 07/26/2003_13:45:06 です。

JServ サーブレット・エンジンのポート変更でのプロシージャの誤り

『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』の 5.3.11 項「JServ サーブレット・エンジンのポートの変更」に記載されている手順には誤りがあります。次の手順を使用してください。

1. Oracle HTTP Server を停止します。
`> opmnctl stopproc ias-component=HTTP_Server`
2. 次のファイルを編集します。
`ORACLE_HOME\Apache\JServ\conf\jserv.properties`
3. port パラメータを新しいポート番号で更新します。
4. ファイルを保存します。
5. Oracle HTTP Server を再起動します。
`> opmnctl startproc ias-component=HTTP_Server`

Identity Management の Oracle HTTP Server (SSO) ポートの変更

『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』の 5.6.3.1 項「Identity Management の Oracle HTTP Server 非 SSL リスナー・ポートの変更」の手順 7 の `mod_osso` の再登録についての記述が不適切です。`mod_osso` の再登録のためのコマンド・パラメータに誤りがあります。

正しいコマンドは次のとおりです。

Oracle HTTP Server (SSO) 非 SSL ポートを変更するときは、Identity Management の Oracle ホームで次のコマンドを実行し、`mod_osso` を再登録します。

```
ORACLE_HOME\jdk\bin\java -jar %ORACLE_HOME%\sso\lib\ossoreg.jar
-oracle_home_path identity_management_oracle_home
-site_name identity_management_hostname:new_http_port_number
-config_mod_osso TRUE
-mod_osso_url mod_osso_url
-u user
```

Oracle HTTP Server (SSO) SSL ポートを変更するときは、Identity Management の Oracle ホームで次のコマンドを実行し、`mod_osso` を再登録します。

```
ORACLE_HOME\jdk\bin\java -jar %ORACLE_HOME%\sso\lib\ossoreg.jar
-oracle_home_path identity_management_oracle_home
-site_name identity_management_hostname:new_https_port_number
-config_mod_osso TRUE
-mod_osso_url mod_osso_url
-virtualhost
-u user
```

サポートされないレプリケーション・ベースの識別管理トポロジ

『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』の第9章の「複数のシングル・サインオン中間層、レプリケートされた Oracle Internet Directory」の項で説明している識別管理トポロジはサポートされていません。

レプリケーションを使用しない識別管理トポロジについては、『Oracle Application Server 10g 高可用性ガイド』を参照してください。

7

Oracle Application Server アクティブ・フェイル オーバー・クラスタに関する問題

この章では、Oracle Application Server アクティブ・フェイルオーバー・クラスタ (AFC) に関する問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- [一般的な問題と回避策](#)

一般的な問題と回避策

この項では、一般的な問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- Oracle Ultra Search クローラを使用するためのデータベース・インスタンスの構成
- ロード・バランサのフェイルオーバー
- インストール・ホスト上でのみ有効な DAS
- OracleAS Single Sign-On での障害を防止するための JDBC パッチのインストール
- 手動によるファイルの同期

Oracle Ultra Search クローラを使用するためのデータベース・インスタンスの構成

AFC のインストールでは、データベース・インスタンスの 1 つで実行するための Oracle Ultra Search クローラが構成されます。データベース・インスタンスの反応がなくなった場合は、同じデータベースの別のインスタンスを構成して Oracle Ultra Search クローラを使用する必要があります。

Oracle Ultra Search クローラを使用するデータベース・インスタンスを変更するには、新しいデータベース・インスタンスで次のコマンドを実行します。

注意： この操作には、wksys スキーマのパスワードが必要です。

```
SQL> @?/ultrasearch/admin/wk0reconfig.sql <instance_name> <connect_url>
```

- <instance_name> には、Oracle Ultra Search クローラが常駐することになる新しいデータベース・インスタンスの名前を指定します。<instance_name> は、次のコマンドを新しいデータベース・インスタンスで実行すると取得できます。

```
SQL> select instance_name from v$instance
```

- <connect_url> には、指定したインスタンスへの接続を保証する JDBC 接続文字列を指定します。次に例を示します。

```
(DESCRIPTION=(ADDRESS_LIST=(ADDRESS=(PROTOCOL=TCP) (HOST=<nodename>) (PORT=<listener_port>))) (CONNECT_DATA=(SERVICE_NAME=<service_name>)))
```

ロード・バランサのフェイルオーバー

AFC でホストまたはプロセスの反応がなくなった場合は、ロード・バランサの再構成が必要です。ロード・バランサを再構成して、反応しなくなったホスト、または Oracle Internet Directory や Oracle HTTP Server のプロセスがリスニングしている特定ポートへの通信を停止してください。ほとんどのロード・バランサには、この処理を自動的に実行するように構成できる機能があります。この機能がシステムで使用しているロード・バランサにない場合は、手動で再構成できます。ロード・バランサの構成手順は、使用しているロード・バランサのドキュメントを参照してください。

インストール・ホスト上でのみ有効な DAS

AFC インフラストラクチャのインストールでは、Oracle Delegated Administration Service (DAS) はインストール・ホスト上でのみ有効になります。

他のホスト上で DAS を有効にするには、追加ホストごとに次の回避策を実行します。

1. 次のエントリを使用して、ldif (das_enable.ldif) ファイルを作成します。

```
--- BEGIN LDIF file contents---
dn: cn=Associated Mid-tiers,orclApplicationCommonName=DASApp, cn=DAS,
cn=Products,cn=OracleContext
changetype: modify
add: uniquemember
uniquemember: orclApplicationCommonName=<InstanceName>.<node>,cn=IAS
```

```
Instances, cn=IAS,cn=Products, cn=OracleContext
---END LDIF file contents-----
```

2. 次の ldapmodify コマンドを実行します。

```
ldapmodify -p <OIDPort> -h <Load Balancer Name> -D cn=orcladmin -w
Instance Password> -v -f das_enable.ldif
```

DAS が追加ホスト上に構成されます。

OracleAS Single Sign-On での障害を防止するための JDBC パッチのインストール

データベース・インスタンスまたはホストが反応しなくなった場合は、OC4J_SECURITY インスタンスの OracleAS Single Sign-On によって、既存のデータベース接続が残りのデータベース・インスタンスに自動的にフェイルオーバーされます。

障害を防止するため、JDBC パッチ 2513420 および 3444173 をインストールしてください。これらのパッチは、次のサイトから入手できます。

<http://metalink.oracle.com>

手動によるファイルの同期

AFC では、afcctl ユーティリティを使用して、あるホストの構成ファイルに対するすべての変更を、クラスタ内の別のホストの構成ファイルと同期させます。afcctl ユーティリティのインストール、構成および使用方法については、『Oracle Application Server 10g 高可用性ガイド』を参照してください。

ただし、afcctl ユーティリティは、AFC のホストの構成ファイルすべてを同期させるわけではありません。次のファイルは手動で同期させる必要があります。

- ORACLE_HOME/dcm/config/dcm.conf
- ORACLE_HOME/dcm/repository/cluster.bom
- ORACLE_HOME/sysman/config/emd.properties
- ORACLE_HOME/sysman/config/emiasconsole.properties
- ORACLE_HOME/sysman/config/emiasconsolelogging.properties
- ORACLE_HOME/sysman/emd/targets.xml
- ORACLE_HOME/sysman/j2ee/config/em-app.xml
- ORACLE_HOME/j2ee/home/config/jazn-data.xml
- ORACLE_HOME/j2ee/home/config/jazn.xml
- ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_SECURITY

次のファイルは afcctl sync ユーティリティが起動されたときに常に同期されます。

- ORACLE_HOME/config/ias.properties
- ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf/httpd.conf
- ORACLE_HOME/opmn/conf/opmn.xml

第III部

J2EE、Web Services およびインターネット・ アプリケーションに関する問題

第 III 部では、J2EE、Web サービスおよびインターネット・アプリケーションのコンポーネントに関する問題について説明します。内容は次のとおりです。

- [第 8 章 「Oracle Application Server Web Services」](#)
- [第 9 章 「Oracle Application Server Forms Services」](#)
- [第 10 章 「Oracle Application Server Containers for J2EE の問題」](#)
- [第 11 章 「Oracle HTTP Server」](#)
- [第 12 章 「Oracle Application Server TopLink」](#)

8

Oracle Application Server Web Services

この章では、Oracle Application Server Web Services（OracleAS Web Services）に関する問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 一般的な問題と回避策
- ドキュメントの誤り

一般的な問題と回避策

この項では、Oracle Application Server Web Services（OracleAS Web Services）に関する一般的な問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [HTML XML ウィザードの実行](#)

HTML XML ウィザードの実行

WebServicesHtmlXmlWizard.jar ファイルは、Oracle Application Server 10g (9.0.4) に同梱されていません。HTML XML ウィザードを使用するには、「ダウンロード」セクションの下にある Oracle Technology Network Japan (OTN-J) の Web サービス・センターから該当するファイルをダウンロードする必要があります。

<http://otn.oracle.com/tech/webservices/index.html>

WebServicesHtmlXmlWizard.jar ファイルをダウンロードした後、このファイルを \$ORACLE_HOME/webservices/lib ディレクトリに格納します。

ドキュメントの誤り

この項では、ドキュメントの既知の誤りについて説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [J2EE アプリケーションでの XML または HTML ストリームの消費 - HTML XML ウィザード](#)
- [WSDL Analyzer についての参照部分の無視](#)
- [デモのリンクの誤った記載](#)

J2EE アプリケーションでの XML または HTML ストリームの消費 - HTML XML ウィザード

WebServicesHtmlXmlWizard.jar ファイルは、Oracle Application Server 10g (9.0.4) に同梱されていません。HTML XML ウィザードの使用方法については、『Oracle Application Server Web Services 開発者ガイド』の第 11 章「J2EE アプリケーションでの Web サービスの使用」で説明しています。この説明は、『HTML XML ウィザードの実行』で説明したように、OTN-J から WebServicesHtmlXmlWizard.jar ファイルをダウンロードしてインストールした後でのみ適用されます。

WSDL Analyzer についての参照部分の無視

『Oracle Application Server Web Services 開発者ガイド』に WSDL Analyzer についての記載がありますが、WSDL Analyzer はリリースされていません。

WSDL Analyzer についてのすべての参照部分は、無視してください。

デモのリンクの誤った記載

『Oracle Application Server Web Services 開発者ガイド』全体にわたって、デモのリンクに誤りがあります。

リンクの記載が次のようになっています。

http://otn.oracle.com/sample_code/tech/java/web_services/content.html

正しくは次のとおりです。

<http://otn.oracle.com/tech/java/oc4j/demos/904/index.html>

Oracle Application Server Forms Services

この章では、Oracle Application Server Forms Services (OracleAS Forms Services) に関する問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 一般的な問題と回避策
- ドキュメントの誤り

一般的な問題と回避策

この項では、Oracle Application Server Forms Services に関する一般的な問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- Windows での CPU 使用率と応答時間の監視
- 事前起動の Forms プロセス使用時における Enterprise Manager に関する既知の問題
- 904 BI-Forms で同じマシンの 902 インフラストラクチャを使用すると SSO 動的リソース作成に失敗する問題
- Graphics が 64 ビット Database に対して失敗する問題

Oracle Forms Developer については、『Oracle Developer Suite リリース・ノート』を参照してください。

Windows での CPU 使用率と応答時間の監視

Enterprise Manager のシステム・コンポーネント表では、CPU とメモリーに関する統計がデフォルトで 1 分ごとに収集されます。このため、CPU スパイクが表示されない可能性があることに注意してください。また、クライアントのアクティビティや要求の待機で Forms Server プロセスが休止している場合は、CPU 使用率が 0.0% とレポートされても異常ではありません。

Forms の「概要」ページでは、このページがレンダリングされるたびに CPU とメモリーに関する統計が収集されます。このページは、「概要」タブをクリックするか、タイムスタンプの横にある「リフレッシュ」アイコンをクリックするとレンダリングされます。ただし、Windows におけるオペレーティング・システムの制限のため、FormsServlet からの応答時間が 16 ミリ秒未満の場合は 0.00 ミリ秒と表示されます。

事前起動の Forms プロセス使用時における Enterprise Manager に関する既知の問題

Enterprise Manager では、em_mode が 1 に設定されていると、事前起動のプロセスが表示されますが、これに関して既知の問題がいくつかあります。

プロセスは存在するが、そのプロセスにクライアントが連結されていない場合は、「ユーザー・セッション」ページの IP アドレスが空白になります。プロセスが連結されると、接続したクライアントの実際の IP アドレスではなく NULL が表示されます。

「接続時間」や「ユーザー ID」など、その他の列はすでに適切に更新されています。

クライアントが連結されていない事前起動のプロセスがある場合は、「ユーザー・セッション」ページでの検索機能が正常に実行されず、プロセスを検索してもすべて失敗します。クライアントが連結されていないプロセスを停止すると、検索機能は正常に実行されるようになります。

クライアントが連結されていないプロセスがある場合でも、列ヘッダーをクリックして実行するソート操作は正常に機能するため、特定のプロセスを検索する際の次善策としてこのソート操作を使用できます。

904 BI-Forms で同じマシンの 902 インフラストラクチャを使用すると SSO 動的リソース作成に失敗する問題

BI-Forms とインフラストラクチャを同じコンピュータにインストールした場合、Forms が OID にリダイレクトすると URL リライティングが機能しない場合があります。この場合、次のメッセージが表示されます。「FRM-92102: ネットワーク・エラーが発生しました。Forms クライアントはサーバーと 5 回の接続を試みましたが、成功しませんでした。」このエラーが発生するのは、同じマシンにインストールされた 9.0.2 インフラストラクチャに対して 9.0.4 Forms を実行し、Internet Explorer を使用している場合のみです。

これは、Forms での SSO サポートに影響する可能性があります。ユーザーが SSO を使用可能にして Forms を実行し、既存の Forms 構成を使用して接続する場合、問題は発生しません。

ただし、ユーザーが既存の Forms 構成を指定せずに Forms を実行しようとすると、Forms が OID にリダイレクトして、ユーザーはこの構成のリソースを動的に作成できます。この場合、リソースは OID によって適切に作成されますが、OID が Forms サーブレットにリダイレクトした後、Forms では接続に失敗します。ユーザーがこの時点で同じ URL をコピーして、別のブラウザで実行する場合、問題は発生しません。この問題が発生するのは 1 回かぎりで、管理者が OID リソースを正しく作成した場合は、ユーザーがこの問題に遭遇することはありません。

同様に、OID (インフラストラクチャのインストールの一部) と BI-Forms を同じマシン上にインストールしていない場合も、この問題が発生することはありません。

Graphics が 64 ビット Database に対して失敗する問題

8.0.6 RSF の制限によって、Windows 上の Oracle Graphics 6i は 64 ビット・データベースに接続できません。したがって、Oracle Forms 10g (9.0.4) を使用して 64 ビット・データベースに接続し、Oracle Graphics と統合する場合は、Oracle Graphics6i Home (Graphics のインストール先) をアップグレードして、Bug 3088708 の修正を含む RSF バージョンを含める必要があります。この RSF については、オラクル社カスタマ・サポート・センターに連絡してください。

ドキュメントの誤り

この項では、OracleAS Forms Services ドキュメントの既知の誤りについて説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [Enterprise Manager のオンライン・ヘルプ](#)

Enterprise Manager のオンライン・ヘルプ

Enterprise Manager のオンライン・ヘルプ・トピック 「Forms Services の構成」 および 「複数の環境ファイルの構成」 に、中間層プロセスは次の順序にする必要があることが記述されています。

```
emctl stop agent
emctl stop em
dcmctl stop
opmnctl stopall
opmnctl startall
dcmctl start
emctl start agent
emctl start em
```

正しい順序は次のとおりです。

```
emctl stop em (Stops em and the agent)
opmnctl stopall
opmnctl startall
emctl start em
```


10

Oracle Application Server Containers for J2EE の問題

この章では、Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J) に関する問題について説明します。
この章の内容は次のとおりです。

- [構成に関する問題と回避策](#)
- [JSP、タグ・ライブラリおよび関連デモに関するリリース・ノート](#)
- [サーブレットに関するリリース・ノート](#)
- [EJBに関するリリース・ノート](#)
- [OC4J サービスに関するリリース・ノート](#)
- [Oracle JMS のリリース・ノート](#)
- [OracleAS JAAS Provider に関するリリース・ノート](#)
- [ドキュメントの誤り](#)

構成に関する問題と回避策

この項では、Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J) の構成に関する問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- OPMN によるデフォルトの CORBA SSL クライアント・ポートの割当が適切に行われない
- ライブラリの共有と使用
- 起動クラスと停止クラスに関する考慮事項
- OC4J での JDK の使用
- OC4J デモのダウンロード
- OC4J 構成ファイルの編集後に表示される警告メッセージ
- OC4J オブジェクト名にはシングルバイトの英数字のみ使用可能
- J2EE アーカイブのデプロイ時のリモート・ファイル・システムからの権限に関する問題
- Oracle Application Server 10g では JDK 1.3.1.05 以上が必要
- Tomcat Examples の削除

OPMN によるデフォルトの CORBA SSL クライアント・ポートの割当が適切に行われない

Oracle Application Server 環境では、iiops1 と iiops2 のポート範囲を `opmn.xml` ファイルに明示的に指定する必要があります。

ライブラリの共有と使用

この項では、ライブラリの共有と使用に関する問題について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- ライブラリの共有
- 無効または不要なライブラリ要素によるパフォーマンスの低下
- EJB JAR ファイル内にデプロイされたカスタム・ユーザー・マネージャ

ライブラリの共有

Oracle Application Server 10g (9.0.4) では、グローバルな `application.xml` ファイルに特定の `<library>` 要素を作成して、アプリケーションに必要なライブラリをロードすることをお薦めします。この方法は、希望の順序でライブラリを効率的にロードする方法としてお薦めします (ライブラリは、`<library>` 要素が検出された順序でロードされます)。

以前のリリースでは、ライブラリを `j2ee/home/lib` ディレクトリに格納でき、このディレクトリには、デフォルトで `<library>` 要素が `application.xml` ファイルに存在していたことに注意してください。このリリースでは、このディレクトリは OC4J システム・ライブラリ用に予約され、このディレクトリを指し示す `<library>` 要素はデフォルトでは `application.xml` ファイルに存在しません。汎用的なライブラリ位置を使用する場合は、`j2ee/home/applib` を使用してください。このリリースでは、デフォルトで、この位置を指し示す `<library>` 要素が `application.xml` に存在します。

ライブラリの共有に関する一般情報は、『Oracle Application Server Containers for J2EE ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

無効または不要なライブラリ要素によるパフォーマンスの低下

OC4J プロセス・メモリーがプログラム実行中に増加し続ける場合は、グローバルな `application.xml` ファイル内の無効なシンボリック・リンクへの参照がある可能性があります。通常、この問題は、従来の Java オブジェクト・メモリー・リークで見られるように、Java オブジェクト・メモリーの増加ではなく、C ヒープの増加に伴って発生します。OC4J では、`application.xml` ファイル内のリンクを使用して、すべてのリソースをロードします。このリンクが無効な場合、C ヒープは増加し続けるため、OC4J でメモリー不足が発生します。すべてのシンボリック・リンクが有効であることを確認して、OC4J を再起動してください。

さらに、OC4J でロード対象として構成する JAR ファイルは、最低限の数に抑えてください。使用しないすべての JAR ファイルは、構成および OC4J で検索対象として構成されたディレクトリから削除してください。OC4J では、クラスとリソースのすべての JAR ファイルを検索するため、ファイル・キャッシュによって余分なメモリーとプロセッサ時間が消費されます。

application.xml ファイルの <library> 要素が、常駐するディレクトリではなく、必要な JAR ファイルや ZIP ファイルを個別に指し示している場合は、ロードを適切に制御できます。

EJB JAR ファイル内にデプロイされたカスタム・ユーザー・マネージャ

Enterprise Java Beans (EJB) JAR ファイル内にデプロイされたカスタム・ユーザー・マネージャ・クラスは、アプリケーションの orion-application.xml ファイルに明示的な <library> 要素が存在しないかぎり、OC4J でロードできません。この <library> 要素は、カスタム・ユーザー・マネージャ・クラスが格納された JAR ファイルを指し示す必要があります。カスタム・ユーザー・マネージャの解決とインスタンス化を可能にするには、次の例に示すように、必要な <library> 要素を作成します。

```
<orion-application ....>
  ...
  <library path="applications\XmlnewsEar\XmlnewsEjb.jar"/>
  ...
</orion-application>
```

起動クラスと停止クラスに関する考慮事項

- 起動メソッドと停止メソッドには、引数として渡される JNDI コンテキストを使用する必要があります。独自に作成することはできません。
- 停止クラスは、停止前にアンデプロイされるアーカイブ・ファイル (WAR および EAR) と区別する必要があります。
- OC4J では、起動クラスのインスタンス、および停止クラスのインスタンスを作成します。これらは、個別のインスタンスです。同じクラスで起動インターフェースと停止インターフェースを実装すると、OC4J ではそのクラスのインスタンスを 2 つ作成します。この場合、起動クラスと停止クラスの間で非静的フィールドを共有することはできません。

OC4J での JDK の使用

この項では、OC4J での JDK の使用に関する問題について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [サポートされる JDK バージョン](#)
- [JDK 1.4 から JDK 1.3 へのソース・コードの移行](#)
- [JDK 1.3 から JDK 1.4 へのソース・コードの移行](#)

サポートされる JDK バージョン

システムにインストールできるのは、1 つの Java Developer's Kit (JDK) のみです。OC4J でサポートされている次のバージョンであることを確認してください。

- JDK 1.3.1
- JDK 1.4.2

スタンドアロン OC4J に JDK は含まれていません。スタンドアロン OC4J を使用する場合は、独自に JDK をインストールする必要があります。

サプライヤによっては、製品に JDK が含まれている場合があります。その場合は、必要に応じて、古いバージョンを削除してサポートされているバージョンに置換し、環境変数を適切に更新します。PATH、CLASSPATH および LD_LIBRARY_PATH (Windows では LIB) の各変数が、公式にサポートされているバージョンの JDK に設定されていることを確認してください。

注意: Sun 社が提供する古い JDK は、/usr/bin にあります。

JDK 1.4 から JDK 1.3 へのソース・コードの移行

Java では、Java コードの JDK 1.4 でのコンパイルと JDK 1.3 での実行をサポートしていません (Bug 2811379)。これを試行すると、Java では実行時に次のいずれかのエラー・メッセージがスローされます。

- 「Unsupported major.minor version 48.0.」
- 「The major.minor version '48.0' is too recent for this tool to understand.」

ただし、JDK 1.4 を使用して生成したクラス・ファイルを、JDK 1.3 を使用して実行する必要がある場合は、次のコマンドを使用すると、JDK 1.3 と互換性のあるクラス・ファイルを JDK 1.4 コンパイラで強制的に生成できます。

```
% javac -target 1.3 hello.java
```

JDK 1.3 から JDK 1.4 へのソース・コードの移行

JDK 1.3 から JDK 1.4 へのアップグレード時には、すべてのクラスをパッケージに格納してください。

JDK 1.4 仕様では、パッケージ内のクラスがパッケージ外のクラスを起動するのを明示的に禁じています。このため、JDK 1.3 でコンパイルされた Java ソース・コードは、JDK 1.4 ではコンパイルされません。このエラーは、次のコンパイラ・メッセージで識別されます。

```
'. ' expected import myClass
```

このメッセージは、Java コンパイラはパッケージとクラス名を検出するが、クラス名のみの行は解析できないことを意味します。

詳細は、JDK に同梱されている Sun 社の互換性に関するドキュメントを参照してください。

OC4J デモのダウンロード

Oracle Application Server 10g (9.0.4) には、コンポーネントごとに 1 つのデモが用意されています。追加のデモは、次の URL で OTN からダウンロードできます。

<http://otn.oracle.com/tech/java/oc4j/demos/>

この索引ページから、必要な追加のデモがあるコンポーネント領域にドリルダウンします。

OC4J 構成ファイルの編集後に表示される警告メッセージ

次の OC4J 構成ファイルの編集後、「拡張サーバー・プロパティ」ページに自動再起動に関する警告メッセージが表示される場合があります。

- server.xml
- global-web-application.xml
- jms.xml
- rmi.xml
- default-web-site.xml

OC4J は、server.xml ファイルが変更された場合にのみ、再起動します。他の OC4J 構成ファイルでは、再起動することはありません。

次の OC4J 構成ファイルを変更するたびに、手動で OC4J サーバーを再起動することをお薦めします。

- global-web-application.xml
- jms.xml
- rmi.xml
- default-web-site.xml

OC4J オブジェクト名にはシングルバイトの英数字のみ使用可能

次のオブジェクト名には、シングルバイトの英数字のみ使用できます。

- OC4J インスタンス名
- OC4J プリケーション名
- OC4J アイランド名
- フーム名
- OracleAS クラスタ名

J2EE アーカイブのデプロイ時のリモート・ファイル・システムからの権限に関する問題

リモート・マウントからアクセスできるファイルにシステム・プロセスを構成するときは、アクセスするユーザーの識別情報がリモート・リソースに適切な権限を持っているかを確認する必要があります。デフォルトでは、Oracle Application Server 10g のインストール時にOPMNによって管理されるすべてのプロセスはローカル権限 LocalSystemとともに実行されます。通常、リモート共有では LocalSystem にアクセスできません。OPMN は LocalSystem 以外の権限を想定して構成されますが、管理プロセスでもこの権限が引き継がれます。システム管理者は、共有および権限を適切に構成する必要があります。

ローカル・マシンにマウントされた CD は、通常、ローカル・コンピュータ上の任意のユーザーが読み取れます。そのため、権限を気にする必要はありません。

この問題はネットワーク・ドライブでよく発生する傾向があります。通常、ネットワーク・ドライブでは、LocalSystem を含まないユーザーの特定のグループにのみアクセスを認可するためです。

推奨される回避策は、デプロイを実行する前に、対象となるファイルをローカル・ドライブにコピーすることです。

Oracle Application Server 10g では JDK 1.3.1.05 以上が必要

Oracle Application Server 10g では、JDK 1.3.1.05 以上が必要です。古いバージョンを使用している場合は、アプリケーションのほぼすべてがデプロイされた後、OPMN が定期的に OC4J を再起動します。

Tomcat Examples の削除

OC4J は、Tomcat Examples をデフォルトで含んでいます。多くの Tomcat Examples は、Oracle Secure Coding Standards に対応していません。Oracle 社は、デモンストレーションおよび環境テストで使用する場合を除き、Tomcat Examples を削除することをお勧めします。

JSP、タグ・ライブラリおよび関連デモに関するリリース・ノート

この項では、JavaServer Pages (JSP)、タグ・ライブラリおよび関連デモに関する問題について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- パッケージに含まれないクラスを起動できない
- OC4J 起動時における SAX ドライバの設定
- JSP ojspc の問題
- JESI タグに関するリリース・ノート
- タグ・ライブラリ・ディスクリプタは WEB-INF の下に配置
- OC4J の実行中にタグ・ライブラリ JAR ファイルを /WEB-INF/lib に追加
- ローカル・クラスを最初に検索
- [java.lang.ClassFormatError: \(切り捨てられたクラス・ファイル\)](#)

パッケージに含まれないクラスを起動できない

この問題は、Oracle Application Server 10g (9.0.4) に同梱されている Sun 社の JDK 1.4 環境に移行する際、サーブレット開発者と JSP 開発者にとって特に重要な考慮事項です。

Sun 社が述べているように、コンパイラでは、不特定の名前空間から型をインポートするインポート文は拒否されます。この変更は、JDK の以前のバージョンでのセキュリティ上の問題とあいまい性に対処するための措置です。これは、パッケージに含まれていないクラス（クラスのメソッド）は起動できないことを示します。パッケージに含まれていないクラスを起動しようとすると、コンパイル時に致命的エラーが発生します。

この問題は、特に、JSP ページから JavaBeans を起動する JSP 開発者に影響を与えます。このような Bean は、パッケージに含まれないことが多いためです (JSP 仕様 2.0 では、新しいコンパイラの要件を満たすために、Bean はパッケージ内に存在していることが要求されます)。パッケージに含まれない JavaBeans が起動されると、OC4J 9.0.3 / JDK 1.3.1 環境で作成および実行された JSP アプリケーションは、OC4J 9.0.4 / JDK 1.4 環境では動作しなくなります。

すべての JavaBean と起動されたその他のクラスがパッケージ内に含まれるようにアプリケーションを更新するまでは、JDK 1.3.1 環境に戻ることでこの問題を回避できます。

注意：

- `javac -source` コンパイラ・オプションを使用すると、JDK 1.4 コンパイラで JDK 1.3.1 コードをシームレスに処理できますが、クラスを起動するにはそのクラスをパッケージに含める必要があります。
- OC4J では、JDK 1.3.1 と JDK 1.4 コンパイラのみがサポートおよび認証されています。`server.xml` ファイルに `<java-compiler>` 要素を追加することで、別のコンパイラを指定できます。これがパッケージに含まれないクラスの問題に対する回避策になることもありますが、OC4J とともに使用する場合、Oracle では他のコンパイラは認証またはサポートされていません。また、Oracle Application Server 環境では、`server.xml` ファイルを直接更新しないでください。更新する場合は、Oracle Enterprise Manager を使用してください。

この問題については、次のリリース・ノートでも説明しています。「[JDK 1.3 から JDK 1.4 へのソース・コードの移行](#)」パッケージに含まれないクラスの問題と JDK 1.4 の互換性に関する他の問題に関する詳細は、次の Web サイトを参照してください。

<http://java.sun.com/j2se/1.4/compatibility.html>

「Java 2 Platform、Standard Edition、v1.4.0 と v1.3 における非互換性」のリンクをクリックしてください。

OC4J 起動時における SAX ドライバの設定

JavaServer Pages 標準タグ・ライブラリ (JSTL) の XML タグのフィルタ機能を OC4J で使用可能にするには、OC4J の起動時に SAX ドライバを設定する必要があります。

スタンダードアロン OC4J の起動時に、コマンドラインで次のオプションを使用します。

`-Dorg.xml.sax.driver=oracle.xml.parser.v2.SAXParser`

この設定は、Oracle Application Server の起動時にシステム・プロパティを使用して指定できます。この指定方法の詳細は、Oracle Application Server のドキュメントを参照してください。

このプロパティを設定しないと、JSTL のデモ `Filter.jsp` で次の例外が発生します。

`javax.servlet.jsp.JspException: System property org.xml.sax.driver not specified`

JSP ojspc の問題

この項では、ojspc に関する問題について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [debug オプションは ojspc の出力に影響を与えない](#)
- [/WEB-INF/lib や /WEB-INF/classes ディレクトリには .java ファイルを含めない](#)

debug オプションは ojspc の出力に影響を与えない

Oracle Application Server 10g (9.0.4) では、ojspc -debug オプションは ojspc の出力に影響を与えません。-debug オプションを指定した場合、このオプションは受け入れられますが無視されます。

/WEB-INF/lib や /WEB-INF/classes ディレクトリには .java ファイルを含めない

ojspc を使用する場合は、/WEB-INF/lib ディレクトリや /WEB-INF/classes ディレクトリ内、またはこれらのディレクトリの下に .java ファイルを配置しないでください。

/WEB-INF/lib や /WEB-INF/classes ディレクトリに .java ファイルが含まれていると、ojspc では、バッチ事前変換時にトップレベルのアーカイブで 1 つ以上の .class ファイルを重複して作成する場合があります。

JESI タグに関するリリース・ノート

この項では、Oracle Application Server 10g (9.0.4) における Java Edge Side Includes (JESI) タグの動作の変更と拡張について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [JESI タグに対する条件付き処理が不要](#)
- [JESI personalize タグで一重引用符を追加](#)
- [インクルードされたページ内に fragment タグを配置可能](#)
- [複数の control タグまたは template タグが使用可能](#)
- [template タグの開始タグと終了タグの外側にレスポンス出力がない](#)
- [明示的な ESI マークアップは JESI タグで使用しない](#)

JESI タグに対する条件付き処理が不要

以前のバージョンの JESI タグ・ライブラリでは、リクエストがブラウザなどのクライアントから直接発行されたか、または Oracle Web Cache から発行されたかに関係なく、JESI タグは常に同じ出力を生成しました。したがって、以前のバージョンのタグ・ライブラリでは、Oracle Web Cache が停止または使用不可になった場合、インクルードされたページまたはフラグメントがレスポンスに挿入されないため、JESI タグで特別な条件付き処理が必要でした。

OC4J 9.0.4 実装では、標準 JSP のインクルード機能を使用してフラグメントを挿入するため、Oracle Web Cache が使用できない場合でも、JESI タグは完全なレスポンスを正しく生成します。詳細は、『Oracle Application Server Containers for J2EE JSP タグ・ライブラリおよびユーティリティ・リファレンス』を参照してください。

JESI personalize タグで一重引用符を追加

OC4J 9.0.4 実装では、JESI personalize タグの default 属性または value 属性（下位互換性のため）の文字列値が一重引用符で囲まれます。この動作は、ESI 構文に準拠しています。Oracle Application Server 10g (9.0.4) より前のバージョンでは、ユーザーが、属性の文字列値を一重引用符で囲む必要がありました。9.0.4 実装より前のバージョンで使用していた personalize タグがページに含まれている場合は、余分な一重引用符を削除するように編集する必要があります。

インクルードされたページ内に fragment タグを配置可能

fragment タグは、template タグ（インクルードするページ内に配置可能）内で引用符で適切に囲まれている場合、jsp:include 標準アクションを介してインクルードされたページ内に配置できるようになりました。

複数の control タグまたは template タグが使用可能

OC4J は、複数の control タグを検出しても例外をスローせず、余分な control タグや template タグを無視します。OC4J は、検出した最初のタグのみ実行します。この機能によって、複数の control タグを JSP のインクルードされたページに配置できます。独自の control タグまたは template タグを含むページに別のページがインクルードされると、2 番目のタグは無視されます。この場合、インクルードされたページは個別に実行できます。

次の 4 つの組合せがあり、それぞれの動作は次のとおりです。

- control タグの後に control タグを使用できます。2 番目の control タグは無視されます。
- control タグの後に template タグを使用できます。template タグの属性は無視されます。
- template タグの後に control タグを使用できます。control タグは無視されます。
- template タグの後に template タグを使用すると、エラーが発生します。

template タグの開始タグと終了タグの外側にレスポンス出力がない

OC4J 9.0.4 および OC4J 9.0.3 の実装では、template タグの開始タグと終了タグの外側にレスポンス出力がないことが必要です。さらに、開始タグと終了タグの外側にレスポンスへのコンテンツ出力がない場合は、インクルードされたページに template タグを配置できます。

明示的な ESI マークアップは JESI タグで使用しない

明示的な ESI マークアップを JESI タグで使用して HTTP レスポンスを生成した場合、JESI タグ・ライブラリの正しい動作は保証されません。

タグ・ライブラリ・ディスクリプタは WEB-INF の下に配置

開発者は、以前の OC4J 実装での JSP 仕様に關係なく、タグ・ライブラリ・ディスクリプタに関する JSP 仕様を注意して遵守する必要があります。

既存の仕様では、タグ・ライブラリ・ディスクリプタは特定のアプリケーションの `application_root`/WEB-INF/ の下にのみ配置できます。

しかし実際にはこの仕様の要件にかかわらず、OC4J 9.0.4 実装（以前の実装も含めて）では、`application_root` の下の任意の位置にタグ・ライブラリ・ディスクリプタが配置されていました。

開発時の実装では、この仕様が厳密に適用されます。タグ・ライブラリ・ディスクリプタを配置できるのは、WEB-INF の下のみです。

この警告は、この OC4J 実装用に開発するコードが、将来アップグレードする際に変更の必要性がないことを確認できるように表示されます。

OC4J の実行中にタグ・ライブラリ JAR ファイルを /WEB-INF/lib に追加

OC4J の実行中にタグ・ライブラリ JAR ファイルを /WEB-INF/lib ディレクトリに追加する場合は、`ClassCastException` を回避するために、`tags_reuse_default` を `none` または `compiletime` に設定してください。

ローカル・クラスを最初に検索

タグ・ライブラリ JAR ファイルを、予約済の場所（グローバル・レベル）にある JAR ファイルのかわりにアプリケーション・レベルで使用する場合は、ローカル・クラスを最初に検索するようにアプリケーション・ローダーを設定する必要があります。これを設定するには、アプリケーションの `orion-web.xml` ファイルに次の値を設定します。

```
<web-app-class-loader search-local-classes-first="true" />
```

java.lang.ClassFormatError: (切り捨てられたクラス・ファイル)

次の例に示す JSP エラー・メッセージは、切り捨てられたクラス・ファイルを示します。

このエラー・メッセージは、次の状況で発生する可能性があります。

- ポータル環境で JSP を使用している場合
- システムの負荷がかなり大きい場合

次のいずれかの方法でこのエラーを修正します。

- JSP ファイルにアクセスして、JSP を再コンパイルします。
- 破損したクラス・ファイルを削除します。次のエラー・メッセージ例では、このクラス・ファイルは /modules/location/bizdir/jsp/bizdir.jsp と示されています。

切り捨てられたクラス・ファイルのエラー・メッセージ例

```
500 Internal Server Error
  OracleJSP:
  JSP Error:
-----
  Request URI:/modules/location/bizdir/jsp/bizdir.jsp
  Exception:
  java.lang.ClassFormatError: _location/_bizdir/_jsp/_bizdir (Truncated class file)
  at java.lang.ClassLoader.defineClass0(Native Method)
  at java.lang.ClassLoader.defineClass(ClassLoader.java:493)
  at java.security.SecureClassLoader.defineClass(SecureClassLoader.java:111)
  at oracle.jsp.app.JspClassLoader.loadClass(JspClassLoader.java:682)
  at java.lang.ClassLoader.loadClass(ClassLoader.java:255)
  ...
  ...
```

サーブレットに関するリリース・ノート

この項では、サーブレットに関するリリース・ノートを示します。この項の内容は次のとおりです。

- パッケージに含まれないクラスを起動できない
- 開発時にクラス名別のサーブレット起動が可能
- <orion-web-app> の一部の属性が使用不可

パッケージに含まれないクラスを起動できない

JDK 1.4 では、パッケージにないクラスからコールする場合、パッケージに含まれないクラスは起動できません。この問題の詳細は、JSP に関するリリース・ノート 「パッケージに含まれないクラスを起動できない」 を参照してください。

開発時にクラス名別のサーブレット起動が可能

OC4J では、開発時の便利な機能の 1 つとして、クラス名別にサーブレットを起動できます。

この機能は、http.webdir.enable システム・プロパティ、または global-web-application.xml ファイルか orion-web.xml ファイルのいずれかにある <orion-web-app> 要素の servlet-webdir 属性を使用して制御します。

この機能の詳細は、『Oracle Application Server Containers for J2EE サーブレット開発者ガイド』を参照してください。

OC4J 9.0.4 実装では、デフォルト設定の http.webdir.enable=true および servlet-webdir="/servlet/" によって、サーブレットをクラス名別にデフォルトで起動できます。

本番環境では、http.webdir.enable=false または servlet-webdir="" (空の引用符) のいずれかを設定して、この機能を無効にする必要があります。

<orion-web-app> の一部の属性が使用不可

OC4J 9.0.4 実装では、<orion-web-app> の属性として `internationalize-resources` および `default-mime-type` が `orion-web.dtd` ファイルに表示されます。ただし、これらの属性に関する説明はありません。使用しないでください。

EJB に関するリリース・ノート

この項では、EJB に関するリリース・ノートを示します。この項の内容は次のとおりです。

- [クライアント・リクエストにポート番号を含める必要性](#)
- [MDB トランザクション・タイムアウト](#)
- [MDB onMessage\(\) メソッドでの JMS 用 JMS 接続の作成と解放](#)
- [orion-ejb-jar.xml ファイル変更時の考慮事項](#)
- [EJB の静的ブロック](#)
- [ping タイムアウトによる OC4J インスタンスの終了](#)
- [EJB に関するその他のリリース・ノート](#)

クライアント・リクエストにポート番号を含める必要性

EJB にアクセスするため、次の形式を使用してクライアントで URL を指定する場合、常にポート番号を指定する必要があります。

`opmn:ormi://host:port:oc4j_inst/application`

ポート番号を指定しないと、`oc4j_inst` はデフォルトで常に `home` インスタンスに設定されます (Bug 3234351)。

MDB トランザクション・タイムアウト

`orion-ejb-jar.xml` ファイルの `transaction-timeout` 属性に定義されている Message-Driven Bean (MDB) トランザクション・タイムアウトは、オプション・パラメータです。この属性は、Oracle JMS を使用するコンテナ管理の MDB トランザクションに対するトランザクション・タイムアウト時間 (秒単位) を制御します。デフォルトは 1 日 (86,400 秒) です。MDB の `transaction-timeout` 属性の適用対象は、Oracle JMS を JMS プロバイダとして使用する CMT MDB のみです。この属性設定は、BMT MDB、または OC4J JMS を使用する MDB には影響を与えません (Bug 3079322)。

- Oracle Application Server での JMS の動作: この時間枠内で完了していないトランザクションはロールバックされ、メッセージが Destination オブジェクトに再配信されます。Oracle JMS によるメッセージ再配信の試行後 (デフォルトの試行回数は 5 回)、このメッセージは例外キューに移動します。詳細は、『Oracle9i アプリケーション開発者ガイド - アドバンスト・キューイング』を参照してください。
- OC4J での JMS の動作: `transaction-timeout` 設定は、OC4J JMS を使用する CMT MDB では機能しません。タイムアウトは常に 1 日で、変更することはできません。タイムアウトが発生すると、OC4J JMS は、配信が完了するまで無期限にメッセージを再配信し続けます。再配信の制限は設定できません。

さらに、`server.xml` ファイルに定義されているグローバルな `transaction-timeout` 属性は、MDB に影響を与えません。

MDB onMessage() メソッドでの JMS 用 JMS 接続の作成と解放

Oracle JMS 用の JMS 接続は、`ejbCreate()` メソッドではなく、MDB `onMessage()` メソッドで作成および解放する必要があります (Bug 2967949)。

orion-ejb-jar.xml ファイル変更時の考慮事項

アプリケーションを OC4J にデプロイ後、アプリケーションの `orion-ejb-jar.xml` ファイルを Oracle Enterprise Manager GUI を使用して変更する場合は、変更内容をアプリケーションに適用するため、OC4J を再起動する必要があります。

アプリケーションをスタンドアロン OC4J にデプロイ後、アプリケーションの `orion-ejb-jar.xml` ファイル内的一部の要素をテキスト・エディタを使用して変更する場合は、アプリケーションを再パッケージ化して、そのファイルをスタンドアロン OC4J（再起動不要）に再デプロイする必要があります。（Bug 3001543）。

EJB の静的ロック

OC4J での EJB デプロイ時には、コンテナが Bean クラスをロードしてそのメソッドを検索し、EJB ラッパーが生成されます。クラスのロード中に静的ロック内のコードが実行されるため、JNDI 環境のコンテキストはまだ設定されていません。実行時でも、Bean は存在していない段階です。ライフ・サイクルのこの段階では、JNDI 環境コンテキストは未定義であるため、Bean プロバイダではこれを使用可能とみなすことができません。

コンテキストを使用可能にするには、Bean の構成時に、`ejbCreate()` メソッドまたは `setSessionContext()` メソッドでコンテキストを設定してキャッシュする必要があります。

ping タイムアウトによる OC4J インスタンスの終了

特定の状況下では、Oracle Application Server の OPMN プロセス監視ソフトウェアが OC4J プロセスとの接続を失う場合があります。この状態は、OC4J インスタンスが適切に機能していることを検証するために OPMN と OC4J で使用するハートビート・プロトコルで、予期しない遅延が発生したことが原因の可能性があります。

この問題が散発的に発生する場合は、後述する指示に従って、ping タイムアウト・パラメータの値を増やしてください。

ただし、リソースが常に不足しているためにこの問題が常に発生する場合は、使用可能なハードウェア・リソースを増やす必要があります。

この問題は、次の状況で発生する可能性があります。

- ホスト・プロセッサがオーバーロードの場合。
- 1つ以上の計算集中型アプリケーションが OC4J インスタンスで実行されている場合。
- 大量（数百）の EJB を持つアプリケーションがデプロイされている場合。大量のヒープのガバージ・コレクションが原因で、ガバージ・コレクション・フェーズ時に OC4J プロセスのレスポンス速度が低下する場合があります。このような動作は通常の使用では発生しませんが、大量の EJB を持つ大規模アプリケーションを、メモリーに制約がある環境にデプロイすると発生する場合があります。

OPMN と OC4J の間の ping プロトコルの動作は、`opmn.xml` 構成ファイルで構成できます。

ping プロトコルで指定したタイムアウト時間を OC4J が超過すると、プロセス監視ソフトウェアは、OC4J プロセスがレスポンスを停止したと判断して、その OC4J プロセスを終了します。

このような動作が Oracle Application Server で発生している可能性がある場合は、次の手順に従ってトラブルシューティングを行い対処してください。

1. OC4J インスタンスが原因不明のまま終了する場合は、最初に診断ロギング・レベルを増やして、ping の障害が終了の原因かどうかを判断します。

- a. OPMN のロギング・レベルを 5 に増やして ping を調べます。

`opmn/conf/opmn.xml` で、次の行を編集します。

```
log-file path="$ORACLE_HOME/opmn/logs/ipm.log" level="5" ...
```

2. デーモンを再ロードします。

`opmn/bin/opmnctl reload`

3. opmn/logs/ipm.log で次の行を調べます。

```
Process Ping Failed: OC4J~<instance name>~default_island~1 (opmnid)
```

4. 前述の行は、現行ホストのメモリーと CPU リソースが不十分であるため、現在指定されている ping タイムアウト時間 (OC4J のレスポンス速度を判断するために OPMN で使用される) 内で操作を実行できない可能性があることを示しています。

次のように設定を変更してください。

- a. timeout と interval の値を増やします。

例 :

```
<ping timeout="60" interval="60"/>
<data id="reverseping-failed-ping-limit" value="5" />
```

5. デーモンを再ロードします。

```
opmn/bin/opmnctl reload
```

6. 適切な OC4J インスタンスを再起動します。

7. タイムアウトの障害が発生したトップレベル操作を繰り返します。

EJB に関するその他のリリース・ノート

EJB に関するその他のリリース・ノートは次のとおりです。

- コンテナ管理の永続性 (CMP) を持つ Entity Bean は、読み取り専用でない別の Entity Bean とのコンテナ管理の関連性 (CMR) がある場合、読み取り専用としてマークできません。
- EJB コンテナ以外のアプリケーション・クライアントから EJB を起動すると、その EJB に対する Java Authentication and Authorization Service (JAAS) はサポートされません。ただし、OC4J インスタンス内のサーブレットから EJB をコールする場合、JAAS はサポートされます。
- Bean が複数のラッパーと関連付けられている場合、コンテナは EJBActivate() メソッドを複数回コールする場合があります (Bug 3107168)。
- アプリケーションの EJB から別のアプリケーションの EJB にアクセスする場合、RMIClientContextFactory オブジェクトは使用できません。この場合は、2 つのアプリケーション間の親子関係を使用し、デフォルトの初期コンテキスト・ファクトリ・オブジェクトを使用する必要があります (Bug 2812150)。
- JTA 2 フェーズ・コミット (2pc) 機能は Oracle9i リリース 2 (9.2) では機能しません。2pc 機能を使用可能にするには、Oracle Database リリース 9.2.0.4 以上を使用してください (Bug 2668460)。
- 現在、orion-ejb-jar.xml ファイルに定義する finder 問合せ文字列内では、オンライン SQL 問合せがサポートされていません。finder 問合せを変更するときは、次のようなオンライン SQL 問合せは使用しないでください。

```
SELECT * FROM
  (SELECT * FROM TEST1) A,
  (SELECT * FROM TEST2) B WHERE A.ID =B.ID
```

OC4J サービスに関するリリース・ノート

この項では、OC4J サービスに関する問題について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [JNDI に関するリリース・ノート](#)
- [Java Object Cache \(JOC\) に関するリリース・ノート](#)
- [OC4J データソースに関するリリース・ノート](#)

JNDI に関するリリース・ノート

この項では、Java Naming and Directory Interface (JNDI) に関するリリース・ノートを示します。この項の内容は次のとおりです。

- [JNDI クラスタリング：サポート外のクライアントからのバインド値](#)
- [IIOP 相互作用の JDK バージョンを混在させない](#)

JNDI クラスタリング：サポート外のクライアントからのバインド値

JNDI クラスタリングでは、次の両方の条件に当てはまる場合を除き、クライアント（新規の InitialContext など）からバインドされたクラスタリング値をサポートしません。

- クライアントが、ルックアップ URL を使用して値を JNDI にバインドしていること。
- すべてのサーバーが起動していること。

IIOP 相互作用の JDK バージョンを混在させない

この項では、Internet Inter-ORB Protocol (IIOP) に関するリリース・ノートを示します。

IIOP 相互作用の JDK バージョンを混在させないでください。Internet Inter-ORB Protocol (IIOP) を使用して OC4J が他の J2EE サーバーと通信中の場合は、すべてのサーバーで同じバージョンの JDK を使用する必要があります。

Java Object Cache (JOC) に関するリリース・ノート

この項では、Java Object Cache (JOC) に関するリリース・ノートを示します。この項の内容は次のとおりです。

- [JOC 構成で javacache.xml を使用](#)

JOC 構成で javacache.xml を使用

OC4J 9.0.4 実装では、JOC 構成で `javacache.xml` ファイルを使用します。以前のバージョンの JOC では、`javacache.properties` ファイルを使用して構成を行っていました。

注意： 同じホスト上に 9.0.4 リリースと 9.0.4 以前のリリースをインストールしている場合は、`javacache.xml` `discovery-port` 属性と `javacache.properties` `discoveryAddress` 属性が同じポートに構成されていないことを確認してください。同じポートに構成されている場合は、いずれかの値を別のポート番号 (7000 ~ 7099) に手動で変更する必要があります。

OC4J データソースに関するリリース・ノート

この項では、OC4J データソースに関するリリース・ノートについて説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [エミュレートされていないデータソースで必要な Java 対応データベース](#)

エミュレートされていないデータソースで必要な Java 対応データベース

エミュレートされていないデータソースを実行する場合は、Java 対応のデータベースを使用する必要があります。

エミュレートされていないデータソースと Java 非対応のデータベースを使用すると、MDB アプリケーション (AQJMS) をデプロイした場合に例外が発生します (OC4J `stdout` がスローされます)。エミュレートされているデータソースあるいは Java 対応のデータベースに切り替えると、デプロイが正常に行われます。

Oracle JMS のリリース・ノート

この項では、Oracle JMS のリリース・ノートについて説明します。この項の内容は次のとおりです。

- Oracle 8.1.7 OCI データベース・ドライバで操作する Oracle JMS の使用
- デフォルト・アプリケーション用サードパーティの JMS プロバイダは OC4J の再起動を停止する

Oracle 8.1.7 OCI データベース・ドライバで操作する Oracle JMS の使用

Oracle Application Server 10g とともに出荷されたデータベース・クライアントでは、Oracle 8.1.7 データベース搭載の OCI データベース・ドライバで Oracle JMS を操作できません。Oracle 8.1.7 データベースを使用する場合は、シン・データベース・ドライバを使用することを Oracle 社ではお薦めします。

デフォルト・アプリケーション用サードパーティの JMS プロバイダは OC4J の再起動を停止する

デフォルト・アプリケーションにサードパーティの JMS プロバイダを作成する場合は、変更を適用するために OC4J を再起動する必要があります。サードパーティの JMS プロバイダは、OC4J の起動を停止します。

起動時のエラーは `jms.log` ファイルに記録されます。次のように記録されます。

```
04/04/06 10:41:58 9.0.4.0.0 Stopped (Critical error during startup)
```

他のアプリケーションの指定のサードパーティ JMS プロバイダに `mb` を追加した場合、このエラーは発生しません。

OracleAS JAAS Provider に関するリリース・ノート

リリース 9.0.4 で OracleAS JAAS Provider を使用する場合は次の項に注意してください。

- OracleAS JAAS Provider での 9.0.4 Oracle Internet Directory Server の使用

OracleAS JAAS Provider での 9.0.4 Oracle Internet Directory Server の使用

9.0.4 Oracle Internet Directory の実装においては、Access Control List (ACL) は JAZNAdminGroup に対して正しく設定されていません。OracleAS JAAS Provider で 9.0.4 Oracle Internet Directory の実装を使用するには、次のコンテンツをファイルに置き、`%s_MgmtRealmDN%` を適切な ID 管理レルム（たとえば `dc=us`、`dc=oracle`、`dc=com`）に置換し、後に続く手順を実行します。

```
dn: cn=JAZNContext,cn=Products,cn=OracleContext,%s_MgmtRealmDN%
changetype: modify
replace: orclaci
orclaci: access to entry
  by group= "cn=JAZNAdminGroup,cn=Groups,cn=JAZNContext,cn=Products,cn=OracleContext"
  (browse, add, delete)
  by group= "cn=IASAdmins,cn=Groups,cn=OracleContext,%s_MgmtRealmDN%"
  added_object_constraint=(objectclass=orclApplicationEntity) (add, delete, browse)
  by * (none)
orclaci: access to attr=(*)
  by group= "cn=JAZNAdminGroup,cn=Groups,cn=JAZNContext,cn=Products,cn=OracleContext"
  (search, read, write, compare)
  by group= "cn=IASAdmins,cn=Groups,cn=OracleContext,%s_MgmtRealmDN%"
  (read, search, write, compare)
  by * (none)
```

1. ファイルに `.ldif` 拡張子を付けます（たとえば `jaznacl.ldif`）。
2. 新規作成したファイルを入力として `ldapmodify` ユーティリティを実行し、`oidport`、`oidhost`、`adminuser_dn`、`password` および `filename` を指定します。

```
ldapmodify -a -p oidport -h oidhost -D adminuser_dn -w password ¥
-f filename.ldif
```

ドキュメントの誤り

この項では、Oracle Application Server 10g (9.0.4) の OC4J ドキュメントの誤りについて説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [『Oracle Application Server Containers for J2EE サーブレット開発者ガイド』の誤り](#)
- [『Oracle Application Server Containers for J2EE JavaServer Pages 開発者ガイド』の誤り](#)
- [『Oracle Application Server Containers for J2EE ユーザーズ・ガイド』の誤り](#)
- [『Oracle Application Server Containers for J2EE サービス・ガイド』の誤り](#)
- [ssoInfo デモのログイン・ユーザー名の変更](#)
- [カード・パーティ製データベースに対して修正された JDBC 接続文字列](#)
- [SSL 構成に関する訂正](#)
- [LDAP の location 属性を jazn.xml または orion-application.xml に設定しない](#)
- [Oracle Application Server 10g とともにインストールされる JDK1.4](#)

『Oracle Application Server Containers for J2EE サーブレット開発者ガイド』の誤り

『Oracle Application Server Containers for J2EE サーブレット開発者ガイド』で、6-6 ページにある次の記述が誤っています。

「注意：OC4J JSP コンテナは persistence-path フラグを現在サポートしていません。このフラグはサーブレット専用です。」

実際は、Oracle Application Server 10g (9.0.4) の JSP コンテナは、このフラグをサポートしています。

『Oracle Application Server Containers for J2EE JavaServer Pages 開発者ガイド』の誤り

『Oracle Application Server Containers for J2EE JavaServer Pages 開発者ガイド』の第 2 章の「Oracle HTTP Server と mod_oc4j」の項にある次の記述が誤っています。

「mod_oc4j モジュールは、必要に応じて、OC4J インスタンスを自動的に再起動できます。」

実際は、OC4J プロセスがなんらかの理由で使用不可になったことが検出されると、mod_oc4j ではなく OPMN が自動的に OC4J プロセスを再起動します。

『Oracle Application Server Containers for J2EE ユーザーズ・ガイド』の誤り

『Oracle Application Server Containers for J2EE ユーザーズ・ガイド』の付録 A 「追加情報」には、次の情報がありません。「server.xml ファイルの <application-server> 内に含まれる要素」の項には、<metric-collector> 要素に関する次のテキストが含まれている必要があります。

<metric-collector>

この <metric-collector> 要素は、OC4J が 0 ~ 100 のメトリックを mod_oc4j に送信するように指定します。これによって、mod_oc4j はルーティングを決定して、使用可能な OC4J インスタンスへの受信リクエストのロード・バランシングを実行できます。送信されるメトリックは相対値のみで、0 (ゼロ) は OC4J インスタンスが非常にビジーであることを示し、100 は OC4J インスタンスが使用可能である (ビジーではない) ことを示します。mod_oc4j は、メトリック・ロード・バランシング用に構成されている場合、値が大きい OC4J インスタンスに最初にルーティングします。

OC4J から mod_oc4j に送信されたメトリックが使用されるのは、メトリック・ベースのロード・バランシングが mod_oc4j で指定され、OC4J が Oracle Application Server 環境で稼動している場合のみです。

メトリック・ベースのロード・バランシングを mod_oc4j で指定し、server.xml の <metric-collector> 要素を指定しないと、mod_oc4j は OC4J がメトリックを送信すると想定しますが、OC4J はメトリックを送信しません。この場合、mod_oc4j は次の警告メッセージをレポートします。

```
No run time metrics for oc4j(opmnid=%s) in notification Oc4jSelectMethod is configured to use run time metrics, please make sure OC4J side is configured accordingly. Default to 50.
```

また、この場合、mod_oc4j は、各 OC4J プロセスについてメトリック値 50 を使用して処理を継続します。

同様に、server.xml の <metric-collector> 要素を指定し、メトリック・ベースのロード・バランシングを mod_oc4j で指定しないと、OC4J はメトリックを送信しますが、mod_oc4j はメトリックを受信するように構成されていません。この場合、mod_oc4j はメトリックを無視し、ロード・バランシング用に構成されたメソッドを使用します。Oc4jSelectMethod を使用して、ロード・バランシング用のメソッドを指定します。Oc4jSelectMethod を指定しないと、mod_oc4j はデフォルトの roundrobin を使用します。

<metric-collector> 要素は、classname 属性を取ります。

classname 属性は、サーバー全体のメトリックを収集して計算するインターフェースを定義します。

DMS 名詞ベースのメトリック・コレクタを使用する場合は、classname 属性の

oracle.oc4j.server.DMSMetricCollector を使用してください。DMSMetricCollector インスタンスでは、いくつかのパラメータを取得します。使用可能なパラメータ値の詳細は、『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』を参照してください。

次に例を示します。

```
<metric-collector classname="oracle.oc4j.server.DMSMetricCollector">
  <init-param>
    <param-name>
      dms-noun
    </param-name>
    <param-value>
      /oc4j/default/WEBs/processRequest.time
    </param-value>
  </init-param>
  <init-param>
    <param-name>
      history-proportion
    </param-name>
    <param-value>
      0.2
    </param-value>
  </init-param>
  <init-param>
    <param-name>
      debug
    </param-name>
    <param-value>
      false
    </param-value>
  </init-param>
</metric-collector>
```

<metric-collector> 要素の使用方法、および mod_oc4j でのメトリック・ベースのロード・バランシングの使用方法については、『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』を参照してください。

『Oracle Application Server Containers for J2EE サービス・ガイド』の誤り

『Oracle Application Server Containers for J2EE サービス・ガイド』の「JNDI クラスタリング」の項にある次の記述が誤っています。

「JNDI クラスタリングが有効化されている場合は、1つのサーバー上でシリアル化可能な値をアプリケーション・コンテキストに（リモート・クライアント、EJB またはサーブレットを介して）バインドし、それを別のサーバー上で読み取ることができます。また、この方法でサブコンテキストを作成したり破棄することもできます。」

OC4J 10g (9.0.4) では、サブコンテキストの破棄はまだサポートされていません。

ssoInfo デモのログイン・ユーザー名の変更

ssoInfo デモで認証に使用するユーザー名が「admin」から「adminuser」に変更されました。ユーザー名に「admin」を使用すると、認証に失敗します。

カード・パーティ製データベースに対して修正された JDBC 接続文字列

『Oracle Application Server Containers for J2EE サービス・ガイド』の「データ・ソース」の章の「DataDirect のデータ・ソース・エントリ」の項で、例に記載された URL に誤りがあります。

現在、URL は次のように表記されています。

```
url="jdbc: ベンダーネーム ://...
```

正しい URL は次のようにになります。

```
url="jdbc:oracle: ベンダーネーム ://...
```

したがって、DataDirect のデータ・ソース・エントリは次のようにになります。

SQLServer

SQLServer データベースのデータ・ソースの設定例は次の通りです。

```
<data-source
    class="com.evermind.sql.DriverManagerDataSource"
    name="OracleDS"
    location="jdbc/OracleCoreDS"
    xa-location="jdbc/xa/OracleXADS"
    ejb-location="jdbc/OracleDS"
    schema="database-schemas/ms-sql.xml"
    connection-driver="com.oracle.ias.jdbc.sqlserver.SQLServerDriver"
    username="mssql"
    password="mssql"
    url="jdbc:oracle:sqlserver://PZWU-PCYWUPZIAS;User=mssql;Password=mssql"
    inactivity-timeout="30"
/>
```

DB2

DB2 データベースのデータ・ソースの設定例は次の通りです。

```
<data-source
    class="com.evermind.sql.DriverManagerDataSource"
    connection-driver="com.oracle.ias.jdbc.db2.DB2Driver"
    name="Oracleds"
    location="jdbc/OracleCoreDS"
    xa-location="jdbc/xa/OracleXADS"
    ejb-location="jdbc/OracleDS"
    schema="database-schemas/db2.xml"
    username="db2admin"
    password="db2admin"
    url="jdbc:oracle:db2://
        ying.us.oracle.com:50000;DatabaseName=sample;CreateDefaultPackage=TRUE"
    inactivity-timeout="30"
/>
```

Sybase

Sybase データベースのデータ・ソースの設定例は次の通りです。

```
<data-source
    class="com.evermind.sql.DriverManagerDataSource"
    name="OracleDS"
    location="jdbc/OracleCoreDS"
    xa-location="jdbc/xa/OracleXADS"
    ejb-location="jdbc/OracleDS"
    schema="database-schemas/sybase.xml"
    connection-driver="com.oracle.ias.jdbc.sybase.SybaseDriver"
    username="JDBC_TEST"
    password="JDBC_TEST"
    url="jdbc:oracle:sybase://dlsun150:4101"
    inactivity-timeout="30"
/>
```

Informix

Informix データベースのデータ・ソースの設定例は次の通りです。

```
<data-source
    class="com.evermind.sql.DriverManagerDataSource"
    name="OracleDS"
    location="jdbc/OracleCoreDS"
    xa-location="jdbc/xa/OracleXADS"
    ejb-location="jdbc/OracleDS"
    schema="database-schemas/informix.xml"
    connection-driver="com.oracle.ias.jdbc.informix.InformixDriver"
    username="tg4odbc"
    password="tg4odbc"
    url="jdbc:oracle:informix://
        dlsuni50:3900;informixServer=gtw93;DatabaseName=gatewaydb"
    inactivity-timeout="30"
/>
```

SSL 構成に関する訂正

『Oracle Application Server Containers for J2EE セキュリティ・ガイド』の第3章「JAAS Preovider の構成とデプロイ」の「Oracle Internet Directory で SSL を使用するための JAAS Provider の構成」の項で、`ldap.protocol` プロパティを `ssl` に設定する指示が誤っています。

SSL を介して Oracle Internet Directory と通信するかどうかを判断するために、Oracle JAAS は `$ORACLE_HOME/config/ias.properties` ファイルの `SSLOnly` プロパティを調べます。この情報は、インストール時または Oracle Enterprise Manager を介して、中間層がインフラストラクチャに関連付けられるときに `ias.properties` ファイルに設定されます。

LDAP の location 属性を `jazn.xml` または `orion-application.xml` に設定しない

『Oracle Application Server Containers for J2EE セキュリティ・ガイド』の第3章「JAAS Provider の構成とデプロイ」にある3つの構成例には不要な設定が含まれているため、削除する必要があります。

特に、`ldap` の `location` 属性は、`$ORACLE_HOME/j2ee/home/config/jazn.xml` ファイルまたは `orion-application.xml` ファイルに設定する必要はありません。

JAAS は、LDAP ベースのプロバイダの `location` プロパティを `$ORACLE_HOME/config/ias.properties` から読み込みます。この情報は、インストール時または Oracle Enterprise Manager を介して、中間層がインフラストラクチャに関連付けられるときに `ias.properties` ファイルに設定されます。

このため、`jazn.xml` ファイルまたは `orion-application.xml` ファイルの `jazn` タグに `location` プロパティは必要ありません。

『Oracle Application Server Containers for J2EE セキュリティ・ガイド』の第3章「JAAS Provider の構成とデプロイ」にある次の構成例を訂正してください。

- [「Oracle Internet Directory で SSL を使用するための JAAS Provider の構成」の構成例の訂正](#)
- [「キャッシングの構成 \(LDAP ベース・プロバイダのみ\)」の構成例の訂正](#)

「Oracle Internet Directory で SSL を使用するための JAAS Provider の構成」の構成例の訂正

「Oracle Internet Directory で SSL を使用するための JAAS Provider の構成」の項にある2つの構成例で、次のようにコードを変更してください。

次のコードを置き換えます。

```
< jazn provider="ldap" location="ldap://pixcn-sun.us.oracle.com:5000" >
```

正しい記述は次のとおりです。

```
<jazn provider="ldap"/>
```

「キャッシングの構成 (LDAP ベース・プロバイダのみ)」の構成例の訂正

「キャッシングの構成 (LDAP ベース・プロバイダのみ)」の項の最後にある構成例を次のように変更してください。次のコードを置き換えます。

```
<jazn provider="LDAP" location="ldap://example.com:389" >
```

正しい記述は次のとおりです。

```
<jazn provider="ldap" />
```

Oracle Application Server 10g とともにインストールされる JDK1.4

『Oracle Application Server Containers for J2EE ユーザーズ・ガイド』の「OC4J の概要」の「OC4J の通信」の「要件」の項の次の文には誤りがあります。

最適なパフォーマンスのためには、Oracle Application Server リリース 2 (9.0.2) とともにインストールされる JDK、つまり JDK 1.3.x を使用して OC4J を実行してください。

正しい記述は、次のとおりです。

パフォーマンスを最適化するためには、Oracle Application Server 10g とともにインストールされる JDK (JDK 1.4.x) で OC4J を実行する必要があります。

11

Oracle HTTP Server

この章では、Oracle HTTP Server に関する問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 一般的な問題と回避策
- 構成に関する問題と回避策
- ドキュメントの誤り

一般的な問題と回避策

この項では、一般的な問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- Oracle Application Server Single Sign-On Wallet はサポートされていない
- OC4J プラグインのスタンドアロンとコア・インストールでの使用方法
- mod_oc4j と mod_jserv を同時に使用する際の制限
- OSSO プラグインを使用するためのファイル権限の変更
- mod_oprocmgr の有効化

Oracle Application Server Single Sign-On Wallet はサポートされていない

Windows 用の Oracle Application Server, 10g (9.0.4) では、Oracle Application Server Single Sign-On Wallet はサポートされていません。かわりに、httpd.conf 内の SSLWalletPassword ディレクティブを使用してください。

Oracle Application Server Single Sign-On Wallet はサポートされていませんが、使用する場合は、Oracle Process Manager サービスの所有者を変更する必要があります。デフォルトの SYSTEM 所有者ではなく、Oracle Application Server Single Sign-On Wallet を使用可能にしたアカウントを使用してください。

OC4J プラグインのスタンドアロンとコア・インストールでの使用方法

OPMN がない OC4J スタンドアロン製品で OC4J プラグインを使用する場合、その OC4J プラグインで使用できるのは、特定のホストとポートへの静的ルーティングのみで、OC4J は AJP を使用するように構成する必要があります。ホストとポートとの静的ルーティングを使用すると、次のような Oc4jMount ディレクティブのみがサポートされます。

```
Oc4jMount /j2ee/* ajp13://localhost:6001,localhost:6002
```

AJP を OC4J 構成で使用可能にするには、OC4J 構成の default-web-site.xml ファイル内に次のような行が存在する必要があります。

```
<web-site port="3000" protocol="ajp13" display-name="OracleAS Java Web Site">
```

port の値は、この OC4J プロセスが着信 AJP リクエストをリスニングするポートを指定します。

mod_oc4j と mod_jserv を同時に使用する際の制限

mod_oc4j と mod_jserv は両方ともサーブレット・コンテナに対するリクエストをルーティングするため、単一の Oracle HTTP Server インスタンス内で両方を実行するように構成する際は注意が必要です。特に、mod_jserv の ApjServAction ディレクティブは、ルーティングの問題が発生する場合があるため、使用しないでください。たとえば、このディレクティブの使用時に .jsp で終わるすべてのリクエストのマッピングが含まれていると、Oc4jMount ディレクティブを介して OC4J で処理される予定であったリクエストが、誤って mod_jserv にルーティングされる場合があります。

OSSO プラグインを使用するためのファイル権限の変更

Microsoft Windows 2003 の IIS 6 内でプラグインを使用するときに、OSSO プラグインを使用したり OC4J プラグインに対して SSL をオンにするには、%ORACLE_HOME%\bin にある .dll ファイルに対する権限を変更する必要があります。このファイル位置は、データベースの RSF が取得される位置と同じです。この .dll ファイルには、ユーザー NETWORK SERVICE の実行権限が付与される必要があります。

この操作は、通常のインストール時には実行しないでください。

IIS 6 はユーザー NETWORK SYSTEM として実行されるため、必要な権限が付与されないかぎり、プラグインは正しく機能しません。

mod_oprocmgr の有効化

mod_oprocmgr を有効にするには、少なくとも 1 つの非 HTTPS ポートを Oracle HTTP Server 用に有効にする必要があります。

構成に関する問題と回避策

この項では、構成に関する問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- Oracle HTTP Server (1.0.2.2.x) を Oracle Application Server (9.0.4.x) で使用できない問題
- mod_plsql 構成ファイルの手動による編集
- 無効な mod_plsql 構成ファイルが Oracle Enterprise Manager インタフェースに表示されない問題
- FastCGI ソケット・パスの長さエラー
- ポート・トンネリングまたは mod_oc4j での SSL を使用可能にした後に Oracle HTTP Server が起動しない問題
- mod_jserv を使用可能にする場合の ApJServManual 設定情報

Oracle HTTP Server (1.0.2.2.x) を Oracle Application Server (9.0.4.x) で使用できない問題

Oracle は、Oracle9iAS リリース 1 (1.0.2.2.x) で提供される Oracle HTTP Server を、Oracle Application Server 10g (9.0.4.x) で提供される OC4J へのフロントエンドとして使用することはサポートしていません。これら 2 つのコンポーネント間でデータをルーティングするときは、mod_proxy を使用しないでください。

Oracle Application Server 10g (9.0.4.x) で提供される OC4J との間でデータをルーティングする場合は、常に mod_oc4j を使用してください。Oracle9iAS リリース 1 (1.0.2.2.x) で提供される Oracle HTTP Server コンポーネントと、Oracle9iAS リリース 1 (1.0.2.2.x) で提供される OC4J との間でデータをルーティングする場合は、mod_proxy モジュールを使用してください。

mod_plsql 構成ファイルの手動による編集

mod_plsql 構成ファイルの *ORACLE_HOME/Apache/modplsql/conf/dads.conf* または *ORACLE_HOME/Apache/modplsql/conf/cache.conf* を編集する場合は、次の手順に従って DCM と Oracle Enterprise Manager を同期化する必要があります。

- コマンドラインで \$ORACLE_HOME/dcm/bin/dcmctl -updateConfig -co HTTP_Server を実行します。
- Application Server Control を再起動すると、Oracle Enterprise Manager の mod_plsql 管理で変更内容が認識されます。
- Oracle HTTP Server を再起動すると、構成ファイルに対する変更内容が認識されます。

無効な mod_plsql 構成ファイルが Oracle Enterprise Manager インタフェースに表示されない問題

Application Server Control を使用して mod_plsql ファイルを構成し、検証時にそのファイルが破損したか、または無効な構文が含まれている場合は、Oracle Enterprise Manager に構成データが表示されません。実行する構成操作はありません。

FastCGI ソケット・パスの長さエラー

ほとんどのプラットフォームでは、FastCGI が使用するソケットのパスは最大 108 文字に制限されています。次のようなエラーが発生した場合は、FastCgiIpcDir ディレクティブを使用して、108 文字より大幅に短いパス名 (/tmp など) を指定します。

```
Thu Oct 16 12:55:06 2003] [error] [client 148.87.9.44] [ecid: 82608810576,1]
FastCGI: failed to connect to (dynamic) server
"/opt/oracle/inst/Apache/Apache/fcgi-bin/echo": path
"/opt/oracle/inst/Apache/Apache/logs/fastcgi/dymanic/aac1cec5416b961cf002c5526b4159"
is too long for a Domain socket
```

ポート・トンネリングまたは mod_oc4j での SSL を使用可能にした後に Oracle HTTP Server が起動しない問題

ポート・トンネリング (iASPT) または mod_oc4j での SSL を使用可能にするように構成を変更すると、変更後の Oracle HTTP Server が起動しない場合があります。この問題の解決方法は次のとおりです。

- 推奨する解決方法 :mod_perl が不要な場合は、httpd.conf から LoadModule perl_module libexec/libperl.so 行をコメント・アウトしてこれを使用不可にします。
- mod_perl が必要な場合は、Sun 社の最新パッチ・セットを実行していることを確認し、mod_perl の LoadModule 行を httpd.conf にある mod_oc4j.conf のインクルードの後まで移動します。

mod_jserv を使用可能にする場合の ApJServManual 設定情報

mod_jserv を使用可能にする場合、ApJServManual ディレクティブが「オフ」モードで機能するには、Apache が opmnctl ではなく apachectl start を使用して起動された場合のみです。

ドキュメントの誤り

この項では、ドキュメントの誤りについて説明します。この項の内容は次のとおりです。

- メトリック・ベースのロード・バランシングに関する追加情報
- IIS 用の匿名アクセスの構成
- Sun ONE での OC4J プラグインの構成の手順における誤り
- プロキシ・プラグインを使用するための Sun ONE リスナーの構成の手順における誤り
- Oracle ではサポートされていないモジュールの記述の誤り

メトリック・ベースのロード・バランシングに関する追加情報

『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』の「Oracle HTTP Server のモジュール」の章に、メトリック・ベースのロード・バランシングに関する記述があります。このトピックに関する追加情報は、『Oracle Application Server 10g リリース・ノート』の「OC4J」の項、および『Oracle Application Server Containers for J2EE ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

IIS 用の匿名アクセスの構成

『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』の付録「Oracle Application Server Containers for J2EE Plug-in の使用」に、IIS 用の匿名アクセスを構成するための次の情報を追加してください。

OC4J で認証を実行する場合は、次の手順を実行してください。

1. 「IIS Management GUI」で、デフォルトの Web サイトをクリックし、「Properties」を選択します。
2. 「Directory Security」タブを選択し、「Anonymous Access and Authentication Control」の下にある「Edit」ボタンをクリックします。「Anonymous access」がチェックされ、「basic authentication」と「integrated Windows Authentication」が両方ともチェックされていないことを確認します。

注意： IIS で認証を実行し、単にユーザー名を OC4J に渡す場合は、IIS で認証を使用不可にしないでください。

Sun ONE での OC4J プラグインの構成の手順における誤り

『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』の付録「Oracle Application Server Containers for J2EE Plug-in の使用」の「Sun ONE での OC4J プラグインの構成」の項における次の記述に誤りがあります。

1. /sunone/https-mymachine/magnus.conf の末尾に次の行を追加します。

```
Init fn="load-modules" shlib="/sunone/opii.so" funcs=opii_init,
opii_objecttype,opii_service,opii_child_init
```

正しくは次のとおりです。

```
Init fn="load-modules" shlib="/sunone/opii.so" funcs=opii_init,
opii_objecttype,opii_service,opii_child_init
```

2. /sunone/https-mymachine/obj.conf を次のように変更します。

- a. ObjectType 行の前に次の行を追加します。

```
ObjectType fn=opii_objecttype
```

- b. 次のような Service 行を追加します。

```
Service Type="oracle/opii" fn="opii_service" UserOutputStreamSize = 8192
```

正しくは次のとおりです。

- a. ObjectType 行の前に次の行を追加します。

```
ObjectType fn=opii_objecttype
```

- b. 次のような Service 行を追加します。

```
Service type="oracle/opii" fn="opii_service"
```

注意：パフォーマンスを最適化するために UseOutputStreamSize を使用する必要がある場合があります。詳細は、Sun ONE Web Server のマニュアルを参照してください。

プロキシ・プラグインを使用するための Sun ONE リスナーの構成の手順における誤り

『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』の付録「Oracle Application Server Proxy Plug-in の使用」の「プロキシ・プラグインを使用するための Sun ONE リスナーの構成」項の手順 4 における次の記述に誤りがあります。

obj.conf ファイルの <Object name=default> セクションで、ObjectType で始まる他のすべての行の前に次の行を追加します。

```
ObjectType fn=op_objecttype UseOutputStreamSize=8192
```

正しくは次のとおりです。

obj.conf ファイルの <Object name=default> セクションで、ObjectType で始まる他のすべての行の前に次の行を追加します。

```
ObjectType fn=op_objecttype
```

Oracle ではサポートされていないモジュールの記述の誤り

『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』の「Oracle HTTP Server のモジュール」の章には、次のモジュールは Oracle ではサポートされていないと記述されていますが、これは誤りです。

```
mod_asis  
mod_auth_dbm  
mod_cern_meta  
mod_example  
mod_imap  
mod_log_agent  
mod_nmap_static
```

これらのモジュールは現在 Oracle でサポートされています。

12

Oracle Application Server TopLink

この章では、Oracle Application Server TopLink (OracleAS TopLink) に関する問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 一般的な問題と回避策
- ドキュメントの誤り

一般的な問題と回避策

この項では、OracleAS TopLink に関する一般的な問題とその回避策について説明します。

注意： この項は、サポートされるすべてのプラットフォームに適用されます。OracleAS TopLink ではファイル・パスおよびスクリプト名がすべてのプラットフォームで同じです。この項では Windows のファイル・パス・セパレータ (¥) をデフォルトで使用します。必要に応じて使用しているプラットフォームに適したファイル・パス・セパレータに置き換えてください。

この項の内容は次のとおりです。

- [新しいパッケージ名](#)
- [API の変更](#)
- [OracleAS TopLink の例](#)
- [BEA WebLogic 8.1 Service Pack 1 での EJB QL 解析と JSP 実行](#)
- [XML パーサーの依存性](#)
- [UTF-8 エンコードの例外](#)
- [SAXParseException のエラー・メッセージ](#)
- [OracleAS TopLink の使用：右から左へ記述する言語を使用する Web クライアント](#)
- [データベースとの通信が失われた後はキャッシュ済の文の実行に失敗する問題](#)
- [OracleAS TopLink を IBM WebSphere 5.1 とともに使用](#)
- [クラスタリングを使用した検出機能の使用](#)
- [OracleAS TopLink Mapping Workbench](#)

新しいパッケージ名

リリース 2 (9.0.3) 以降、構造全体のベース・パッケージは `oracle.toplink` になりました。パッケージ名変更ツールを使用して、既存のアプリケーション・ソース・コードをアップグレードし、リリース 2 (9.0.3) より前のバージョンを参照する OracleAS TopLink Mapping Workbench のプロジェクトをアップグレードしてください。

注意： 以前のバージョンからリリース 2 (9.0.3) にアップグレードする場合は、プロジェクトを OracleAS TopLink 10g (9.0.4) でオープンする前にパッケージ名を変換する必要があります。

パッケージ名変更ツールの詳細は、『Oracle Application Server TopLink スタート・ガイド』を参照してください。

API の変更

10g (9.0.4) では、OracleAS TopLink の API が次のように変更されました。

- `DatabasePlatform.initializePreallocatedSequences()` のかわりに `DatabaseSession.getSequencingControl().initializePreallocated()` を使用してください。
- `DatabasePlatform.setUsesNativeSequencing(boolean)` は INTERNAL とマークされているため、ユーザーは使用できません。かわりに、`DatabaseSession.getSequencingControl().shouldUseNativeSequencing()` および `shouldUseTableSequencing()` を使用してください。

- `oracle.toplink.tools.codegen` が変更されました。既存のコードを維持するには、次を使用してください。
 - `AttributeDefinition` のかわりに、`ReflectiveAttributeDefinition` を使用してください。
 - `MethodDefinition` のかわりに、`ReflectiveMethodDefinition` を使用してください。

追加のコード定義の実装は、`NonreflectiveMethodDefinition` および `NonreflectiveAttributeDefinition` に含まれています。

- `RemoteCORBAConnection.scrollableCursorPreviousObject` が追加されました。
- `RemoteEJBConnection.scrollableCursorPreviousObject` が追加されました。
- `RemoteJMSConnection.scrollableCursorPreviousObject` が追加されました。
- `RemoteRMICConnection.scrollableCursorPreviousObject` が追加されました。

OracleAS TopLink の例

EJB 1.1 CMP Single Bean の例を BEA Weblogic 6.1 を使用して Sybase SQL Server で実行しようとすると、Sybase は SQL エラーをスローします。

BEA WebLogic 8.1 Service Pack 1 での EJB QL 解析と JSP 実行

OracleAS TopLink 10g (9.0.4) では、OracleAS TopLink が、ANTLR 2.70 に対して構築と解析を実行します。BEA WebLogic 8.1 Service Pack 1 は、ANTLR 2.72 に同梱されています。BEA WebLogic 8.1 SP1 を使用し、同じアプリケーションで OracleAS TopLink EJB QL 解析と JSP 実行を同時に使用すると、ANTLR のバージョン間の非互換性のために解析の問題が発生します。この項の内容は次のとおりです。

- [EJB QL 解析](#)
- [JSP 実行](#)

EJB QL 解析

JSP を同時に実行せずに、BEA WebLogic 8.1 SP1 を使用して OracleAS TopLink EJB QL 解析を使用するには、`antlr.jar` ファイル (OracleAS TopLink のインストールで提供されるバージョン 2.70) をクラスパスの最初の項目として配置してください。

JSP 実行

EJB QL を同時に使用せずに、BEA WebLogic 8.1 SP1 を使用して OracleAS TopLink で JSP を実行するには、`antlr.jar` ファイル (バージョン 2.70) をクラスパスから削除してください。

XML パーサーの依存性

この項では、XML パーサーの依存性の問題について説明します。

- [OC4JXML パーサーの依存性](#)
- [Crimson XML パーサーの問題](#)

OC4JXML パーサーの依存性

デフォルトでは、OC4J および OracleAS TopLink は両方とも Oracle XML Parser for Java v2 を使用します。OC4J と OracleAS TopLink を同時に使用する場合は、両方とも同じバージョンの Oracle XML Parser for Java v2 を使用していることを確認してください。バージョンが異なると、XML 解析に失敗してアプリケーション・エラーが発生する場合があります。

Crimson XML パーサーの問題

Crimson (<http://xml.apache.org/crimson/>) は、Java 2 Platform、Standard Edition (J2SE) および一部の JAXP リファレンス実装で提供される XML パーサーです。

JAXP API を持つ Crimson を使用して、システム識別子が完全修飾 URL でない XML ファイルを解析すると、XML 解析に失敗して「not valid URL」例外が発生します。

他の XML パーサーは、システム識別子 URL が具体的に参照されるまで、その妥当性チェックを遅延します。

この問題が発生する場合は、次のいずれかの処置を実行してください。

- 完全修飾のシステム識別子 URL が XML ファイルで使用されていることを確認します。
- 別の XML パーサー (Oracle XML Parser for Java v2 など) を使用します。

UTF-8 エンコードの例外

10g (9.0.4) では、OracleAS TopLink がサポートするのは UTF-8 エンコードのみです。UTF-8 以外にフォーマットされた XML ファイルを読み取ろうとすると、OracleAS TopLink の例外であるエラー・コード 9006 とともに SAXParseException が発生します。

SAXParseException のエラー・メッセージ

- 「The markup in the document preceding the root element must be well-formed.」
- 「Start of root element expected.」

いずれかの例外が発生した場合は、UTF-8 エンコードの問題かどうかを調べてください。

OracleAS TopLink の使用 : 右から左へ記述する言語を使用する Web クライアント

OracleAS TopLink: Web クライアントは、右から左へ記述する一部の言語のテキストを正しく表示できません。

データベースとの通信が失われた後はキャッシュ済の文の実行に失敗する問題

文キャッシュを使用するようにログインまたは問合せを構成し、データベースとの通信が失われた後にリストアすると、以前にキャッシュされた文の実行に失敗する場合があります。

たとえば、例外ハンドラを定義してセッションに登録するには、`Session.setExceptionHandler()` を使用するのが一般的な方法です。例外ハンドラを起動して失われた通信を処理し、そのハンドラがデータベースとの接続を再確立すると、以前にキャッシュした文の再実行に失敗します。

OracleAS TopLink を IBM WebSphere 5.1 とともに使用

OracleAS TopLink を WebSphere Application Server 5.1 とともに使用するときは、`PARENT_FIRST` に設定したクラス・ローダー・モードを使用してアプリケーションを構成およびデプロイすることをお薦めします。

アプリケーションを `PARENT_LAST` に設定したクラス・ローダー・モードを使用して構成する必要がある場合は、次のいずれかを選択します。

- `<JAVA_HOME>¥lib¥jaxp.properties` ファイルを削除 (または名前を変更) します。`<JAVA_HOME>` は、通常 `<WebSphere_Install>¥java¥jre` です。
- WebSphere インストールに含まれる xerces ライブラリを、同じ共有ライブラリの `xmlparserv2.jar` の後に配置します。このファイルは、`<WebSphere_Install>¥java¥jre¥lib¥xml.jar` にあります。

クラスタリングを使用した検出機能の使用

クラスタリングを使用した検出機能は、JMS を使用する ClusteringService でのみサポートされます。キャッシュの同期化には、ClusteringService ではなく、新しいリモート・コマンド・マネージャ (RCM) を使用してください。

OracleAS TopLink Mapping Workbench

この項では、OracleAS TopLink Mapping Workbench 10g (9.0.4) の問題について説明します。

- Oracle Database の指定
- 以前のバージョンからのプロジェクトの移行
- Microsoft Windows と ATI ビデオ・カードでの JDK の問題
- マッピングされたネットワーク・ドライブの Windows XP での使用
- JAWS の使用
- アイコン・サイズ
- 大規模なクラスパスの参照
- ソース・コードの生成
- 複数レベルの結合
- サポートされない JRE
- 無効な警告メッセージ
- 配列型属性の不適切な set メソッド
- 式ビルダーでの取消しによって問合せが変更される問題
- 主キー・フィールドへの複数のマッピングが OracleAS TopLink Mapping Workbench での ejb-jar.xml ファイルの生成方法に影響を与える問題
- コード生成されたプロジェクト・クラスでは式のすべての型の文字列値を使用
- デフォルト以外のロケールの使用

Oracle Database の指定

このリリースでは、Oracle8i および Oracle8i データベース固有の新しいプラットフォーム・ファイルが導入されました。以前のリリースには、汎用の Oracle データベース・プラットフォーム・ファイルが含まれていました。汎用の Oracle データベース・プラットフォームを使用する OracleAS TopLink Mapping Workbench 9.0.3 プロジェクトをインポートするときは、次の手順を実行します。

1. 「データベース」プロパティ・シートで、「Oracle8i」または「Oracle9i」のいずれかをデータベース・プラットフォームとして選択します。プロジェクトで Oracle8i より前のデータベースを使用している場合は、「Oracle」を選択します。詳細は、『Oracle Application Server TopLink Mapping Workbench ユーザーズ・ガイド』の「データベースに対する作業」を参照してください。

注意： OracleAS TopLink Mapping Workbench を Oracle Database 10g とともに使用する場合は、「Oracle9i」を選択してください。

2. プロジェクトを保存して閉じ、次にそのプロジェクトを再度オープンします。

以前のバージョンからのプロジェクトの移行

OracleAS TopLink Mapping Workbench のプロジェクトをバージョン 3.6 より前のバージョンから移行する場合は、次のサイトからオラクル社カスタマ・サポート・センターに連絡してください。

<http://metalink.oracle.com>

Microsoft Windows と ATI ビデオ・カードでの JDK の問題

Microsoft Windows プラットフォームでは、J2SE 1.4.1 の Java 2D 機能が原因でシステム・クラッシュ（青色の画面になる）が発生する可能性があります。JDK 1.4.1_02 ではこの不具合は修正されていますが、Java 以外の一部のアプリケーションではシステム・クラッシュが発生する場合があります。OracleAS TopLink Mapping Workbench の実行時にこの問題が発生する場合は、ATI ドライバを更新してください。

特定のカードの最新ドライバは、通常、使用しているコンピュータ、ビデオ・カードまたはビデオ・チップ・メーカーの Web サイトから取得できます。詳細は、次の Web サイトで J2SE 1.4.1 のドキュメントを参照してください。

<http://java.sun.com/j2se/1.4.1/relnotes.html>

マッピングされたネットワーク・ドライブの Windows XP での使用

マッピングされたネットワーク・ドライブを Microsoft Windows XP プラットフォームで使用すると、OracleAS TopLink Mapping Workbench のファイル選択用ダイアログ（「ファイルの保存」や「ファイルを開く」など）でディレクトリ・ツリーのオープンや横断を行う際に、応答速度が低下する場合があります。このような動作を回避するため、ネットワーク・ドライブのマッピングを解除してください。

JAWS の使用

JAWS 4.5.1 の制限によって、OracleAS TopLink Mapping Workbench の入力フィールド・ラベルが正しく表示されません。アクセス可能性を最大にするには、JAWS 3.7 および Access Bridge バージョン 103 の使用をお薦めします。

アイコン・サイズ

OracleAS TopLink Mapping Workbench のツールバーのアイコン・サイズを変更すると、アプリケーションが次回起動したときに失敗する場合があります。workbench.xml ファイルを編集して、small-icon="false" を "true" に変更する必要があります。

大規模なクラスパスの参照

大規模ディレクトリ（ルート・ディレクトリなど）または .jar ファイルをプロジェクトのクラスパスで参照すると、「クラスの選択」ダイアログの応答速度がかなり遅くなり、パフォーマンスが低下する場合があります。

ソース・コードの生成

記述子のソース・コードを生成し、OracleAS TopLink Mapping Workbench が新しいソース・コードを書き込む前にプロセスを取り消した場合は、ソース・コードが正常に更新されたことを示すダイアログが表示されます。しかし、実際には、プロセスを取り消すと、OracleAS TopLink Mapping Workbench は既存のコードを上書きしません。

10g (9.0.4) では、OracleAS TopLink Mapping Workbench はインナー・クラスのコード生成をサポートしません。

BLOB を含む表からソース・コードを生成すると、生成された Java コードには、型定義とメソッド・パラメータのエラーが含まれる場合があります。このエラーは、ソース・コードを編集して削除する必要があります。

複数レベルの結合

OracleAS TopLink Mapping Workbench で 1 対 1 マッピングに対して「結合の使用」を選択すると、誤った SQL が生成され、NULL のインスタンスが SQL から戻されます。

例 12-1

Customer は、1 対 1 マッピングによってリンクされた 3 つのオブジェクトからなります。

Customer は **Address** にリンクされ、**Address** は **Country** にリンクしています。

各クラスは異なる表にマッピングされ、**Customer** は CUSTOMER 表に、**Address** は ADDRESS 表に、**Country** は COUNTRY 表にマッピングされています。

「結合の使用」オプションを使用すると、OracleAS TopLink Mapping Workbench は誤った問合せを生成します。

リレーションシップを正しく結合するには、次の構文を使用します。

```
readAllByExample.addJoinedAttribute("address");
readAllByExample.addJoinedAttribute(tpBuilder.get("address").get("country"));
```

サポートされない JRE

OracleAS TopLink Mapping Workbench は Sun JRE 1.4 とともに使用しないでください。サポートされているプラットフォームの詳細は、『Oracle Application Server TopLink スタート・ガイド』を参照してください。

無効な警告メッセージ

OracleAS TopLink Mapping Workbench では、可変 1 対 1 マッピングを作成するとき、次の警告メッセージが誤ってステータス・バーに表示される場合があります。

「次の指定された問合せ名は、もう有効ではありません :xxx」

xxx は、マッピングの「問合せキーの関連付け」タブで指定した問合せキーの名前です。この警告は、無視しても安全です。

書込み可能マッピングと集計マッピング同じフィールドに関連付けると、OracleAS TopLink Mapping Workbench の次の警告メッセージが表示される場合があります。

「次のフィールドには複数の書き込み可能マッピングがあります :<フィールド名>」

集計マッピングによって実際にフィールドに書き込まれていない場合（たとえば、フィールドがターゲット外部キー参照の一部として使用されている場合）、この警告は無視しても安全です。

配列型属性の不適切な set メソッド

OracleAS TopLink Mapping Workbench では、配列型属性の適切な set メソッドを生成しません。

式ビルダーでの取消しによって問合せが変更される問題

OracleAS TopLink Mapping Workbench の式ビルダーを使用しているときは、取消しを選択して変更内容を破棄しても、問合せが誤って変更される場合があります。

たとえば、ネストされた複合問合せを作成し、その複合問合せを削除するように問合せを編集したとします。次に、この変更内容を破棄するために「取消」を押しても、変更内容が誤って適用されます。この問題が発生した場合は、問合せを再度編集して、誤って削除された複合コンポーネントを置換する必要があります。

主キー・フィールドへの複数のマッピングが OracleAS TopLink Mapping Workbench での ejb-jar.xml ファイルの生成方法に影響を与える問題

OracleAS TopLink Mapping Workbench を使用して EJB 2.0 CMP Bean 記述子を作成するときは、Bean の主キー・フィールドへの複数のマッピングを作成しないでください。この記述子に主キー・フィールドへの複数のマッピングが含まれている場合、フィールドへの必要な直接マッピングは、記述子内の主キーへの最後のマッピングであることが必要です。最後のマッピングでない場合、OracleAS TopLink Mapping Workbench は主キー・フィールド要素を ejb-jar.xml ファイルに書き込めません。

たとえば、記述子に主キーに対するフィールドへの直接マッピングが含まれ、主キーを外部キーとして使用する 1 対 1 マッピングが後に続いている場合、主キー・フィールド要素は ejb-jar.xml ファイルに書き込まれません。

コード生成されたプロジェクト・クラスでは式のすべての型の文字列値を使用

OracleAS TopLink Mapping Workbench で式を定義するときは、リテラル値の型を選択できます。プロジェクトの Java ソースをエクスポートする場合、すべてのリテラル値は文字列型として書き込まれます。

たとえば、LONG 型のリテラル値 (100000) を指定して問合せを定義し、プロジェクトの Java ソースをエクスポートする場合、このリテラル値は文字列型として書き込まれます。

例 12-2 エクスポートされたプロジェクトの Java ソースの問合せ

```
ReadObjectQuery namedQuery0 = new
ReadObjectQuery(examples.sessions.threetier.model.Employee.class);
namedQuery0.setName("testQuery");
...
namedQuery0.setSelectionCriteria(expBuilder0.get("salary").equal("100000"));
descriptor.getQueryManager().addQuery("testQuery", namedQuery0);
```

デフォルト以外のロケールの使用

OracleAS TopLink Mapping Workbench を Windows で使用するとき、Windows プラットフォームのデフォルト・ロケールで使用できるのは、OracleAS TopLink のみです（たとえば、日本語版 Windows PC で使用できるのは日本語ロケールのみです）。

ドキュメントの誤り

この項では、ドキュメントの既知の誤りについて説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [OracleAS TopLink の Web クライアントの構成](#)
- [OracleAS TopLink Mapping Workbench のチュートリアル](#)
- [『Oracle Application Server TopLink Mapping Workbench ユーザーズ・ガイド』](#)

OracleAS TopLink の Web クライアントの構成

『Oracle Application Server TopLink アプリケーション開発者ガイド』の「Web Client の構成」の項に記述されている web.xml ファイルの正しいパスは、<ORACLE_HOME>/toplink/config/toplinkwc です。

Web クライアントを Oracle Application Server Containers for J2EE とともに使用するときは、ドキュメントに示されている <ORACLE_HOME>/toplink/examples/oc4j/904/server のかわりに、ローカルの <J2EE_HOME> ディレクトリを指定してください。

BEA WebLogic をデプロイするには、次に示すように、<ORACLE_HOME>/toplink/config/toplinkwc/weblogic.xml ファイルにこのデータ・ソースへの参照を定義する必要があります。

```
<reference-descriptor>
  <resource-description>
    <res-ref-name>jdbc/DataSourceName</res-ref-name>
    <jndi-name>jdbc/DataSourceName</jndi-name>
  </resource-description>
</reference-descriptor>
```

「アプリケーション・サーバーの構成」の項に記述されている、toplinkwc.ear をアプリケーション・サーバー固有のディレクトリにコピーする手順説明の最初のステップは必要ありません。<ORACLE_HOME>/toplink/bin ディレクトリ内の assembleWebClient スクリプトを実行すると、build.properties ファイルに指定されているように、toplinkwc.ear ファイルがアセンブルおよびデプロイされます。

OracleAS TopLink Mapping Workbench のチュートリアル

『Oracle Application Server TopLink Mapping Workbench ユーザーズ・ガイド』のチュートリアルを実行する際は、次の変更に注意してください。

- 順序を使用する場合は、OracleAS TopLink Mapping Workbench から順序表を作成するのに加えて、データベースにも順序表を作成する必要があります。
- 順序表を作成するとき、SEQ_NAME と SEQ_COUNT のサイズには両方とも 38 を使用してください。
- BaseProject 記述子の継承を実装するときは、「問合せでのサブクラスの読み取り」オプションが選択されていることを確認してください。
- 図 B-49 で、BaseProject クラスのインジケータ・タイプが誤って欠落しています。BaseProject は抽象クラスのためインジケータ値は必要ありませんが、「継承」タブには表示されています。

『Oracle Application Server TopLink Mapping Workbench ユーザーズ・ガイド』

『Oracle Application Server TopLink Mapping Workbench ユーザーズ・ガイド』の付録 C 「トラブルシューティング」の「エラー・メッセージ」の項に、「クラス・インジケータ値を抽象クラス<クラス名>に対して定義する必要はありません。」というメッセージがあります。このメッセージの正しい原因および処置は、次のとおりです。

原因: 抽象クラスがクラス・インジケータ値を使用しません。

処置: 「クラス・インジケータ値」タブで「クラス・インジケータ・フィールド」を「<選択なし>」に設定します。

第IV部

Oracle Application Server Portal の問題

第IV部では、Oracle Application Server Portal（OracleAS Portal）に関する問題について説明します。
内容は次のとおりです。

- [第13章 「Oracle Application Server Portal」](#)
- [第14章 「Oracle Ultra Search」](#)
- [第15章 「Oracle Application Server Syndication Services」](#)

Oracle Application Server Portal

この章では、Oracle Application Server Portal（OracleAS Portal）に関する問題について説明します。
この章の内容は次のとおりです。

- 構成に関する問題と回避策
- UIに関する問題と回避策
- OmniPortlet、シンプル・パラメータ・フォーム、Web クリッピング・ポートレットに関する問題と回避策
- 検索に関する問題と回避策
- PDKに関する問題と回避策
- NLSに関する問題と回避策
- ドキュメントの誤り

構成に関する問題と回避策

この項では、OracleAS Portal の構成に関する問題とその回避策について説明します。

- 「Portal サービスの監視」リンクが動作しない
- 「Portal の Web Cache 設定」ページが正しく動作しない
- oc4j.properties に手動で設定する必要のある oracle.http.configfile プロパティ
- Federated Portal Adapter を SSL に関連付けるリライト規則の誤り
- 同一ホスト上の 2 つの Oracle HTTP Server にログインする際の問題
- OracleAS Web Cache の SSL を使用可能にしているサイトでの OracleAS Portal ターゲットの監視

「Portal サービスの監視」リンクが動作しない

(OracleAS Portal の) 「Portal サービスの監視」リンクを使用すると、ポータルを監視および管理している Oracle Enterprise Manager Application Server Control に直接アクセスできます。このリンクは、次の場合に誤って構成されることがあります。

- Application Server Control の「Portal の Web Cache 設定」ページを使用して OracleAS Web Cache 構成を変更した場合
- ptlconfig スクリプトの -site モードを使用した場合

これらの場合、Application Server Control のポートが 1810 にハードコーディングされるため、リンクが動作しません。

また、Oracle Application Server のインスタンス名にアンダースコア '_' が含まれている場合も、「Portal サービスの監視」リンクは動作しません。

回避策として、次のスクリプトを実行してください。

```
$ORACLE_HOME/portal/conf/ptlconfig -dad <dad name> -em
```

このスクリプトを実行すると、正しいポートを使用するようにリンクがリストアされます。「Portal サービスの監視」リンクをリフレッシュするには、OracleAS Portal のコンテンツの OracleAS Web Cache と File System Cache の両方を消去する必要があります。

- OracleAS Web Cache を消去する手順:
 - 「サービス」ポートレットで「グローバル設定」をクリックします。デフォルトでは、「サービス」ポートレットは「Portal ビルダー」ページの「管理」タブの「Portal」サブタブにあります。
 - 「キャッシュ」タブをクリックし、「Web Cache 全体を消去」を選択します。
 - 「適用」または「OK」をクリックしてキャッシュを消去します。
- File System Cache を消去する手順:
 - OracleAS Portal の File System Cache をクリーンアップします。この作業では、Apache/modplsql/cache ディレクトリ下の中間層 Oracle ホーム内にあるすべてのファイルとディレクトリを 1 つずつ削除していきます。キャッシュのディレクトリを直接削除しないでください。
 - OracleAS Portal リポジトリにアクセスする中間層が複数ある場合は、前述の手順を各中間層ごとに実行します。
 - PortalListeningHostPort の値を "http://<host>:<port>" に変更します。

Apache/modplsql/cache ディレクトリのデフォルト位置は、Apache/modplsql/conf/cache.conf ファイルの PlsqlCacheDirectory エントリの構成設定でわかります。デフォルト位置が変更されている場合は、そのディレクトリ下のファイルをすべてクリーンアップしてください。

「Portal の Web Cache 設定」ページが正しく動作しない

Oracle Enterprise Manager Application Server Control の「Portal の Web Cache 設定」ページでは、OracleAS Portal で使用される OracleAS Web Cache の設定を指定できます。ただし、ホストやポート番号の変更など、他の構成変更と同時に「リスニング・ポート SSL 使用可能」プロパティを変更した場合、このページで行われた構成変更はターゲットに反映されません。この結果、Application Server Control でポータルのホームページ・ダウンロードのメトリックが失敗します。

使用可能な回避策は次の 2 通りあります。

- 1 番目の回避策では、Oracle Enterprise Manager 内の問題は解決されますが、手順 1 と手順 2 の間で短時間ですが OracleAS Portal が停止します。
 1. 「Portal の Web Cache 設定」ページで、ポート・プロパティのみを別のポート番号に設定し、「OK」をクリックします。
 2. 「Portal の Web Cache 設定」ページを再度オーブンし、ポート・プロパティのみを実際のポート番号に設定し、「OK」をクリックします。
- 2 番目の回避策では、OracleAS Portal が停止することはありませんが、構成ファイルを手動で編集する必要があります。
 1. 変更前に、\$MID_TIER_ORACLE_HOME/sysman/emd/targets.xml をバックアップします。
 2. 次に示すプロパティに正しいホストおよびポートの詳細が設定されるように \$MID_TIER_ORACLE_HOME/sysman/emd/targets.xml を編集し、保存します。

```
<Property NAME="PortalListeningHostPort" VALUE="myportal.us.oracle.com:8000"/>
```

このプロパティは、TYPE="oracle_portal" で始まるセクションの下にあります。適切な設定を選択（つまり <Property NAME="portal_DAD" VALUE="portal"/> が更新を必要とするポータル・アプリケーションと一致）していることを確認してください。

 3. ターゲットを Oracle Enterprise Manager に再ロードします。

```
$MID_TIER_ORACLE_HOME/bin/emctl reload
```

oc4j.properties に手動で設定する必要のある oracle.http.configfile プロパティ

Oracle Application Server Portal Developer Kit のインストール時に、oc4j.properties の oracle.http.configfile プロパティは自動的には設定されません。したがって、oc4j.properties ファイルを手動で更新する必要があります。このファイルの場所は、次のとおりです。

- UNIX の場合 : <ORACLE_HOME>/j2ee/OC4J_Portal/config/oc4j.properties
- Windows の場合 : <ORACLE_HOME>\j2ee\OC4J_Portal\config\oc4j.properties

次の行を追加し、Oracle ホームへの正しい絶対パスに置き換えるようにします。

```
oracle.http.configfile=<ORACLE_HOME>/portal/conf/cache.xml
```

Federated Portal Adapter を SSL に関連付けるリライト規則の誤り

『Oracle Application Server Portal 構成ガイド』では、Federated Portal Adapter を SSL に関連付ける方法について説明しています（6.3.2.1.4 項「OracleAS Portal 全体にわたる SSL」）。この項で説明されているリライト規則に誤りがありました。portal.conf ファイルからリライト規則をコピーするのではなく、MID_TIER_ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf ディレクトリにある ssl.conf ファイルの仮想ホスト・セクションで次の行を追加または編集する必要があります。

```
RewriteEngine On
RewriteOptions inherit
</VirtualHost>
```

同一ホスト上の 2 つの Oracle HTTP Server にログインする際の問題

Infrastructure インストールと Portal and Wireless 中間層インストールが 1 台のコンピュータにある場合など、1 台のコンピュータで 2 つの Oracle HTTP Server を実行しているとき、Microsoft Internet Explorer Web ブラウザでは OracleAS Portal にログインできません。この動作は Internet Explorer バージョン 5.5 および 6.0 で確認されています。OracleAS Single Sign-On サーバーが使用するポートから OracleAS Web Cache が使用するポートにブラウザ・リダイレクトが発行されるときに、この問題が発生します。OracleAS Web Cache のポートは Oracle9iAS Portal の背後に位置します。Internet Explorer はリダイレクトを受け取ると、Host: ヘッダーを宛先ポートではなく最初のポートによって誤って設定します。

Internet Explorer でこのエラーが発生した場合、ログインの試行後に次のメッセージのいずれかが表示されることがあります。

エラー : `wwsec_app_priv.process_signon` で予期しないエラーが発生
(ORA-06502: PL/SQL: 数値または値のエラー : 文字列バッファが小さすぎます)
(WWC-41417)

または

エラー : 認証情報の解読に失敗しました。
原因は、データが破損しているか、このアプリケーション構成の暗号化キーが不正であるか、
不正なアクセスが試みられたためと考えられます。
管理者に通知してください。 (WWC-41454)

Internet Explorer は SSL モードおよび非 SSL モードにおいて Host: ヘッダーを誤って設定しますが、問題が発生するのは SSL モードの場合のみです。これは、OracleAS Web Cache が非 SSL モード内の包括的なデフォルト HTTP ポートにポートをマッピングするように設定されているためです。回避策は、2 台のコンピュータを使用することです。1 台は「Infrastructure」インストール・タイプ用、もう 1 台を「Portal and Wireless」インストール・タイプ用とします。

OracleAS Web Cache の SSL を使用可能にしているサイトでの OracleAS Portal ターゲットの監視

Application Server Control を使用して SSL (HTTPS URL) を介して OracleAS Portal を監視するには、その URL の Web サイトで使用されている OracleAS Certificate Authority を認識するように Oracle Management Agent を構成する必要があります。エージェント・ソフトウェアは、セキュアなインターネット Web サイトで使用される可能性の高いほとんどの商用の認証局を認識するように事前に構成されています。しかしながら、エージェントが OracleAS Certificate Authority を認識しない場合、Application Server Control では、OracleAS Portal ターゲットを監視する目的で OracleAS Portal Provider を監視したり OracleAS Metadata Repository のバージョン情報を表示したりできません。

関連項目 :

- Enterprise Manager のオンライン・ヘルプの Application Service Level Management に関する項を参照してください。
- OracleAS Certificate Authority などの公開鍵インフラストラクチャ (PKI) 機能の概要については、『Oracle Security 概要』の「セキュリティに対する公開鍵インフラストラクチャによるアプローチ」を参照してください。
- Enterprise Manager のオンライン・ヘルプの、リモート URL の可用性を監視するためのビーコンの使用方法に関する項を参照してください。

OracleAS Certificate Authority を認識するようにエージェントを構成する手順は、次のとおりです。

1. Web サイトの OracleAS Certificate Authority の証明書を次の手順で取得します。

- a. Microsoft Internet Explorer で、監視する Web サイトの HTTPS URL に接続します。
- b. ブラウザ画面下部にある小さな鍵のアイコンをダブルクリックします。このアイコンはユーザがセキュアな Web サイトに接続していることを示します。

アイコンをダブルクリックすると「証明書」ダイアログ・ボックスが表示され、Web サイトで使用されている証明書の情報が示されます。他のブラウザでも同様の仕組みで Web サイトの証明書の詳細を表示できます。

- c. 「証明のパス」タブをクリックして、証明書のリストの最初のエントリを選択します。
- d. 「証明書の表示」をクリックして、2番目の「証明書」ダイアログ・ボックスを表示します。
- e. 「証明書」ウィンドウで「詳細」タブをクリックします。
- f. 「ファイルにコピー」をクリックして、証明書のエクスポート・ウィザードを表示します。
- g. 証明書のエクスポート・ウィザードで、証明書をテキスト・ファイルにエクスポートして保存する形式として「**Base64 encoded X.509 (.CER)**」を選択します。テキスト・ファイルには `myportal_certificate.cer` などの識別しやすい名前を付けます。
- h. 任意のテキスト・エディタで証明書ファイルを開きます。

証明書ファイルには、次に示すような内容が表示されます。

```
-----BEGIN CERTIFICATE-----
MIIDBzCCAnCgAwIBAgIQTs4NcImNY3JAs5edi/5RkTANBgkqhkiG9w0BAQQFADCB
... base64 certificate content...
-----END CERTIFICATE-----
```

2. 認証局エージェントのリストを次の手順で更新します。
 - a. Oracle ホームの次のディレクトリで、`b64InternetCertificate.txt` ファイルを探します。
`oracle_home/sysman/config/`
このファイルには、Base64 証明書のリストが記載されています。
 - b. エクスポートした証明書ファイルの内容を `b64InternetCertificate.txt` ファイルの冒頭に追加します。 **BEGIN** 行から **END** 行まで、証明書の Base64 のテキストがすべて追加されるようにします。
3. Application Server Control を再起動します。

```
emctl stop iasconsole
emctl start iasconsole
```

Application Server Control を再起動すると、エージェントが認識できる OracleAS Certificate Authority のリストが追加されたことが検出されます。これで、OracleAS Portal Provider を正しく監視し、OracleAS Metadata Repository のバージョン情報を表示できるようになります。

UI に関する問題と回避策

この項では、OracleAS Portal の UI に関する問題とその回避策について説明します。

- 相対リンクが絶対リンクに変換される
- ポートレットをページに追加するときの問題 - プロバイダの登録の失敗
- Oracle9iAS Portal 9.0.2.6 からアップグレードした場合の余分なパースペクティブ・ページ・テンプレート
- 新しいバージョンの作成時にカスタム属性がデフォルト値に戻る

相対リンクが絶対リンクに変換される

この問題は、Internet Explorer でリッチ・テキスト・エディタを使用する場合にのみ発生します。相対リンクが含まれるテキスト・アイテムを作成すると、そのリンクは絶対リンクに変換されます。これは、コンテンツを別のサイトにエクスポートする場合に問題となります。次に例を示します。

1. テキスト・アイテムを作成します。
2. リッチ・テキスト・エディタで HTML モードに切り替えます。
3. 次のように入力します。
``
4. 「OK」をクリックします。

5. テキスト・アイテムを編集します。

base が URL に追加され、たとえば、 のように変換されていることに注意してください。

1つの回避策として、リッチ・テキスト・エディタを使用不可にする方法があります。詳細は、『Oracle Application Server Portal ユーザーズ・ガイド』を参照してください。別の回避策は、Bug 3009204 にパッチ (Oracle MetaLink の Web サイト <http://metalink.oracle.com> から入手可能) を適用することです。このパッチでは、テキスト・アイテムを解析し、絶対 URL を相対 URL に変換するスクリプトが提供されます。

ポートレットをページに追加するときの問題 - プロバイダの登録の失敗

ポートレットをページに追加できない場合は、プロバイダの登録に問題がある可能性があります。ポートレット ID が同じ 2 つのポートレット、名前のない複数のポートレットまたは ID のない複数のポートレットを持つプロバイダを登録した場合、エラー・メッセージは返されません。ただし、これらすべての場合で、そのプロバイダのポートレットをページなどに追加することはできません。

Oracle9iAS Portal 9.0.2.6 からアップグレードした場合の余分なパースペクティブ・ページ・テンプレート

以前に Oracle9iAS Portal 9.0.2.6 リポジトリ・アップグレード・パッチ #2981297 のバージョン 1、2 または 3 を使用して Oracle9iAS Portal 9.0.2.6 にアップグレードし、次に OracleAS Portal 10g (9.0.4) にアップグレードした場合は、パースペクティブ・ページ・テンプレートが 2 つ存在するという問題が発生する可能性があります。この問題が発生するのは、以前に Oracle9iAS Portal 9.0.2.6 にアップグレードし、次に、アップグレードしたパースペクティブが含まれていたページ・グループに追加のパースペクティブを作成した場合です。

アップグレードしたページ・グループの 1 つ以上に、パースペクティブ・ページ・テンプレートが 2 つ含まれている場合は、影響を受けるページ・グループごとに次の手順を実行します。

1. Oracle9iAS Portal 9.0.2.6 へのアップグレード後 (OracleAS Portal 10g (9.0.4) へのアップグレード前) に作成されたパースペクティブの 1 つのパースペクティブ・ページを表示します。
2. 編集モードに切り替えます。
3. ページ・ツールバーで、「テンプレートの編集」をクリックします。
4. テンプレート・ツールバーで、「テンプレート: プロパティ」をクリックします (ページ・グループではなく、必ずテンプレートの「プロパティ」リンクをクリックしてください)。
5. テンプレートの「表示名」を、たとえば「<template_name>_delete」という名前に編集して、「OK」をクリックします。
6. ナビゲータに移動し、ページ・グループのテンプレート領域にドリルダウンします。
7. 「<template_name>_delete」という名前のテンプレートを削除します。
8. 次のスクリプトを使用して、ページ・グループ内のパースペクティブ・ページをすべて削除してから、正しいパースペクティブ・ページ・テンプレートを使用して再度作成します。
 - ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wws/pstdefin.sql
 - ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wws/pstpgshw.sql
 - ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wws/pstundef.sql
 - ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wws/pstpgcre.sql
 - ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wws/pstprcpg.sql

これらのスクリプトの詳細は、『Oracle Application Server Portal 構成ガイド』を参照してください。

新しいバージョンの作成時にカスタム属性がデフォルト値に戻る

次の場合は、新しいバージョンが作成されたとき、カスタム属性の値がデフォルト値に戻ります。

- 「アイテムの編集」ページで属性が非表示の状態で、アイテムが編集され、新しいバージョンが作成された場合。この場合は、領域の表示内にカスタム属性が表示されなくなります。現在、唯一の回避策は、バージョニング使用時は常に「アイテムの編集」ページでカスタム属性を表示することです。
- アイテムが WebDAV を介して編集され、ページでバージョニングが有効である場合（「シンプル」または「監査」バージョニングのいずれか）。バージョニングが有効な場合、WebDAV では常に新しいバージョンが作成され、カスタム属性の値は、新しいバージョンではデフォルト値に設定されます。現在、唯一の回避策は、カスタム属性をバージョニングおよび WebDAV と組み合せて使用しないことです。

OmniPortlet、シンプル・パラメータ・フォーム、Web クリッピング・ポートレットに関する問題と回避策

この項では、OmniPortlet、Web クリッピング・ポートレット、シンプル・パラメータ・フォームに関する問題について説明します。これらのポートレットは、ポートレット・リポジトリ内に、ポートレット・リポジトリ：ポートレット・ビルダーのように格納されています。

- [ブラウザ要件](#)
- [\(OmniPortlet\) インストール後に OmniPortlet プロバイダの更新が必要](#)
- [\(OmniPortlet\) 「ニュース・レイアウト・スクロール」タイプが Netscape 4.79 でサポートされていない](#)
- [\(OmniPortlet\) 書式化された数値がチャートで表示されない](#)

ブラウザ要件

OmniPortlet、Web クリッピングまたはシンプル・パラメータ・フォームのポートレットを編集する（つまり、デフォルト編集モードでプロパティを設定する）には、次のバージョンのブラウザを使用する必要があります。

- Netscape 7.0 以上
- Microsoft Internet Explorer 5.5 以上（Windows NT および Windows 2000 の場合）
- Microsoft Internet Explorer 6.0（Windows XP の場合）

これらのバージョンより古いブラウザを使用すると、JavaScript エラーが発生する場合があります。

(OmniPortlet) インストール後に OmniPortlet プロバイダの更新が必要

OmniPortlet でパラメータとイベントを使用する場合は、最初に OmniPortlet プロバイダを更新する必要があります。更新する手順は、次のとおりです。

1. OracleAS Portal にログインします。
2. 「ナビゲータ」リンクをクリックします。
3. 「プロバイダ」タブを選択します。
4. 「ローカルで構築されたプロバイダ」を選択します。
5. 「OmniPortlet プロバイダ」を探し、その「更新」リンクをクリックします。

(OmniPortlet) 「ニュース・レイアウト・スクロール」タイプが Netscape 4.79 でサポートされていない

OmniPortlet の「ニュース・レイアウト・スクロール」タイプは、Microsoft Internet Explorer および Netscape 7.0 でサポートされています。Netscape 4.79 では機能しません。

(OmniPortlet) 書式化された数値がチャートで表示されない

データ・ソース内の数値に、書式化された文字列、カンマまたは通貨記号 (\$32,789.00 など) が含まれている場合、これらはチャートの生成時にテキストとみなされ、無視されます。回避策として、書式化文字を数値から削除してください。

検索に関する問題と回避策

この項では、OracleAS Portal の検索機能に関する問題について説明します。

- [検索エラー - 「ページ・グループ ID が存在しません。」 \(WWS-30641\)](#)
- [最大戻り値が機能しない](#)
- [Netscape 4.79 を使用した検索結果の保存に関する問題](#)
- [結果属性が表示されない](#)
- [Oracle Text の有効化 / 無効化によるパースペクティブ選択への影響](#)
- [検索結果ページに複数の検索ポートレットが配置されている場合の問題](#)
- [パースペクティブを共有オブジェクトに昇格した場合の検索結果への影響](#)
- [ページ・グループまたは検索属性が多数選択された場合に発生する問題](#)

検索エラー - 「ページ・グループ ID が存在しません。」 (WWS-30641)

関連する検索結果ページのページ・グループが削除された場合は、検索ポートレットまたは基本検索ボックス・アイテムが含まれるページに、次のエラーが表示されます。

Error: An unexpected error has occurred (WWS-32100)

...

The Page Group ID does not exist. (WWS-30641)

また、「検索設定」ページにアクセスして、新しい検索結果ページを選択することもできません（「検索設定」ページには、「Portal ビルダー」ページの「管理」タブの「Portal」サブタブにある「サービス」ポートレットからアクセスします）。

この問題を解決するには、Bug 3263977 で公開されている指示に従ってください。この情報は、次の Oracle MetaLink の Web サイトから入手可能です。

<http://metalink.oracle.com>

最大戻り値が機能しない

(カスタム検索ポートレットを使用して) カスタム検索フォームを構築できます。このフォームでは、ユーザーが「結果の最大数を設定」できます。このリリースでは、返される結果の総数がこのオプションによって制限されません。

ただし、ユーザーによる「1 ページに表示する結果数の設定」を許可すると、各ページに表示される結果数を制限できます。

Netscape 4.79 を使用した検索結果の保存に関する問題

Netscape 4.79 で、複数の検索語を空白で区切って検索した場合 (sales targets など) は、検索結果の保存に関する問題が発生する場合があります。「The request had invalid syntax」というエラーが表示されます。

結果属性が表示されない

カスタム検索ポートレットでは、検索結果に表示する属性を選択できます。ただし、リストされている使用可能な属性の一部は、検索結果に表示されません。つまり、「基本アイテムタイプ」、「パラメータ・フォームの表示」、「アイテムのチェックアウトを有効にする」、「新しいブラウザ・ウィンドウでアイテムを表示するリンク」、「Oracle Reports Components」、「反転イメージ」、「アイテムコンテンツ」、「ポートレット・コンテンツ」、「ポートレット・インスタンスのグローバル一意 ID」、「プロバイダ名」、「更新アイテム・インジケータ」、「新規アイテム・インジケータ」は表示されません。

Oracle Text の有効化 / 無効化によるパースペクティブ選択への影響

Oracle Text が有効な場合は、1つ以上のパースペクティブで検索結果を制限できます。Oracle Text が無効な場合は、1つのパースペクティブでのみ検索結果を制限できます。検索結果をパースペクティブで制限してから、Oracle Text を有効から無効（または無効から有効）に切り替えると、パースペクティブの選択が正常に機能しない場合があります。

検索結果ページに複数の検索ポートレットが配置されている場合の問題

検索機能は、1つの検索ポートレットが1ページにマップされるように設計されています。したがって、複数の検索ポートレット（基本、詳細、カスタムまたは Ultra Search のポートレット）が含まれるページに検索結果を表示するように選択した場合は、結果ページのすべての検索ポートレットによって応答が行われ、各検索ポートレットに検索結果が表示されます。このような表示にならないように、検索結果は単一の検索ポートレットが含まれるページに表示することをお薦めします。

同様に、Ultra Search ポートレットから結果が返されると、同じページに配置された他の検索ポートレットによって応答が行われます。したがって、Ultra Search ポートレットが含まれるページには追加の検索ポートレットを配置しないでください。

パースペクティブを共有オブジェクトに昇格した場合の検索結果への影響

（Oracle Text が有効な場合のみ）パースペクティブを共有オブジェクトに昇格した後、そのパースペクティブでアイテムを検索すると、アイテムが返されません。回避策として、パースペクティブの昇格後に、Oracle Text の索引を削除し、再作成してください。詳細は、『Oracle Application Server Portal 構成ガイド』を参照してください。

ページ・グループまたは検索属性が多数選択された場合に発生する問題

検索基準の属性が多数ある場合や検索対象のページ・グループ・リストが長い場合は、検索機能の動作に一貫性がなくなる可能性があります。この問題は、URL のサイズ制限が原因です。次に、発生する可能性のある問題の例を示します。

- 「Save Search」、「一括操作」、「編集」などのリンクが動作しません。これらのリンクが動作するのは、属性 / ページ・グループの選択数が少ない場合であることに注意してください。
- 検索結果のページでは、タブの変更時に検索基準が失われる可能性があります。
- 結果の保存時に検索結果の一部が失われる場合があります。また、検索を再度実行したときに、一部の属性が失われる可能性があります。

回避策は、ユーザーが選択可能な属性またはページ・グループ（またはその両方）の数を減らすことです。

PDK に関する問題と回避策

Oracle Application Server Portal Developer Kit (PDK) リリース 9.0.4 は、OracleAS Portal & Wireless のインストール時に同時に組み込まれます。JPDK および PL/SQL PDK のリリース・ノートは、これらの中間層の \$ORACLE_HOME の位置にあります。

- **JPDK の場合** : \$ORACLE_HOME/portal/pdkjava/v2/pdkjava.v2.releasenotes.html
- **PL/SQL の場合** : \$ORACLE_HOME/portal/pdkjava/v2/pdkplsql.release.notes.html

OracleAS PDK の最新バージョン

新しいバージョンの OracleAS PDK が定期的にリリースされ、新機能、新規 API および追加ドキュメントが提供されます。最新の機能をすべて利用するために、Portal Center <http://portalcenter.oracle.com> から最新の PDK をダウンロードしてください。

最新バージョンの OracleAS PDK のリリース・ノートは、Portal Center および次の PDK のダウンロード場所にもあります。

- [pdk\plsql\pdkplsql.release.notes.html](#)
- [pdk\jpd\pdk\pdkjava.v2.release.notes.html](#)

WSRP および JSR 168 のサポート

Oracle Application Server 10g (9.0.4) 以降、OracleAS Portal は JSR 168 ポートレットの構築をサポートしています。OracleAS Portal は、WSRP 対応のポートレットをまだサポートしていません。そのため、現在 JSR 168 をテストできるのは、ホストされた OracleAS Portal Verification Service (<http://portalstandards.oracle.com/>) またはダウンロード用に利用できる OracleAS Portal の Developers Preview に限られます。また、Developers Preview と、ホストされた OracleAS Portal Verification Service は、いずれも開発の目的でのみ提供されるものですので、本番システムでは使用しないようにしてください。「JSR 168 ポートレットの登録」の項も参照してください。

NLS に関する問題と回避策

この項では、OracleAS Portal における National Language Support (NLS) に関する問題について説明します。

- Oracle Text の検索の制限 (テキスト・ファイルおよび HTML ファイル)
- Netscape 7.0 を使用した場合の BiDi の配置に関する問題
- Excel/SYLK 形式のレポートを Microsoft Excel で開く場合の問題
- ダブルバイトの空白キーで検索キーワードを区切れない
- BiDi 言語ではテキスト入力が常に右から左に行われる
- URL アイテムに関する ISO-8859 以外の Web ページの制限
- ASCII 以外の文字に関する制限
- 共有タイプ・オブジェクトが英語以外のページ・グループに表示されない
- Oracle Ultra Search ポートレットのヘルプ・ページに関する問題
- OracleAS Portal でサポートされない一部のデータベース・キャラクタ・セット

Oracle Text の検索の制限 (テキスト・ファイルおよび HTML ファイル)

一部の ASCII 以外のキャラクタ・セット環境では、プレーン・テキスト・ファイルおよび HTML ファイルの ASCII 以外の文字コンテンツを検索できません。

ドキュメントのキャラクタ・セットがデータベース・キャラクタ・セットと同じで、データベース・キャラクタ・セットが次のいずれかの場合は、プレーン・テキストおよび HTML ファイルを検索できます。

- US7ASCII
- WE8ISO8859P1
- JA16SJIS
- KO16KSC5601
- ZHS16CGB231280
- ZHT16BIG5

データベース・キャラクタ・セットがここにリストされているキャラクタ・セット以外でも、ドキュメントが WE8ISO8859P1 キャラクタ・セットの場合、検索機能は正常に動作します。他の ASCII 以外のキャラクタ・セット環境では、この問題が発生する可能性があります。

Word や PDF などのバイナリ・ファイルを検索するときは問題ありません。

Netscape 7.0 を使用した場合の BiDi の配置に関する問題

Mozilla の問題のため、ヘッダー・イメージと一部のボタンが正しく配置されません。

Excel/SYLK 形式のレポートを Microsoft Excel で開く場合の問題

Excel/SYLK 形式のレポートを作成するとき、ファイル・エンコードはデータベース・キャラクタ・セットと常に同じです。このようなファイルは Microsoft Excel で開くことができません。回避策として、エクスポートしたファイルをネイティブのエンコードに変換してください。

たとえば、データベース・キャラクタ・セットが UTF8 の場合、エクスポートしたレポートは UTF8 データベース・キャラクタ・セットでエンコードされているため、Excel では開くことができません。日本語の Windows システムでは、Excel は Shift_JIS でエンコードされたファイルのみを開くことができますが、ファイルを Shift_JIS でエクスポートするには、データベース・キャラクタ・セットが JA16SJIS である必要があります。このため、データベース・キャラクタ・セットが EUC (日本語の別の標準キャラクタ・セット) または UTF8 の場合、ファイルは開きません。メモ帳を使用すると、ファイルを開いて別のキャラクタ・セットで保存できます。

ダブルバイトの空白キーで検索キーワードを区切れない

ダブルバイトの空白文字を使用して 2 つの検索キーワードを区切ることはできません。シングルバイトの空白文字を使用する必要があります。

BiDi 言語ではテキスト入力が常に右から左に行われる

すべてのテキスト領域およびフィールドの方向が右から左 (RTL) です。ただし、左から右 (LTR) に機能する必要があるテキスト領域もあります。Internet Explorer ユーザーは、左側にある [Ctrl] キーを押しながら [Shift] キーを押すと、この方向を変更できます。

URL アイテムに関する ISO-8859 以外の Web ページの制限

URL アイテムを使用した ISO-8859-1 以外の Web ページは表示できない場合があります。この機能は他のポートレットでは提供されるため、かわりに NLS URL サービスや Web クリッピングなどのポートレットを使用することもできます。

ASCII 以外の文字に関する制限

- ASCII 以外の XML データは XML ポートレットに正しく表示されません。ASCII 以外の XML データを表示するには、この機能が備わっている OmniPortlet を使用してください。
- 指定した URL からの ASCII 以外のデータが URL ポートレットに正しく表示されません。このようなデータをポートレットに表示するには、この機能が備わっている Web クリッピング・ポートレットを使用してください。
- Web プロバイダの表示名で ASCII 以外の文字を使用した場合、表示名が正しく表示されません。同様に、プロバイダ・グループの表示名で使用された ASCII 以外の文字も表示されません。
- データベース・プロバイダのポートレット名で、ASCII 以外の文字は使用できない場合があります。ただし、表示名では使用できます。
- ポートレット名に ASCII 以外の文字が含まれている場合は、ポートレットのプレビュー時に名前が正しく表示されません。
- (Internet Explorer のみ) UTF8 以外のデータベース・キャラクタ・セットを使用すると、フォーム・コンポーネントのラベルが正しく表示されない場合があります。この問題は Netscape では発生しません。

共有タイプ・オブジェクトが英語以外のページ・グループに表示されない

共有タイプ・オブジェクト（ページ・タイプ、アイテム・タイプ）のデフォルト言語は常に英語です。英語以外の言語でページ・グループを作成した場合は、そのページ・グループのデフォルト言語で共有タイプの翻訳が存在していないかぎり、共有タイプをページ・グループで使用可能にできません。

翻訳を作成する手順は、次のとおりです。

1. 「共有オブジェクト」ページ・グループに対して言語を使用可能にします。

詳細は、『Oracle Application Server Portal ユーザーズ・ガイド』の「翻訳の作成」の項を参照してください。

2. 「言語の設定」ポートレットで該当する言語に切り替えます。

3. セッション言語が英語以外の言語に設定されている状態で、ページ・タイプまたはアイテム・タイプを編集します。

この結果、該当する言語での翻訳タイプが自動的に作成されます。

これで、英語以外のページ・グループで共有タイプが使用可能になります。

Oracle Ultra Search ポートレットのヘルプ・ページに関する問題

Oracle Ultra Search ポートレットで「ヘルプ」リンクをクリックすると、全言語でヘルプ・ページに無効な情報が表示されます。

回避策として、次の場所にある適切なヘルプ・ファイルのエンコードを UTF8 に変更してください。

`ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_Portal/applications/UltrasearchPortlet/query/html`

OracleAS Portal でサポートされない一部のデータベース・キャラクタ・セット

データベースのキャラクタ・セットが Java によってサポートされていない場合、「サポートされていない IANA 文字コード」の例外が OracleAS Portal で表示されます。Java (1.3、1.4、1.5) は、次のキャラクタ・セットをサポートしていません。

- NE8ISO8859P10
- CEL8ISO8859P14

これらのキャラクタ・セットの文字を使用する必要がある場合は、Unicode キャラクタ・セット AL32UTF8 を使用してください。

ドキュメントの誤り

この項では、OracleAS Portal ドキュメントの既知の誤りと補足事項について説明します。

- ドキュメントの誤り
- 追加文書

ドキュメントの誤り

この項では、OracleAS Portal ドキュメントの既知の誤りについて説明します。この項の内容は次のとおりです。

- アイテム / ポートレットのプロパティの編集
- 保留中のアイテムの編集
- 最新バージョンのイメージの参照
- リスト・ビューでの作業
- 非公開アイテムのセクションに関する記述の誤り
- アイテム・レベルのセキュリティとページ・キャッシュ
- ユーザー・プロファイルのヘルプの誤り

- カスタム検索結果の表示スタイルの定義
- ページ・ポートレットへの背景色または背景イメージの適用
- エラー・メッセージ WWC-40018 が誤って WWC-40019 と記述されている
- JSR 168 ポートレットの登録

アイテム / ポートレットのプロパティの編集

オンライン・ヘルプで、「**編集**」アイコンをクリックすると、アイテムまたはポートレットのプロパティを編集できると記述されています。これはアイテムに関しては正しい記述ですが、ポートレットの横にあるこのアイコンをクリックすると「デフォルトの編集」ページが表示されます。ポートレットのインスタンス属性（表示名など）を編集するには、「**操作**」アイコンをクリックして、「編集ポートレットインスタンス」リンクをクリックします。

保留中のアイテムの編集

「保留中のアイテム：プレビュー」のオンライン・ヘルプ (cawkpend.htm) では、承認プロセスの最初の承認者による承認が済んでいない場合、送信者は保留中のアイテムの編集を続行できると記述されていますが、これは誤りです。

最新バージョンのイメージの参照

イメージ属性で、アップロードしたソース・イメージを参照できます。ドキュメントには、現在次のように記述されています。

OracleAS Portal にアップロードされたイメージを再利用するには、このフィールドに、その内部名（ファイル名ではなく）をパスを指定せずに入力します。たとえば、1645.GIF と入力します。

参照したイメージ・アイテムでバージョニングを使用しているときに、参照で内部ファイル名（1645.gif など）を使用すると、イメージが作成された場合、参照では最新バージョンが使用されません。イメージ参照では、引き続き元のバージョンが表示されます。次に例を示します。

1. イメージ属性では、イメージ・アイテムを 1645.gif などの内部ファイル名で参照します。
2. イメージ・アイテムを更新し、新しいバージョンを作成します。新しいバージョンには、新しい内部ファイル名（1705.gif など）を設定します
3. イメージ属性では引き続き 1645.gif が参照され、新しいバージョンのイメージを参照するように更新されません。

したがって、内部ファイル名は、バージョニングを使用していない場合か、最新バージョンでない場合でも、参照では常に元のバージョンを指し示す場合にのみ使用してください。

バージョニングを使用しながら、常に最新バージョンを表示する場合は、内部ファイル名ではなく、イメージ・アイテムへの永続性のあるリンクを使用します。永続性のあるリンクでは、常に最新バージョンのイメージが取得されます。このため、1645.gif と入力するかわりに、次のように入力します。

/pls/<DAD>/url/item/<GUID>

これは、永続性のあるリンクの相対 URL 書式です。次に例を示します。

/pls/portal/url/ITEM/A47D41ECA23648A9E030007F0100118A

ホスト名やドメイン名を変更する場合、またはコンテンツを別のサイトにエクスポートする場合は、常に相対 URL を使用する必要があります。永続的な URL の詳細は、『Oracle Application Server Portal ユーザーズ・ガイド』の「ページおよびアイテムの URL について」を参照してください。

リスト・ビューでの作業

リスト・ビュー機能については、オンライン・ヘルプ・トピック「ページ編集モード：リスト・ビュー」(pobpglst.htm) に記載されています。このトピックの情報の一部に誤りがあります。

ボタン：アクション・リスト：オプション「ILS を有効にする」および「ILS を無効にする」は使用できません。

ボタン：検索：検索では大文字・小文字は区別されません。

サブアイテム：オンライン・ヘルプでは、サブアイテムはリスト・ビューに表示されないと記述されています。これは正しい記述ですが、サブアイテムが検索基準と一致する場合、検索結果には表示されます。

また、リスト・ビューでは、テンプレートに基づくページに、テンプレートに属しているタブまたはアイテムが表示されないことに注意してください。「テンプレートの編集」リンクをクリックして、テンプレートにタブとアイテムを表示する必要があります。したがって、リスト・ビューでページを編集するときは、テンプレートから継承されたタブにアイテムを追加することはできません。また、別の編集ビュー（グラフィカル・ビューなど）を使用してページを編集したときに、これらのタブにアイテムが追加された場合、そのアイテムはリスト・ビューには表示されません。

Netscape 4.8 を使用している場合は、「説明」列の下のバージョン情報が誤って表示されます。この問題は Internet Explorer では発生しません。

非公開アイテムのセクションに関する記述の誤り

ページ・グループの編集の「アイテム」タブに関するオンライン・ヘルプ (sbrsmit.htm) に誤りがあり、「期限切れアイテムと削除アイテム」セクション、「期限切れアイテムと削除アイテムの表示」チェック・ボックス、「期限切れアイテムと削除アイテムの保持」チェック・ボックスと記述されています。これらは、正しくはそれぞれ「非公開アイテム」セクション、「編集モードで非公開アイテムを表示」チェック・ボックス、「削除アイテムの保持」チェック・ボックスです。これらのチェック・ボックスの使用方法の詳細は、ページ自体のテキストを参照してください。

アイテム・レベルのセキュリティとページ・キャッシュ

オンライン・ヘルプに誤りがあり、アイテム・レベルのセキュリティ (ILS) が有効である場合は、ページ・キャッシュが自動的に無効になると記述されています。ページ・キャッシュは、ILS が有効である場合でも無効なりません。

ユーザー・プロファイルのヘルプの誤り

「Portal ユーザー・プロファイルの編集」タブのオンライン・ヘルプ「設定」(secumed1.htm) および「権限」(secmed3.htm) に誤りがあり、これらのページに「デフォルトに戻す」ボタンがあると記述されています。このオプションは使用できません。

カスタム検索結果の表示スタイルの定義

「デフォルトの編集：カスタム検索 - 結果の表示」ページのオンライン・ヘルプ (sbrsres.htm) に誤りがあり、スタイルおよび属性の設定は、検索結果に返されたアイテムにのみ適用されると記述されています。「検索結果のレンダリングに使用するスタイルおよび属性を指定してください。」セクションの下にある「スタイル」および「属性」の設定は、アイテムとページの両方に適用されます。

ページ・ポートレットへの背景色または背景イメージの適用

ページ・ポートレット（ナビゲーション・ページを含む）に背景色または背景イメージを表示する場合は、次の手順を実行します。

1. ナビゲーション・ページをポートレットとして公開したときに独自のスタイルを使用していること、つまり、ページ・プロパティで「ポートレットを配置したページのスタイルを使用」を選択していないことを確認します。
2. コンテナ・ページ（ポートレットが含まれているページ）のスタイルで、「ポートレット・ボディ色」を「NULL」（値指定なし）に設定します。この手順はドキュメントに記載されていません。

エラー・メッセージ WWC-40018 が誤って WWC-40019 と記述されている

Web キャッシュ接続に関するエラー・メッセージ WWC-40018 が、『Oracle Application Server Portal エラー・メッセージ・ガイド』で誤って WWC-40019 と記述されています。

JSR 168 ポートレットの登録

『Oracle Application Server Portal 開発者ガイド』の「ローカルの OracleAS Portal インスタンスへの登録」の項では、JSR 168 をローカルの OracleAS Portal インスタンスに登録する方法が説明されています。これらの説明は現在の本番用にリリースされた製品には適用されませんが、本番の WSRP 対応の OracleAS Portal がリリースされるまで Developers Preview として使用することができます。Developers Preview は開発の目的でのみ提供されるものですので、本番システムでは使用しないようにしてください。

追加文書

この項では、OracleAS Portal ドキュメントの既知の補足事項と追加事項について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [パブリック・ユーザーはアイテム・レベルのセキュリティが有効であるページを検索できない](#)
- [ログ・レジストリ・レコードのデータが不正確](#)
- [新規プロバイダへの権限付与](#)
- [カスタム属性に対する一意な名前の使用](#)
- [WebDAV クライアントで期限切れアイテムが期限切れ後も表示される](#)
- [Portal スマート・テキストおよび Portal スマート・リンク・アイテム](#)
- [検索設定の変更を有効にするためにキャッシュの失効が必要](#)

パブリック・ユーザーはアイテム・レベルのセキュリティが有効であるページを検索できない

PUBLICユーザーは、アイテム・レベルのセキュリティが有効であるページでアイテムを検索できません。

ログ・レジストリ・レコードのデータが不正確

ログ・レジストリ・レコードに関するオンライン・ヘルプ ([wvlogadm.htm](#)) で、ログが記録される処理がリストされています。OracleAS Web Cache を導入すると、OracleAS Portal の動作ログ表に記録される処理の一部が不正確になります。特に、表示、実行、表示および実行が該当します。ただし、ログが記録される他のすべての処理は正確であるため、動作ログ表とビューは OracleAS Portal Metadata Repository に存在したままでです。

新規プロバイダへの権限付与

新規プロバイダを作成 / 登録すると、そのプロバイダに対するポートレットを表示するために、「Portlet ステージング領域」の下の「ポートレット・リポジトリ」にページが作成されます。このページは、すべてのログイン・ユーザーに表示されるわけではありません。表示できるのは、プロバイダを公開したユーザーとポータル管理者のみです。公開者またはポータル管理者は、必要に応じて、プロバイダ・ページのプロパティを変更して適切なユーザー / グループに権限を付与できます。

カスタム属性に対する一意な名前の使用

カスタム属性の名前は、ページ・グループ間で一意になるように設定することをお薦めします。たとえば、ページ・グループ名を接頭辞や接尾辞として組み込むことができます。

カスタム属性に一意な名前が設定されていない場合は、検索結果の属性の選択時に同じ名前が表示されます。たとえば、2つのカスタマイズ属性の名前が両方とも 'MyCustomAttribute1' の場合は、次のようにリストされます。

```
MyCustomAttribute1
MyCustomAttribute1
```

このように、どの属性がどのページ・グループに属しているか確定できません。しかし、これらの属性に 'MyCustomAttribute_PG1' と 'MyCustomAttribute_PG2' という名前を設定すると、次のようにそれぞれ一意な名前で識別できます。

```
MyCustomAttribute_PG1
MyCustomAttribute_PG2
```

WebDAV クライアントで期限切れアイテムが期限切れ後も表示される

期限切れアイテムは、システム・ページ時にデータベースから完全に削除されるまで、WebDAV クライアントで表示され続けます。

Portal スマート・テキストおよび Portal スマート・リンク・アイテム

(ポートレットとして公開されている) Portal スマート・テキストまたは Portal スマート・リンク・アイテムが含まれているページを、別のページに埋め込むことができます。別のページに埋め込むと、Portal スマート・テキスト / Portal スマート・リンク・アイテムは、埋め込まれたページに関連して動作します。たとえば、「**編集**」 Portal スマート・リンク・アイテムをページ A に追加し、そのページをポートレット A として公開した後、ポートレット A をページ B に配置すると、「**編集**」リンクを使用してページ B を編集できます。

検索設定の変更を有効にするためにキャッシュの失効が必要

ページ・キャッシュが有効の場合は、「検索設定」ページで行った変更が、既存の検索ポートレットにすぐに反映されない場合があります。たとえば、Oracle Text を有効にしている場合、指定した範囲の検索演算子は、キャッシュが消去されるまで使用できません。即時に適用されないその他の設定には、新しい「検索結果ページ」、「拡張検索リンク / ページ」および「インターネット検索エンジン」の詳細があります。

キャッシュは、すべての検索ポートレットで 24 時間ごとに自動的に消去されます。または、OracleAS Web Cache Manager (「サービス」ポートレットの「Web Cache 管理」リンクからアクセス可能) を使用してキャッシュを手動で消去できます。

14

Oracle Ultra Search

この章では、Oracle Ultra Search に関する問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 一般的な問題と回避策
- Oracle Ultra Search バックエンドのカスタマ・データベース・インストール
- ドキュメントの誤り

一般的な問題と回避策

この項では、Oracle Ultra Search に関する一般的な問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- Oracle Ultra Search URL ステータス・コード
- Oracle Application Server 10g へのアップグレード
- Oracle Ultra Search および OracleAS Portal
- データ・ソースに制限アクセスを使用する場合のセキュリティに関する考慮事項
- データベース・キャラクタ・セット変更後の Oracle Ultra Search の再構成
- マルチバイト名を使用したデータソースのクロールが失敗する
- ISO-2022-JP キャラクタ・セットのデータのクロールが失敗する
- すべてのデータベース・キャラクタ・セットが Oracle Ultra Search でサポートされていない
- 不具合

Oracle Ultra Search URL ステータス・コード

Oracle Ultra Search では、一連のコードを使用して、クロールされた URL のクロール結果が示されます。標準の HTTP ステータス・コードに加え、HTTP 関連以外の問題についても固有のコードが使用されます。索引付けされるのは、ステータスが 200 の URL のみです。表 14-1 に、Oracle Ultra Search のステータス・コードを示します。

表 14-1 Oracle Ultra Search クローラの URL ステータス・コード

コード	説明	コード	説明
200	URL OK	907	ソケット・バインドの例外。
400	不正なリクエストです。	908	フィルタが使用できません。
401	権限が必要です。	909	複製ドキュメントが検出されました。
402	支払が必要です。	910	複製ドキュメントが無視されました。
403	アクセスは禁止されています。	911	空のドキュメント。
404	見つかりません。	951	URL 索引は未作成。
405	メソッドは使用できません。	952	URL クロール済。
406	受け入れられません。	953	メタ・タグ・リダイレクション。
407	プロキシ認証が必要です。	954	HTTP リダイレクション。
408	タイムアウトのリクエストです。	955	ブラック・リスト URL。
409	競合しています。	956	URL が一意ではありません。
410	存在しません。	957	監視 URL (プレースホルダとしての URL)。
414	リクエスト-URI が長すぎます。	958	ドキュメントの読み取りエラー。
500	内部サーバー・エラーです。	959	フォーム・ログインに失敗しました。
501	実装されていません。	1001	データ型が TEXT/HTML ではありません。
502	ゲートウェイが不正です。	1002	ネットワーク・データ・ストリームが壊れています。
503	サービスは利用できません。	1003	HTTP リダイレクト位置が存在しません。
504	ゲートウェイのタイムアウトです。	1004	関連 URL が不正です。
505	HTTP バージョンはサポートされません。	1005	HTTP エラーです。
902	ドキュメント読み込みのタイムアウトです。	1006	HTTP ヘッダー解析中のエラーです。
903	フィルタリングに失敗しました。	1007	無効な URL 表の列名。

表 14-1 Oracle Ultra Search クローラの URL ステータス・コード (続き)

コード	説明	コード	説明
904	メモリー不足エラーです。	1008	JDBC ドライバがありません。
905	URL を処理中の I/O 例外。	1009	テキスト・ドキュメントとしてレポートされたバイナリ・ドキュメント。
906	接続が拒否されました。	1010	無効な表示 URL。

Oracle Application Server 10g へのアップグレード

『Oracle Application Server 10g アップグレード』に従って、Oracle9iAS 9.0.2 を Oracle Application Server 10g にアップグレードする前に、データベース 9.0.1.5 のパッチ・セットを適用する必要があります。

パッチ・セットを適用した後に、そのパッチ・セットのノートに記述されている次のインストール後の処理は実行しないでください。

「変更しようとしているデータベースに Oracle Ultra Search をインストールしている場合にのみ、次の手順を実行してください。」

かわりに、次のインストール後の手順を実行してください。

- CONNECT / AS SYSDBA
- GRANT SELECT ON SYS.DBMS_LOCK_ALLOCATED TO WKSYS;
- ALTER USER WKSYS ACCOUNT UNLOCK;
- ALTER PACKAGE WKSYS.WK_CRW COMPILE BODY;
- ALTER PACKAGE WKSYS.WK_SNAPSHOT COMPILE BODY;

Oracle Ultra Search および OracleAS Portal

Oracle Ultra Search でクロールできるのは、パブリックな Oracle AS Portal ソースのみです。パブリック・ページの設定方法は、『Oracle Application Server Portal 構成ガイド』を参照してください。

データ・ソースに制限アクセスを使用する場合のセキュリティに関する考慮事項

この項では、データ・ソースへのアクセス制限に单一の ACL を使用する場合のセキュリティに関する重要な考慮事項について説明します。

Oracle Ultra Search のデータ・ソースは、単一の管理者指定 ACL で保護できます。この ACL は、そのデータ・ソースに属するドキュメントを表示できるユーザーとグループを指定します。

Oracle Ultra Search では、検索ユーザーが問合せを実行したとき、Oracle Server の ACL 評価エンジンを使用して権限を評価します。この ACL 評価エンジンは Oracle XML データベースの機能です。Oracle Ultra Search の問合せで、管理者指定 ACL によって保護されているドキュメントを取得しようとした場合、その ACL は、評価された後キャッシュされます。

ACL のキャッシュ期間は、XDB 構成パラメータによって制御されます。『Oracle9i XML データベース 開発者ガイド』の「Oracle XML DB リソースのセキュリティ」の章を参照してください。XDB のマニュアルでは、/xdbconfig/sysconfig/acl-max-age パラメータを変更する必要があることが示されています。値は、ACL のキャッシュ期間を決定する数値 (秒数) です。この構成パラメータの変更方法は、「Oracle XML DB のインストールおよび構成」の章を参照してください。

ACL はキャッシュされるため、管理者指定 ACL に対する変更はすぐには伝播されないことに注意してください。これは、変更が行われる前に存在していたデータベース・セッションにのみ適用されます。

データベース・キャラクタ・セット変更後の Oracle Ultra Search の再構成

この再構成には、\$ORACLE_HOME/ultrasearch/admin/ の下にある 2 つの SQL スクリプト (wk0prefcheck.sql および wk0idxcheck.sql) が使用されます。

- wk0prefcheck.sql が wksys の下で起動され、デフォルトのキャラクタ・セットと索引設定が再構成されます。
- wk0idxcheck.sql は、データベース・キャラクタ・セットの変更前に作成されたインスタンス (デフォルト・インスタンスなど) を再構成するために必要です。このスクリプトはインスタンスの所有者が起動する必要があります、wk0prefcheck.sql によって生成される再構成後のデフォルト設定に依存するため、wk0prefcheck.sql を最初に実行する必要があります。
- wk0idxcheck.sql を実行すると、Oracle Ultra Search で使用される Oracle Text 索引も削除および再作成されます。そのため、すでに索引付けされているデータ・ソースがある場合は、すべてのデータ・ソースを再クロールする必要があります。
- wk0idxcheck.sql はインスタンスごとに 1 回ずつ実行する必要があります。「owner1」と「owner2」がそれぞれ所有する「inst1」と「inst2」の 2 つのインスタンスがある場合は、wk0idxcheck.sql を、「owner1」で 1 回、「owner2」で 1 回の合計 2 回実行する必要があります。

マルチバイト名を使用したデータソースのクロールが失敗する

マルチバイト名を使用したデータソースの Oracle Ultra Search クロールは失敗します。Oracle データベースを起動するローカル環境とロケールのターゲット・ファイルとの間に互換性がない場合は、ファイルが見つからないというエラーが発生します。

この問題を解決するには、正しいロケールを設定し、Oracle データベースを再起動して、強制的に Oracle Ultra Search でデータ・ソースを再クロールする必要があります。

次に例を示します。

1. 次のコマンドを使用して、Oracle データベース・インスタンスを停止します。

```
SQL> shutdown immediate
```

2. 次のコマンドを使用して、ロケールを 'ja' に設定します。

```
> setenv LANG ja
> setenv LC_ALL ja
```

3. 次のコマンドを使用して、Oracle データベース・インスタンスを再起動します。

```
SQL> startup
```

4. 強制再クロールで Oracle Ultra Search スケジュールを再起動します。

ISO-2022-JP キャラクタ・セットのデータのクロールが失敗する

ISO-2022-JP キャラクタ・セットのデータで Ultra Search を使用する場合は、Sun 社の JDK 1.4.2_04 以上をダウンロードし、それを Ultra Search バックエンド (Ultra Search スキーマが格納されているデータベース) のホスト・マシンにインストールして、Ultra Search バックエンドに新しい JDK インストールを指定する必要があります。

Ultra Search バックエンドに特定の JDK インストールを指定する (Ultra Search クローラの実行に使用される JDK を設定する) には、SQL*Plus で ORACLE_HOME/ultrasearch/admin/wkrepca.sql スクリプトを実行します。wksys ユーザーで接続し、JDK インストールのパスをスクリプトに渡す必要があります。次に例を示します。

```
sqlplus wksys/schema_password @ORACLE_HOME/ultrasearch/admin/wkrepca.sql
/usr/local/jdk1.4/bin/java
```

すべてのデータベース・キャラクタ・セットが Oracle Ultra Search でサポートされていない

Oracle Ultra Search では、Oracle Text でサポートされないデータベース・キャラクタ・セットはサポートされていません。たとえば、AL32UTF8 キャラクタ・セットはサポートされていません。

Unicode サポートについては、UTF8 を使用してください。

サポートされているデータベース・キャラクタ・セットの詳細は、『Oracle Text リファレンス』の「レクサー型」の項を参照してください。

不具合

- **Bug 3186386:** 非 SSO モードでの Oracle Ultra Search の ACL の作成または編集が失敗する

Oracle Ultra Search 管理者は、データベース管理者または管理権限が付与されている SSO ユーザーでログインできます。このリリースでは、データベース管理者でログインすると、特定の状況では、データ・ソース用の管理者指定 ACL を作成も編集もできません。ACL を作成または変更しようとすると、「アクセスが拒否されました。」エラーが発生します。回避策は、データ・ソース用の ACL を作成 / 変更する場合は、常に SSO ユーザーでログインすることです。
- **Bug 3411206:** データベース・キャラクタ・セットが UTF8 またはアジア言語のキャラクタ・セットの場合にデフォルト・インスタンスの索引付け設定が不適切である

デフォルト・インスタンスは、シード・データベースとともに作成され、英語 /ISO8859 に設定されます。インストール時に、中国語などのマルチバイト言語を処理するデータベース・キャラクタ・セット（例：UTF8）を設定するように選択した場合は、デフォルト・インスタンスを更新する必要があります。この問題を回避するには、wksys で \$ORACLE_HOME/ultrasearch/admin/wk0prefcheck.sql を実行して索引設定を確認した後、インスタンス所有者で \$ORACLE_HOME/ultrasearch/admin/wk0idxcheck.sql を実行して問題を修正します。デフォルト・インスタンスの下にあるすべてのデータ・ソース（ある場合）を再クリールする必要があります。データベース・キャラクタ・セットが JA16EUC の場合は、最初に Bug 3411046 の回避策を適用する必要があります。
- **Bug 3411046:** データベース・キャラクタ・セットを JA16EUC に変更した場合に誤ったフィルタ出力キャラクタ・セットが設定される

Ultra Search のインストール後にデータベース・キャラクタ・セットを JA16EUC に変更し、wk0prefcheck.sql または wk0idxcheck.sql を実行すると、キャッシュ・ファイルのキャラクタ・セットが 'EUC_JP' という誤った値に設定されます。この問題を回避するには、wk0prefcheck.sql および wk0idxcheck.sql 内の行 "Encoding:= 'EUC_JP'" を "Encoding:= 'Unicode'" に変更し、wk0prefcheck.sql および wk0idxcheck.sql を再実行します。
- **Bug 3318301:** データベース・キャラクタ・セットが KO16MSWIN949 の場合に韓国語のレクサーを使用できない

データベース・キャラクタ・セットが KO16MSWIN949 の場合は、韓国語ドキュメントの索引付けが使用できません。

データベース・キャラクタ・セットが JA16EUCTILDE、JA16EUCYEN、JA16SJISTILDE または JA16SJISYEN の場合は、日本語のレクサーと同じ問題が発生します。

データベース・キャラクタ・セットが ZHS32GB18030、ZHT16MSWIN950 または ZHT16HKSCS の場合は、中国語のレクサーと同じ問題が発生します。

この問題を回避するには、更新された wk0prefcheck.sql および wk0idxcheck.sql を取得して、インストールを修正します。Ultra Search を再インストールする場合は、更新された wk0pref.sql が必要です。
- **XML DB に依存する問題:** 次の 2 つの XML データベースの不具合は、9.2.0.4 データベース・リリースで認識されています。これらの問題は、9.2.0.4 データベース後のパッチ・リリースで修正されます。
 - **Bug 3172282:** 特定の ACL に対するすべての ACE をリストしようとするときは Oracle Core Dumps を使用する

Oracle 9.2.0.4 を使用している場合、Oracle Ultra Search 管理者は、管理者指定 ACL を作成後に表示できません。そのため、これらの ACL は編集または変更できません。したがって、管理者はこれらの ACL に指定した権限を常に把握しておく責任があります。さらに、ACL は表示できないた

め編集できません。この結果、ACL を変更する必要がある場合は、既存のデータ・ソースを削除し、再作成して、新しい権限を設定した新規 ACL を割り当てる必要があります。

- [Bug 3176161: resource_view を updatexml で更新するとコア・ダンプが生成される](#)

Oracle 9.2.0.4 を使用している場合、この不具合によって XDB リポジトリに格納されている ACL は更新できません。したがって、Bug 3172282 が修正された場合（および管理者が管理者指定 ACL を作成後に表示できる場合）でも、ACL を編集することはできません。この結果、ACL を変更する必要がある場合は、既存のデータ・ソースを削除し、再作成して、新しい権限を設定した新規 ACL を割り当てる必要があります。

Oracle Ultra Search バックエンドのカスタマ・データベース・インストール

Oracle Ultra Search は、既存の Oracle 9i (9.0.1.4) 以上のデータベースの上にインストールできます。次の 2 通りのインストール方法があります。

- [Oracle Application Server Repository Creation Assistant を使用したインストール](#)
- [wk0setup を使用した手動インストール](#)

Oracle Application Server Repository Creation Assistant を使用したインストール

Oracle Application Server Repository Creation Assistant (OracleAS RepCA) は、カスタマ・データベースを OracleAS Metadata Repository に変換します。OracleAS RepCA はすべての Oracle Application Server コンポーネント・スキーマをインストールし、Oracle Ultra Search バックエンドもインストールします。

OracleAS RepCA は Oracle Application Server リリースでのみ使用できます。カスタマ・データベースへの Oracle Ultra Search バックエンドのインストールには、OracleAS RepCA を使用する方法をお薦めします。Oracle Ultra Search とともに他の Oracle Application Server コンポーネント・スキーマもすべてインストールされるというオーバーヘッドはありますが、かわりに OracleAS Infrastructure 10g の利点 (Identity Management の統合、IM 再関連付けの正しく定義されたプロセスなど) を利用できます。

OracleAS RepCA を使用して MR を作成する方法の詳細は、『Oracle Application Server 10g インストレーション・ガイド』の「OracleAS Metadata Repository の既存のデータベースへのインストール」の項を参照してください。

重要: Oracle Ultra Search については、OracleAS RepCA によるインストール後に実行する必要がある構成手順があります。Oracle Ultra Search クローラは、JDK 1.4.1 以上を必要とする Java アプリケーションです。Oracle Ultra Search は、OracleAS RepCA によってデフォルトの JDK インストール (\$ORACLE_HOME/jdk/bin/java など) を使用するように構成されます。このインストールは、10g より前の ORACLE_HOME では、JDK 1.4.1 より前のバージョンです。したがって、\$ORACLE_HOME/jdk/bin/java がすでに JDK 1.4.1 以上でないかぎり、次の手順を実行する必要があります。

1. ローカル・システムに 1.4.1 以上の JDK をインストールします。
2. OracleAS RepCA CD の ultrasearch/admin ディレクトリに移動します。次に、SQL*Plus で wkrepca.sql スクリプトを実行します。wksys ユーザーで接続し、JDK 1.4.1 以上の Java 実行ファイルのパスをスクリプトに渡す必要があります。次に例を示します。

```
sqlplus wksys/wksys password@repca_cd/ultrasearch/admin/wkrepca.sql
      /usr/local/jdk1.4/bin/java
```

wk0setup を使用した手動インストール

Oracle Ultra Search バックエンドのみをカスタマ・データベースにインストールする場合は、Oracle Ultra Search バックエンドの手動インストールを選択できます。このプロセスを示すために、ここでは次の値と表記規則を使用します。

ORACLE_HOME: ターゲット・データベースの Oracle ホーム・ディレクトリ。

SH: ソース・ディレクトリ。OracleAS RepCA CD のディレクトリで、Oracle Ultra Search のディレクトリ (OracleAS RepCA など) が含まれます。

Oracle Ultra Search バックエンドの手動インストールの手順は、次のとおりです。

1. \$ORACLE_HOME/ultrasearch ディレクトリをバックアップします。バックアップするには、このディレクトリの名前を \$ORACLE_HOME/ultrasearch.old に変更します。
2. \$H/ultrasearch を \$ORACLE_HOME/ultrasearch にコピーします。
3. ディレクトリを \$ORACLE_HOME/ultrasearch/admin に変更します。
4. Oracle Ultra Search キーワード wksys がターゲット・データベースにすでに存在する場合は、次のように実行してアンインストールします。

```
@ sqlplus /nolog @$ORACLE_HOME/ultrasearch/admin/wk0deinst.sql sys SYSPW CSTR
```

各パラメータの内容は次の項を参照してください。

5. SQL*Plus スクリプト wk0setup.sql を実行します。

次に例を示します。

```
sqlplus /nolog @$ORACLE_HOME/ultrasearch/admin/wk0setup.sql $ORACLE_HOME CSTR sys SYSPW 'as sysdba' WKSYSKPW TBLSPC TMPTBLSPC portal CFS oui PSEP JDBCDRV JDBCNL$ JEXEC CTXHX JDBC_NODE JDBC_ALL $ORACLE_HOME
```

使用されている様々なパラメータの内容は次のとおりです（パラメータは誤って解釈されないように、一重引用符で囲む必要があります）。

- *CSTR*: '@' で始まる TNS 別名 (@inst1 など)。このパラメータは 1 つの空白 (' ') で渡すことができます。
- *SYSPW*: SYS ユーザー / キーワード wksys のパスワード。
- *TBLSPC*: wksys の表領域。
- *TMPTBLSPC*: wksys の一時表領域。
- *CFS*: \$ORACLE_HOME が Cluster File System (CFS) にある場合は 'true'、それ以外は 'false'。
- *PSEP*: パス・セパレータ (例: UNIX では ':'、Windows では ';')。
- *JDBCDRV*: JDBC ドライバ classes12.zip へのパス (\$ORACLE_HOME/jdbc/lib/classes12.zip など)。
- *JDBCNL\$*: nls_charset12.zip または orai18.jar へのパス (\$ORACLE_HOME/jdbc/lib/nls_charset12.zip など)。
- *JEXEC*: Java 実行可能ファイルのパス (/packages/jdk1.4.1/bin/java など)。このパスは、JDK 1.4.1 以上のインストレーションを指示する必要があります。
- *CTXHX*: INSOFILTER である ctxhx へのパス (\$ORACLE_HOME/ctx/bin/ctxhx など)。
- *JDBC_NODE*: Thin JDBC 接続文字列および '@' の後の部分のみ (HOST:PORT:SID など)。RAC の場合、この接続文字列は現行のノードに対するものであることが必要です。
- *JDBC_ALL*: JDBC_NODE と同じですが、CFS が true の RAC の場合、この JDBC 文字列にはすべての RAC ノードが含まれている必要があります (ヒント: TNS 構文を使用)。

データベース・キャラクタ・セット変更後のバックエンドの再構成

Oracle Ultra Search のインストール後にデータベース・キャラクタ・セットが変更された場合は、新しいキャラクタ・セットに適応するように Oracle Ultra Search のバックエンドを再構成する必要があります。

この再構成には、\$ORACLE_HOME/ultrasearch/admin/ にある 2 つの SQL スクリプト (wk0prefcheck.sql および wk0idxcheck.sql) が使用されます。

- `wk0prefcheck.sql` が `wksys` の下で起動され、デフォルトのキャッシュ・キャラクタ・セットと索引設定が再構成されます。
`wk0idxcheck.sql` を実行すると、Oracle Ultra Search で使用される Oracle Text 索引も削除および再作成されます。すでに索引付けされているデータ・ソースがある場合は、すべてのデータ・ソースを強制的に再クロールする必要があります。
`wk0idxcheck.sql` はインスタンスごとに 1 回ずつ実行する必要があります。そのため、「owner1」と「owner2」がそれぞれ所有する「inst1」と「inst2」の 2 つのインスタンスがある場合は、`wk0idxcheck.sql` を、「owner1」で 1 回、「owner2」で 1 回の合計 2 回実行する必要があります。
- `wk0idxcheck.sql` は、データベース・キャラクタ・セットの変更前に作成されたインスタンス（デフォルト・インスタンスなど）を再構成するために必要です。このスクリプトはインスタンスの所有者が起動する必要があります、`wk0prefcheck.sql` によって生成される再構成後のデフォルト設定に依存するため、`wk0prefcheck.sql` を最初に実行する必要があります。

ドキュメントの誤り

この項では、『Oracle Ultra Search ユーザーズ・ガイド』のドキュメントの誤りについて説明します。この項の内容は次のとおりです。

- 全般的な訂正
- セキュア検索
- セキュアな Oracle Ultra Search インストールの構成
- Oracle Application Server による Oracle Ultra Search Middle-Tier のインストール
- Oracle HTTP Server および OC4J とともに Oracle Ultra Search Middle-Tier を構成する場合
- `ultrasearch.properties` ファイルの編集
- Oracle Ultra Search のバックエンドをリモート・クローラ・ホストで構成する場合
- Oracle Ultra Search セキュリティ・モデル
- リモート・クローラ・プロファイル

全般的な訂正

チューニングおよび管理の章の「一時ディレクトリ」という用語は、正しくは「キャッシュ・ディレクトリ」です。

セキュア検索

Oracle Ultra Search では、ユーザー定義のデータ・ソース・タイプに対してのみ「Crawl ACLs from the Data Source」モードがサポートされます。このモードでは、クローラ・エージェントによって、他のドキュメント属性とともに、ACL がデータ・ソースから取得されます。Web、表、ポータル、電子メールまたはファイル・タイプの場合は、ACL をデータ・ソースから取得することはできません。

エージェント API に関しては、送信される URL の ACL をエージェントが設定できる新規 URL プロパティ "UrlData.ACL" があります。また、エージェント API には新規の `AclHelper` クラスがあります。このクラスによって、必ず正しい書式の ACL 文字列になるように ACL 文字列が生成されます。

ACL のプリンシパルとして使用できるのは、識別名 (DN) およびグローバル・ユーザー ID (GUID) のみです。

セキュアな Oracle Ultra Search インストールの構成

セキュア Oracle Ultra Search のインストールの設定に関して、次の追加事項および訂正事項があります。セキュア Oracle Ultra Search のインストールを設定する前に、次のことを実行する必要があります。

- Oracle データベース リリース 9.2.0.4 以上のインストールまたはアップグレード。ドキュメントでは、リリース 10.1.0 以上と誤って記述されています。

- Oracle Internet Directory のインストール。中間層および IM (Identity Management) のリリースが 9.0.4 以上であることが必要です。
現在のドキュメントには、OracleAS RepCA を使用して、9.2.0.4 データベースを Oracle Application Server 9.0.4 Metadata Repository に変換できると記述されています。これを実行できるのは、9.2.0.4 データベースが存在する場合であるという記述を追加する必要があります。
- データベースの Oracle Internet Directory への登録。
OracleAS RepCA を使用すると、データベースを Oracle Internet Directory に登録できます。登録後、次の手動による手順を実行する必要があります。
 - データベースの識別名を、RDBMS_SERVER_DN 初期化パラメータ値としてデータベース・サーバー・パラメータ・ファイル spfile.ora に追加します。
 - データベースを再起動します。この結果、新規初期化パラメータが有効になります。
- Oracle-Oracle Internet Directory SSL リンク（以前は "SSL" が欠落していました）の構成。データベースと Oracle Internet Directory の間でセキュアな接続を確立するためには、次の各マニュアルの指示に従ってください。
 - **SSL に対応した Oracle Internet Directory の構成:** 『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』の第 13 章「Secure Sockets Layer (SSL) とディレクトリ」
 - **SSL に対応したデータベースの構成:** 『Oracle Advanced Security 管理者ガイド』の第 15 章「エンタープライズ・セキュリティの管理」

また、Oracle Identity Management および Oracle Internet Directory を使用するデータベースの構成の詳細について 『Oracle9i Database 管理者ガイド』 を参照するという記述は無視してください。

Oracle Application Server による Oracle Ultra Search Middle-Tier のインストール

「オプションの構成」 Oracle Installer 画面で「OracleAS Portal」オプションを選択した場合は、次の項の構成手順が Oracle Portal Configuration Assistant (OPCA) によって自動的に実行されます。

項テキスト（「data-sources.xml ファイルの編集」）で指示されている追加の手動手順を実行する必要はありません。すべて自動的に構成されます。

Oracle HTTP Server および OC4J とともに Oracle Ultra Search Middle-Tier を構成する場合

application.xml ファイルについて、`<orion-application>` タグの下の記述を次のように変更してください。

変更前 :

```
<library path="$ORACLE_HOME/ultrasearch/lib/ultrasearch_query.jar" />
<library path="$ORACLE_HOME/ultrasearch/webapp/config" />
<library path="$ORACLE_HOME/jlib/uix2.jar" />
<library path="$ORACLE_HOME/jlib/share.jar" />
<library path="$ORACLE_HOME/jlib/regexp.jar" />
<library path="$ORACLE_HOME/lib/mail.jar" />
<library path="$ORACLE_HOME/lib/activation.jar" />
<library path="$ORACLE_HOME/lib/xmlparserv2.jar" />
<library path="$ORACLE_HOME/jdbc/lib/nls_charset12.zip" />
<library path="$ORACLE_HOME/jdbc/lib/classes12.jar" />
```

変更後 :

```
<library path="$ORACLE_HOME/ultrasearch/lib/ultrasearch_query.jar" />
<library path="$ORACLE_HOME/ultrasearch/webapp/config" />
<library path="$ORACLE_HOME/jlib/uix2.jar" />
<library path="$ORACLE_HOME/jlib/share.jar" />
<library path="$ORACLE_HOME/jlib/regexp.jar" />
<library path="$ORACLE_HOME/jdbc/lib/nls_charset12.zip" />
<library path="$ORACLE_HOME/jlib/repository.jar"/>
<library path="$ORACLE_HOME/jlib/ohw.jar"/>
<library path="$ORACLE_HOME/jlib/ldapjclnt9.jar"/>
<library path="$ORACLE_HOME/j2ee/home/jazn.jar"/>
```

```
<library path="$ORACLE_HOME/portal/jlib/ptlshare.jar"/>
<library path="$ORACLE_HOME/portal/jlib/pdkjava.jar"/>
```

default-web-site.xml について、<web-site> タグの下に次のように記述を追加してください。

変更前：

```
<web-app application="UltrasearchAdmin" name="admin" root="/ultrasearch/admin" />
<web-app application="UltrasearchQuery" name="query" root="/ultrasearch/query"/>
<web-app application="UltrasearchPortlet" name="query" root="/provider/ultrasearch" />
```

変更後：

```
<web-app application="UltrasearchQuery" name="query" root="/ultrasearch/query"/>
<web-app application="UltrasearchQuery" name="welcome" root="/ultrasearch" />
<web-app application="UltrasearchAdmin" name="admin" root="/ultrasearch/admin" />
<web-app application="UltrasearchAdmin" name="admin_sso" root="/ultrasearch/admin_sso" />
<web-app application="UltrasearchAdmin" name="ohw" root="/ultrasearch/ohw" />
```

ultrasearch.properties ファイルの編集

ultrasearch.properties ファイルの内容が変更されています。

ultrasearch.properties ファイルの例を次に示します。

```
connection.driver=oracle.jdbc.driver.OracleDriver
#If set, The JDBC connection URL specified here will override the dynamically #acquired one
from OID.
#This setting is also used by the 9i query sample (gsearch.jsp)
#Example: connection.url=jdbc:oracle:thin:@<host>:<port>:<sid>
connection.url=%JDBC_CONN_STR%
oracle.net.encryption_client=REQUESTED
oracle.net.encryption_types_client=(RC4_56,DES56C,RC4_40,DES40C)
oracle.net.crypto_checksum_client=REQUESTED
oracle.net.crypto_checksum_types_client=(MD5)
oid.app_entity_cn=m16bi.sgtcnsun03.cn.oracle.com
domain=us.oracle.com
```

ultrasearch.properties ファイルで JDBC 接続文字列を構成する必要がなくなりました。データベース接続情報は Oracle Internet Directory から取得されます。

注意： Oracle Ultra Search 9i の問合せサンプル・ページ (gsearch.jsp) は、そのままでは機能しなくなります。別のプロパティ・ファイルを使用するか、または ultrasearch.properties ファイルを編集する必要があります。

Oracle Ultra Search のバックエンドをリモート・クローラ・ホストで構成する場合

手順 4 の正しい記述は次のとおりです。

4. 登録スクリプトを起動します。

WKSYS スーパー・ユーザーで SQL*Plus を起動し、次のように入力します。

```
@full_path_of_registration_script
```

RMI ベースのリモート・クロールの登録スクリプトは、次のとおりです。

```
$REMOTE_ORACLE_HOME/ultrasearch/tools/remotecrawler/scripts/<platform>/register.sql
```

JDBC ベースのリモート・クロールの登録スクリプトは、次のとおりです。

```
$REMOTE_ORACLE_HOME/ultrasearch/tools/remotecrawler/scripts/<platform>/register_jdbc.sql
```

たとえば、UNIX ホストの \$REMOTE_ORACLE_HOME の値が /home/oracle9i の場合は、SQL*Plus プロンプトで次のように入力して、RMI ベースのリモート・クローラを登録します。

```
/home/oracle9i/ultrasearch/tools/remotecrawler/scripts/unix/register.sql
```

同様に、Windows で SQL*Plus を実行しているときに、\$REMOTE_ORACLE_HOME が d:\Oracle\Oracle9i の場合は、SQL*Plus プロンプトで次のように入力して、JDBC ベースのリモート・クローラを登録します。

```
d:\Oracle\Oracle9i\ultrasearch\tools\remotecrawler\scripts\winnt\register_jdbc.sql
```

Oracle Ultra Search セキュリティ・モデル

Oracle Ultra Search でセキュア Web サイトにアクセスする場合、クローラのトラストストアおよび Oracle Containers for J2EE (OC4J) JVM のトラストストアに証明書をインポートする必要がある場合があります。

Oracle Ultra Search 管理ツールは、OC4J JVM 内で動作する Web アプリケーションです。セキュア・ポータル・インスタンスでは、クライアントが SSL で認証されている必要があります。セキュア・ポータル・インスタンスでページ・グループを検出するには、Oracle Ultra Search 管理ツールで HTTPS ネットワーク・コールを行う必要があります。

デフォルトでは、OC4J JVM は一般に知られている認証局の証明書を認識します。しかし、セキュア・ポータル・インスタンスで、自己署名証明書または不明な認証局によって署名された証明書が使用される場合は、ポータルの証明書を OC4J JVM のトラストストアにインポートする必要があります。これは、Sun 社の keytool ユーティリティで実行できます。

OC4J JVM のデフォルトのトラストストアは \$ORACLE_HOME/jdk/jre/lib/security/cacerts にあります。

関連項目： Sun 社の keytool 鍵および証明書管理ユーティリティの使用方法、SSL サービスのカスタマイズ、およびトラストストア管理の詳細は、Sun 社のドキュメントを参照してください。

別のトラストストアを使用するように OC4J を構成する方法は、OracleAS Containers for J2EE のドキュメントを参照してください。

リモート・クローラ・プロファイル

この項の最後に、次の注意を追加してください。

注意： リモート・クローラのキャッシュ・ディレクトリは、サーバー側クローラのキャッシュ・ディレクトリにマウントする必要があります (「クローラ」→「設定」タブで指定)。このようにマウントしないと、ドキュメントの索引を作成できません。

Oracle Application Server Syndication Services

この章では、Oracle Application Server Syndication Services（OracleAS Syndication Services）に関する問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- ドキュメントの誤り

ドキュメントの誤り

この項では、OracleAS Syndication Services のドキュメントの誤りについて説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [ファイルおよび WebDAV コネクタの増分更新に関する注意](#)

ファイルおよび WebDAV コネクタの増分更新に関する注意

増分更新は、アクセスされるファイルおよび Web Distributed Authoring and Versioning (WebDAV) の最終変更日に基づいて行われます。原則として、ある更新から次の更新までに配信されるファイルは、ソース・ディレクトリをスキャンして、変更日が前回の更新時間より後の要素をすべて識別することによって判別されます。一部のオペレーティング・システムでは、ファイルを移動したときにファイルの変更日が更新されないため、移動したリソースで元の変更時間が保持されます。

この動作を考慮する必要があるのは、OracleAS Syndication Services によってコンテンツ・リソースとして使用されるファイルをあるディレクトリに移動する場合です。つまり、移動したファイルの元の変更日が最終更新時間より前である場合、これらのファイルは、次回の増分更新時に配信されません。この場合は、完全更新によってファイルを取得できます。

ディレクトリ内でファイルをコピーする場合、コピー・コマンドでは変更日に現在の日付が設定されるため、この問題は発生しません。

第 V 部

Oracle Application Server Wireless の問題

第 V 部では、OracleAS Wireless に関する問題について説明します。内容は次のとおりです。

- 第 16 章 「Oracle Application Server Wireless」

16

Oracle Application Server Wireless

この章では、Oracle Application Server Wireless (OracleAS Wireless) に関する問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 一般的な問題と回避策
- 構成に関する問題と回避策
- ドキュメントの誤り

一般的な問題と回避策

この項では、OracleAS Wireless の一般的な問題に関する情報と回避策について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- マルチチャネル・ゲートウェイの使用
- パフォーマンスの最適化と JSP ファイルの変更
- メッセージのトランスポート
- マルチバイトのユーザー名は Jabber ではサポートされない
- ドライバ名の変更
- プッシュ SOAP の URL
- 一部の MXML メッセージでのイメージの破損
- 通知の早期配信
- XHTML および XForms
- Customization Portal でのデバイス妥当性チェック用にローカライズされた音声メッセージのエラー
- 再作成された SSO ユーザーが使用できない機能
- シグネチャ獲得フォーム・コントロールの使用
- Oracle Application Server Wireless と Web Cache の統合
- Oracle Application Server Wireless と Oracle Portal の統合
- Oracle Application Server Wireless の log.xml ファイルは NLS をサポートしない
- POST メソッドはすべての言語でサポートされているわけではない

注意： パフォーマンスの問題と計画の詳細は、OTN-J の「OracleAS Wireless」セクションを参照してください。

- システム環境変数 (IAS_HOME) の大 / 小文字区別
- モデル・オブジェクトの変更はアプリケーション全体には伝播されない
- Web クリッピングのヘルプ・ページの制限
- 無効なユーザー・アカウント
- Web クリッピングの出力が異なる言語で表示される場合がある
- 日本語文字列によるショート・メッセージの送信を避ける
- 韓国語文字でメッセージを保存できない

マルチチャネル・ゲートウェイの使用

マルチチャネル・ゲートウェイを使用するには、Web アプリケーションを作成してデプロイする必要があります。アプリケーションの開発には、任意の Web テクノロジを使用できます。静的ページまたは動的ページのいずれも使用できます。また、モバイル XML または XHTML マークアップ言語も使用できます。HTTP (HTTPS) プロトコルを介してアプリケーションにアクセスできることが唯一の要件です。アプリケーションは、マルチチャネル・ゲートウェイと同じマシン上で実行される場合とそうでない場合があります。

説明を簡略にするため、アプリケーションは単純な JSP (`Hello.jsp`) であるとします。この JSP にアクセスするための URL は、次のとおりです。 `http://myhost:8080/jsp/Hello.jsp`.

マルチチャネル・ゲートウェイは、次の URL を使用してアクセスできる別の Web アプリケーションです。`http://hostname:7777/mcs/remote/` (7777 は Oracle9iAS Wireless のデフォルト・ポートです)。ただし、マルチチャネル・ゲートウェイはコンテンツを作成しないため、マルチチャネル・ゲートウェイの URL にアクセスしてもコンテンツは表示されません。使用しているデバイスからマルチチャネル・ゲートウェイを介して独自のアプリケーション (コンテンツ・ソース) にアクセスするには、特別な URL を指定する必要があります。特別な URL の作成方法を説明するために、次のサンプル URL について考えてみます。

`http://myhost:8080/jsp/Hello.jsp`

使用しているデバイスに入力する URL は、次のとおりです。

`http://hostname:7777/mcs/remote/http/myhost/8080/jsp/Hello.jsp`

次に、この URL の作成方法を説明します。

1. 基本となるマルチチャネル・ゲートウェイの URL を取得します。ここでは、`http://hostname:7777/mcs/remote/` です。
2. アプリケーションへの絶対 URL を作成します。この URL には、デフォルトのポート番号 (HTTP の場合は 80、HTTPS の場合は 443) を使用する場合でもポート番号を含めます。
3. アプリケーションの元の URL にある `://` と `:` を `/` に置き換えます (つまり、`http://myhost:8080/jsp/Hello.jsp` を `http/myhost/8080/jsp/Hello.jsp` に変更します)。
4. 変更した URL をマルチチャネル・ゲートウェイの URL に追加します。

Web アプリケーションにパラメータを渡す手順はとても簡単です。標準的な URL 構文を使用して、URL の最後に問合せ文字列を追加します。

次に例を示します。`fname` パラメータと `lname` パラメータを `Hello.jsp` に渡す場合は、次の構文を使用します。

`http://hostname:7777/mcs/remote/http/myhost/8080/jsp/Hello.jsp?fname=John&lname=Doe`

マルチチャネル・ゲートウェイでユーザー・デバイスからの要求を受信すると、次のように、元のアプリケーション URL が再作成されます。

`http://myhost:8080/jsp/Hello.jsp`

要求はこの URL に送信されます。マルチチャネル・ゲートウェイでは、ユーザー・デバイスが要求の送信に使用したのと同じ HTTP メソッドを使用します (ユーザー・デバイスが GET を使用した場合、マルチチャネル・ゲートウェイは GET を使用してバックエンド・アプリケーションにアクセスします。現在サポートされているのは、GET および POST のみです)。

パフォーマンスの最適化と JSP ファイルの変更

一般的に、Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J) は JavaServer Pages (JSP) ファイルを調べて変更を検出し、次に再コンパイルします。ただし、ptg Web アプリケーション内にデプロイされた JSP ファイルについては、この OC4J の動作が変更されています。

インクルードされ、プリコンパイルされた JSP ファイルを変更すると、OC4J ではその JSP ファイルの変更を検出およびコンパイルしません。

参照: OC4J 構成の詳細は、『Oracle Application Server Containers for J2EE JavaServer Pages 開発者ガイド』の「JSP 構成パラメータ」を参照してください。

たとえば、ptg Web アプリケーション内にデプロイされたすべての JSP ファイルはプリコンパイルされます。なんらかの理由でそれらの JSP ファイルを変更すると、プリコンパイルされたクラス・ファイルを使用できなくなるため、OC4J 設定を変更して JSP コンパイルを使用可能にする必要があります。使用可能にするには、次の場所にある ptg アプリケーションの `web.xml` ファイルを変更します。

`[ORACLE_HOME]/OC4J_Wireless/applications/ptg/ptg-web/WEB-INF/web.xml`

この問題 (JSP ファイルへの変更内容が有効にならない) を回避し、Oracle Application Server Wireless に含まれる JSP ファイルのパフォーマンスを最適化するには、次に説明するように `web.xml` ファイルを変更する必要があります。

1. ファイルから次の部分を削除します。

```

<!--
WARNING!!! Overridden JSP engine settings
With this configuration the JSP files in this application will NOT be
recompiled.
Any changes to the JSP source files will NOT take effect.
If you want to switch back to the default JSP engine settings simply comment
out
the servlet declaration and mapping for the jsp servlet below.
-->
<servlet>
<servlet-name>jsp</servlet-name>
<servlet-class>oracle.jsp.runtimev2.JspServlet</servlet-class>
<!-- you can disable page scope listener if you
don't need this function. -->
<init-param>
<param-name>check_page_scope</param-name>
<param-value>true</param-value>
</init-param>
<!-- you can set main_mode to "justrun" to speed up
JSP dispatching, if you don't need to recompile
your JSP anymore. You can always switch your
main_mode. Please see our doc for details -->
<init-param>
<param-name>main_mode</param-name>
<param-value>justrun</param-value>
</init-param>
<load-on-startup>0</load-on-startup>
</servlet>
<servlet-mapping>
<servlet-name>jsp</servlet-name>
<url-pattern>/*.jsp</url-pattern>
</servlet-mapping>
<servlet-mapping>
<servlet-name>jsp</servlet-name>
<url-pattern>/*.JSP</url-pattern>
</servlet-mapping>
<servlet-mapping>
<servlet-name>jsp</servlet-name>
<url-pattern>/*.jspx</url-pattern>
</servlet-mapping>
<servlet-mapping>
<servlet-name>jsp</servlet-name>
<url-pattern>/*.sqljsp</url-pattern>
</servlet-mapping>
<servlet-mapping>
<servlet-name>jsp</servlet-name>
<url-pattern>/*.SQLJSP</url-pattern>
</servlet-mapping>

```

2. また、`ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_Wireless/applications/ptg/ptg-web/WEB-INF/classes/_modules` ディレクトリ、および `ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_Wireless/applications/ptg/ptg-web/WEB-INF/classes` ディレクトリにある名前がアンダースコア (_) で始まるすべてのクラス・ファイルも削除する必要があります。
3. `OC4J_Wireless` アプリケーションを再起動します。

メッセージのトランスポート

メッセージに関して次の問題があります。

- デバイスでの不具合のため、ASCII 以外の文字を含む件名付き MMS メッセージの Nokia 3650 への送信はサポートされていません。
- SyncML サーバー設定の Nokia 3650 への送信はサポートされていません。
- 事前にシードされているサイト・レベルのすべてのドライバは、デフォルトで使用可能です。パフォーマンスを向上させるために、不要なドライバを使用不可にできます。
- メッセージのトランスポートでは、拡張メッセージ・サービス (EMS) で送信できるのは英語のメッセージのみです。英語以外の言語は、SMS および MMS でサポートされています。

マルチバイトのユーザー名は Jabber ではサポートされない

Instant Messaging で使用するバックエンドである Jabber では、マルチバイトのユーザー名をサポートしません。このため、Instant Messaging モジュールでもマルチバイトのユーザー名をサポートしません。

ドライバ名の変更

ユーザー・インターフェースとドキュメントでは、XMSDriver への参照がすべて PushDriver に変更されました。

プッシュ SOAP の URL

このリリースでは、プッシュ SOAP の URL が変更されました。Oracle Application Server Wireless の新規にインストールしたインスタンスに対して XMS クライアントを使用している場合は、新しい URL を使用するようにクライアントを更新する必要があります。デフォルトでは、新しい URL は /xms/webservices (以前のリリースでは /push/webservices) です。

インスタンスをリリース 9.0.2 から 9.0.4 にアップグレードした場合、古い URL (/push/webservices) は有効なままで、アプリケーションは実際には 9.0.2 のコードベースを実行します。したがって、古い URL は下位互換性を維持するためにのみ使用し、新しい URL (/xms/webservices) を使用するように SOAP API のクライアントを更新する必要があります。

一部の MXML メッセージでのイメージの破損

属性 addImageExtension=true を指定したイメージ参照を含む MXML メッセージを XMS を使用して電子メール受信者に送信すると、一部の電子メール・クライアントでは、表示されるオンライン・イメージが破損している場合があります。この問題を回避するには、次の手順を実行します。

1. Oracle Application Server Wireless Tools の「**基本管理**」タブに移動します。
2. 「ASYNC」デバイスを選択します。
3. 「**編集**」をクリックします。
4. 「**プラウザ**」セクションに移動し、「**イメージファイル MIME タイプ**」表にナビゲートします。
5. 次の MIME タイプを左ペインから右ペインに移動します。
 - image/bmp bmp
 - image/png png
 - image/tiff tif
 - image/gif gif
 - image/jpeg jpg
6. 「**適用**」をクリックして変更内容を保存します。

通知の早期配信

連絡ルールで送信時間枠を指定しているユーザーに対して電子メールで通知メッセージを送信する場合、メッセージが時間枠より早期に配信される場合があります。たとえば、ユーザーが連絡ルールで午前 10 時まで電子メールを受信しないように指定している場合でも、通知が午前 9 時に生成されると、60 分間配信が遅延されることではなく、そのメッセージは即時に送信されます。

この問題の回避策はありません。

XHTML および XForms

この項では、XHTML および XForms に関する問題について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [XHTML/XForms の非同期サポート](#)
- [XForms で「戻る」ボタンを使用する際のエラー](#)
- [XForms を使用したラジオ・ボタン、チェック・ボックスおよび選択リストの表示](#)
- [XForms を使用したフォーム送信](#)

XHTML/XForms の非同期サポート

XForms を使用して非同期サービスを開発する場合は、itemset ではなく item element を使用して select 要素と select1 要素のオプション・リストを表示する必要があります。

XForms で「戻る」ボタンを使用する際のエラー

XForms Web アプリケーションでは、ブラウザの「戻る」ボタンを使用できません。Oracle Application Server は、ブラウザと Application Server 間の複数のラウンドトリップをサポートするために、サーバー上のフォームの状態をキャッシュします。ブラウザの「戻る」ボタンを使用すると、ブラウザ（キャッシュ）はサーバーの現在の状態をフェッチしないため、競合が発生する場合があります。また、特定のアクション（XForms の submit など）の場合、Application Server では状態が消去されるため（発行後にサーバーの状態が消去されるため）、再発行が試行されると（ブラウザの「戻る」ボタンを使用して）、サーバーはエラーをスローします。

XForms を使用したラジオ・ボタン、チェック・ボックスおよび選択リストの表示

XForms は、select1 と select コントロールを使用して、値リストから 1 つ以上選択できることを示します。ラジオ・ボタン、チェック・ボックスまたは選択リストを表示するには、これらのコントロールを使用します。また、appearance 属性を使用して、UI で表示される select1 または select の種類を制御します。appearance="full" を使用して、ラジオ・ボタン（select1 の場合）またはチェック・ボックス（select の場合）を表示します。

XForms を使用したフォーム送信

XForms 文書で *post submission* メソッドを使用すると、XForms プロセッサは、送信済の XML（インスタンス）データの xmlns 名前空間属性（デフォルト名前空間と使用した名前空間の接頭辞）を送信しません。これは既知の不具合で、作成者は、名前空間の接頭辞をインスタンス・データのルート要素に定義することで、この問題を回避できます。

Customization Portal でのデバイス妥当性チェック用にローカライズされた音声メッセージのエラー

音声チャネルを介したデバイス妥当性チェック・メッセージは、ユーザーのロケールが「English」に設定されている場合のみ機能します。このメッセージは、音声ゲートウェイで英語自動音声認識（ASR）エンジンを使用してレンダリングされます。ユーザー・ロケールまたはゲートウェイが他の設定の場合は、ASR エンジンでサポートされていないため、メッセージ配信でエラーが発生する場合があります。

再作成された SSO ユーザーが使用できない機能

Oracle Application Server Wireless Tools の再作成された SSO ユーザーは、その Tools の一部の機能にアクセスできません。あるユーザーを削除してから再作成すると、そのユーザーは Wireless Tools のすべての機能を使用できなくなります。この問題は、SSO サーバーがユーザーの GUID 情報をキャッシュするために発生します。この問題を解決するには、SSO サーバーを再起動します。

シグネチャ獲得フォーム・コントロールの使用

一部のブラウザ（Spectrum24® WebClient for Palm Computing Platform など）は、シグネチャ獲得機能をサポートしています。OracleAS Wireless XML を使用して開発されたアプリケーションでは、シグネチャ獲得をサポートするために必要なターゲット・マークアップを生成できます。このリリースでは、次のブラウザでのシグネチャ獲得がサポートされています。

- Palm OS 4.1 用の Symbol Spectrum24® WebClient for Palm Computing Platform バージョン 2.8-10
- Microsoft Pocket PC の Microsoft Pocket Internet Explorer 4.1
- Microsoft CE3 以上の Microsoft Pocket Internet Explorer

サポートされている Microsoft Pocket PC や Windows Mobile プラットフォームには、Oracle Signature Capture Plug-in for Pocket Internet Explorer がインストールされている必要があります。Oracle Signature Capture Plug-in は、Oracle MetaLink (<http://metalink.oracle.com>) からダウンロードできます。または、オラクル社カスタマ・サポート・センターに連絡してください。

Oracle Application Server Wireless と Web Cache の統合

WebCache は MobileXML 文書をサポートしていますが、XHTML+XForms または XHTML-MP で記述された文書はサポートしていません。

Oracle Application Server Wireless と Oracle Portal の統合

デバイスでこの機能を使用するには、デバイスが適切な HTTP ACCEPT ヘッダーを送信する必要があります。

Oracle Application Server Wireless の log.xml ファイルは NLS をサポートしない

このリリースでは、Oracle Application Server Wireless の log.xml は NLS をサポートしていません。

POST メソッドはすべての言語でサポートされているわけではない

XForms トランスフォームは、POST メソッドを含むマークアップ言語を出力する場合があります。したがって、POST メソッドをサポートしないデバイス（日本の旧型の J-Phone Type C2 デバイスなど）は、XForms でサポートされません。

システム環境変数 (IAS_HOME) の大/小文字区別

ドライブを示す文字（C: など）が大文字であることを確認してください。

モデル・オブジェクトの変更はアプリケーション全体には伝播されない

Wireless モデル API を使用しており、Wireless 永続オブジェクトに変更を加える場合は、Web アプリケーションの `web.xml` ファイルに次の行を追加して、Web アプリケーション全体に変更が伝播されるようにします。

```
<?xml version="1.0" encoding="ISO-8859-1"?>
<!DOCTYPE web-app PUBLIC
"-//Sun Microsystems, Inc.//DTD Web Application 2.3//EN"
"http://java.sun.com/dtd/web-app_2_3.dtd">
<web-app>
<!-- ... -->
<filter-mapping>...</filter-mapping>
<listener>
<listener-class>oracle.panama.servlet.CacheManagerListener</listener-class>
</listener>
<servlet>...</servlet>
<!-- ... -->
</web-app>
```

Web クリッピングのヘルプ・ページの制限

OracleAS Wireless Webtool の Web クリッピングの機能にアクセスする場合、Web ブラウザに Netscape を使用してブラウザの言語が日本語であるとき、Web クリッピングのヘルプ・ページを正常に表示できません。

無効なユーザー・アカウント

OracleAS Wireless Portal に HDML シミュレータによってアクセスする場合、無効なユーザー・アカウントでログインしようとすると、ユーザー名の非 ASCII データは破損データとして表示されるか、別の文字列に変更されます。

Web クリッピングの出力が異なる言語で表示される場合がある

OracleAS Wireless Web クリッピングで、ユーザー・プロファイルと異なる言語で出力が表示される場合があります。ユーザー・プロファイルの言語は、Webtool にログインするときに使用される言語です。Web クリッピング・マネージャは、Web ブラウザの言語をデフォルトとして使用します。

OracleAS Wireless Web クリッピングの出力を特定の言語で表示するには、Web ブラウザの言語の設定方法に関するブラウザのヘルプを参照してください。

日本語文字列によるショート・メッセージの送信を避ける

OracleAS Wireless Portal (特に ptg/rm) との接続のために UPSDK 3.3.1 シミュレータを使用している場合、SMS に移動して日本語文字列のショート・メッセージを送信および保存すると、保存された日本語のメッセージが文字化けになります。

韓国語文字でメッセージを保存できない

OracleAS Wireless Portal にログインして「PIM」→「Short Messaging」を選択し、韓国語文字で事前定義ショート・メッセージを作成して保存すると、その SMS が保存されたことを確認できます。ただし、「メッセージの選択」を選択して保存されたメッセージを選択しようとしても、そのメッセージは見つかりません。

OracleAS Wireless Portal にアクセスする場合、韓国語文字でショート・メッセージを保存しないようにお薦めします。

構成に関する問題と回避策

この項では、OracleAS Wireless の構成に関する問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- 10g の 64 ビット・データベースで Configuration Assistant が Wireless に対してハングする
- Oracle Application Server Wireless のスタンドアロン・インスタンス名にはシングルバイトの英数字のみ使用
- OID に基づくアプリケーション・エンティティでの潜在的な競合
- OC4J_Wireless
- Oracle Application Server Wireless ホスト名の更新
- Oracle Application Server Workflow の統合
- OracleAS Wireless の不正なサイト URL
- Openwave プラグインを使用した新規デバイスまたはシミュレータの検出
- Oracle Application Server Wireless と Oracle Internet Directory の統合
- Studio ツールおよび Customization ツールにログインできない

10g の 64 ビット・データベースで Configuration Assistant が Wireless に対してハングする

元のデータベースと同じマシン上に 10g データベースを再作成する前に、元のデータベースと同じサービス名と SQL*Net ポートを使用して、データベースに接続を試みるすべての中間層を停止する必要があります。これによって、多数の誤ったユーザー名 / パスワード要求を受け取ることがありません（そうでない場合、アカウントはロック・アウトします）。

新しいデータベースの作成中も中間層を実行し続ける必要がある場合は、回避策として、`failed_login_attempts` を UNLIMITED に設定します。

Oracle Application Server Wireless のスタンドアロン・インスタンス名にはシングルバイトの英数字のみ使用

Oracle Application Server Wireless のスタンドアロン・インスタンス名に使用できるのは、シングルバイトの英数字のみです。これには、メッセージ・ゲートウェイ、通知エンジン、データ・フィード・エンジン、通知イベント・コレクタ、パフォーマンス・ログ出力およびロケーション・イベント・サーバーのインスタンス名も含まれます。

OID に基づくアプリケーション・エンティティでの潜在的な競合

共通のメタデータ・リポジトリ（Oracle Application Server Wireless スキーマ）に対してインストールされた Oracle Application Server Wireless 中間層は、OID の共通のアプリケーション・エンティティを共有します。アプリケーション・エンティティは最初の Oracle Application Server Wireless 中間層のインストール時に作成され、その中間層をインストールした OID ユーザーが所有します。同じメタデータ・リポジトリに対して後続の Oracle Application Server Wireless 中間層をインストールするときは、最初の中間層インストール時に作成されたアプリケーション・エンティティが使用されます。

メタデータ・リポジトリに対する後続の Oracle Application Server Wireless 中間層のインストールは、最初の Oracle Application Server Wireless 中間層をインストールした OID ユーザーが実行する必要があります。

別の OID ユーザーを使用して後続の Oracle Application Server Wireless 中間層をインストールする場合は、後続の Oracle Application Server Wireless 中間層のインストールを開始する前に、アプリケーション・エンティティの共有所有者として OID ユーザーを追加する必要があります。

Oracle Application Server Wireless アプリケーション・エンティティの共有所有者を追加する手順は、次のとおりです。

1. 次のスクリプトを実行して、最初の中間層から Oracle Application Server Wireless アプリケーション・エンティティの名前を検索します。

```
$ORACLE_HOME/wireless/bin/getAppEntityName.sh [bat]
```

このスクリプトは、Oracle Application Server Wireless アプリケーション・エンティティの名前を出力します。

2. 前のステップで戻された Oracle Application Server Wireless アプリケーション・エンティティの名前に対して、OID Deployment Delegation Console または Oracle ディレクトリ・マネージャを使用して、新しい OID ユーザーをコンポーネント所有者として追加します。

参照： 詳細は、『Oracle Application Server 10g インストレーション・ガイド』の「Deployment Delegation Console を使用したグループへのユーザーの追加」を参照してください。

OC4J_Wireless

OC4J_Wireless サーバーで多数の同時ユーザーをサポートする必要がある場合は、次の JVM オプションを使用して最大メモリー・サイズを 1GB (以上) に増やしてください。

```
-Xms512m -Xmx1024m
```

さらに高いヒット率をサポートするには、httpd.conf で MaxClients パラメータの値を増やすことができます。たとえば、httpd.conf で MaxClients を 1024 に設定すると、最大 1024 の同時 HTTP リクエストを許容できます。この結果、OC4J_Wireless インスタンス内のアプリケーション・サーバー・スレッド数の増加が見込めます。OC4J_Wireless で多数のアプリケーション・サーバー・スレッドをサポートするためには、スレッド・スタック・サイズを 256KB に縮小してください。Solaris 環境では、デフォルトのスタック・サイズは 512KB です。スタック・サイズは、次の JVM オプションで設定します。

```
-Xss256k
```

複数の CPU を持つマシン上で OC4J_Wireless インスタンスを実行している場合は、JVM オプションを設定し、JDK 1.4 で Parallel GC アルゴリズムを使用可能にできます。ParallelGCThreads パラメータには、ホスト内の CPU の数を設定できます。たとえば、4 つの CPU を持つ Solaris マシンの場合は、次のように JDK 1.4 JVM オプションを設定すると、OC4J_Wireless インスタンスのパフォーマンスが向上します。

```
-XX:+UseParallelGC -XX:ParallelGCThreads=4
```

GC チューニング・パラメータを次のように設定すると、OC4J_Wireless のパフォーマンスが向上します。

```
-XX:NewRatio=2 -XX:SurvivorRatio=16
```

Oracle Application Server Wireless ホスト名の更新

Oracle Application Server Wireless のポートとホスト名の両方を更新する手順は、『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』に記載されています。ホスト名のみを更新してポートを更新しない場合は、次の手順に従ってください。

中間層ホストで次のコマンドを実行して、Wireless を SSO に再登録します。

```
ORACLE_HOME/wireless/bin/reRegisterSSO.sh new_wireless_url oracle_home administrator_dn
```

ここで、

new_wireless_url は、新しい Web Cache リスナー・ポートを含む Wireless HTTP URL です。

oracle_home は、Web Cache ポートを変更する中間層 Oracle ホームです。

administrator_dn は、OID 管理者です。

たとえば、ホスト myhost の /home/oracle の中間層インストールで Web Cache リスナー・ポートを 7779 に変更すると、次のようにになります。

```
ORACLE_HOME/wireless/bin/reRegisterSSO.sh http://myhost:7779/ptg/rm
/home/oracle cn=orcladmin
```

Oracle Application Server Workflow の統合

ユーザーが Workflow 通知を適切に受信できるように、Customization Portal で次の設定が適切に行われていることを確認してください。

- デバイスは作成および検証されている必要があります。
- 「ユーザー・プロファイル」セクションの「他のアプリケーションからのマイ・ユーザー・プロファイルへのアクセスを許可」オプションがチェックされている必要があります。
- 「連絡ルール」セクションで、正しく連絡先が指定されている必要があります。

また、Workflow ホームページでも正しく設定されている必要があります。

設定する手順は、次のとおりです。

1. Workflow ホームページにログインします。
2. 「ユーザー設定」をクリックします。「電子メール通知を送信してください」の値に「メールを送信しないでください」は指定できません。この値が指定されている場合、ユーザーは「更新」をクリックして値を変更する必要があります。「メールを送信しないでください」または「プレーン・テキスト要約メール」以外のオプションを選択します。
3. 変更内容を確認して「OK」をクリックします。

Workflow のワークリスト・アプリケーションを使用可能にするには、「ワークフロー」フォルダを参照可能にする必要があります。参照可能にする手順は、次のとおりです。

1. Oracle Application Server Wireless Tool にログインします。
2. 右上部にある「コンテンツ」タブをクリックして、「コンテンツの公開」ページに移動します。
3. 「ワークフロー」フォルダを選択して「編集」をクリックします。
4. 「参照可能」ボックスをチェックして、「適用」をクリックします。

OracleAS Wireless の不正なサイト URL

9.0.4 の中間層のインストール時に、WebCache では HTTPS ポート番号を構成する必要があります。WebCache で HTTPS ポート番号が構成されていない場合、Oracle Application Server Wireless はデフォルトで HTTPS ポートを 0 (ゼロ) に設定します。

WebCache で正しい HTTPS ポートを構成した後は、Oracle Enterprise Manager を使用して HTTPS 関連の URL パラメータをすべて再構成する必要があります。

Openwave プラグインを使用した新規デバイスまたはシミュレータの検出

Openwave で提供されるプラグイン・インターフェースを使用する場合は、HDML_EZweb 論理デバイスのユーザー・エージェントを次のように変更してください。

```
UP.Browser/3.0*UP.Link/3*, UP.Browser/3.2.9.1-*UP.Link/3*"
```

Oracle Application Server Wireless と Oracle Internet Directory の統合

Oracle Application Server Wireless と OID の間でデータを同期化する場合は、Oracle Directory Integration Server (odisrv) を実行します。

Studio ツールおよび Customization ツールにログインできない

Customization ツールおよび Studio ツールへのログインに関する問題が報告されています。この問題は、Wireless を構成する前に JServ を構成したときに発生しています。したがって、JServ を構成する前に Wireless を構成してください。JServ と OC4J を同時に実行した場合の問題については、『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』の「JServ および OC4J の同時使用」を参照してください。

ドキュメントの誤り

この項では、OracleAS Wireless のドキュメントの誤りについて説明します。この項の内容は次のとおりです。

- ユーザーのロケールの決定
- UNIX ポートの記述
- Oracle Application Server Wireless Tool でのアカウント番号
- MXML タグの用語集
- 音声アプリケーション用の Oracle Application Server Wireless の構成
- オーディオ・パラメータの場所
- Grammar.jsp
- ドライバ属性
- Jabber の例
- チューニングに関する追加情報
- 更新された URL
- Web サービスの使用
- CMG MMS ドライバ
- カスタマイズにおいてユーザー・パスワードを変更できない
- 既存のユーザーを追加してもエラーが発生しない
- ユーザー・グループ更新時のエラー・メッセージ
- デバイスの検索結果が更新されない
- ロケーション検索でロケーション名が返されない

ユーザーのロケールの決定

『Oracle Application Server Wireless 管理者ガイド』の「ログイン後」の項の正しい記述は次のとおりです。

Oracle Application Server Wireless Web サーバー (ptg/rm) では、次の順序でユーザーのロケールを決定します。

1. `PAlocale` (ある場合) を使用します。
2. `Accept_Language` HTTP ヘッダー (ある場合) を使用します。
3. サイトのデフォルトのロケールを使用します。

UNIX ポートの記述

ドキュメント全体を通して、すべてのインスタンスで UNIX は Solaris に置換できます。ただし、『Oracle Application Server Wireless 管理者ガイド』の第 13 章「Oracle Application Server Wireless の最適化」で説明されている Oracle Application Server Wireless のチューニングは除きます。この章で説明されているチューニングは Solaris 固有です。

Oracle Application Server Wireless Tool でのアカウント番号

Oracle Application Server Wireless Tool を使用してデバイスを作成または変更するときは、デバイスに対して電話番号を入力します。この番号がデバイスのアカウント番号になります。オンライン・ヘルプでは、ユーザー・インターフェースに「アカウント番号」というラベルが表示される場所で電話番号を参照する場合があります。これは、正しくはアカウント番号です。

MXML タグの用語集

MXML タグのオンライン用語集で、`dtmf` 属性の `<SimpleMenu>` が欠落しています。

この属性は、DTMF キーが最初の 9 つの `<SimpleMenuItem>` に自動的に割り当てられるかどうかを制御します。

`dtmf` 属性の値は `true` または `false` で、デフォルトは `false` です。

音声アプリケーション用の Oracle Application Server Wireless の構成

『Oracle Application Server Wireless 管理者ガイド』では、マニュアルのリリース以後に次の箇所が変更されました。

- 9.2.2 項の「音声対応アプリケーションの構成とテスト」の情報は不要になったため、削除してください。
- 9.2.3.1 項の「ボイス・アクセス用 Mobile Studio の提供」では、記述してある手順以外に、`PAlogin` パラメータを `PAlogin=true` に設定する必要があります。

オーディオ・パラメータの場所

『Oracle Application Server Wireless 管理者ガイド』の「電子メール・アプリケーションをプリフェッチするためのボイス・メイン・メニューの構成」にある記述で、`ORACLE_SERVICES_PIM_MAIL_AUDIO_TMP_DIR` パラメータと `ORACLE_SERVICES_PIM_MAIL_AUDIO_TMP_URL` は、Voice Main Menu アプリケーションではなくメール・アプリケーションにあります。

Grammar.jsp

次の記述は、『Oracle Application Server Wireless 管理者ガイド』の「一般コマンドのテスト」に適用されます。

- `grammer.jsp` へのパスが正しくありません。統合されたインスタンスの `globalGrammar.jsp` へのパスは、`<IAS-HOME>/j2ee/OC4J_Wireless/applications/modules/modules-web/common/jsp/globalGrammar.jsp` です。
- 次の記述は無効になりました。
「「My Oracle」メイン・メニューの次のファイル、またはパーソナライズしたメニューの他の .JSP を変更します。」
`<iasw-root>/iaswv20/wireless/j2ee/applications/voice/voice-web/mainmenu/MO CGrammar.jsp`

ドライバ属性

『Oracle Application Server Wireless 開発者ガイド』の「ビルトイン・ドライバ」にあるドライバ属性に関する記述が次のように変更されました。

- UCP ドライバ用の `sms.server.default.encoding` 属性：

テキスト・メッセージのデフォルト・エンコード。デフォルト値は IA5 です。マルチバイト言語（中国語など）の場合は、この属性を UCS-2 に設定する必要があります。属性 `sms.message.chunksize` はこれに応じて設定する必要があります（つまり、エンコードが IA5 の場合はチャunk・サイズを 160 未満に設定し、エンコードが UCS-2 の場合は 70 未満に設定します）。

- SMPP ドライバ用の `sms.server.default.encoding` 属性:

テキスト・メッセージのデフォルト・エンコード。デフォルト値は IA5 です。マルチバイト言語（中国語など）の場合は、この属性を UCS-2 に設定する必要があります。属性 `sms.message.chunksizes` はこれに応じて設定する必要があります（つまり、エンコードが IA5 の場合はチャンク・サイズを 160 未満に設定し、エンコードが UCS-2 の場合は 70 未満に設定します）。

Jabber の例

『Oracle Application Server Wireless 開発者ガイド』の「Jabber の概要」で、参照する図が誤っています。この段落の正しい記述は次のとおりです。

Oracle Application Server Wireless インスタンスが、ID の `oracleagent@msn` を使用し、Jabber の MSN トランスポート・ゲートウェイを介して MSN に接続する場合を考えてみます。この場合、MSN のエンド・ユーザーは、クライアントからこの ID (`oracleagent@msn.com`) にメッセージを送信して、Oracle Application Server Wireless インスタンスのアプリケーションにアクセスできます。

チューニングに関する追加情報

チューニング情報は、Oracle Application Server Wireless のマニュアルの発行以降に変更および追加されています。OTN-J で Oracle Application Server Wireless のチューニングに関する最新情報を入手してください。

更新された URL

OracleAS Wireless のマニュアルの発行以後、いくつかの URL が変更されました。表 16-1 にその詳細を示します。

表 16-1 OracleAS Wireless で変更された URL

既存の URL	変更後の URL
http://software.palm.com/download.jsp	http://software.palm.com
http://java.sun.com/products/Javacomm/	http://java.sun.com/products/javacomm/
http://messenger.us.oracle.com/push/webservices	http://messenger.oracle.com/push/webservices
http://mobile.us.oracle.com/ompm/site/product/devices/certified/certified_gateways_wap.jsp	http://otn.oracle.co.jp モバイル・テクニカル・センターに進みます。
http://mservice.oracle.com/	http://otn.oracle.co.jp モバイル・テクニカル・センターに進みます。
http://software.palm.com/download.jsp	http://software.palm.com/
http://vvsp.local.hostname:vvsp.local.port/	リンクではなく、例として使用されています。
http://www.otn.oracle.com/docs/products/oracle9i/doc_library/901_%20doc/nav/docindex.htm	この参照は無視してください。
http://www.otn.oracle.com/wireless	http://otn.oracle.co.jp
http://xmlns.oracle.com/2002/MobileXML	http://xmlns.oracle.com

Web サービスの使用

「Web サービスの使用」の項に、モバイル・ポジショニングのサポートに関する記述がありません。この段落は次のように置換してください。

Oracle Application Server のロケーション・サービスでは、Geocoder、Mapper、Router または YPFinder インタフェースの機能を使用する Wireless アプリケーションでの Web サービスの使用をサポートします。アプリケーション開発者は、アプリケーションを OracleAS Wireless 内で実行する場合、特別なコードを追加する必要はありません。Web サービスは、ジオコーディング、マッピング、ルーティング、ビジネス・ディレクトリ (YP) およびモバイル・ポジショニングのサポートのために、サービス・プロキシとして統合されています。

CMG MMS ドライバ

『Oracle Application Server Wireless 開発者ガイド』の CMG MMS ドライバに関する情報を、この項の内容に置き換えてください。

このドライバは、CMG MMSC (Multimedia Messaging Service Center) との間で MMS メッセージを送受信する機能を提供します。このドライバは、CMG MMSC API for VAS v1.1.1 ライブラリとともに動作するように更新されています。旧バージョンはすでに CMG から入手できず、また v1.1.1 は旧バージョンとの下位互換性がないため、v1.1.1 にアップグレードする必要があります。

必要なカード・パーティ製ソフトウェア

このドライバには、CMG (<http://www.cmrgwds.com>) から提供されている CMG MMSC API for VAS v1.1.1 (`mmscapi.jar` および `mmscapi.war`) が必要です。`mmscapi.jar` ライブラリを `$ORACLE_HOME/opmn/conf/opmn.xml` (UNIX の場合) または `$ORACLE_HOME\opmn\conf\opmn.xml` (Windows の場合) 内の CLASSPATH に追加する必要があります。

クラス名

`oracle.panama.messaging.transport.driver.mms.CMGMMSDriver`

構成

- `mms.cmg.account.id` – VAS アプリケーションの MSISDN、または CMG MMSC に登録されている短縮形の識別番号。これは必須です。
- `mms.cmg.account.alias` – CMG U パワー Web インタフェース内に構成されているアプリケーション別名。これは必須です。
- `mms.cmg.account.password` – CMG MMSC に登録されている、VAS アプリケーションを認証するためのパスワード。これは必須です。
- `mms.cmg.config.file` – CMG MMSC API 用のコア構成ファイルへのパス。これは必須です。このファイルの内容の詳細は、CMG MMSC API 配布パッケージに含まれているユーザー・マニュアルを参照してください。このドライバには、構成ファイルのサンプル (`$ORACLE_HOME\wireless\messaging\drivers\cmg\CMGMMSDriver.cfg`) が含まれています。
- `mms.cmg.debug` – 追加デバッグ情報のファイルへのロギングを有効にします。オプションは、`true` (デバッグ有効)、`false` または空白 (デバッグ無効) です。
- `mms.cmg.billing.category` – MMSC 請求カテゴリ (オプション)。この値は、MMSC に対してカスタムの請求カテゴリ情報を送信するために使用されます。請求カテゴリの詳細と例は、CMG MMSC API 配布パッケージに含まれているユーザー・マニュアルを参照してください。
- `mms.cmg.billing.price` – MMSC 請求価格の値 (オプション)。この値は、MMSC に対してカスタムの請求価格情報を送信するために使用されます。請求価格の詳細と例は、CMG MMSC API 配布パッケージに含まれているユーザー・マニュアルを参照してください。

追加構成

MMS メッセージを受信するようにドライバを構成するには、次の手順を実行する必要があります。

1. 次の手順で、`mmscapi.war` ファイルを `cmgmmse.ear` ファイルにパッケージ化します。
 - a. `$ORACLE_HOME\wireless\messaging\drivers\cmg\cmgmmse.ear.zip` を空のディレクトリに解凍します。これにより、ディレクトリ構造 (`\META-INF\application.xml` および `\META-INF\MANIFEST.MF`) が作成されます。
 - b. このディレクトリに `mmscapi.war` ファイルをコピーし、ファイルの名前を `cmgmmse.war` に変更します。これにより、最終的なディレクトリ構造 (`\META-INF\application.xml`、`\META-INF\MANIFEST.MF`、`\cmgmmse.war`) が作成されます。
 - c. このディレクトリ構造を圧縮し、`zip` ファイルの名前を `cmgmmse.ear` に変更します。
 - d. `cmgmmse.ear` を `$ORACLE_HOME\wireless\j2ee\applications\` にコピーします。
2. `$ORACLE_HOME\wireless\j2ee\config\wireless-web-site.xml` に、`<web-app application="cmgmmse" name="cmgmmse" root="/cmgmmse" load-on-startup="true"/>` を追加します。

3. \$ORACLE_HOME/wireless/j2ee/config/wireless-server.xml に、<application name="cmgmmsc" path="../applications/cmgmmsc.ear" auto-start="true" /> を追加します。
4. OracleAS Wireless インスタンスを起動します。これにより、cmgmmsc.ear ファイルが自動的にデプロイされます。
5. 自動デプロイが完了した後、\$ORACLE_HOME/wireless/j2ee/applications/cmgmmsc/cmgmmscWEB-INF/web.xml で次の作業を行います。
 - トレース用ディレクトリとファイル名を編集します。
 - 次のセクションを追加します。


```
<servlet-mapping>
  <servlet-name>
    HttpReceive
  </servlet-name>
  <url-pattern>
    /HR
  </url-pattern>
</servlet-mapping>
```
6. \$ORACLE_HOME/wireless/lib/log4j-core.jar および \$ORACLE_HOME/wireless/lib/log4j.jar をバックアップします (ファイルの拡張子は .jar 以外に変更します)。\$ORACLE_HOME/wireless/j2ee/applications/cmgmmsc/cmgmmscWEB-INF/lib/log4j-1.2.5.jar を \$ORACLE_HOME/wireless/lib/log4j-core.jar にコピーします。
7. OracleAS Wireless インスタンスを再起動します。

サーブレット HttpReceive は OracleAS Wireless インスタンス内で実行され、RMI と CMGMMSDriver との通信を必要とします。詳細は、CMG MMSC API 配布パッケージに含まれているユーザー・マニュアルに説明されています。

カスタマイズにおいてユーザー・パスワードを変更できない

エンド・ユーザーは、管理者によって権限が与えられている場合のみパスワードを変更することができます。権限が与えられていないと、「パスワードの変更」フィールドはグレー表示 (使用不可) になります。

パスワードのリセットに関する詳細は『Oracle Application Server Wireless 管理者ガイド』を参照してください。

既存のユーザーを追加してもエラーが発生しない

ユーザーまたはグループを、既存の名前で追加しようとすると、既存のユーザー・データまたはグループ・データが更新されます。この場合、エラーが生成されるのではなく、既存情報の更新が行なわれます。

ユーザー・グループ更新時のエラー・メッセージ

ユーザー・グループ・データを不正な情報 (たとえば既存の名前) で編集すると、エラーが表示されます。詳細を変更し、「終了」をクリックすると、新しいエンティティが作成されます。

デバイスの検索結果が更新されない

Webtool 上のあるタブ (たとえば「基本管理」) で、デバイスの検索を実行すると、次に Webtool の別のタブ (たとえば「サービス」) で検索を実行しても、前の検索結果がそのまま残ります。

ロケーション検索でロケーション名が返されない

アドレスからロケーションを作成し、その新しいロケーション名で検索を行なうと、ロケーション情報は返されますが、ロケーション名は表示されません。

第 VI 部

キャッシュに関する問題

第 VI 部では、キャッシュ・コンポーネントに関する問題について説明します。内容は次のとおりです。

- 第 17 章 「Oracle Application Server Web Cache」

Oracle Application Server Web Cache

この章では、Oracle Application Server Web Cache（OracleAS Web Cache）に関する問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 一般的な問題と回避策
- 構成に関する問題と回避策
- Windows に固有の問題
- ドキュメントの誤り

一般的な問題と回避策

この項では、OracleAS Web Cache に関する一般的な問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- セキュリティ
- 圧縮されたコンテンツが現在はブラウザに表示されない
- エンド・ユーザーのパフォーマンス監視によって監視されるページの Cookie および JavaScript
- パフォーマンスの低下とメモリー
- ディスク領域とサービスの中断
- HTTP 通信の変更の影響
- 範囲リクエストに対するレスポンス動作の変更

セキュリティ

Web ページをキャッシュするように OracleAS Web Cache を設定すると、URL を認識している他のユーザーがこれらのページにアクセスする可能性があります。このため、キャッシング保護コンテンツは作成しないでください。

圧縮されたコンテンツが現在はブラウザに表示されない

圧縮を使用可能にすると、一部のブラウザの不具合によって圧縮と出力 HTML が影響を受けます。あるブラウザ・タイプでは、圧縮を使用するために追加設定を実行する必要があります。または不具合のある特定のブラウザでは、圧縮を使用禁止にする必要がある場合があります。

関連項目 :

- ブラウザによる制限の簡単なリストは、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』を参照してください。
- 該当するブラウザに関するベンダーのドキュメントを参照してください。

エンド・ユーザーのパフォーマンス監視によって監視されるページの Cookie および JavaScript

エンド・ユーザーのパフォーマンス監視では、追加の Cookie が作成され、JavaScript がページに挿入されます。エンド・ユーザーのパフォーマンス監視によって作成される追加の Cookie および JavaScript と競合する Cookie および JavaScript が、アプリケーションで生成される場合があります。この動作によってアプリケーションに問題が発生する場合は、OracleAS Web Cache Manager の「End-User Performance Monitoring」ページ（[Logging and Diagnostics] → [End-User Performance Monitoring]）でこの機能を使用禁止にしてください。

パフォーマンスの低下とメモリー

OracleAS Web Cache はメモリー内キャッシングであるため、ページングを最小化するには OracleAS Web Cache を専用コンピュータに配置するのが最適な方法です。コンピュータが OracleAS Web Cache の実行専用でない場合は、キャッシングの最大サイズが合計メモリーの 20 パーセントを超えないようにしてください。

オブジェクトのキャッシングまたは失効に費やす時間が長くなる場合は、コンピュータでページングが発生していないかどうかを確認してください。ページングが発生すると、パフォーマンスが大幅に低下する可能性があります。ページングが発生するコンピュータで OracleAS Web Cache が効率的に動作するように設定するには、OracleAS Web Cache を専用コンピュータに配置するか、またはキャッシングの最大サイズとキャッシング・オブジェクトの最大サイズを小さくします。

OracleAS Web Cache でキャッシュの最大サイズを超えるメモリーが使用される場合は、増加の原因が、キャッシュ・オブジェクトの最大サイズを超えるドキュメントに対する大量の同時リクエストである可能性があります。この場合、ドキュメントはキャッシュされないため、OracleAS Web Cache では、リクエストの処理およびオリジナル・サーバーへの転送に、ドキュメントをキャッシュした場合より多くのメモリーが使用されます。アクセス・ログを確認して、大容量のドキュメントに対して多数の同時リクエストが行われているかどうかを判別し、これらのドキュメントがキャッシュされるように、キャッシュ・オブジェクトの最大サイズの値を調整してください。さらに、キャッシュ・ルールまたはレスポンス・ヘッダーでドキュメントのキャッシュが指定されていることを確認してください。

キャッシュの最大サイズまたはキャッシュ・オブジェクトの最大サイズを変更するには、OracleAS Web Cache Manager の「Resource Limits」ページ（「Properties」→「Resource Limits」）で、「Maximum Cache Size」および「Maximum Cached Object Size」に新しい制限を設定します。

関連項目： 推奨トポロジの詳細は、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』を参照してください。

ディスク領域とサービスの中止

十分なディスク領域のないシステムでは、OracleAS Web Cache が失敗する場合があります。ログ・ファイルが含まれるパーティションに十分な領域があることを確認してください。

HTTP 通信の変更の影響

OracleAS Web Cache が既存の Web アプリケーション・サーバー環境に追加されると、HTTP 通信の変更がアプリケーションの次の側面に影響を与えます。

- プロトコル / ホスト名 / ポートのマッピング

通信を OracleAS Web Cache 経由で確実にダイレクトするには、すべての絶対 URL を、OracleAS Web Cache のプロトコル、ホスト名およびポート番号を使用するように設定します。また、Oracle HTTP Server の `httpd.conf` ファイル内の `Port` ディレクティブで、必ず OracleAS Web Cache のリスニング・ポートを指定してください。

- SSL 处理

クライアントと OracleAS Web Cache の間の接続が HTTPS であるが、OracleAS Web Cache とオリジナル・サーバーの間の接続が HTTP の場合は、証明書管理を OracleAS Web Cache に追加します。

- ページ配信のタイミング

圧縮されたページまたは処理が必要なページの場合、OracleAS Web Cache は、オリジナル・サーバーからページ全体を取得してから、ページをブラウザに送信します。

- HTTP プロトコル

OracleAS Web Cache では、次のことが透過的に実行されます。

- OracleAS Web Cache は、オリジナル・サーバーとブラウザ間のプロトコル・バージョンのアップグレードおよびダウングレードを行います。
- キャッシュ可能オブジェクトの場合、OracleAS Web Cache は、コンテンツをブラウザに送信するときに、最初のリクエストに対するチャunk・エンコードではなく `Content-Length` レスポンス・ヘッダーを付加します。
- キャッシュ・ヒットの場合、OracleAS Web Cache は `Content-Length` レスポンス・ヘッダー・フィールドを、その内容がオリジナル・サーバーから送信された内容と異なるときは必ず上書きします。この機能によって、ブラウザが完全なページ・コンテンツを受信することが保証されます。

範囲リクエストに対するレスポンス動作の変更

以前のリリースでは、OracleAS Web Cache で `Range` という HTTP リクエスト・ヘッダー・フィールドの付いたマルチパート・ドキュメントのリクエストを受信したとき、そのドキュメントがすでにキャッシュされていなかった場合、OracleAS Web Cache は、オリジナル・サーバーにドキュメント全体をリクエストし、ドキュメント全体をクライアントに送信していました。ドキュメントがすでにキャッシュされていた場合、OracleAS Web Cache は、クライアントがリクエストした部分のみを送信していました。

このリリースでは、OracleAS Web Cache で `Range` という HTTP リクエスト・ヘッダー・フィールドの付いたマルチパート・ドキュメントのリクエストを受信し、そのドキュメントがすでにキャッシュされていないと、OracleAS Web Cache は、オリジナル・サーバーにドキュメントの一部をリクエストします。OracleAS Web Cache は、(オリジナル・サーバーから受信した内容によって、ドキュメント全体またはドキュメントの一部の場合がある) レスポンスをクライアントに正確に戻します。

ただし、OracleAS Web Cache がキャッシュするのはドキュメント全体であるレスポンスのみで、範囲のレスポンスであるレスポンスはキャッシュしません。このキャッシュ動作は、将来のリリースで修正されます。

構成に関する問題と回避策

この項では、OracleAS Web Cache の構成に関する問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- 設定の開始方法
- 構成に関する一般的な誤り
- ポートの競合
- ラージ・オブジェクトのキャッシュ
- `chgiphost.sh` 実行前にキャッシュをクラスタから削除する
- アップグレード時におけるキャッシュ・クラスタ・メンバー間での失効リクエストの送信
- セッションと複数の Cookie のバインド
- Internet Explorer ブラウザにおけるキャッシュ操作の成功メッセージに関する再ロードの問題

設定の開始方法

OracleAS Web Cache を設定するには、OracleAS Web Cache Manager を使用します。設定を完了した後は、Application Server Control を使用して、キャッシュの起動、停止または再起動の他に、キャッシュおよびオリジナル・サーバーのステータスを監視できます。

OracleAS Web Cache Manager を使用する手順は、次のとおりです。

1. OracleAS Web Cache のコンピュータにログインしていない場合は、インストールを実行したユーザーの ID でログインします。
2. OracleAS Web Cache を Oracle Process Manager and Notification (OPMN) Server とともに起動します。コマンドラインで、次のように入力します。
`opmnctl startproc ias-component=WebCache`
3. ブラウザに、OracleAS Web Cache の Welcome ページの URL を入力します。
`http://web_cache_hostname:4000/webcacheadmin`
4. 管理者ユーザー ID とパスワードの入力を求められた場合は、ユーザー名に、ユーザー名 `ias_admin`、または OracleAS Web Cache の管理者ユーザー名 `administrator` のいずれかを入力します。インストール時にパスワードを指定した場合は、そのパスワードを入力します

OracleAS Web Cache では、`webcache.xml` と `internal.xml` という 2 つの設定ファイルを使用します。OracleAS Web Cache Manager は、設定情報を `webcache.xml` ファイルに書き込みます。OracleAS Web Cache は、`internal.xml` ファイルを使用します。これらのファイルは、UNIX 上では `$ORACLE_HOME/webcache` ディレクトリ、Windows 上では `ORACLE_HOME\webcache` ディレクトリにあります。このリリース・ノートに説明されている場合、またはオラクル社カスタマ・サポート・センターから指示された場合を除き、これらの設定ファイルを手動で編集しないでください。これらの設定ファイルを不適切に編集すると、OracleAS Web Cache で問題が発生することがあります。

関連項目： 設定に関する詳細な説明は、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』を参照してください。

構成に関する一般的な誤り

構成に関してよくある誤りを次に示します。

- 「Site-to-Server Mapping」ページ（「Origin Servers, Sites, and Load Balancing」→「Site-to-Server Mapping」）でサイトをオリジナル・サーバーに適切にマップしていない場合。サイトがマップされていない場合、OracleAS Web Cache は、リクエストをデフォルトの Oracle HTTP Server に転送します。サイトの設定に関するその他のエラーは、次のとおりです。
 - サイトのすべての別名が指定されていない
 - ワイルド・カード文字 * の使用の誤り
 - 複数のオリジナル・サーバーがあるサイトに、サイトからサーバーへの複数のマッピングを作成する
- ポートの競合

関連項目： 詳細は、「ポートの競合」を参照してください。

- URL の ping

「Origin Server」ページ（「Origin Servers, Sites, and Load Balancing」→「Origin Servers」）で「Ping URL」フィールドを設定するとき、URL の入力方法はオリジナル・サーバーによって異なります。Web アプリケーション・サーバーの場合は、Web アプリケーション・サーバーの仮想ホストを表すサイト名またはドメイン名を含む相対 URL か完全修飾 URL のいずれかを入力します。プロキシ・サーバーの場合は、プロキシ・サーバーの背後にあるオリジナル・サーバーの仮想ホストを表すサイト名またはドメイン名を含む完全修飾 URL を入力します。URL がキャッシュされるようにしてください。

関連項目： 設定の詳細は、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』を参照してください。

ポートの競合

デフォルトでは、OracleAS Web Cache は、次に示すデフォルトの HTTP ポートを使用するように設定されています。

- リスニング・リクエスト : 7777
- 管理用リクエスト : 4000
- 失効用リクエスト : 4001
- 統計用リクエスト : 4002

これらのポートが使用中の場合には、インストール・プロシージャによって、使用可能なポート番号の範囲の中から別のポート番号が割り当てられます。

インストールが終了すると、OracleAS Web Cache が起動します。ポートの競合がある場合は、OracleAS Web Cache の起動に失敗することがあります。

関連項目： ポートの設定方法、ポートの競合の解決方法、およびポートの競合に関するイベント・ログのメッセージの詳細は、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』を参照してください。

ラージ・オブジェクトのキャッシュ

キャッシュ・オブジェクトの最大サイズを設定するには、OracleAS Web Cache Manager の「Resource Limits」ページ（「Properties」→「Resource Limits」）に移動します。

キャッシュ・オブジェクトの最大サイズを指定した場合は、指定のサイズ以下で、キャッシュ・ルールに一致するドキュメントのみがキャッシュに保存されます。指定のサイズを超えるオブジェクトは、他のキャッシュ・ルールを満たしている場合でもキャッシュされません。9.0.4 インストールのデフォルトは 100KB です。アップグレードされたキャッシュの場合、デフォルトでは制限は指定されていません。アップグレードされたキャッシュにデフォルトを適用する場合は、「Resource Limits」ページで「Maximum Cached Object Size」の値を変更してください。

キャッシュ・オブジェクトの最大サイズを超えるドキュメントがあり、そのドキュメントが頻繁にリクエストされる場合は、キャッシュ・オブジェクトの最大サイズの制限値を大きくすることを考慮してください。

キャッシュ・オブジェクトの最大サイズの設定は、レスポンスに Content-Length ヘッダーが存在しない場合は無視されます。

関連項目： リソース制限の設定方法の詳細は、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』を参照してください。

chgiphost.sh 実行前にキャッシュをクラスタから削除する

スクリプト chgiphost.sh を使用すると、コンピュータのホスト名または IP アドレスを変更できます。コンピュータに、OracleAS Web Cache クラスタの一部である中間層インスタンスが含まれている場合は、このスクリプトを実行する前に、そのインスタンスをキャッシュから削除してください。

関連項目：

- キャッシュ・クラスタの削除方法の詳細は、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』を参照してください。
- chgiphost.sh スクリプトの使用方法の詳細は、『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』を参照してください。

アップグレード時におけるキャッシュ・クラスタ・メンバー間での失効リクエストの送信

OracleAS Web Cache クラスタがある場合は、キャッシュ・クラスタ・メンバーを 1 つずつアップグレードできます。キャッシュはリクエストに対する応答を継続します。ただし、他のクラスタ・メンバーは設定バージョンが異なるため、キャッシュは、異なるバージョンで動作しているキャッシュ・クラスタ・メンバーにはリクエストを転送しません。かわりに、リクエストされたドキュメントが、そのキャッシュまたは同じ設定バージョンのクラスタ・メンバーにキャッシュされていない場合、OracleAS Web Cache はリクエストをオリジナル・サーバーに転送します。この場合、OracleAS Web Cache Manager の「Operations」ページ（「Operations」→「Cache Operations」）で、「Operation Needed」が「Incompatible software version」であることを示します。

キャッシュ・クラスタ・メンバーが同じバージョンの OracleAS Web Cache を実行していない場合も、ドキュメントを失効し、その失効を他のクラスタ・メンバーに伝播できますが、失効リクエストは、9.0.2 または 9.0.3 など旧バージョンの OracleAS Web Cache で動作しているキャッシュから送信される必要があります。

関連項目： キャッシュ・クラスタ・メンバーのアップグレードの情報など、OracleAS Web Cache を 10g (9.0.4) にアップグレードする方法の詳細は、『Oracle Application Server 10g アップグレード』を参照してください。

セッションと複数の Cookie のバインド

ユーザー・セッションをオリジナル・サーバーにバインドするように OracleAS Web Cache を設定するには、OracleAS Web Cache Manager の「Session Binding」ページ（「Origin Servers, Sites, and Load Balancing」→「Session Binding」）で、サイトをセッション定義名に関連付けます。Cookie の設定時に、OracleAS Web Cache でユーザー・セッションを複数の Cookie とバインドする場合は、Any Set Cookie のセッションを選択します。Any Set Cookie を選択するときは、「Session Binding Cookie」で「Enable」をクリックして、レスポンスに Set-Cookie レスポンス・ヘッダーを含めるように OracleAS Web Cache に指定してください。

関連項目： セッション・バインドの設定の詳細は、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』を参照してください。

Internet Explorer ブラウザにおけるキャッシュ操作の成功メッセージに関する再ロードの問題

OracleAS Web Cache Manager の「Cache Operations」ページ（「Operations」→「Cache Operations」）で正常な操作を送信すると、成功メッセージのダイアログ・ボックスが表示されます。このメッセージを確認して「OK」をクリックした場合、Internet Explorer の一部のバージョンでは、成功のダイアログ・ボックスによって OracleAS Web Cache Manager のインターフェースがメッセージ・ボックス自体に再ロードされます。

Windows に固有の問題

この項では、Windows に固有の問題について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [Windows NT ワークステーション上の同時ユーザー数](#)
- [webcache.xml の XML 解析エラーがイベント ビューアに表示される](#)

Windows NT ワークステーション上の同時ユーザー数

OracleAS Web Cache では、Windows NT のワークステーションで許可される同時ユーザー数は 5 ユーザーです。6 ユーザー以上の同時ユーザーが必要な場合は、Windows NT Server の使用を検討してください。

webcache.xml の XML 解析エラーがイベント ビューアに表示される

webcache.xml ファイルの読み取りができないことに関連する XML 解析エラーが、Windows NT の画面上ではなく、イベント ビューアに表示されます。

ドキュメントの誤り

この項では、ドキュメントの既知の誤りについて説明します。

- [root 権限による webcached の実行](#)
- [オリジナル・サーバーのダミー Wallet](#)

root 権限による webcached の実行

『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』の第 8 章「特別な設定」では、次のような場合に webcached を root 権限で実行する方法について、「root 権限による webcached の実行」の項で説明しています。

- 1024 より小さな特権ポート番号を OracleAS Web Cache のリスニング・ポートとして使用する場合
- OracleAS Web Cache への接続に使用されるファイル記述子が 1,024 よりも多い場合
- 現在の opmnctl または webcachectl のユーザーが OracleAS Web Cache Manager の「Process Identity」ページ（「Properties」→「Process Identity」）で設定されたユーザーと一致しない場合

この手順には、OracleAS Web Cache プロセスのプロセス ID の変更に関する情報が含まれていますが、最初の 2 つの箇条書きに誤りがあります。特権ポートの場合および OracleAS Web Cache のファイル記述子の制限を増やす場合は、`webcache_setuser.sh` の `setroot` コマンドを使用して、プロセス ID の設定を変更せずに OracleAS Web Cache に対して root 権限を指定できます。

OracleAS Web Cache に root 権限を指定するには、root ユーザーとして次の手順を実行します。

1. \$ORACLE_HOME/webcache/bin から、次のコマンドを実行します。

```
webcache_setuser.sh setroot <user_ID>
```

ここで `<user_ID>` はインストールを実行した OracleAS ユーザーです。

2. コンピュータをログオフし、OracleAS をインストールしたユーザーとして再びログインします。
3. OracleAS Web Cache を起動します。

オリジナル・サーバーのダミー Wallet

『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』および OracleAS Web Cache Manager のオンライン・ヘルプには、UNIX では `ORACLE_HOME/webcache/wallets/default` に、Windows では `ORACLE_HOME\webcache\wallets\default` にダミー Wallet があることが記載されていません。この Wallet は、オリジナル・サーバーへの OracleAS Web Cache HTTPS 通信をテストする目的で設けられています。本番環境では、ドキュメントに説明されている手順で、Oracle Wallet Manager を使用して新規の Wallet を作成してください。デフォルトでは、Oracle Wallet Manager は `/etc/ORACLE/WALLETS/user_name` ディレクトリ (UNIX の場合)、または `%USERPROFILE%\ORACLE\WALLETS` ディレクトリ (Windows の場合) に Wallet を格納しています。

第VII部

ビジネス・インテリジェンスに関する問題

第VII部では、ビジネス・インテリジェンス・コンポーネントに関する問題について説明します。内容は次のとおりです。

- 第18章「Oracle Application Server Discoverer」
- 第19章「Oracle Reports」
- 第20章「Oracle Application Server Personalization」

Oracle Application Server Discoverer

この章では、Oracle Application Server Discoverer（OracleAS Discoverer）に関する問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 一般的な問題と回避策
- 構成に関する問題と回避策
- 有用な情報
- ドキュメントの誤り

一般的な問題と回避策

この項では、OracleAS Discoverer に関する一般的な問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- 動作要件
- Discoverer Plus 終了時の内部エラー (Bug 3168973)
- OracleAS Discoverer Plus とインターネット・ブラウザの組合せによってポップアップを使用できない (Bug 2932434)
- Netscape v7.0 ブラウザでの OracleAS Discoverer Plus の起動 (Bug 2916131)
- Excel にエクスポートする際の Microsoft Internet Explorer v6.0 の起動エラー (Bug 3114083)
- NT での OracleAS Discoverer Plus と Sun Java Plug-In 1.4.1 の実行に関する障害 (Bug 2917867)
- Microsoft Internet Explorer での HTTP 1.1 プロトコルと圧縮データの問題 (Bug 3106890)
- Netscape 4.7 ブラウザを使用する OracleAS Discoverer Viewer に有効なフォント・サイズ (Bug 3113325)
- Netscape 4.x での OracleAS Discoverer の使用に関する制限事項 (Bug 3182331)
- Web キャッシュ接続をオープンできないエラー (WWC-40019) (Bug 2960099)
- Jinitiator 1.3 でトルコ語ロケールの OracleAS Discoverer Java Plus を起動できない (Bug 3231114)
- 英語以外の環境において、エクスポート後のセーブ・ファイルを再度開くと、Microsoft Excel がハングもしくはエラーが表示される (Bug 2878213)
- ボタンが表示されない、または英語のテキストで表示される (Bug 3083171)
- 英語以外の環境において英語テキストが表示される (Bug 3229690)
- 再実行できない一部の OracleAS Discoverer Configuration Assistant のコマンド (Bug 3491457)
- OracleAS Discoverer Java Plus および OracleAS Discoverer Viewer での CORBA プロトコル・エラー・メッセージ (Bug 3541028)
- OracleAS Discoverer のメモリ不足の場合に必要なレジストリ変更

動作要件

Oracle Application Server Discoverer の動作要件に関する最新の情報は、次の URL を参照してください。

<http://www.oracle.co.jp/products/system/index.html>

Discoverer Plus 終了時の内部エラー (Bug 3168973)

システムでワークブックのスケジューリングが使用禁止になっていると、Discoverer Plus の終了時に次のエラー・メッセージが表示されることがあります。

内部エラーが発生しました。エラーが継続する場合は、Discoverer 管理者に問い合わせてください。

このエラーは、Discoverer が V\$PARAMETER を問い合わせてスケジュールされたワークブックのステータスを取得しようとするために発生します。この問題を解決するには、次の回避策の 1 つを使用します。

- 『Oracle Discoverer Administrator 管理ガイド』および『Oracle Developer Suite リリース・ノート』に従って、ワークブックのスケジューリング機能を設定します。
- ShowExpiredRunsOnExit 作業環境のデフォルト値を 0 (ゼロ) に設定します。
- Discoverer Plus で「ツール」→「オプション」→「一般」を選択し、「終了する際に、期限切れの結果を表示せずに自動的に削除する」チェック・ボックスを選択します。

OracleAS Discoverer Plus とインターネット・ブラウザの組合せによってポップアップを使用できない (Bug 2932434)

OracleAS Discoverer Plus は、「接続先 Discoverer Plus」メイン・ページのポップアップ・ウィンドウとして表示されます。ただし、一部のインターネット・ブラウザにはポップアップ・ウィンドウを禁止するオプションがあります。接続を選択する際、ブラウザにそのようなオプションがあり Discoverer Plus が表示されない場合は、ポップアップ・ウィンドウを禁止するブラウザのオプションがオフになっているかどうかを確認してください。

Netscape v7.0 ブラウザでの OracleAS Discoverer Plus の起動 (Bug 2916131)

Netscape v7.0 ブラウザから Discoverer Plus を正常に起動するには、次の手順に従って Netscape の設定を変更します。

1. Netscape のメニュー・バーから「編集」→「設定」→「サポートアプリケーション」を選択します。
2. 「常に Netscape Plug-in Finder Service (PFS) を使用してプラグインを取得する」チェック・ボックスの選択を解除します。

Excel にエクスポートする際の Microsoft Internet Explorer v6.0 の起動エラー (Bug 3114083)

Microsoft Internet Explorer v6.0 を使用して Discoverer Plus から Microsoft Excel にエクスポートするときに、独立したブラウザ・ウィンドウが正常に起動しないことがあります。この問題は、Microsoft Internet Explorer v6.0 で動作設計が変更されたことに起因しています。

次の手順に従って、Discoverer 中間層を Microsoft Internet Explorer の信頼済サイトに指定することによって、問題を回避してください（次のメニュー・オプションは記載時点での正確な情報です）。

1. Microsoft Internet Explorer のメニュー・バーから「ツール」→「インターネットオプション」を選択し、「インターネットオプション」ダイアログを表示します。
2. 「セキュリティ」タブを表示します。
3. 「信頼済みサイト」アイコンを選択して「サイト」ボタンをクリックし、「信頼済みサイト」ダイアログを表示します。
4. Discoverer 中間層の URL を次の書式で入力します。

`http://<host.domain>:<port>`

ここで、

- `<host.domain>` には、Oracle HTTP Server がインストールされているサーバー名とドメインを指定します。
- `<port>` には、Discoverer がインストールされているポート番号（通常は 7777 または 7778）を指定します。

NT での OracleAS Discoverer Plus と Sun Java Plug-In 1.4.1 の実行に関する障害 (Bug 2917867)

NT クライアントで Discoverer Plus を使用する場合は、JInitiator 1.3.1.9 または Sun Java Plug-In 1.4.2 を使用してください。これは、Sun Java Plug-In 1.4.1 を使用したときの不具合によるものです。

Microsoft Internet Explorer での HTTP 1.1 プロトコルと圧縮データの問題 (Bug 3106890)

Microsoft Internet Explorer では、HTTP 圧縮を使用している Web サーバーから送信されたデータの最初の 2048 バイトが消失する問題（ページの表示に失敗する問題）が判明しています。この問題の詳細は、次のリンクにアクセスしてください。

<http://support.microsoft.com/default.aspx?scid=kb;en-us;Q313712>

次の手順に従ってクライアントの HTTP 1.0 で HTTP 圧縮を使用不可に指定することによって、問題を回避できます。

1. Microsoft Internet Explorer のメニュー・バーから「ツール」→「インターネット オプション」を選択し、「インターネット オプション」ダイアログを表示します。
2. 「詳細設定」タブを表示します。
3. 次の各チェック・ボックス（「HTTP 1.1 設定」カテゴリ）の選択を解除します。
 - 「HTTP 1.1 を使用する」チェック・ボックス
 - 「プロキシ接続で HTTP 1.1 を使用する」チェック・ボックス

Netscape 4.7 ブラウザを使用する OracleAS Discoverer Viewer に有効なフォント・サイズ (Bug 3113325)

Netscape 4.7 ブラウザを使用した Discoverer Viewer では、フォントのレンダリングに関する問題が判明しています。Netscape 4.7 では、カスケード・スタイル・シート (CSS) のサポートに制限があります。この問題は、CSS に指定されているフォント・サイズが無視されることに起因しています。

この問題を解決するには、新しいブラウザのバージョンにアップグレードしてください。

Netscape 4.x での OracleAS Discoverer の使用に関する制限事項 (Bug 3182331)

Netscape 4.x で Discoverer を使用すると、次の問題が発生することが判明しています。

- Netscape 4.x で Discoverer Viewer を使用している場合、ワークブック・リストのフィルタ処理には ASCII 文字のみを使用する必要があります。
- Netscape 4.x で Discoverer Viewer を使用している場合、パラメータには ASCII 文字のみを使用する必要があります。
- Netscape 4.x で Discoverer を使用している場合、プライベート接続の作成には ASCII 文字のみを使用する必要があります。
- Netscape 4.x で Discoverer Plus を使用している場合、ブラウザ・ウィンドウのサイズは変更できません。

問題を回避するには、Netscape の新しいバージョンを使用してください。

Web キャッシュ接続をオーブンできないエラー (WWC-40019) (Bug 2960099)

既存の OracleAS Infrastructure 10g を使用しながら、新規に Business Intelligence および Forms のインストールタイプを実行した後、Discoverer ポートレットを編集して発行しようとすると、エラー・メッセージが表示される可能性があります。

エラーを回避するには、OracleAS Portal のコンテンツに対して OracleAS Web Cache が使用不可になっていることを確認してください。

1. Portal 管理者（たとえば、ユーザー名 Portal を使用）で OracleAS Portal にログインします。
2. 「管理」タブを表示します。
3. 「Portal」サブタブを表示します。
4. 「サービス」領域で「グローバル設定」リンクを選択します。
5. 「キャッシュ」タブを表示します。
6. 「Web Cache を Portal コンテンツ・キャッシュに対応させる」チェック・ボックスの選択を解除します。
7. 「ホスト名」フィールドが正しく設定されていることを確認します。

注意: 複数の Oracle Application Server Middle-Tier がインストールされている場合、ホスト名は最新の Oracle Application Server インストールのホスト名に更新されます。場合によっては、以前の Oracle Application Server インストールのホスト名に変更する必要があります。

8. 「適用」または「OK」をクリックして変更内容を保存します。

JInitiator 1.3 でトルコ語ロケールの OracleAS Discoverer Java Plus を起動できない (Bug 3231114)

ロケールがトルコ語に設定されている場合、JInitiator 1.3.1.8 を使用して OracleAS Discoverer Plus を起動することはできません。

回避策は Sun Java Plug-In 1.4.1 を使用することです。この問題は最新バージョンの JInitiator (1.3.1.16) では解決済です。

英語以外の環境において、エクスポート後のセーブ・ファイルを再度開くと、Microsoft Excel がハングもしくはエラーが表示される (Bug 2878213)

英語以外の環境において、OracleAS Discoverer を使用し、Excel の Pivot 形式でエクスポートしたファイルを開く場合において、Excel がハングもしくはエラーを返すことがあります。この回避策として、ファイルを開く時に、マクロを無効にしてください。

ボタンが表示されない、または英語のテキストで表示される (Bug 3083171)

Oracle Application Server のインストール後、完全に翻訳された内容が「OracleAS Discoverer Viewer」および「OracleAS Discoverer 接続先」のページに表示されないことがあります。一部のボタン、テキストまたはリンクが英語で表示される場合もあります。

この問題を解決するには、Oracle Application Server のインストール完了後にすべての OPMN サービスを再起動してください。

英語以外の環境において英語テキストが表示される (Bug 3229690)

英語以外のロケール設定において、OracleAS Discoverer Viewer を使用している場合、設定した言語に関わらず、英語テキストが表示されることがあります。(例えば、ボタン名やリンク名など)

こうした場合は、Oracle Enterprise Manager から、OC4J_BL_Forms サービスを再起動してください。

再実行できない一部の OracleAS Discoverer Configuration Assistant のコマンド (Bug 3491457)

OracleAS Discoverer Configuration Assistant では、次のコマンドの再実行はできません。

- C:\\$OraHome1\\$opmn\\$bin\\$opmnctl start=
- C:\\$OraHome1\\$opmn\\$bin\\$opmnctl reload=
- C:\\$OraHome1\\$opmn\\$bin\\$opmnctl startproc ias-component=Discoverer=
- C:\\$OraHome1\\$discoverer\\$util\\$registerSession.bat=
- C:\\$OraHome1\\$opmn\\$bin\\$opmnctl stopproc ias-component=Discoverer=

OracleAS Discoverer Java Plus および OracleAS Discoverer Viewer での CORBA プロトコル・エラー・メッセージ (Bug 3541028)

次のインターネット・ブラウザ言語を選択している場合は、既存の接続をクリックするか、または新しい接続を作成しようとすると、OracleAS Discoverer Java Plus および OracleAS Discoverer Viewer を介して CORBA エラー・メッセージが生成されます。

- ar-ae (アラビア語 アラブ首長国連邦)

次の CORBA エラー・メッセージが表示されます。

"Corba protocol error...." message

このエラー・メッセージを回避するには、インターネット・ブラウザ言語を英語に設定し、接続の作成時に前述の言語を明示的に指定してください。

OracleAS Discoverer のメモリ不足の場合に必要なレジストリ変更

OracleAS Discoverer の実行中に特定数のユーザーが接続してそれ以上のユーザーが接続できなくなると、即座に「OSAgent を使用してセッションに接続できません」エラーの OracleAS Discoverer Viewer Plus ページが返されます。これは OracleAS Discoverer のメモリが不足し、新しいプロセスを生成できないために発生します。すべてのハンドルは、デスクトップ・ヒープと呼ばれるシステム全体のメモリに割り当てられます。このメモリのサイズは、次のレジストリ設定 (HKEY_LOCAL_MACHINE → SYSTEM → CurrentControlSet → Control → Session Manager → SubSystems) によって制御されます。

```
Windows=%SystemRoot%\system32\csrss.exe ObjectDirectory=Windows
SharedSection=1024,3072,512 Windows=On SubSystemType=Windows ServerDll=basesrv,1
ServerDll=winsrv:UserServerDllInitialization,3
ServerDll=winsrv:ConServerDllInitialization,2 ProfileControl=Off
MaxRequestThreads=16
```

このキーの SharedSection=1024,3072,512 の部分がデスクトップ・ヒープ・メモリを制御します。その 3 番目の値 (512) が、OracleAS Discoverer などの非対話型サービスのヒープ・メモリを制御します。メモリの単位はキロバイトです。

より多くのセッションを生成できるように、たとえば次のようにこの値を増やします。
SharedSection=1024,3072,1024

この値の設定が高すぎるとシステムの機能が停止するので注意してください。最大 3072 キロバイトまで値を増やすことができます。

構成に関する問題と回避策

この項では、OracleAS Discoverer の構成に関する問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- Plus のトランSPORTが HTTPS の場合は常に HTTPS URL の使用が必要 (Bug 3024208)
- インストール後の OracleAS Discoverer の構成でのエラー (Bug 3206792)

Plus のトランSPORTが HTTPS の場合は常に HTTPS URL の使用が必要 (Bug 3024208)

『Oracle Application Server Discoverer 構成ガイド』の第 12 章「OracleAS Discoverer のセキュリティ管理」には、Discoverer 中間層管理者が、HTTPS を Discoverer Plus のトランSPORT・プロトコル (アプレットと中間層との間の通信に使用) として指定する方法が記述されています。『Oracle Application Server Discoverer 構成ガイド』では、HTTPS プロトコルを指定した後、Discoverer Plus を起動するための HTTPS URL を管理者がエンド・ユーザーに示すように説明されています。エンド・ユーザーが、HTTPS URL ではなく、デフォルトの HTTP URL を使用して Discoverer Plus を起動しようとすると、次のエラー・メッセージが表示されます。

Oracle Discoverer Application Server に接続できません。: 試行 1 RMI プロトコル・オーバー HTTPS
トランSPORT : Web サーバー : <url> から応答がありません。

この問題を解決するには、エンド・ユーザーが HTTPS URL を使用して Discoverer Plus を起動する必要があります。

インストール後の OracleAS Discoverer の構成でのエラー (Bug 3206792)

Oracle Application Server をインストールする場合、インストールの過程で OracleAS Discoverer を構成するように指定できます。

Oracle Application Server Control を使用して、インストール終了後に OracleAS Discoverer を構成することもできます。インストール終了後に OracleAS Discoverer を構成する場合は、Discoverer の設定ページを表示するときに次のエラー・メッセージが表示されることがあります。

エラーが発生しました : oracle.disco.oem.configurationDiscoConfigurationException:

Cannot find element:configuration Entity Path [system/configuration] not valid.Check log to see if the
PlugIn was loaded

このエラー・メッセージが表示された場合は、次の手順でコマンドラインから Oracle Application Server Control を再起動します。

1. コマンド・プロンプトに次のコマンドを入力し、Oracle Application Server Control を停止します。

```
$ORACLE_HOME/bin/emctl stop iasconsole
```

2. コマンド・プロンプトに次のコマンドを入力し、Oracle Application Server Control を起動します。

```
$ORACLE_HOME/bin/emctl start iasconsole
```

有用な情報

この項では、OracleAS Discoverer に関する有用な情報について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Discoverer 3.1 からのアップグレード](#)
- [End User Layer 表の手動による編集](#)
- [スケジュールされたワークブックのみを実行できるエンド・ユーザーによる問合せのリフレッシュ](#)
- [HWOnline ファイルの利用](#)
- [書式設定：軸ラベルのフォント・サイズ](#)
- [スケジューリングと集計](#)
- [パフォーマンスを改善する OracleAS Discoverer Portlet Provider の追加構成パラメータ](#)
- [Oracle Discoverer EUL Command Line for Java のコマンドによる Oracle Discoverer レジストリ変数の設定](#)
- [Oracle Discoverer のその他のレジストリ変数](#)
- [OracleAS Discoverer Viewer のカスタマイズの移行](#)
- [Oracle Discoverer EUL Command Line for Java の実行 \(UNIX のみ\)](#)
- [OracleAS Discoverer と Real Application Clusters \(RAC\) / 透過的アプリケーション・フェイルオーバー \(TAF\)](#)
- [不要になった XWindow ディスプレイ](#)

Oracle Discoverer 3.1 からのアップグレード

Oracle Discoverer 3.1 からアップグレードする場合は、中間手順として EUL を Discoverer 4.1 にアップグレードするための要件が『Oracle Discoverer Administrator ガイド』に記載されています。

Oracle Discoverer Administrator Edition 4.1 を所有していない場合は、Internet Developer Suite (1.0.2) の CD Pack を入手して、Oracle Discoverer Administrator Edition 4.1 を使用してください。

End User Layer 表の手動による編集

オラクル社カスタマ・サポート・センターまたは開発部門から特に指示がない限り、End User Layer (EUL) 表またはそのコンテンツは (たとえば、SQL*Plus を使用して) 手動で編集しないでください。手動による EUL 表の編集はサポートされていません。手動で編集すると EUL が破損する可能性があります。

スケジュールされたワークブックのみを実行できるエンド・ユーザーによる問合せのリフレッシュ

スケジュールされたワークブックのみを実行できるエンド・ユーザーの場合は、「スケジュール・マネージャ」ダイアログの「リフレッシュ」ボタンによって、問合せが実表で再度実行されることはありません。問合せは、スケジュールされたワークブックの結果を格納する表で再実行されます。これは、「オプション」ダイアログの「一般」タブで「問合せを自動的に実行」オプションを選択している場合にも適用されます。

HWOnline ファイルの利用

以前のバージョンの Oracle Discoverer には、ドリルアウト機能のデモを実行するための HWOnline.htm および Memo.doc ファイルが付属していました。ディスク領域を節約し、インストール時間を短縮するために、これらのファイルとその使用方法の説明は Oracle Technology Network Japan (OTN-J) の Web サイトからダウンロード可能予定です。

<http://otn.oracle.co.jp>

書式設定：軸ラベルのフォント・サイズ

以前のバージョンの Oracle Discoverer では、軸アイテムのフォント・サイズは、データのフォント・サイズよりもわずかに大きく自動設定されていました。リリース 9.0.4 以降は、軸ラベルのデフォルト・フォント・サイズがデータと同じサイズになりました。

スケジューリングと集計

次の計算が指定されているワークブックをスケジュールする場合は注意が必要です。

- DISTINCT 集計 (たとえば、COUNT DISTINCT、SUM DISTINCT)
- CASE 式が含まれている計算
- 分析関数が含まれている計算
- PL/SQL 関数が含まれている計算

ワークブックの「オプション」ダイアログの「集計」タブにある「シート書式」タブで設定された「<集計できないラベル>」(「集計できない値」オプション)を表示します」オプションが実際に選択されているかどうかに関係なく、Discoverer では、このオプションが選択されているかのようにスケジュールされたワークブックが処理されます。

また、「オプション」ダイアログの「集計」タブにある「データベースで集計された値を表示データベースでは、Discoverer と同じ集計方法が使用されます。」オプションは、スケジュールされたワークブックには使用できないことに注意してください。

パフォーマンスを改善する OracleAS Discoverer Portlet Provider の追加構成パラメータ

表 18-1 に、OracleAS Discoverer Portlet Provider を使用している場合に OracleAS Discoverer のセッション・プールのパフォーマンスを改善できる configuration.xml ファイルの追加設定項目を示します。

表 18-1 OracleAS Discoverer Portlet Provider の構成パラメータ

設定	説明
/disco:configuration/portlet/@maxSessionAgeHour	Discoverer セッションがセッション・プール内に存在できる最大時間（時間単位）を指定します。この時間を経過すると、そのセッションは Portlet Provider によってプールから削除されます。 この設定のデフォルト値は 1 時間です。ほとんどの場合、デフォルト値のままで不都合はありません。 セッションによってあまりにも多くのメモリーが消費される場合は、低い値を指定します。この値を低くすると、セッションの再利用周期が速くなり、再利用セッションで確保されるメモリーがオペレーティング・システムに解放されるため、メモリー消費量が削減されます。ただし、セッションを再起動する必要があるため、リフレッシュ時間はわずかに増加します。 maxSessionAgeHour は絶対的なタイムアウトであることに注意してください。プール内のセッションが頻繁に使用されている（つまり、非アクティブ時間が maxSessionInactivityPeriodMinute を超えることがない）場合にも、maxSessionAgeHour 値に達するとセッションは削除されます。

表 18-1 OracleAS Discoverer Portlet Provider の構成パラメータ（続き）

設定	説明
/disco:configuration/portlet/@maxSessionInactivityPeriodMinute	<p>Discoverer セッションがセッション・プール内で非アクティブな状態で存在できる最大時間（分単位）を指定します。この時間を経過すると、そのセッションは Portlet Provider によってプールから削除されます。</p> <p>この設定のデフォルト値は 10 分です。ほとんどの場合、デフォルト値のままで不都合はありません。</p> <p>セッションによってあまりにも多くのメモリーが消費される場合は、低い値を指定します。この値を低くすると、セッションの再利用周期が速くなり、再利用セッションで確保されるメモリーがオペレーティング・システムに解放されるため、メモリー消費量が削減されます。ただし、セッションを再起動する必要があるため、リフレッシュ時間はわずかに増加します。</p> <p>maxSessionInactivityPeriodMinute は非アクティブなセッションのみに適用されます。実行中の問合せは非アクティブとはみなされません。つまり、maxSessionInactivityPeriodMinute に指定した時間よりも長くかかる問合せを実行しているために、セッションが終了することはありません。</p>

Oracle Discoverer EUL Command Line for Java のコマンドによる Oracle Discoverer レジストリ変数の設定

Oracle Discoverer EUL Command Line for Java に用意されている一部のコマンドを使用する場合は、表 18-2 に示す Discoverer レジストリ変数の明示的な設定が必要になる場合があります。

表 18-2 OracleAS Discoverer レジストリ変数

コマンド	Discoverer レジストリ変数
-export	ArchiveCacheFlushInterval FormatXML ExportJoinFromMaster
-refresh_<オブジェクト>	DefaultPreserveDisplayPropertyForRefresh EnableTriggers
-import	FormatXML
-connect -apps_user	AppsFNDNAME AppsGWYUID
-load	SetNULLItemHeadingOnBulkLoad MaxNumberJoinPredicates
すべてのコマンド	SqlTrace

Windows プラットフォームの場合、Discoverer レジストリ変数は Windows のレジストリに格納されます。UNIX プラットフォームの場合、Discoverer レジストリ変数は .reg_key.dc ファイルに格納されます。

Discoverer レジストリ変数を設定するには、次のいずれかを実行します。

- （Windows のみ） regedit または regedt32 を使用して、Windows レジストリを編集することによって必要なレジストリ変数の値を指定します。
- （Windows および UNIX）コマンド・プロンプトに次のコマンドを入力することによって、必要なレジストリ変数の値を指定します。

```
dis51pr -setadminpref <registry variable name> <value>
```

Discoverer レジストリ変数（およびその説明、デフォルト値、使用可能な値など）の詳細は、次のマニュアルを参照してください。

- 『Oracle Discoverer Administrator 管理ガイド』
- 『Oracle Application Server Discoverer 構成ガイド』

Oracle Discoverer のその他のレジストリ変数

Discoverer では、『Oracle Discoverer Administrator 管理ガイド』および『Oracle Application Server Discoverer 構成ガイド』に記載されている変数に加え、表 18-3 に示すレジストリ変数を使用できます。

表 18-3 Discoverer のその他のレジストリ変数

カテゴリ	Discoverer レジストリ変数	説明	デフォルト	有効な値
データベース	DefaultPreserveDisplayPropertyForRefresh	リフレッシュする場合に、更新された項目の説明を破棄して当初の説明で置換するか、更新された項目の説明をそのまま保持するかを指定します。	0	0 = 更新された説明を使用 1 = 当初の説明を使用
データベース	EnableTriggers	データベース・トリガーを使用できるかどうかを指定します。 たとえば、Discoverer では、リフレッシュ時に新しい列を検出するたびに、データベースをコールしようとします。この値を 0 (ゼロ) に設定すると、Discoverer はデータベース・コールを実行しません。	0	0 = データベース・トリガー使用不可 1 = データベース・トリガー使用可能
データベース	ExportJoinFromMaster	ビジネスエリアをエクスポートするときに、マスター・フォルダからの結合もエクスポートするかどうかを指定します。	0	0 = マスター・フォルダからの結合をエクスポートする 0 以外 = マスター・フォルダからの結合をエクスポートしない
データベース	SetNULLItemHeadingOnBulkLoad	バルク・ロードを実行するときに、アイテム・ヘッダーをアイテム表示名と同じ値に設定するか、NULL の値を設定するかを指定します。	0	0 = アイテム・ヘッダーにアイテム表示名を設定 1 = アイテム・ヘッダーに NULL を設定

OracleAS Discoverer Viewer のカスタマイズの移行

以前のバージョンから Discoverer をアップグレードする際、過去に Discoverer Viewer をカスタマイズした場合は、ファイルを手動で編集してカスタマイズ内容を再度適用する必要があります。詳細は、次のマニュアルを参照してください。

- 4.1 から 9.0.4 にアップグレードする場合は、『Oracle Application Server Discoverer 構成ガイド』を参照してください。
- 9.0.2 から 9.0.4 にアップグレードする場合は、『Oracle Application Server 10g アップグレード』を参照してください。

Discoverer Viewer をカスタマイズする場合は、Discoverer の各バージョン間でカスタマイズを移行する責任があります。実行した変更によっては、新しいバージョンの Discoverer に付属しているファイルをカスタマイズしたファイルで単純に置換できない可能性があります。その場合は、新しいバージョンのファイルを手動で編集して、カスタマイズ内容を反映する必要があります。

Oracle Discoverer EUL Command Line for Java の実行 (UNIX のみ)

UNIX で Oracle Discoverer EUL Command Line for Java を実行するには、様々な環境変数を正確に設定する必要があります。次に示すように、環境変数は、discwb.sh スクリプトを使用して明示的に設定するか、または eulapi スクリプトを使用して暗黙的に設定できます。

- 環境変数を明示的に設定して Oracle Discoverer EUL Command Line for Java コマンドを発行するには、コマンドを発行するコマンドライン・プロンプトに次のコマンドを入力します。

```
<ORACLE_HOME>/discoverer/discwb.sh
```

このコマンドの発行後は、次の Oracle Discoverer EUL Command Line for Java のコマンドを入力できます。

```
java -jar <ORACLE_HOME>/discoverer/lib/eulbuilder.jar -<command list>
```

たとえば、Sales1 と呼ばれるフォルダをリフレッシュするには、次のように入力します。

```
java -jar <ORACLE_HOME>/discoverer/lib/eulbuilder.jar -connect jchan/12345@my_database
-refresh_folder Sales1
```

- Oracle Discoverer EUL Command Line for Java コマンドの実行時に環境変数を暗黙的に設定するには、<ORACLE_HOME>/bin ディレクトリの eulapi スクリプトを使用してコマンドを実行します。たとえば、Sales1 と呼ばれるフォルダをリフレッシュするには、次のように入力します。

```
<ORACLE_HOME>/bin/eulapi -connect jchan/12345@my_database -refresh_folder Sales1
```

ヒント : eulapi スクリプトを実行するたびに <ORACLE_HOME>/bin を入力しなくても済むようにするには、最初に discwb.sh を実行します。

OracleAS Discoverer と Real Application Clusters (RAC) / 透過的アプリケーション・フェイルオーバー (TAF)

Real Application Clusters (RAC) システムでの透過的アプリケーション・フェイルオーバー (TAF) に対する OracleAS Discoverer のサポートには、次の tnsnames.ora エントリの例のように、「select」のフェイルオーバー・モードが必要です。

```
NAME =
(DESCRIPTION=
(ADDRESS=
(PROTOCOL=tcp)
(HOST=servername)
(PORT=1521))
(CONNECT_DATA=
(SERVICE_NAME= NAME)
(FAILOVER_MODE=
(TYPE=select)
(METHOD=basic)
(RETRIES=4)
(DELAY=15))))
```

RETRIES および DELAY の初期設定を、この例で指定されている値（つまり、4 と 15）にすることをお薦めします。ただし、ユーザー独自のシステムでは、これらの値を増加することが必要な場合もあります。

フェイルオーバーが発生すると、まれにエラー・メッセージが表示されることがあります。エラー・メッセージに応答すると、セッションは正常に続行されます。この問題を解決するために、リリース 9.0.4 のパッチの発行が予定されています。

不要になった XWindow ディスプレイ

『Oracle Application Server Discoverer 構成ガイド』の 2.12 項「HTTP を使用した Discoverer Viewer の実行」には、次のような説明があります。

UNIX 環境で OracleAS をインストールした場合は、Discoverer Viewer のグラフおよびチャート作成機能をサポートするために、Discoverer サーブレットで XWindow ディスプレイを使用可能にする必要があります。X Server を参照するように DISPLAY 環境変数を設定する方法は、『Oracle Application Server 10g インストレーション・ガイド』を参照してください。

XWindow ディスプレイは不要になりました。

ドキュメントの誤り

この項では、ドキュメントの既知の誤りについて説明します。この項の内容は次のとおりです。

- Discoverer Portlet Provider を OracleAS Portal に登録するときに必要な追加手順
- configuration.xml ファイルの構成設定の訂正
- Oracle Discoverer EUL Command Line for Java のコマンド実行に関する構文例での '-jar' の欠落
- 規定されている EUL のリリース要件 5.1 は正しくは 5.0.2
- ShowExpiredRunsOnExit 作業環境に表示される誤ったデフォルト設定
- ユーザー・レベルの作業環境を 1.0.2.2 から 9.0.4 へアップグレードするためのコマンドの誤り

Discoverer Portlet Provider を OracleAS Portal に登録するときに必要な追加手順

『Oracle Application Server Discoverer 構成ガイド』の 9.4 項「OracleAS Portal に Discoverer Portlet Provider を登録する方法」に、次の追加手順を挿入してください。

- 9. d. 「ユーザー・ログイン頻度」を「ユーザーセッションに対して 1 度」に変更します。

configuration.xml ファイルの構成設定の訂正

『Oracle Application Server Discoverer 構成ガイド』の A.4 項「configuration.xml 内の構成設定のリスト」の表には、複数の細かい誤りがあります。次の表を参照してください。

表 18-4 訂正表

設定	訂正
/disco:configuration/portlet /@maximumSessions	正しい記述は次のとおりです。 /disco:configuration/portlet/@maxSessions
/disco:configuration/servlet /xsl_translator/stylesheets_pool	正しい記述は次のとおりです。 /disco:configuration/servlet/xsl_translator/@stylesheet_pool
query_progress_delay	このパラメータは、configuration.xml ファイルでグローバルに設定できなくなりました。 ただし、このパラメータはユーザーごとに設定できます。『Oracle Application Server Discoverer 構成ガイド』の 11.8 項「Discoverer Viewer の URL パラメータ」を参照してください。

Oracle Discoverer EUL Command Line for Java のコマンド実行に関する構文例での '-jar' の欠落

『Oracle Discoverer EUL Command Line for Java ユーザーズ・ガイド』の 1.7 項と 1.9 項の例では、コマンドライン構文の '-jar' 部分が欠落しています。Java のコマンドラインを実行するときは、次の構文を使用します。

```
java -jar eulbuilder.jar -<command list>
```

規定されている EUL のリリース要件 5.1 は正しくは 5.0.2

『Oracle Application Server Discoverer 構成ガイド』の ix および 1-17 ページには、次の段落が含まれています。

Discoverer を使用してデータを分析するには、データベースに Discoverer End User Layer (EUL) リリース 5.1 をインストールする必要があります。Discoverer マネージャは、Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) のコンポーネントとして出荷されている Oracle Discoverer Administrator リリース 9.0.4 以上を使用して End User Layer (EUL) リリース 5.0.2 を作成するか、アップグレードする必要があります。

前述の段落で指定されている EUL リリースの記述は誤りです。これらの段落は次のように置換してください。

Discoverer を使用してデータを分析するには、データベースに Discoverer End User Layer (EUL) リリース 5.0.2 をインストールする必要があります。Discoverer マネージャは、Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) のコンポーネントとして出荷されている Oracle Discoverer Administrator リリース 9.0.4 以上を使用して End User Layer (EUL) リリース 5.0.2 を作成するか、アップグレードする必要があります。

ShowExpiredRunsOnExit 作業環境に表示される誤ったデフォルト設定

『Oracle Application Server Discoverer 構成ガイド』の 8.8 項「Discoverer ユーザー作業環境のリスト」では、ShowExpiredRunsOnExit 作業環境のデフォルト設定は 0 (ゼロ) と記載されていますが、これは誤りです。この作業環境の実際のデフォルト設定は 1 です。

ユーザー・レベルの作業環境を 1.0.2.2 から 9.0.4 へアップグレードするためのコマンドの誤り

『Oracle Application Server Discoverer 構成ガイド』の D.3.1.3 項「ユーザー・レベルの作業環境を Discoverer リリース 4.1 から Discoverer リリース 9.0.4 へアップグレードする方法 (Windows の場合)」では、次のコマンドを入力する箇所が 2 つあります。

```
prompt> <ORACLE_HOME_2>\discoverer\util\migrateprefs.bat
```

両方とも、正しいコマンドは次のとおりです。

```
prompt> <ORACLE_HOME_2>\discoverer\util\migrateprefs.bat -from 102
```


19

Oracle Reports

この章では、Oracle Reports に関する問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 一般的な問題と回避策
- 構成に関する問題と回避策
- 管理に関する問題と回避策
- NLS 固有の問題と回避策
- ドキュメントの誤り

一般的な問題と回避策

この項では、Oracle Reports に関する一般的な問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- Oracle Application Server での rwconverter ヘルプの表示
- OLAP Server 問合せの作成
- OPMN 管理の Reports Server での Graphics 6i の埋込みレポートの実行
- Web への簡単なマトリックス・レポートの実行
- JServ が構成されていると OracleAS Reports Services のデモが機能しない

Oracle Application Server での rwconverter ヘルプの表示

Oracle Application Server のみのインストールでは、Oracle Reports オンライン・ヘルプ・システムはインストールされません。「Convert」ダイアログ・ボックス (rwconverter に対するユーザー・インターフェース) の「ヘルプ」をクリックすると、次のメッセージが表示されます。

REP-544: on-line help system is not available

Oracle Reports オンライン・ヘルプを表示するには、Oracle Developer Suite をインストールします。このインストールには、Oracle Reports オンライン・ヘルプが含まれています。

OLAP Server 問合せの作成

適切なファイルがインストールされていない状態で OLAP Server 問合せを作成すると、次のエラー・メッセージが表示されます。

REP-0069: Internal Error

XR-3013: The Express xConnect.ini file is missing or incomplete

回避策

OLAP Server 問合せを作成する前に、必要な OLAP Server 接続ファイルがマシン上にあることを確認してください。

OPMN 管理の Reports Server での Graphics 6i の埋込みレポートの実行

Oracle Enterprise Manager または OPMN を使用して Reports Server を管理している場合は、Graphics 6i のチャートが埋込まれたレポートを Reports Server で実行することはできません。

ただし、『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』の 2.1.3.1 項と、本リースノートの「インプロセス・サーバーに対するデフォルト・プリンタの設定」で指示されている回避策を適用した後は、Windows サービスとして起動される Reports Server で、同じレポート (Graphics 6i が埋込まれたレポート) を実行できます。

推奨事項

Graphics 6i のチャートが埋込まれたレポートは、コマンド・プロンプトを使用して起動したスタンドアロンの Reports Server で実行してください。

Web への簡単なマトリックス・レポートの実行

Web レイアウトに対する実行機能を使用して、Web に対して作成および実行された単純なマトリックス・レポートが正しく表示されません。

この問題を修正するには、パッチをダウンロードする必要があります。Windows の ARU パッチ番号は 5147374 です。

JServ が構成されていると OracleAS Reports Services のデモが機能しない

同一のアプリケーション・サーバー・インスタンスに JServ と OracleAS Reports Services を構成している場合は、OracleAS Reports Services のデモを実行できません。

構成に関する問題と回避策

この項では、Oracle Reports の構成に関する問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [負荷が高いマシンでの Reports Server の構成](#)
- [Oracle Enterprise Manager に Windows サービスとして登録された Reports Server の起動](#)
- [Reports Queue Manager を使用した管理者ログインの変更](#)
- [PDF ファイルまたはプリンタへのグラフ出力のイメージ解像度の改善](#)
- [Oracle Reports の Java 仮想マシンに対する値の指定](#)
- [OID でのリソース作成時の Oracle Reports と Oracle Portal の統合エラーの解決](#)

負荷が高いマシンでの Reports Server の構成

処理速度が遅いマシンや負荷が高いマシンにレポートをデプロイするには、次の構成が必要になる可能性があります。

- [ping タイムアウト \(OPMN 側\) : ping タイムアウトとは、OPMN がタイムアウトの判断に使用する単位です。OPMN は、\(OC4J_BI_FORMS で\) インプロセス Reports Server からのコールバックを指定時間待機した後、タイムアウトと判断します。](#)

デフォルトのタイムアウト時間は 150 です。この時間は、ping タイムアウト、ping 間隔およびリトライ回数から算出されます。それぞれのデフォルト値は次のとおりです。

ping タイムアウト = 30 秒

ping 間隔 = 20 秒

リトライ回数 = 3 回

注意： リトライ回数は、OPMN が OC4J に正常に接続し、プロセスから定期的に ONS 通知を受信する場合にのみ適用可能です。

これらの値に基づいて、それぞれ 30 秒のタイムアウトと 20 秒の間隔で 3 回の ping が試行されます。1 回目の ping は、指定された ping 間隔が経過した後に実行されます。したがって、OPMN によって OC4J が起動された時点から、プロセスに反応がなく再起動とみなされるまでに、約 150 (20 + 3 × 30 + 2 × 20) 秒が経過します。OPMN が OC4J に接続した後、OC4J の処理速度が非常に遅いために定期的な ONS 通知の送信が滞る場合は、30 秒のタイムアウトが適用される可能性があります。

関連項目： `opmn.xml` ファイルの詳細は、『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』を参照してください

- [コールバック・タイムアウト \(Reports Server 側\) : コールバック・タイムアウトとは、Reports Server がタイムアウトの判断に使用する単位で、エンジンからの応答を指定時間待機した後、タイムアウトと判断します。この値は、Reports Server 構成ファイル `server_name.conf` で指定できます。このタイムアウト時間の単位はミリ秒です。](#)

次に例を示します。

```
<engine id="rwEng" class="oracle.reports.engine.EngineImpl" initEngine="1" maxEngine="1"
minEngine="0" engLife="50" maxIdle="30" callbackTimeout="80000">
```

注意： マシンの処理速度が非常に遅い場合はタイムアウトの値を増加してください。

Oracle Enterprise Manager に Windows サービスとして登録された Reports Server の起動

Oracle Enterprise Manager または OPMN によって Windows サービスとして管理されている Reports Server は起動または停止しないでください。また、コマンドラインを介して起動または停止することもお薦めしません。実行すると、次の問題が発生する可能性があります。

- Reports Server のステータスが正しく反映されなくなります。
- Reports Server の起動時または停止時に Oracle Enterprise Manager にエラーが表示されます。

回避策

Oracle Enterprise Manager に登録されている Reports Server は、必ず Oracle Enterprise Manager または OPMN を介して起動または停止する必要があります。

Reports Queue Manager を使用した管理者ログインの変更

Oracle Reports で、Reports Queue Manager を使用して管理者パスワードを変更すると、次のアクションを Oracle Enterprise Manager または OPMN から実行できなくなります。

- Reports Server の起動または停止
- Reports Server のメトリックの表示

推奨事項

Reports Server の管理には、Oracle Enterprise Manager または OPMN の使用をお薦めします。

ただし、Reports Queue Manager を使用して管理者パスワードを変更する場合は、次の手順を実行する必要があります。

1. 変更したユーザー名とパスワードを、指定された Reports Server エントリの `targets.xml` ファイルに追加します。
2. `ENCRYPTED=FALSE` を設定します。

次に例を示します。

```
<Property NAME="UserName" VALUE="foo" ENCRYPTED="FALSE"/>
...
...
<Property NAME="Password" VALUE="hello123" ENCRYPTED="FALSE"/>
```

3. Oracle Enterprise Manager を再起動します。Oracle Enterprise Manager を再起動すると、ユーザー名とパスワードが暗号化され、`ENCRYPTED=TRUE` が設定されます。

PDF ファイルまたはプリンタへのグラフ出力のイメージ解像度の改善

環境変数 `REPORTS_GRAPH_IMAGE_DPI` は、PDF ファイルまたはプリンタにグラフを出力する際の 1 インチ当たりのドット数 (DPI) を指定します。この環境変数のデフォルト値は、レポートの生成時間をできるかぎり短縮してレポート・ファイル・サイズも小さくなるように、72DPI に設定されています。

72DPI よりも高い値を指定すると、PDF ファイルまたはプリンタに送信されるグラフのイメージ解像度が向上します。ただし、レポート出力の生成時間およびファイル・サイズに影響を与えます。

注意： この環境変数に 250 の値を指定すると、次のようにになります。

- Oracle Reports のグラフを挿入したレポートの生成時間は、72 DPI に設定した値で同じレポートを生成する場合に比べて 5 ~ 6 倍必要です。
- PDF ファイル・サイズも 5 ~ 6 倍に増加します。

有効な値

72 ~ 300

デフォルト

72

使用方法

- Windows では、レジストリを使用して値を指定します。
- 250 よりも大きい DPI 値を設定し、グラフが約 5 × 5 インチよりも大きい場合は、JVM のメモリー不足エラーを回避するために、REPORTS_JVM_OPTIONS を使用して JVM ヒープ・サイズの値も変更する必要があります。

関連項目： JVM オプションの設定方法については、『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』を参照してください。

- この変数は、PDF およびプリンタへの出力に限定されているため、Oracle Reports の配布機能では現在サポートされません。

Oracle Reports の Java 仮想マシンに対する値の指定

デフォルトでは使用可能でない JVM の特定の機能を使用するために、JVM オプションの明示的な設定が必要になる場合があります。そのためには、コマンドラインでキーワード JVMOPTIONS を使用して、Reports Runtime、Reports Builder または Reports Converter の Java 仮想マシン (JVM) のいずれかにに対してオプションを設定します。

たとえば、次のコマンドを使用してヒープ領域が 512MB の Reports Builder を起動できます。

```
rwbuilder jvmoptions=-Xmx512M
```

複数のオプションを指定できます。その場合はオプションを引用符で囲む必要があります。

```
rwbuilder jvmoptions="-Xmx256M -Xms=128M"
```

構文 `JVMOPTIONS={options in reports runtime, reports builder, reports converter JVM}`

デフォルト `-Xmx256M`

注意： `jvmoptions` キーワードを使用して値を設定すると、その値は環境変数 `REPORTS_JVM_OPTIONS` の値よりも優先されます。

OID でのリソース作成時の Oracle Reports と Oracle Portal の統合エラーの解決

OracleAS Portal で、Oracle Reports セキュリティの設定を Reports 定義ファイル・アクセスに対して構成している場合は、Reports 定義ファイルの編集時に、「実行」または「ポートレットとして実行」をクリックすると、エラーが発生する可能性があります。

```
500 Internal Server Error
Unexpected Error. Please contact Administrator
```

このエラーは、次の条件すべてに当てはまる場合に発生します。

- 実行環境が、9.0.4 MT (中間層)、9.0.4 IM (識別管理) および 9.0.2 MR (メタデータ・リポジトリ) を相互に実行するように構成された、相互運用デプロイ (9.0.2 と 9.0.4 の複合環境を許可) の場合。
- SSOCONN パラメータを使用して OracleAS Portal で Oracle Reports を実行している場合。
- SSOCONN パラメータに指定した接続リソースが、Oracle Internet Directory サーバーで作成されていない場合。

この問題を回避する手順は、次のとおりです。

- 9.0.4 IM の *ORACLE_HOME* にある次のファイルをテキスト・エディタでオーブンします。

ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf/mod_osso.conf

- 次のフラグを追加します。

OssoRedirectByForm on

次に例を示します。

```
<IfModule mod_osso.c>
OssoIpCheck off
OssoIdleTimeout off
OssoConfigFile
/private1/iasinst/install_set1/904infra/Apache/Apache/conf/osso/osso.conf
OssoRedirectByForm on
</IfModule>
```

管理に関する問題と回避策

この項では、Oracle Reports の管理に関する問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- Reports Server 情報に対する Enterprise Manager のアクセスの認証
- OracleAS Portal でのアイテム・リンクとしてのレポートの実行

Reports Server 情報に対する Enterprise Manager のアクセスの認証

server_name.conf の *identifier* 要素に、新しい値 SERVERACCESSKEY が追加されました。この値は、Enterprise Manager で Reports Server 情報を保護するために使用されます。

次の認証が実装されます。

- server_name.conf* ファイルの *identifier* 要素の値が暗号化され、%SERVERACCESSKEY_USER%/%SERVERACCESSKEY_PASSWORD% の形式になります。次に例を示します。

```
<identifier confidential="yes" encrypted="no">
%SERVERACCESSKEY_USER%/%SERVERACCESSKEY_PASSWORD%</identifier>
```

- targets.xml* ファイルの対応するエントリを次に示します。

```
<Property NAME="UserName" VALUE="%SERVERACCESSKEY_USER%" ENCRYPTED="FALSE"/>
<Property NAME="Password" VALUE="%SERVERACCESSKEY_PASSWORD%" ENCRYPTED="FALSE"/>
```

デフォルトのインストールでは、インストール時の %SERVERACCESSKEY_USER% 値と %SERVERACCESSKEY_PASSWORD% 値は、*targets.xml* の値と必ず一致します。

注意： Enterprise Manager で Reports Server のページにデータを正しく表示するためには、*server_name.conf* と *targets.xml* の %SERVERACCESSKEY_USER% と %SERVERACCESSKEY_PASSWORD% が一致する必要があります。

ユーザー名とパスワードを変更する手順は、次のとおりです。

- ORACLE_HOME*/reports/conf/*server_name.conf* ファイルを次のように編集します。

```
<identifier confidential="yes" encrypted="no">new_username/new_password</identifier>
```

- ORACLE_HOME*/sysman/emd/targets.xml ファイルを次のように編集します。

```
<Property NAME="UserName" VALUE="new_username" ENCRYPTED="FALSE"/>
<Property NAME="Password" VALUE="new_password" ENCRYPTED="FALSE"/>
```

- Enterprise Manager と Reports Server を再起動します。server_name.conf と targets.xml のユーザー名とパスワードは、再起動後に暗号化されます。

注意： Oracle Reports 10g (9.0.4) から、Oracle Enterprise Manager (Enterprise Manager) は、Reports Server 情報へのアクセスに Oracle Internet Directory 認証を使用しません。EM では、SERVERACCESSKEY 値を使用して認証を実装します。

OracleAS Portal でのアイテム・リンクとしてのレポートの実行

デフォルト以外の言語設定で OracleAS Portal をインストールした場合は、ポータル・ページ上のアイテム・リンクとしてのレポートの公開に必要な複数のエントリが、自動的にインストールされません。rwl lang.sql スクリプトを使用して、選択した言語をインストールする必要があります。

したがって、次の場合は rwl lang.sql スクリプト (ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wwd/) を実行する必要があります。

- OracleAS Portal のインストール時に、デフォルト (US) に加えて少なくとも 1 つの言語を選択した場合。
- および
- OracleAS Portal のアイテム・リンクとしてレポートを公開する場合。

注意： これはインストール完了後 1 回かぎりのタスクです。1 回実行すると OracleAS Portal でアイテム・リンクとしてレポートを公開できるようになります。

スクリプトを実行する手順は、次のとおりです。

- ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wwd/ ディレクトリに変更します。
- sqlplus を実行します。
- ポータル・スキーマを使用して OracleAS Portal にログインします。

注意： これは、OracleAS Portal PL/SQL パッケージのインストールに使用するポータル・スキーマです。

- 次のパラメータを使用して rwl lang.sql スクリプトを実行します。

`@rwl lang.sql language_list`

ここで、

`language_list` は、カンマ区切りの言語リストです。

たとえば、フランス語と日本語をインストールするには、次のように指定します。

`@rwl lang.sql f,ja`

使用方法

- sqlplus は、カンマ (,) 区切りの 1 つのパラメータではなく、2 つのパラメータとして言語リストを取り扱うため、カンマ (,) の前後には空白を使用できません。
- rwl lang.sql スクリプトのヘッダーには、全言語の省略形のリストが含まれています。様々な省略形を確認するには、テキスト・エディタを使用してスクリプト・ファイルを開いてください。

NLS 固有の問題と回避策

この項では、Oracle Reports の NLS 固有の問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- マルチバイト・エンコーディングの JSP レポートのオープン / 実行
- マルチバイトのオブジェクト型データにアクセスするレポートの実行
- ヨーロッパ以外の言語での Oracle Enterprise Manager の画面の表示

マルチバイト・エンコーディングの JSP レポートのオープン / 実行

JSP レポートのエンコーディングが NLS_LANG 環境変数の対応する値と異なる場合（例：JSP レポートが EUC-JP で NLS_LANG が JA16SJIS の場合など）、次のようなエラーが発生します。

- JSP ファイルの実行時

REP-6106/6104 javax.servlet.jsp.JspException
REP-0495 問合せをトークン化できません
- JSP ファイルを Reports Builder で開いたとき

REP-0069 Internal Error または REP-6106

この問題を回避するために、NLS_LANG に対応したエンコーディングに JSP レポート・ファイルを変換する必要があります。

例：

JSP レポートのエンコーディング：

```
<%@ page contentType="text/html;charset=EUC-JP" %>
<META http-equiv="Content-Type" content="text/html;charset=EUC-JP">
```

この JSP ファイルは、EUC-JP キャラクタ・セットでエンコードされている必要があります。

NLS_LANG の設定：

```
NLS_LANG=JAPANESE_JAPAN.JA16EUC
```

この例では、NLS_LANG の設定値（JA16EUC）と JSP レポートのエンコーディング（EUC-JP）とが正しく対応しています。

マルチバイトのオブジェクト型データにアクセスするレポートの実行

マルチバイト文字を含むレポートで、オブジェクト型データにアクセスする場合、レポートの実行に失敗します。

ヨーロッパ以外の言語での Oracle Enterprise Manager の画面の表示

Oracle Enterprise Manager Application Server Control Console では、西ヨーロッパ以外の言語を使用していると、Reports Server の次のページに、文字化けしたタイトルが表示されることがあります。

- エンジン
- 構成
- 構成ファイルの編集

ドキュメントの誤り

この項では、ドキュメントの既知の誤りについて説明します。

- 『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』の第 19 章「OracleAS Reports Services の管理と監視」では、Oracle Enterprise Manager ユーザー・インターフェースに対する最新の更新内容が反映されていないスクリーンショットが掲載されている可能性があります。
- OTN が改良されたため、Oracle Reports のドキュメント・ページに直接アクセスする URL がマニュアル内で誤って記載されています。
<http://otn.oracle.com/docs/products/reports/content.html> を
<http://otn.oracle.com/documentation/reports.html> の URL に訂正してください。

20

Oracle Application Server Personalization

この章では、Oracle Application Server Personalization（OracleAS Personalization）に関する問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 一般的な問題と回避策
- 構成に関する問題と回避策
- 管理に関する問題と回避策
- ドキュメントの誤り

一般的な問題と回避策

この項では、OracleAS Personalization に関する一般的な問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- 正確な製品名
- 「拡張」ボタンで「404 ファイル未検出」メッセージが表示される
- ID 順ソートおよびタイプ順ソートが動作しない
- パフォーマンスとデータ・サイジング
- SSL モード
- MTR 参照が異なる場合に発生する RE パッケージの配布での障害
- RE セッションがアクティブな場合に発生する RE パッケージの配布での障害

正確な製品名

正確な製品名は、Oracle Application Server Personalization です。この製品の旧称は、Oracle9i Personalization です。Oracle9i Personalization 以外に、Oracle Personalization または OP と呼ばれる場合もあります。正しい略称は、OP ではなく、OracleAS Personalization です。

「拡張」ボタンで「404 ファイル未検出」メッセージが表示される

以前に「拡張」ボタンをクリックしたウィンドウがそのままオープンしている状態で、メッセージ・ビュー・ウィンドウを表示するために「拡張」ボタン（「ログ」ページ下部）をクリックすると、一部のブラウザのバージョンによっては、このメッセージが表示されます。

ID 順ソートおよびタイプ順ソートが動作しない

セッションフルおよびセッションレス両方の REAPI コールで、昇順または降順の選択に関係なく、リクエスト・コンテンツに対する ID 順ソートおよびタイプ順ソートが動作しません。回避策はありません。

パフォーマンスとデータ・サイジング

次の表に、3 種類のデータセットのパフォーマンス結果を示します。ビルト時間は、顧客数に対して直線相関、平均プロファイル・サイズに対して二次曲線相関になります。これらの結果は、Sun Enterprise 450 (4 x UltraSPARC-II 400MHz) 搭載メモリー 4096MB による実行結果です。これらの数値に基づいて、任意のデータセットのビルト時間を推定できます。

データ セット	顧客数	項目数	平均プロ ファイル ・サイズ	平均レーティ ング・プロ ファイル	平均購入 プロファ イル	平均ナビ ゲート・プロ ファイル	ビルト 時間	集計モル ・ルール数	抱合せ販売 モデル・ ルール数
1	1000	50000	50	8	17	25	1 分	9152	155
2	5000	50000	71	8	27	36	3 分	166588	37
3	1000	50000	100	16	34	50	5 分	313154	2997

各列ヘッダーは、次の内容を示しています。

- **データセット**：データセットの ID。
- **顧客数**：登録顧客数。MTR_CUSTOMER 表のレコード数です。
- **項目数**：項目数。MTR_ITEM 表のレコード数です。
- **平均プロファイル・サイズ**：各顧客プロファイルの項目数。これは、平均レーティング・プロファイル、平均購入プロファイルおよび平均ナビゲート・プロファイルの合計です。

- **平均レーティング・プロファイル**: 各顧客プロファイルのレーティング項目の平均数。MTR_RATING_DETAIL のレコード数を MTR_RATING_DETAIL 内の CUSTOMER_ID 数で除算した結果です。
- **平均購入プロファイル**: 各顧客プロファイルの購入項目の平均数。MTR_PURCHASING_DETAIL のレコード数を MTR_PURCHASING_DETAIL 内の CUSTOMER_ID 数で除算した結果です。
- **平均ナビゲート・プロファイル**: 各顧客プロファイルのナビゲート項目の平均数。MTR_NAVIGATION_DETAIL のレコード数を MTR_NAVIGATION_DETAIL 内の CUSTOMER_ID 数で除算した結果です。
- **ビルド時間**: 集計モデルおよび抱合せ販売モデルのビルドにかかる合計時間。
- **集計モデル・ルール数**: 集計モデルのルール数。
- **抱合せ販売モデル・ルール数**: 抱合せ販売モデルのルール数。

MOR 一時領域

次の式を使用して、MOR 一時領域に必要なバイト数の概算を推定します。

$$(54 * P^2 * C) / 2$$

P は平均プロファイル・サイズ、C は顧客数です。ビルド時に生成される各項目の組合せを格納するには、1 レコード当たり 54 バイト必要です。これは、2 つの項目列と 1 つの件数列を格納するために必要な領域です。モデル・ビルドを実行する場合、使用可能な一時領域は、データセットの P 値と C 値に必要な推定一時領域よりも大きくする必要があります。

SSL モード

OracleAS Personalization リリース 10g (9.0.4) では、OracleAS Personalization 管理 UI での SSL モードは必須ではありませんが、SSL モードを使用して OracleAS Personalization 管理 UI にログインすることをお薦めします。SSL を使用せずに管理 UI にログインすると、警告メッセージ（メッセージは英語）が表示されます（「[\[Oracle Application Server Personalization ユーザーズ・ガイド\] の誤り](#)」も参照してください）。

MTR 参照が異なる場合に発生する RE パッケージの配布での障害

RE にあった MTR とは異なる MTR を参照するリコメンデーション・エンジンに、新しいモデル・パッケージを配布すると、現行のユーザー・セッションがすべて終了し、そのセッション・データは古い MTR に同期化されます。これは、現行のセッションがすべて無効になることを意味します。

RE セッションがアクティブな場合に発生する RE パッケージの配布での障害

アクティブな RE セッションがある場合に、新しいパッケージを RE に配布すると、その直後の REAPI コールが失敗となる可能性があります。回避策はコールを再試行することです。

この回避策を実行するための Java コード例を次に示します（REAPI コールが指定されている try ブロックの後ろで例外を取得して、指定した 3 種類のエラーの発生を判断するチェックを実行し、3 種類のいずれかのエラーが検出された場合は REAPI メソッドを再起動します）。

```
filename: RetryTest.java

// Copyright (c) 2003 Oracle Corp
/*
 * This code snippet demonstrates a work-around
 * to overcome ORA-04068 error in calling REAPI
 * right after a new package is deployed
 */

import oracle.dmt.op.re.reapi.rt;
import java.lang.Long;
import java.sql.*;
import java.io.IOException;
```

```

/*
 * Class RetryTest
 * <P>
 */
public class RetryTest
{
    /*
     * main
     * @param args
     */
    public static void main(String[] args) throws ClassNotFoundException
    {
        REProxy proxy = REProxy.getProxy();
        String custID = "945";           // arbitrary, for demo only
        String sessionID = "101";        // arbitrary, for demo only
        TuningSettings tunings;
        FilteringSettings filters;
        IdentificationData idData;
        String[] m_catList = new String[1];
        RecommendationContent recContent;
        RecommendationList rec;

        try {
            proxy.createCustomerSession(custID, sessionID);

            // create settings data
            idData = IdentificationData.createSessionful(sessionID,
                Enum.User.CUSTOMER);
            idData.userID = "user1";           // arbitrary, for demo only
            tunings = new TuningSettings(Enum.DataSource.NAVIGATION,
                Enum.InterestDimension.INTEREST,
                Enum.PersonalizationIndex.HIGH,
                Enum.ProfileDataBalance.BALANCED,
                Enum.ProfileUsage.EXCLUDE);
            m_catList[0] = "socks";           // arbitrary, for demo only
            filters = new FilteringSettings();
            filters.categoryList = m_catList;
            filters.categoryMembership = Enum.CategoryMembership.EXCLUDE_LEAVES;
            filters.categoryFiltering = Enum.Filtering.ON;
            recContent = new RecommendationContent(Enum.Sorting.ASCENDING);

            rec = proxy.recommendTopItems(idData,
                10,
                tunings,
                filters,
                recContent);
            System.out.println("Done!");      // arbitrary, for demo only
            proxy.releaseProxy();
        } catch(BadDBConnectionException bdbe) {
            bdbe.printStackTrace();
        } catch (SQLException se) {
            if (isNewDeploy(se))
                return (recommendTopItems(idData, 10, tunings, filters, recContent));
            else
                System.err.println(se);
        } catch (IOException ioe) {
            System.err.println(ioe);
        } catch(BadDBConnectionException bdbe) {
            bdbe.printStackTrace();
        }
    }

    /*
     * isNewDeploy - find out if a brand new package is deployed

```

```

*/
private boolean isNewDeploy(SQLException e) {
    String st = e.getMessage();
    String functionName = "isNewDeploy";
    try {
        if (debugAll() || debugApi())
            m_log.logT(functionName + " SQLException catched: " + e.getMessage());
        if (st.indexOf("ORA-04068") >= 0)
            return true;
        else
            return false;
    } catch (NullPointerException npe) {
        return false;
    }
}
}

```

構成に関する問題と回避策

この項では、OracleAS Personalization の構成に関する問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- OracleAS Personalization に対する SSL の構成
- ネイティブ・キャラクタ・セットの制限
- 未選択の Personalization がコンポーネント構成オプションに表示されない
- RAC での作業には SID ではなく SERVICE_NAME の使用が必要
- 英語以外のロケールで構成スクリプトを起動できない

OracleAS Personalization に対する SSL の構成

この項では、SSL モードで OracleAS Personalization 管理 UI にアクセスできるように、[https](https://) を構成するために必要な手順を説明します。

Oracle Application Server Business Intelligence をインストールする場合は、オプション・ボックスを選択して Oracle Personalization を構成します。

「Personalization スキーマ作成ウィザード」を使用して、カスタマ・データベースに OracleAS Personalization スキーマを構成します。次の手順を実行します。

1. \$ORACLE_HOME/opmn/conf/opmn.xml を編集し、`<ias-component id=HTTP_Server>` 要素の `ssl-disabled` を検索します。起動モードを `ssl-disabled` から `ssl-enabled` に変更します。変更するとエントリは次のようにになります。

```
<data id="start-mode" value="ssl-enabled"/>
```

2. 次のコマンドを使用して OPMN を再ロードします。

```
opmnctl reload
```

3. 次の 2 つのポート番号が \$ORACLE_HOME/install/portlist.ini ファイルにリストされていることに注目してください。

```
Oracle HTTP Server Listen (SSL) port = 4444
Web Cache HTTP Listen (SSL) port = 4443
```

次の例では、SSL モードの Apache にポート 4444、SSL モードの Web Cache にポート 4443 を使用します。portlist.ini でポート値の設定を調整します。

4. ブラウザから `http://<host>:4000/webcacheadmin/` にアクセスし、Web Cache 管理 UI にログインします。

5. リスニング・ポートを追加します。

```
IP: ANY
Port 4443
Protocol: HTTPS
Wallet : $OH/webcache/wallets/default/
```

「Require Client-Side Certificate」ボックスは選択しないでください。

6. オリジナル・サーバーを追加します。

```
Hostname: <host>
Port: 4444
Routing: ENABLE
Capacity: 100
Failover Threshold: 5
Ping URL: /
Ping Interval (seconds): 10
Protocol: https
```

7. サイト定義を追加します。

```
Host Name: <host>
Port Number: 4443
HTTPS Only Prefix:
Client-Side Certificate: Not Required
Default Site: No
Create Alias from Site Name with/without www: No
```

8. サイトからサーバーへのマッピングを（最後のレコードの前に）追加します。

- a. サイト定義で構成した SSL をコンボ・ボックスで選択します。
- b. 構成した SSL Web サーバーを選択します。
- c. Unrestricted を除外します。

9. 画面右側の最上部にある「Apply Changes」をクリックします。

10. 「Cache Operations」の下の「Restart」ボタンをクリックします。

11. OracleAS Business Intelligence インスタンスの Enterprise Manager にログインします。

12. 「OC4J_BI_Forms」を選択して「Restart」をクリックします。

13. 「HTTP Server」を選択して「Stop」をクリックします。

14. 再度「HTTP Server」を選択して「Start」をクリックします。（サーバーを停止してから起動する必要があります。再起動で変更内容すべてが有効になるわけではありません。）

これで SSL が動作するようになります。https://<host>:4443/OP/Admin への接続を試みてください。

ネイティブ・キャラクタ・セットの制限

OracleAS Personalization の利用には、キャラクタセットとして UTF8 のみサポートされます。

未選択の Personalization がコンポーネント構成オプションに表示されない

Oracle Application Server Business Intelligence インストールで、OracleAS Personalization 管理サーブレットの選択を解除してインストールを実行した場合は、次の手順に従ってサーブレットを構成します。

1. OracleAS Personalization 管理 UI サーブレットが格納されている .ear ファイルを検索します。このファイルは、Oracle Application Server Business Intelligence インストールの ORACLE_HOME の下に、次の名前で格納されています。

```
$ORACLE_HOME/mp/web-app/op.ear.
```

Web ブラウザを起動する位置から .ear ファイルを参照できることを確認します。

2. OracleAS Personalization 管理 UI を構成する Oracle Application Server Business Intelligence インスタンスを管理している「Enterprise Manager」画面から、「OC4J_BI_Forms」コンポーネント・リンクをクリックします。
3. 「OC4J: OC4J_BI_Forms」ページの「アプリケーション」リンクをクリックします。
4. 「OC4J:OC4J_BI_Forms:Applications」ページの「EAR ファイルのデプロイ」リンクをクリックします。
5. 「J2EE アプリケーション」入力フィールドの「参照」ボタンをクリックして、手順 1 で参照した op.ear ファイルにナビゲートします。
 - a. 「アプリケーション名」フィールドに「OP」と入力します。
 - b. 親アプリケーションのデフォルトを選択します。
 - c. 「続行」ボタンをクリックします。
6. /OP および /redemo のデフォルトの URL マッピングは正確です。「終了」ボタンをクリックしてください (OracleAS Personalization 管理 UI では Single Sign On を使用しません。そのため、次のページの JAZN の構成は不要です。ここで「終了」をクリックします)。
7. Personalization スキーマ作成ウィザード (opconfig) を使用して、顧客データベース・スキーマを構成します。
8. Enterprise Manager を使用して OC4J_BI_Forms J2EE コンテナを再起動した後、OracleAS Personalization 管理 UI にログインします。

RAC での作業には SID ではなく SERVICE_NAME の使用が必要

OPCONFIG ウィザードは、tnsnames.ora ファイルの CONNECT_DATA レコードの SID を使用して Oracle に接続するため、RAC テスト・システムのスキーマを作成できませんでした。RAC の場合は、SID を SERVICE_NAME に変更する必要があります。

英語以外のロケールで構成スクリプトを起動できない

入力メソッドがオンの場合、英語以外の環境ではスクリプト opconfig.sh を起動できません。これは JDK 1.4.1 で発生する問題です。

構成ウィザードを開始する前に、JDK 1.4.2 をインストールし、JAVA_HOME を JDK 1.4.2 のインストール・ディレクトリに設定することで、この問題を回避できます。別の回避策として、入力メソッドをオフに切り替えてから構成ウィザードを開始する方法もあります。

管理に関する問題と回避策

この項では、OracleAS Personalization の管理に関する問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- JDBC ドライバ
- 顧客データベース
- パスワードの制限
- 混在できないデータベース言語とプログラミング言語
- OracleAS Personalization のホーム・ディレクトリ
- 変更された OP MTR の列
- OracleAS Personalization の高可用性

JDBC ドライバ

OracleAS Personalization のマニュアルでは、使用できる JDBC ドライバの種類に関する説明が省略されています。OracleAS Personalization リコメンデーション・エンジンを実行しているデータベースで動作している JDBC ドライバを使用できます。

顧客データベース

OracleAS Personalization には、Oracle Application Server に付属しているデータベースに加え、顧客データベースが必要です。顧客データベースは、Oracle9i リリース 1 (9.0.1) であることが必要です。

パスワードの制限

パスワードの暗号化および復号化のために、OracleAS Personalization ユーザーのパスワードには 2 つの制限があります。

- OracleAS Personalization ユーザーは、パスワードの末尾には空白を入力しないでください。
- ユーザー・パスワードは、標準的な Oracle の制限である 30 文字以下に制限されます。

混在できないデータベース言語とブラウザ言語

NLS_LANGUAGE によって、OracleAS Personalization メッセージの言語が決まります。OracleAS Personalization は、メッセージをブラウザ・セッション固有の言語に翻訳しません。これは、OracleAS Personalization 管理 UI は管理用の UI であり、そのユーザーはデータベース NLS_LANGUAGE に指定されている言語を理解できると想定して設計されているためです。

OracleAS Personalization のホーム・ディレクトリ

リリース 9.0.4 では、OracleAS Personalization のディレクトリが \$ORACLE_HOME/dmt から \$ORACLE_HOME/mp に移動しました。

変更された OP MTR の列

OP MTR の複数の表の列が VARCHAR2 (4000) 型から VARCHAR2 (1000 CHAR) に変更されました。変更されたのは、次の表の DESCRIPTION 列です。

- MTR_TAXONOMY
- MTR_CATEGORY
- MTR_HOTPICK_GROUP
- MTR_ITEM

また、これらの表すべての NLS_LENGTH_SEMANTICS は CHAR 型に設定されています。

OracleAS Personalization の高可用性

OracleAS Personalization Recommendation Engine Application Program Interface (REAPI) は、OracleAS Portal などの可用性の高い Web アプリケーションに埋め込むことができます。

ドキュメントの誤り

この項では、OracleAS Personalization ドキュメントの既知の誤りについて説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [『Oracle Application Server Personalization ユーザーズ・ガイド』の誤り](#)
- [プログラマーズ・ガイドの 9.1.1 ~ 9.1.2 項のコード・サンプルの欠落](#)
- [プログラマーズ・ガイドの B.3.2 項のコード・サンプルの欠落](#)

『Oracle Application Server Personalization ユーザーズ・ガイド』の誤り

マニュアルに記載されている http の入力によるログインは、かわりに https を入力することをお薦めしています。これは推奨事項であり、必須ではありません。http を入力してログインすると、セッションが保護されていないことを示す警告が表示されます (『SSL モード』も参照してください)。

プログラマーズ・ガイドの 9.1.1 ~ 9.1.2 項のコード・サンプルの欠落

『Oracle Application Server Personalization プログラマーズ・ガイド』の 9.1.1 項および 9.1.2 項のコード・サンプルが欠落しています。その項では、ファンクションの実行に必要な主な手順がリストされています。ファイル REBatchTest.java に、recommendTopItems と crossSellForItem の起動方法を示すサンプル・コードがあります。

ファイル REBatchTest.java は、ディレクトリ ORACLE_HOME/mp/reapi/batch/ にあり、OracleAS Personalization がインストールされているシステムで使用できます。

プログラマーズ・ガイドの B.3.2 項のコード・サンプルの欠落

『Oracle Application Server Personalization プログラマーズ・ガイド』の B.3.2 項のサンプル・プログラムは、サンプル・プログラムではありません。これは、プロパティ・ファイル batchtest.txt (B.3.1 項) の繰返しです。

B.3.2 項に必要なサンプル・プログラムは、ORACLE_HOME/mp/reapi/batch/ ディレクトリの REBatchTest.java ファイルに格納されています。このプログラムは OracleAS Personalization がインストールされているシステムで使用できます。

第VIII部

E-Business 統合の問題

第VIII部では、E-Business コンポーネントに関する問題について説明します。内容は次のとおりです。

- 第21章 「Oracle Application Server ProcessConnect」
- 第22章 「Oracle Workflow」

21

Oracle Application Server ProcessConnect

この章では、Oracle Application Server ProcessConnect（OracleAS ProcessConnect）に関する問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- テクノロジ・アダプタに関する問題と回避策
- アプリケーション・アダプタに関する問題と回避策
- Tuxedo 用の統合アダプタに関する問題と回避策
- モデリング・ツールとユーザー・インターフェースに関する問題と回避策
- D3L 使用時の契約の検証に関する問題と回避策
- デプロイに関する問題と回避策
- 別のメタデータ・リポジトリへの ProcessConnect 中間層の再関連付け
- サポートされていない XSD 構成メンバーに関する問題と回避策
- その他の既知の問題

テクノロジ・アダプタに関する問題と回避策

この項では、OracleAS ProcessConnect のテクノロジ・アダプタに関する問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- Oracle Database アダプタ : ポートの値
- Oracle Database アダプタ : 表定義の変更
- Oracle Database アダプタ : ネイティブ・イベント作成時の XML 解析エラー
- Oracle Database アダプタ : 同じ表名のスキーマを使用した相互作用の作成
- ファイル /FTP アダプタ : Microsoft FTP サーバーがサポートされていない
- 8.1.7 アプリケーション（スパーク）データベースを使用した Advanced Queuing アダプタ
- アダプタおよび変換時の NullPointerException エラー
- Oracle HTTP アダプタおよび Internet Information Server

Oracle Database アダプタ : ポートの値

Oracle Call Interface (OCI) 接続を使用する場合は、Oracle Database アダプタの配信チャネルにポートの値を指定する必要があります (Bug 3031166)。

説明

Oracle Database アダプタの配信チャネルに OCI 接続を指定し、ポートの値が空白の場合は、その配信チャネルを選択して相互作用を参照すると、エラーが発生します。

回避策

OCI 接続を使用する場合は、ポートに値が指定されていることを確認します。実際の値は使用されません。

Oracle Database アダプタ : 表定義の変更

Oracle Database アダプタは、実行中の表定義への変更をサポートしていません (Bug 3112202)。

説明

表定義の削除と再作成、または変更のために列が異なる場合は、相互作用に失敗します。

回避策

Oracle Database アダプタの相互作用で使用される表の列は、デプロイ後に変更しないでください。

Oracle Database アダプタ : ネイティブ・イベント作成時の XML 解析エラー

OUT 引数があり、パッケージ名のないストアド・プロシージャに対して相互作用を実行すると、ランタイム・エラーが発生します。OUT 引数用の XML が誤って移入されます (Bug 3359643)。

回避策

ストアド・プロシージャをパッケージ名の下に配置します。ストアド・プロシージャを使用して相互作用を作成します。

Oracle Database アダプタ : 同じ表名のスキーマを使用した相互作用の作成

インターフェース表のアダプタ交換プロトコルから読み取りレコードは使用できず、また同じ表名の 2 つのスキーマを設定することはできません。各スキーマに対して相互作用を作成しようとすると、2 番目の相互作用作成時に次のエラーが戻されます (Bug 3220416)。

Error -: AIP-12207: Failed while creating Interaction
Error -: AIP-16012: Parameter: adapter Exchange Protocol is unique for object Interaction

説明

OracleAS ProcessConnect では、表名を使用して相互作用名および Oracle レコード名が設定されます。2 番目の相互作用の作成が失敗する原因是、表名が同じであるためです。相互作用名と Oracle レコード名は、一意キー制約下では一意であることが必要です。

回避策

1. 2 番目の表にビューを設定します。
2. そのビューに基づいて相互作用を作成します。

ファイル/FTP アダプタ : Microsoft FTP サーバーがサポートされていない

OracleAS ProcessConnect 9.0.4 では、Microsoft FTP サーバーから戻される非主流の FTP 結果コードがファイル/FTP アダプタで認識されません。具体的には、Microsoft FTP サーバーは、NLST (ディレクトリの一覧表示)、RETR (ファイルの取得) および STOR (ファイルの挿入) などのコマンドの応答として結果コード 125 を戻します。ファイル/FTP アダプタでは、主流の結果コード 150 (ほとんどの FTP サーバー製品で使用) が想定されているため、結果コード 125 で応答している Microsoft FTP サーバー上にあるインバウンド・ディレクトリ内のファイルは検出されません。

8.1.7 アプリケーション (spo-ク) データベースを使用した Advanced Queuing アダプタ

8.1.7 アプリケーション (spo-ク) データベースを Advanced Queuing アダプタで使用する場合は、次のタスクを実行する必要があります。

1. テキスト・エディタを使用して次の構文をコピーし、ASCII ファイルに貼り付けます。

```
connect sys/password;
create function substrc(str in varchar2, i1 in number, i2 in number)
    return varchar2 is
begin
    return substr(str, i1, i2);
end;
/
create public synonym substrc for substrc;
grant all on substrc to public;
```
2. この ASCII ファイルを SQL 拡張子 (たとえば、substrc_patch.sql) を使用して保存します。
3. *password* を 8.1.7 アプリケーション・データベースの *sys* に対するパスワードに変更します。
4. SQL*Plus を使用し、8.1.7 アプリケーション・データベースに対してこの SQL スクリプトを実行します。

アダプタおよび変換時の NullPointerException エラー

OracleAS ProcessConnect では、構成パラメータのロギング・レベルがいくつか提供されています。すべての構成パラメータの名前の一部に、oracle.tip.DiagnosticLevel が含まれます。構成パラメータは tip.properties ファイル内にあります。このファイルには、Oracle Enterprise Manager の OracleAS ProcessConnect 中間層インスタンス・ページ下部にある「サーバー・プロパティ」ページ・リンクからアクセスできます (Bug 3173735)。

説明

oracle.tip.DiagnosticLevel パラメータがデバッグ・モード・ロギング・レベルに設定されている場合は、変換時に NullPointerException エラーが発生する場合があります。

回避策

該当する oracle.tip.DiagnosticLevel のパラメータ値をデバッグではなくエラーに設定します。

関連項目：「サーバー・プロパティ」ページの構成パラメータにアクセスする方法は、『Oracle Application Server ProcessConnect ユーザーズ・ガイド』の次の説明を参照してください。

- 第18章「Oracle Enterprise Managerを使用したシステム管理」

見出し：「Oracle Application Server ProcessConnect の監視タスクおよび管理タスク」

「サーバー・プロパティ」ページのオンライン・ヘルプにも、様々なレベルの `oracle.tip.DiagnosticLevel` 構成パラメータに関する説明があります。

Oracle HTTP アダプタおよび Internet Information Server

Oracle では、リリース 9.0.4 用の Oracle HTTP アダプタを使用した Microsoft Internet Information Server (IIS) の使用がサポートされています。このサポートは、インバウンド通信用の OracleAS Proxy Plugin for Microsoft IIS を使用することによって提供されます。

アプリケーション・アダプタに関する問題と回避策

この項では、次のアプリケーション・アダプタの設計時の構成に関する問題とその回避策について説明します。

- PeopleSoft 8 用の Oracle Application Server 統合アダプタ
- SAP R/3 用の Oracle Application Server 統合アダプタ
- Siebel 2000 用の Oracle Application Server 統合アダプタ
- J.D. Edwards OneWorld XE 用の Oracle Application Server 統合アダプタ

インストール時のライセンス登録

OracleAS ProcessConnect のインストーラでは、アプリケーション・アダプタのライセンスが正しく登録されません。

回避策

注意： 変数 `ORACLE_HOME` は、現在の `ORACLE_HOME` の絶対パスを示します。

1. 次のパスを組み込むように環境変数 `LD_LIBRARY_PATH` を設定します。

`ORACLE_HOME`/ip/adapters/lib

2. 次を実行します。

`ORACLE_HOME`/ip/adapters/bin/licreg

`ORACLE_HOME`/ip/adapters/config/acboip.lic

インストーラで CLASSPATH が正しく設定されない

OracleAS ProcessConnect のインストーラでは、アプリケーション・アダプタの設計時構成に対して `CLASSPATH` が正しく設定されません。

回避策

注意： `ORACLE_HOME` 変数はすべて Oracle ホームの実パスで置換してください。

1. *ORACLE_HOME/opmn/conf/opmn.xml* で、`<process-type id="OC4J_ProcessConnect" module-id="OC4J">` の下にある `<environment>` 要素の下に、次の XML セグメントを追加します。

```
<variable id="CLASSPATH" value="ORACLE_HOME/ip/adapters/lib/appadapters.jar" append="true"/>
<variable id="CLASSPATH" value="ORACLE_HOME/ip/adapters/lib/Connector.jar" append="true"/>
<variable id="CLASSPATH" value="ORACLE_HOME/ip/adapters/lib/Kernel.jar" append="true"/>
<variable id="CLASSPATH" value="ORACLE_HOME/ip/adapters/lib/SiebelDataBean.jar" append="true"/>
<variable id="CLASSPATH" value="ORACLE_HOME/ip/adapters/lib/SiebelTC_enu.jar" append="true"/>
<variable id="CLASSPATH" value="ORACLE_HOME/ip/adapters/lib/SiebelTcCommon.jar" append="true"/>
<variable id="CLASSPATH" value="ORACLE_HOME/ip/adapters/lib/SiebelTcOM.jar" append="true"/>
<variable id="CLASSPATH" value="ORACLE_HOME/ip/adapters/lib/psjoa.jar" append="true"/>
```

2. *ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_ProcessConnect/config/application.xml* で、最後のライブラリ・パスを次のように置換します。

正:

```
<!-- Comment the following element to use principals.xml -->
<library path="ORACLE_HOME/ip/config"/>
<principals path=".//principals.xml"/>

<log>
```

誤:

```
<!-- Comment the following element to use principals.xml -->
<library path="ORACLE_HOME/ip/config"/>
<library path="ORACLE_HOME/ip/adapters/lib/appadapters.jar"/>
<library path="ORACLE_HOME/ip/adapters/lib/Connector.jar"/>
<library path="ORACLE_HOME/ip/adapters/lib/Kernel.jar"/>
<library path= "/private/sabburi/midtier/ip/adapters/lib/SiebelDataBean.jar"/>
<library path="ORACLE_HOME/ip/adapters/lib/SiebelTC_enu.jar"/>
<library path="ORACLE_HOME/ip/adapters/lib/SiebelTcCommon.jar"/>
<library path="ORACLE_HOME/ip/adapters/lib/SiebelTcOM.jar"/>
<library path="ORACLE_HOME/ip/adapters/lib/psjoa.jar"/>
<principals path=".//principals.xml"/>
```

`<log>`

この結果、コメント行の下にある他のアダプタ・ライブラリが削除されます。

3. *ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_ProcessConnect/application-deployments/integration/orion-application.xml* で、次の太字の行を追加します。

```
<library path="ORACLE_HOME/lib/dms.jar"/>
<library path="ORACLE_HOME/jlib/uix2.jar"/>
<library path="ORACLE_HOME/jlib/rts2.jar"/>
<library path="ORACLE_HOME/jlib/ohw.jar"/>
<library path="ORACLE_HOME/jlib/regexp.jar"/>
<library path="ORACLE_HOME/jlib/share.jar"/>
<library path="ORACLE_HOME/lib/xmlparserv2.jar"/>
<library path="ORACLE_HOME/ip/lib/ip.jar"/>
<library path="ORACLE_HOME/rdbms/jlib/xsu12.jar"/>
<library path="ORACLE_HOME/ip/lib/chartbuilder.jar"/>
<library path="ORACLE_HOME/ip/adapters/lib/legacyadapters.jar"/>
<library path="ORACLE_HOME/ip/adapters/lib/appadapters.jar"/>
<library path="ORACLE_HOME/ip/lib/xdb_g.jar"/>
<library path="ORACLE_HOME/jlib/gss-1_2.zip"/>
<principals path="principals.xml"/>
```

Tuxedo 用の統合アダプタに関する問題と回避策

この項では、Tuxedo 用の Oracle Application Server 統合アダプタに関する問題とその回避策について説明します。このアダプタは、OracleAS ProcessConnect で使用可能なレガシー・アダプタです。この項の内容は次のとおりです。

- [Oracle Connect の問題](#)
- [Oracle Connect へのメタデータのインポート](#)

Oracle Connect の問題

Oracle Connect では、次の問題が発生します。

- 文字列フィールドが NULL で終了せず、埋め込まれる。
- 配列にカウンタが含まれていない。
- 大規模な Field Manipulation Language (FML) ファイルに依存しているサービスでエラーが返される。

パッチ情報については、Bug 3212302 を参照してください。

Oracle Connect へのメタデータのインポート

Oracle Studio Import Metadata パースペクティブで、メタデータを Field Manipulation Language (FML) ファイルから Oracle Connect にインポートすると、次の問題が発生します。

- 生成された XML メタデータで文字列フィールドが正しく定義されていない。
- 配列にカウンタが含まれていない。

パッチ情報については、Bug 3212314 を参照してください。

モデリング・ツールとユーザー・インターフェースに関する問題と回避策

この項では、OracleAS ProcessConnect のモデリング・ツールとユーザー・インターフェースに関する問題について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [管理タブのハング](#)
- [OC4J_ProcessConnect インスタンスの起動、停止および再起動](#)
- [セッション・タイムアウト](#)
- [Netscape のポップアップ・ウィンドウに関する問題](#)
- [ユーザー・インターフェース操作の速度が遅い](#)
- [複数ユーザーによる同一オブジェクトの更新](#)

管理タブのハング

OracleAS ProcessConnect のユーザー・インターフェース・ツールで管理タブをクリックすると、システムがハングする場合があります (Linux ではいくつかの事例が確認されています)。

回避策

次のファイルをコピーします (つまり、既存のファイルを置換します)。

```
"$ORACLE_HOME/ip/install/administration.uix" を "$ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_ProcessConnect/
applications/integration/ip/pages/adm inistration/administration.uix" へ
```

ただし、これによって、Enterprise Manager へのリンクがなくなります。Enterprise Manager に接続するには、別のブラウザ・ウィンドウを使用して、『Oracle Application Server ProcessConnect ユーザーズ・ガイド』の 18-5 ページに指定され、ここで繰り返されている URL を入力します。

Oracle Enterprise Manager Application Server Control Console から OracleAS ProcessConnect にアクセスする手順は、次のとおりです。

次の URL に進みます。

`http://hostname:port/`

ここで、

`hostname` は、OracleAS ProcessConnect Middle-Tier インスタンスがインストールされているホストの名前です。

`port` は、OracleAS ProcessConnect をインストールしたときに割り当てた番号です。このポート番号は、インストールの終了時に表示されます。

OC4J_ProcessConnect インスタンスの起動、停止および再起動

ProcessConnect Enterprise Manager のホームページにある「すべて起動」、「すべて停止」、「すべて再起動」の各ボタンは、OC4J_ProcessConnect インスタンスに影響を与えません (Bug 3167662)。

回避策

OC4J_ProcessConnect を個別に起動、停止および再起動します。

セッション・タイムアウト

デフォルトのセッション・タイムアウトは、`web.xml` ファイルに指定されており、構成可能です。

説明

セッション・タイムアウトを短くすると、セッション・オブジェクトが廃棄され、無効なページになります。

`web.xml` ファイルの場所は、次のとおりです。

`$ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_ProcessConnect/applications/integration/ip/WEB-INF/web.xml`

回避策

ブラウザのタイムアウト後に、ユーザー・インターフェース・ツールにログインします。OracleAS ProcessConnect のホームページに進み、タイムアウトしたページに達するまでタブをクリックします。`web.xml` に次の行を追加してセッション・タイムアウトを構成し、タイムアウト前のセッション継続時間を分単位で 120 にします。

```
<session-config>
<session-timeout>120</session-timeout>
</session-config>
```

Netscape のポップアップ・ウィンドウに関する問題

Netscape 4.78 および 4.79 で、ポップアップ・ウィンドウに問題が発生する場合があります。たとえば、イベント本体要素を作成し、データ型を選択するために懐中電灯アイコンをクリックすると問題が発生します。

回避策

Netscape 4.8、Netscape 7.0 または Internet Explorer 5.5 にアップグレードします。

ユーザー・インターフェース操作の速度が遅い

ユーザー・インターフェースの操作中に、ブラウザがハングしているように見える場合があります。

説明

一部のユーザー・インターフェースの操作では、完了まで数分かかる場合があります。たとえば、数百のデータ型を含む大きな XSD のインポートでは、最大 10 分程度かかる場合があります。操作の完了を待機してください。

複数ユーザーによる同一オブジェクトの更新

複数のユーザーが、リポジトリを同時にエクスポートすることはできません。

説明

現在のリリースでは、1人のユーザーがオブジェクトを表示しているときに、別のユーザーがそのオブジェクトを更新すると、キャッシュがデータベースにフラッシュされるまで、最初のユーザーはそのオブジェクトの最新バージョンを参照できません。同時更新の場合は、最後の更新が有効となります。

D3L 使用時の契約の検証に関する問題と回避策

AIP-17301 「The inbound interaction spec type associated with the translator {0} must have a parameter value that is associated with an event body element of a native event type」 エラーが戻された場合は、次を実行します (Bug 3042640)。

1. デザイン・リポジトリの所有者 (ip) で SQL*Plus にログインします。
2. 次のコマンドを発行します。

```
update TIP_ADAPTERPARAMETER_T
  set ISMANDATORY = 'N'
  where NAME = 'Namespace' and
    DESCRIPTION like 'XSD%';
```

3. 変更をコミットします。

WebIV の Note # 263536.1 を参照してください。

デプロイに関する問題と回避策

デプロイ時に、モデリング・ツールは、既存の構成が静止するのを待機してから新規の構成をデプロイします。静止には、長時間かかる場合があります。

説明

静止に 3 ~ 4 分以上かかる場合は、2 つの可能性があります。

1. 現在アクティブな構成が、メッセージを処理中です。
または
2. アクティブな構成が、外部イベントを待機中です。

回避策

調整レポートに未処理の調整がなく、予期される外部イベントがない場合は、構成の静止を中断できます。

別のメタデータ・リポジトリへの ProcessConnect 中間層の再関連付け

次の手順は、J2EE インストールに対してのみ有効です (J2EE より後のインストールには無効です)。

1. 次のファイルを `IASSchema=false` となるように編集します。

```
$ORACLE_HOME/ip/config/ConfigTool.properties
```

他のすべてのプロパティは「`true`」に設定してください。

2. コマンド・プロンプトで `ConfigTool` を実行し、次のように正しい環境変数を設定します。

```
java oracle.tip.install.ConfigTool oracle_home null ip_passwd wf_passwd dbhost dbport
dbservicename null null null null null
```

ここで、

`oracle_home` は、このインストールの現在の Oracle ホームです。

`ip_passwd` は、新規データベース内の `ip` キーワードに対するパスワードです。

`wf_passwd` は、新規データベース内の `owf_mgr` キーワードに対するパスワードです。

`dbhost` は、新規データベースに対するホスト名です。

`dbport` は、新規データベースに対するポートです。

`dbservicename` は、新規データベースに対するサービス名です。

(注意: パラメータは合計で 12 個あります。)

再関連付けを終了した後は、『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』にある、OracleAS ProcessConnect およびワークフローのシードとデータを新しいメタデータ・リポジトリに移行する際の再関連付けに関する項を参照してください。

サポートされていない XSD 構成メンバーに関する問題と回避策

この項では、サポートされていない追加の XSD 構成メンバーについて説明します。この項は、『Oracle Application Server ProcessConnect ユーザーズ・ガイド』の付録 A 「ネイティブ書式およびトランスレータ」を補足します。この項の内容は次のとおりです。

- ワイルドカード要素を含む `complexType`
- ネストされた置換グループ
- 匿名メンバーのカーディナリティ
- `type="xs:anySimpleType"` のメンバー

ワイルドカード要素を含む `complexType`

ワイルドカード要素 (すべてのタグ) を含む `complexType` には、他のメンバーを指定できません。 `WildcardMember` が、所有するデータ型の唯一のメンバーでない場合は、実行時エラーが発生します (Bug 3112007)。ワイルドカードが制限されている場合は、`complexContent` 拡張子のある実行時エラーが発生します (Bug 3115819)。

説明

XMLSchema では、ワイルドカードのメンバー要素は、それが最後に発生するメンバーである場合、どの複合型にも許容されます。次に例を示します。

```
<xs:complexType name="Colour">
  <xs:sequence>
    <xs:element name="saturation" type="xs:string"/>
    <xs:any processContents="skip" maxOccurs="2"/>
  </xs:sequence>
</xs:complexType>
```

複数の要素と 1 つのワイルドカードを使用して XSD でタイプを定義する別の方には、`complexContent` 拡張子と制限を使用する方法があります。単一のワイルドカード・メンバーでタイプが定義されている場合、そのタイプは `complexContent` 拡張子のベースとしては使用できません。これは、ベースのワイルドカードに加えて、拡張タイプで指定した追加のメンバーでタイプを指定したことと同等なためです。同様に、拡張子によって導出された `complexContent` タイプには、そのベース型が空白でないかぎり、ワイルドカード・メンバーを含めることはできません。

サポートされない場合:

```
<xs:complexType name="Colour1">
  <xs:sequence>
    <xs:any processContents="skip" maxOccurs="1"/>
  </xs:sequence>
</xs:complexType>

<xs:complexType name="Colour2">
  <xs:complexContent>
    <xs:extension base="Colour1">
      <xs:sequence>
        <xs:element name="hue" type="xs:string"/>
      </xs:sequence>
    </xs:extension>
  </xs:complexContent>
</xs:complexType>

<xs:complexType name="Colour3">
  <xs:complexContent>
    <xs:extension base="Colour2">
      <xs:sequence>
        <xs:element name="saturation" type="xs:string"/>
        <xs:any processContents="skip" maxOccurs="2"/>
      </xs:sequence>
    </xs:extension>
  </xs:complexContent>
</xs:complexType>
```

OracleAS ProcessConnect でのワイルドカード・メンバーに対するサポートは、限定されたサポートのみです。このため、ワイルドカード・メンバーを含む `complexType` に、他のメンバー要素または属性を含めることはできません。また、`complexContent` 拡張子のベースとして使用されているタイプのワイルドカード・メンバーに対するサポート、および導出された `complexContent` タイプのワイルドカード・メンバーに対するサポートはありません。前述の例では、`Colour1` は単独で ProcessConnect においてサポートされます。`Colour2` は、そのベース型にワイルドカードが含まれているため、サポートされません。`Colour3` は、ワイルドカードと別のメンバーの他にワイルドカード・メンバーを含んだ `Colour1` から、2 つのステップで導出されているためサポートされません。

次の例では、サポートされない構造体が削除されています。

サポートされる場合:

```
<xs:complexType name="Colour1">
  <xs:sequence>
    <xs:any processContents="skip" maxOccurs="1"/>
  </xs:sequence>
</xs:complexType>
```

サポートされないワイルドカードの構造体は、設計時には検出されませんが、実行時には失敗します (AIP-10403 「起動エンジンは、ステップの実行後、ビジネス・イベントを呼び出す際に異常終了しました。」)。ネイティブなイベントやビジネスのデータ型を作成する前に、サポートされないワイルドカードの構造体をすべて XSD から削除する必要があります。

回避策

必要なワイルドカードの内容を把握している場合は、その内容でワイルドカード・メンバーを置換できます。

一般的な回避策は、次のようにワイルドカード・メンバーを含むグループを定義してから、元のタイプのワイルドカードをそのグループへの参照に置き換えることです。

```

<xs:complexType name="Colour">
  <xs:sequence>
    <xs:element name="hue" type="xs:string"/>
    <xs:group ref="wild"/>
  </xs:sequence>
</xs:complexType>

<xs:group name="wild">
  <xs:sequence>
    <xs:any processContents="skip" maxOccurs="2"/>
  </xs:sequence>
</xs:group>

```

ネストされた置換グループ

ネストされた置換グループによって実行時エラーが発生します (Bug 3112030)。

説明

XMLSchema では、1 つの置換グループの見出しだある要素が、別のグループのメンバーになれます。ProcessConnect では、置換グループに別の置換グループを含めることはできません。ネストされた置換グループは、設計時には検出されませんが、実行時エラーが発生します。これを避けるには、ネイティブなイベントやビジネスのデータ型を作成する前に、すべてのネストされた置換グループを XSD から削除する必要があります。

次の例の `WritingImplement` は、トップレベルの置換グループです。この置換グループには、`Pen` と `Pencil` の 2 つのメンバーがあります。`Pencil` は、`DisposablePencil` と `MechanicalPencil` を含む独立した置換グループの見出しあります。

次の例は、`Pencil` が置換グループ `WritingImplement` 内にあるため、機能しません。

サポートされない場合:

```

<xs:element name="subsggrp">
  <xs:complexType>
    <xs:sequence>
      <xs:element ref="WritingImplement"/>
      <xs:element ref="Pen"/>
      <xs:element ref="Pencil"/>
    </xs:sequence>
  </xs:complexType>
</xs:element>

<xs:element name="WritingImplement" abstract="true"/>

<xs:element name="Pen" substitutionGroup="WritingImplement" type="penType"/>

<xs:element name="Pencil" substitutionGroup="WritingImplement"/>
<xs:element name="MechanicalPencil" substitutionGroup="Pencil" type="pencilType"/>
<xs:element name="DisposablePencil" substitutionGroup="Pencil" type="pencilType"/>

```

回避策

ネストされた置換グループを、そのグループのメンバーおよび元のグループ・メンバーすべてを含む、単一のグループにフラット化します。ネストされた置換グループへの各参照は、フラット化されたグループへの参照に置換されます（次の例では太字で示します）。次の例では、置換グループ **Pencil** のメンバーが **WritingImplement** に移動します。**Pencil** への参照は、**WritingImplement** への参照に変更されます。ただし、**Pen** は別の置換グループの見出しではないため、**Pen** への参照は変更されません。

サポートされる場合：

```
<xs:element name="subsgrp">
  <xs:complexType>
    <xs:sequence>
      <xs:element ref="WritingImplement"/>
      <xs:element ref="Pen"/>
      <xs:element ref="WritingImplement"/>
    </xs:sequence>
  </xs:complexType>
</xs:element>

<xs:element name="WritingImplement" abstract="true"/>

<xs:element name="Pen" substitutionGroup="WritingImplement" type="penType"/>

<xs:element name="Pencil" substitutionGroup="WritingImplement" type="pencilType"/>
<xs:element name="MechanicalPencil" substitutionGroup="WritingImplement" type="pencilType"/>
<xs:element name="DisposablePencil" substitutionGroup="WritingImplement" type="pencilType"/>
```

匿名メンバーのカーディナリティ

`maxOccurs` が無制限の匿名選択グループによって、実行時エラーが発生します (Bug 3133105)。

説明

OracleAS ProcessConnect は、実行時にカーディナリティのある匿名メンバーによって失敗します。この構造体は設計時には検出されないため、インポートする前に、すべてのカーディナリティのある匿名メンバーを XSD から削除する必要があります。削除しないと、実行時エラーが発生します。匿名メンバーは、ネストされた選択グループまたは順序グループ、および再使用可能なグループへの参照から作成されます。匿名メンバーに、1 以外の値に設定された `minOccurs` または `maxOccurs` がないかぎり、XSD 内でエラーが発生します。

次の例にある、ネストされた選択グループ、ネストされた順序グループ、およびグループ参照は、それにカーディナリティがあるためすべて無効です。

サポートされない場合：

```
<xs:complexType name="Document">
  <xs:sequence>
    <xs:choice minOccurs="0" maxOccurs="unbounded">
      <xs:element name="text" type="xs:string"/>
      <xs:sequence minOccurs="1" maxOccurs="2">
        <xs:element name="warning" type="xs:string"/>
        <xs:element name="code" type="xs:int"/>
      </xs:sequence>
    </xs:choice>
    <xs:group ref="mygroup minOccurs="0"/>
  </xs:sequence>
</xs:complexType>
```

回避策

現在、このサポートされない構造体に対する回避策はありません。

type="xs:anySimpleType" のメンバー

anySimpleType に、facetValue が NULL の whiteSpace ファセットがある場合は、実行時エラーが発生します (Bug 3133329)。

説明

名前空間 <http://www.w3.org/2001/XMLSchema> 内にある XMLSchema のスカラー型 anySimpleType は、すべてのスカラー型の導出に必要なベース型です。スキーマでは、このベース型は要素のタイプまたはスカラー型のベース型としても直接使用できます。

サポートされる (whiteSpace の値が設定されている) 場合:

```
<xsd:simpleType name="ID">
  <xsd:restriction base="xsd:anySimpleType">
    <xsd:whiteSpace value="preserve">
  </xsd:restriction>
</xsd:simpleType>
```

サポートされない (whiteSpace の値が設定されていない) 場合:

```
<xsd:complexType name="Comment">
  <xsd:attribute name="severity" type="xsd:anySimpleType">
</xsd:complexType>

<xsd:simpleType name="SKU">
  <xsd:restriction base="xsd:anySimpleType">
    <xsd:length value="10">
  </xsd:restriction>
</xsd:simpleType>
```

OracleAS ProcessConnect では、インスタンスに表示されるすべてのスカラー型に、whiteSpace ファセットの値を指定する必要があります。anySimpleType にはこのファセットに対する値がないため、メンバーのタイプとして直接使用することはできません。導出されたタイプで whiteSpace ファセットの値が宣言されている場合は、anySimpleType を別の simpleType のベース型として使用できます。前述の例にある Comment は、その中にタイプが anySimpleType の属性が含まれているため、使用できません。ID は anySimpleType から導出されますが、whiteSpace の値を指定するため有効です。SKU は anySimpleType から直接導出され、whiteSpace の値を提供しないため使用できません。

回避策

anySimpleType を別のスカラー型のベースとして使用する場合は、導出されたタイプに whiteSpace ファセットを追加します。次のように、タイプ SKU を変更します。

```
<xsd:simpleType name="SKU">
  <xsd:restriction base="xsd:anySimpleType">
    <xsd:length value="10">
    <xsd:whiteSpace value="preserve">
  </xsd:restriction>
</xsd:simpleType>
```

タイプが anySimpleType の要素については、タイプを string に変更します。Comment は、次のようにになります。

```
<xsd:complexType name="Comment">
  <xsd:attribute name="severity" type="xsd:string">
</xsd:complexType>
```

その他の既知の問題

OracleAS ProcessConnect における既知の問題は、次のとおりです。

- シード済の相互作用に対してネイティブなイベント型を作成すると、失敗します。ユーザーには警告されません (Bug 2815475)。
- データ定義記述言語 (D3L) 定義にタイプ `termstring` のフィールドが含まれており、`endchar` 属性の文字がネイティブなワイヤ・メッセージ (インパウンド変換用) にない場合は、D3L パーサーがスピンし、Java `OutOfMemoryError` が発生します (Bug 3076754)。

22

Oracle Workflow

この章では次の内容について説明します。

- 構成に関する問題と回避策
- 管理に関する問題と回避策
- ドキュメントの誤り

構成に関する問題と回避策

この項では、Oracle Workflow の構成に関する問題とその回避策について説明します。

Oracle Application Server および Oracle E-Business Suite の Oracle Workflow

Oracle E-Business Suite データベースに、スタンドアロンの Oracle Workflow サーバーをインストールしないでください。Oracle Application Server 10g (9.0.4) で使用できる Oracle Workflow のバージョン、またはこのバージョンの Oracle Workflow に依存している Oracle Application Server のコンポーネントを使用する場合は、Oracle Workflow サーバーを、Oracle E-Business Suite のインスタンスには使用しないデータベースにインストールする必要があります。

Oracle Application Server 10g (9.0.4) を Oracle E-Business Suite とともに実装する場合、Oracle Workflow Configuration Assistant は、そのデータベースにスタンドアロン・バージョンの Oracle Workflow サーバーをインストールしません。かわりに、Oracle E-Business Suite に埋め込まれている Oracle Workflow サーバーのバージョンは、継続して使用できます。

Oracle Application Server Metadata Repository 10g (9.0.4) を Oracle E-Business Suite が使用しているデータベースにインストールする場合、Oracle Workflow Configuration Assistant は、そのデータベースにスタンドアロン・バージョンの Oracle Workflow サーバーをインストールしません。かわりに、Oracle E-Business Suite に埋め込まれている Oracle Workflow サーバーのバージョンは、継続して使用できますが、Oracle Application Server の機能の一部が制限される場合があります。

Oracle Workflow コンポーネントのバージョン

使用するデータベースにインストールされた Oracle Workflow サーバー・コンポーネントのバージョンは、Oracle Workflow スキーマも含めて、使用する Oracle Workflow 中間層コンポーネントのバージョンと一致する必要があります。つまり、Oracle Workflow リリース 2.6.3 を使用する場合は、Oracle Application Server 10g (9.0.4) で使用できる Oracle Workflow サーバーと中間層コンポーネントの両方をリリース 2.6.3 のコンポーネントにする必要があります。

Oracle Workflow リリース 2.6.2 がインストールされている既存の Oracle9i Application Server リリース 2 (9.0.2) のインフラストラクチャ・データベースを使用する場合は、そのデータベースを Oracle Application Server 10g (9.0.4) の中間層のホームで使用する前に、Oracle Workflow サーバーのインストールをリリース 2.6.3 にアップグレードする必要があります。Oracle Workflow サーバーのインストールをリリース 2.6.3 にアップグレードするには、「アップグレード」オプションを指定して、Oracle Workflow Configuration Assistant を Oracle Application Server 10g (9.0.4) の中間層のホームにある wf サブディレクトリから実行します。

注意： 既存の Oracle Workflow サーバーのインストールをアップグレードするために、Oracle Application Server Repository Creation Assistant (OracleAS RepCA) を使用しないでください。適切に Oracle Workflow リリース 2.6.3 にアップグレードするには、Oracle Workflow Configuration Assistant を使用します。

Oracle Workflow Manager の構成

Oracle Workflow の管理機能や Java ベースの Workflow Notification Mailer も含め、Oracle Workflow Manager コンポーネントを Oracle Enterprise Manager Application Server Control 内で使用する場合は、Workflow Configuration Assistant を実行して Oracle Workflow Manager を構成します。

- Oracle Content Management Software Development Kit の CD から Oracle Workflow をインストールすると、Oracle Universal Installer によって Workflow Configuration Assistant が自動的に起動され、Oracle Workflow Manager が自動的に構成されます。
- Oracle Workflow のファイルがインストールされている Oracle ホームから Workflow Configuration Assistant を手動で実行する場合は、最初に Workflow Configuration Assistant のスクリプトを編集して、Oracle Application Server インスタンスおよび使用する Oracle Workflow インストールが常駐するデータベースを指定するインストール・パラメータを設定する必要があります。この情報は、Workflow Configuration Assistant が Oracle Workflow Manager の情報を Oracle Enterprise Manager Application Server Control の targets.xml ファイルに構成するために必要です。

手動による Workflow Configuration Assistant の実行中に、Oracle Workflow Manager を構成する場合は、次のディレクトリで Workflow Configuration Assistant のスクリプトを編集します。

- UNIX の場合 : \$ORACLE_HOME/wf/install/wfinstall.csh
- Windows NT の場合 : %ORACLE_HOME%\wf\install\wfinstall.bat

テキスト・エディタでスクリプトを開き、次のような行を検索します。

```
... repository.jar" WorkflowCA /wkdir <workflow_directory> /orahome <oracle_home> /ospath
$PATH
```

次に例を示します。

```
... repository.jar" WorkflowCA /wkdir /d1/iasinstall/m21pw1/wf /orahome
/d1/iasinstall/m21pw1 /ospath $PATH
```

このスクリプトを編集し、/wkdir、/orahome および /ospath の各パラメータの後に Oracle Workflow Manager に必要なパラメータを追加します。

```
... repository.jar" WorkflowCA /wkdir <workflow_directory> /orahome
<oracle_home> /ospath $PATH /iasname <schema_name.machine_name> /iasmachine <machine_name>
/iasport <port_number> /iassid <database_SID> /jdbcconnnode <connect_string>
/fileupdate true
```

次のようにパラメータ値を指定します。

- /iasname - 使用する Oracle Application Server インスタンスの名前。次の書式で指定します。
schema_name.machine_name
- /iasmachine - 使用する Oracle Application Server インスタンスのホスト名。
- /iasport - Oracle Workflow キーマが常駐するデータベースのデータベース・リスナーのポート番号。
- /iassid - Oracle Workflow がインストールされているデータベースのシステム識別子 (SID)。
- /jdbcconnnode - リモート・データベースにアクセスするための JDBC 接続識別子。次の書式で指定します。*host:port:sid*
- /fileupdate - Oracle Enterprise Manager Application Server Control の targets.xml ファイルを更新するためには、このパラメータの値を *true* に指定する必要があります。

スクリプトへの変更を保存し、次のコマンドを使用して Workflow Configuration Assistant を起動します。

- UNIX の場合 :

```
$ORACLE_HOME/wf/install/wfinstall.csh
```

- Windows NT の場合 :

```
%ORACLE_HOME%\wf\install\wfinstall.bat
```

Oracle Workflow Configuration Assistant のウィンドウが表示されたら、Workflow Notification Mailer を実行する場合に必要な追加のパラメータも含めて、残りの構成パラメータを入力します。詳細は、インストレーション・マニュアルを参照してください。

Workflow Configuration Assistant のサイレント・モードでの実行

Workflow Configuration Assistant を手動で起動する場合は、サイレント・モードでの実行を選択できます。そのためには、最初にスクリプトを編集し、使用するすべての構成パラメータを入力します。この場合は、すべての必須パラメータと同様に、使用する機能の条件によって必要となるパラメータも指定する必要があります。

次のディレクトリで、Workflow Configuration Assistant のスクリプトを編集します。

- UNIX の場合 : \$ORACLE_HOME/wf/install/wfinstall.csh
- Windows NT の場合 : %ORACLE_HOME%\wf\install\wfinstall.bat

テキスト・エディタでスクリプトを開き、次のような行を検索します。

```
... repository.jar" WorkflowCA /wkdir <workflow_directory> /orahome
<oracle_home> /ospath $PATH
```

次に例を示します。

```
... repository.jar" WorkflowCA /wkdir /d1/iasinstall/m21pw1/wf /orahome
/d1/iasinstall/m21pw1 /ospath $PATH
```

このスクリプトを編集し、/wkdir、/orahome および /ospath の各パラメータの後に追加のパラメータを追加します。

```
... repository.jar" WorkflowCA /wkdir <workflow_directory> /orahome
<oracle_home> /ospath $PATH /wfacct <workflow_schema> /
wfpasswd <workflow_schema_password> /syspasswd <SYS_password> /instype
<installation_type> /oraid <database_SID> /constr <connection_string>
```

サイレント・モードで Workflow Configuration Assistant を実行するには、次の必須パラメータをスクリプトに含める必要があります。

- /wkdir - 使用する Oracle ホーム・ディレクトリ内の Oracle Workflow ディレクトリ。デフォルトのディレクトリは、次のとおりです。\$ORACLE_HOME/wf
- /orahome - 使用する Oracle ホーム・ディレクトリ。
- /wfacct - 使用する Oracle Workflow データベース・アカウントのユーザー名。新規インストールの場合、デフォルトの Workflow アカウントは owf_mgr です。
- /wfpasswd - 使用する Oracle Workflow データベース・アカウントのパスワード。
- /syspasswd - 使用する SYS パスワード。詳細については、Oracle DBA に連絡してください。

注意： Oracle Workflow Configuration Assistant をサイレント・モードで実行するために、これらのパスワードをスクリプトに入力する場合は、必ずファイルを保護し、この情報にアクセスできるのは許可された管理者のみにしてください。

- /instype - Oracle Workflow を新規インストール、または Oracle Workflow リリース 2.6.3 を再インストールする場合は、Install を指定します。Oracle Workflow リリース 2.6.0、リリース 2.6.1 またはリリース 2.6.2 の既存のインストールをアップグレードする場合は、Upgrade を指定します。Oracle Workflow の既存のインストールに言語をロードする場合は、"add language" を指定します。
- /nlsopt - /instype パラメータに Add language を指定した場合は、追加する言語の言語コードで /nlsopt パラメータを指定する必要があります。Oracle Workflow Server は、Oracle Application Server がサポートする次の言語をサポートしています。
 - AR - アラビア語
 - PTB - ポルトガル語（ブラジル）
 - FRC - フランス語（カナダ）
 - CS - チェコ語
 - DK - デンマーク語
 - NL - オランダ語
 - US - 英語
 - SF - フィンランド語
 - F - フランス語
 - D - ドイツ語
 - EL - ギリシャ語

- IW - ヘブライ語
- HU - ハンガリー語
- I - イタリア語
- JA - 日本語
- KO - 韓国語
- ESA - スペイン語 (南米)
- N - ノルウェー語
- PL - ポーランド語
- PT - ポルトガル語
- RO - ルーマニア語
- RU - ロシア語
- ZHS - 簡体字中国語
- SK - スロバキア語
- E - スペイン語
- S - スウェーデン語
- TH - タイ語
- ZHT - 繁体字中国語
- TR - トルコ語
- /orasid - Oracle Workflow がインストールされているデータベースのシステム識別子 (SID) または TNS 名。
- /constr - Oracle Workflow がインストールされているデータベースの接続文字列。

また、次の追加パラメータを指定することによって、各パラメータに対応する機能を使用できます。

- /tablespace - Oracle Workflow データベース・アカウントに割り当てる有効な表領域名。このパラメータを指定しない場合、新規インストールの Oracle Workflow データベース・アカウントに対するデフォルトの表領域は USERS です。このパラメータは、Oracle Workflow の新規インストールを実行している場合のみ有効です。アップグレード中に Oracle Workflow の表領域の変更はできません。
- /debug - Workflow Configuration Assistant によってデバッグ情報を workflow.log ファイルに書き込む場合は、true を指定します。記録しない場合は、false を指定します。
- Oracle Workflow ディレクトリ・サービスとして Oracle Internet Directory と統合する場合は、次のパラメータを指定します。
 - /ldaphost - 使用する Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) ディレクトリが常駐するホストの名前。
 - /ldapport - ホスト上のポート。
 - /ldapuser - LDAP サーバーへの接続に使用される LDAP ユーザー・アカウント。このユーザー名には書き込み権限を指定し、LDAP ディレクトリにバインドする必要があります。次に例を示します。cn=orcladmin
 - /ldapopwd - LDAP ユーザー・アカウントのパスワード。
 - /ldaplogbase - その下に変更ログが格納される LDAP ノード。次に例を示します。cn=changelog
 - /ldapuserbase - その下にユーザー・レコードがある LDAP ノード。次に例を示します。cn=Base, cn=OracleSchemaVersion

- Oracle Workflow Manager を使用する場合は、次のパラメータを指定します。
 - /iasname - 使用する Oracle Application Server インスタンスの名前。次の書式で指定します。
schema_name.machine_name
 - /iasmachine - 使用する Oracle Application Server インスタンスのホスト名。
 - /iasport - Oracle Workflow シキーマが常駐するデータベースのデータベース・リスナーのポート番号。
 - /iassid - Oracle Workflow がインストールされているデータベースのシステム識別子 (SID)。
 - /jdbcconnnode - リモート・データベースにアクセスするための JDBC 接続識別子。次の書式で指定します。host:port:sid
 - /fileupdate - Oracle Enterprise Manager Application Server Control の targets.xml ファイルを更新するためには、このパラメータの値を true に指定する必要があります。
- Workflow Notification Mailer を使用する場合は、次のパラメータを指定します。これらのパラメータを指定する場合は、Oracle Workflow Manager のパラメータも指定する必要があることに注意してください。
 - /mailserver - インバウンドの Internet Message Access Protocol メール・サーバーの名前。
 - /mailuser - 通知メールが電子メールの送受信に使用するメール・アカウントのユーザー名。
 - /mailhtml - Oracle HTTP Server で Oracle Workflow に定義された Web エージェントを識別するベースの URL。HTML エージェントは、次の書式で指定する必要があります。

`http://<server.com:portID>/pls/wf`

<server.com:portID> は、使用する Web リスナーがリクエストを受け入れるサーバーと TCP/IP のポート番号を示します。

 - /mailhost - アウトバウンドの SMTP メール・サーバーの名前。
 - /mailreply - 着信メッセージを受信する電子メール・アカウントのアドレスで、このアドレスには、通知の応答が送信されます。

スクリプトへの変更を保存し、次のコマンドを使用して Workflow Configuration Assistant を起動します。

- UNIX の場合：
`$ORACLE_HOME/wf/install/wfinstall.csh`
- Windows NT の場合：
`%ORACLE_HOME%\wf\install\wfinstall.bat`

スクリプトにすべての最小限の必須パラメータが含まれている場合、そのスクリプトは Oracle Workflow Configuration Assistant のウィンドウを表示することなく構成を実行します。

LDAP ポート

Oracle Internet Directory と統合する場合は、Workflow Configuration Assistant または Oracle Workflow 内の「グローバル・ワークフロー設定」ページのいずれかで、使用している LDAP ディレクトリに、Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) サーバーの情報を指定します。LDAP サーバーへの接続ポートには、非 Secure Sockets Layer (非 SSL) のポートを指定する必要があります。

ecxutils.jar に関するエラー

Oracle Workflow のインストール時と構成時に作成された workflow.log ファイルには、ecxutils.jar という名前のファイルのロードに関するエラーが表示される場合があります。これらのエラーは、無視しても安全です。

インストール後に行う Workflow ディレクトリ・サービス実装の変更

Oracle Workflow のインストール時と構成時には、実装するディレクトリ・サービスのタイプを選択します。Oracle Internet Directory (OID) および Oracle Application Server Single Sign-On と統合するか、または Oracle Database のユーザーとロールを Oracle Workflow のディレクトリ・リポジトリとして使用できます。

ディレクトリ・サービスの実装は、初期のインストールと構成が完了した後に、必要に応じて変更できます。

詳細は、『Oracle Workflow 管理者ガイド』の「Oracle Workflow の設定」を参照してください。

Oracle Database ユーザーから Oracle Internet Directory への変換

1. 使用しているデータベースに DBMS_LDAP の PL/SQL パッケージがロードされていることを確認します。このパッケージには、LDAP サーバーからデータにアクセスするために使用されるファンクションとプロシージャが含まれており、LDAP 同期に必要なパッケージです。DBMS_LDAP パッケージがすでにインストールされているかどうかを確認するには、SQL*Plus に接続して、次のコマンドを使用します。

```
desc DBMS_LDAP
```

DBMS_LDAP パッケージが存在しない場合は、<ORACLE_HOME>/rdbms/admin ディレクトリにある catldap.sql スクリプトを実行して、DBMS_LDAP パッケージを手動でロードします。このスクリプトは、SYS ユーザーで実行します。たとえば、次のコマンドを使用します。

```
sqlplus "SYS/<SYS password> as sysdba" @$ORACLE_HOME/rdbms/admin/catldap.sql
```

2. <ORACLE_HOME>/wf/sql/wfdircsv.sql スクリプトを実行して、OID 統合をサポートする Oracle Workflow ディレクトリ・サービスのビューを実装します。たとえば、次のコマンドを使用します。

```
sqlplus owf_mgr/<passwd> @$ORACLE_HOME/wf/sql/wfdircsv.sql
```

3. Oracle Workflow のセキュリティ・ファンクションとプロシージャが含まれた適切なバージョンの WFA_SEC パッケージをロードします。このパッケージをロードするには、Oracle Workflow データベース・ユーザーで SQL*Plus にログインし、<ORACLE_HOME>/wf/sql/wfsecssb.sql スクリプトを実行します。たとえば、次のコマンドを使用します。

```
sqlplus owf_mgr/<passwd> @$ORACLE_HOME/wf/sql/wfsecssb.sql
```

4. Oracle HTTP Server の dads.conf ファイルにある、データベース・アクセス記述子 (DAD) を Oracle Workflow 用に更新して、次のパラメータを指定します。DAD を更新するには、Oracle Enterprise Manager を使用するか、または dads.conf ファイルを直接編集することもできます。DAD の名前は、/pls/your_Workflow_DAD にする必要があります。次に例を示します。

/pls/wf

- PlssqlDatabaseUsername - Oracle Workflow スキーマ
- PlssqlDatabasePassword - Oracle Workflow スキーマ・パスワード
- PlssqlDatabaseConnectionString - データベース接続文字列
- PlssqlDefaultPage - wfa_html.home
- PlssqlSessionStateManagement - StatelessWithResetPackageState
- PlssqlAuthenticationMode - Basic

5. 次のエントリを、使用する mod_osso 構成ファイルに追加して、Oracle Workflow DAD を保護します。使用する DAD の名前を、「your_Workflow_DAD」に置き換えます。

```
<Location /pls/your_Workflow_DAD>
    require valid-user
    authType Basic
</Location>
```

詳細は、次のマニュアルを参照してください。『Oracle Application Server Single Sign-On アプリケーション開発者ガイド』の「mod_osso を使用したアプリケーションの開発」

DAD および mod_osso 構成ファイルを更新した後は、Oracle HTTP Server を再起動します。

6. 「グローバル・ワークフロー設定」ページで、次の LDAP 作業環境を設定します。詳細は、次のマニュアルを参照してください。『Oracle Workflow 管理者ガイド』の「グローバル・ユーザー設定の設定」
 - LDAP ホスト
 - LDAP ポート
 - LDAP ユーザー名
 - LDAP パスワード
 - LDAP ChangeLog のベース・ディレクトリ
 - LDAP ユーザー・ベース・ディレクトリ

7. 既存の Workflow ユーザー情報を、Oracle Internet Directory に移行します。シングル・サインオンとシングル・アドミニストレーションを有効にするには、既存の Oracle Workflow ユーザー情報を、1 回で OID に移行する必要があります。以前にユーザー情報を格納したユーザー表も含めて、すべての必要なデータを WF_LOCAL_USERS から移行することを確認します。移行後のユーザー情報の維持は、OID を介してのみ行います。

OID には、ldifmigrator という移行ツールが用意されています。このツールを使用するには、必要な置換変数を使用して、ユーザー情報をデータベースから中間 LDAP Data Interchange Format (LDIF) ファイルに抽出する必要があります。ldifmigrator ツールは、実行時に指定された引数または LDAP ディレクトリから取得した情報に基づいて変数を置換することによって、ファイル内の中間エントリを実際の LDIF エントリに変換します。ldifmigrator によって生成された LDIF ファイルは、OID バルク・ツールを使用して OID にアップロードできます。

ldifmigrator、中間 LDIF ファイルに必要な書式および OID バルク・アップロード・ツールの詳細は、次のマニュアルを参照してください。『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』の付録 A 「LDIF およびコマンドライン・ツールの構文」

8. WF_LDAP API を使用して Oracle Workflow ディレクトリ・サービスを OID と定期的に同期化します。手順については、次のマニュアルを参照してください。『Oracle Workflow 管理者ガイド』の「Oracle Workflow の設定」の「Workflow ディレクトリ・サービスと Oracle Internet Directory の同期」

Oracle Internet Directory から Oracle Database ユーザーへの変換

1. Oracle Workflow ディレクトリ・サービスと OID との同期化のために、WF_LDAP API の実行を計画していたデータベース・ジョブをすべて停止します。詳細は、次のマニュアルを参照してください。『Oracle Workflow 管理者ガイド』の「Oracle Workflow の設定」の「Workflow ディレクトリ・サービスと Oracle Internet Directory の同期」

2. Oracle HTTP Server の dads.conf ファイルにある、データベース・アクセス記述子 (DAD) を Oracle Workflow 用に更新して、次のパラメータを指定します。DAD を更新するには、Oracle Enterprise Manager を使用するか、または dads.conf ファイルを直接編集することもできます。DAD の名前は、/pls/your_Workflow_DAD にする必要があります。次に例を示します。
/pls/wf

- PlsSqlDatabaseConnectionString - データベース接続文字列
- PlsSqlDefaultPage - wfa_html.home
- PlsSqlSessionStateManagement - StatelessWithResetPackageState
- PlsSqlAuthenticationMode - Basic

mod_plsql データベース認証を有効にするために、データベースのユーザー名またはパスワードを指定していないことを確認します。

3. Workflow DAD のエントリを、mod_osso 構成ファイルから削除します。

DAD および mod_osso 構成ファイルを更新した後は、Oracle HTTP Server を再起動します。

4. <ORACLE_HOME>/wf/sql/wfdirouv.sql スクリプトを実行して、Oracle Workflow ディレクトリ・サービスのビューを、Oracle Database のユーザーとロールにマップします。たとえば、次のコマンドを使用します。

```
sqlplus owf_mgr/<passwd> @$ORACLE_HOME/wf/sql/wfdirouv.sql
```

wfdirouv.sql スクリプトは、ネイティブの各 Oracle Database ユーザーの電子メール・アドレスを、そのユーザーのユーザー名にそれぞれ設定します。最低限のセットアップ手順としては、スクリプトを編集して、ネイティブの Oracle Database ユーザーを WF_ROLES ビュー定義を介して既存のメール・ディレクトリ・ストアにリンクするか、またはユーザー名と電子メール・アカウント名が一致する場合は、@oracle.com などの組織のドメインを WF_USERS ビュー定義のユーザー名に追加します。通常、変更する列は、WF_USERS の EMAIL_ADDRESS および WF_ROLES の EMAIL_ADDRESS です。詳細は、『Oracle Workflow 管理者ガイド』の「Oracle Workflow の設定」を参照してください。

5. Oracle Workflow のセキュリティ・ファンクションとプロシージャが含まれた適切なバージョンの WFA_SEC パッケージをロードします。このパッケージをロードするには、Oracle Workflow データベース・ユーザーで SQL*Plus にログインし、<ORACLE_HOME>/wf/sql/wfsecwsb.sql スクリプトを実行します。たとえば、次のコマンドを使用します。

```
sqlplus owf_mgr/<passwd> @$ORACLE_HOME/wf/sql/wfsecwsb.sql
```

6. 「グローバル・ワークフロー設定」ページで、次の LDAP 作業環境を消去します。詳細は、次のマニュアルを参照してください。『Oracle Workflow 管理者ガイド』の「グローバル・ユーザー設定の設定」

- LDAP ホスト
- LDAP ポート
- LDAP ユーザー名
- LDAP パスワード
- LDAP ChangeLog のベース・ディレクトリ
- LDAP ユーザー・ベース・ディレクトリ

Oracle Workflow への言語追加時のエラー

Oracle Workflow Configuration Assistant を実行して TH および JA の言語を追加するとエラーが発生します。この動作は \$wf\$sql\$wftoken.sql の時点で終了します。ただし、Oracle Workflow Web ページで翻訳を確認することもできます。

管理に関する問題と回避策

この項では、Oracle Workflow の管理に関する問題とその回避策について説明します。

Java ベースの Workflow Notification Mailer

リリース 2.6.3 の Oracle Workflow には、Generic Service Component Framework 内にサービス・コンポーネントとして実装された Java ベースの通知メーラー・プログラムが含まれています。このプログラムは、ユーザーに通知を電子メールで通信し、応答を解釈します。Oracle Workflow には、Workflow Notification Mailer という、シードされた通知メーラー・サービス・コンポーネントが用意されています。このプログラムには、アウトバウンドの SMTP メール・サーバーとインバウンドの IMAP メール・サーバーが必要です。

通知メーラーの新しい Java ベースの実装によって、Oracle Workflow の以前のリリースで使用されていた C ベースの Notification Mailer プログラムが置き換えられます。Oracle Workflow の既存のインストールをリリース 2.6.3 にアップグレードする場合は、注意してください。C ベースの Notification Mailer 用の実行可能ファイルは、アップグレード時にスタブ・ファイルに置き換えられ、そのバージョンの Notification Mailer は実行できなくなります。かわりに、Oracle Enterprise Manager Application Server Control 内の Oracle Workflow Manager コンポーネントを使用して、Java ベースの Workflow Notification Mailer を実行します。

ドキュメントの誤り

この項では、ドキュメントの既知の誤りについて説明します。

データベース・アクセス記述子

『Oracle Workflow for Oracle Content Management SDK インストレーション・ノート』には、「インストール」オプションまたは「アップグレード」オプションを選択した場合は、Workflow Configuration Assistant によって、Oracle Workflow の Database Access Descriptor (DAD) が Oracle HTTP Server インストール内の mod_osso 構成ファイルに作成される、という Workflow Configuration Assistant に関する記述があります。実際に DAD が作成される先は、Oracle HTTP Server インストール内の dads.conf ファイルです。

DBMS_LDAP パッケージ

『Oracle Workflow for Oracle Content Management SDK インストレーション・ノート』の「Oracle Workflow Server インストール」の項では、Oracle Universal Installer および Oracle Workflow Configuration Assistant の実行後に、「DBMS_LDAP パッケージのロード (条件によっては必要)」を 4 つの手順で示しています。Oracle Internet Directory (OID) と Oracle Application Server Single Sign-On を Oracle Workflow ディレクトリ・サービスとして統合する場合、この手順は、実際にはインストール前に実行する必要があります。Oracle Universal Installer と Oracle Workflow Configuration Assistant を実行する前に、使用するデータベース内に DBMS_LDAP の PL/SQL パッケージがロードされていることを確認してください。

使用するデータベースに DBMS_LDAP パッケージをインストールせずに、OID 統合の LDAP 値を指定して、Oracle Universal Installer と Oracle Workflow Configuration Assistant を実行した場合は、Oracle Workflow Configuration Assistant の完了後に無効なパッケージが発生する可能性があります。この場合は、『Oracle Workflow for Oracle Content Management SDK インストレーション・ノート』の説明に従ってパッケージをロードし、次に Oracle Workflow スキーマを再コンパイルします。詳細は、『Oracle9i PL/SQL パッケージ・プロシージャおよびタイプ・リファレンス』を参照してください。

第 IX 部

管理とセキュリティに関する問題

第 IX 部では、管理とセキュリティに関する問題について説明します。内容は次のとおりです。

- [第 23 章 「Oracle Internet Directory」](#)
- [第 24 章 「Oracle Delegated Administration Services」](#)
- [第 25 章 「Oracle Directory Integration and Provisioning」](#)
- [第 26 章 「Oracle Application Server Certificate Authority」](#)
- [第 27 章 「Oracle Enterprise Manager」](#)

23

Oracle Internet Directory

この章では、Oracle Internet Directory に関する問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 一般的な問題と回避策
- 構成に関する問題と回避策
- アップグレードに関する問題とアップグレードの準備作業
- 管理に関する問題と回避策
- ドキュメントの誤り

一般的な問題と回避策

この項では、Oracle Internet Directory に関する一般的な問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- Oracle Internet Directory データベースのシャットダウン時または接続に失敗した場合の OIDMON の動作
- SSL 対応および非 SSL 対応の両 LDAP ポートでリスニングできる Oracle ディレクトリ・サーバー・インスタンス
- 不完全なバルク・ロード操作からの回復
- Oracle9i Database Server リリース 9.2 に対して実行するディレクトリ・サーバーでプラグイン機能がサポートされない
- ref 属性に値が設定されていると ROOT DSE を変更できない
- 中断されたバルク・ロード操作のロールバック

Oracle Internet Directory データベースのシャットダウン時または接続に失敗した場合の OIDMON の動作

OID モニターでは、シャットダウンを適切に処理するためにデータベース内の情報が必要です。

高可用性の使用例では、データベースへの接続に失敗した場合、OID モニターは自動的にシャットダウンしません。かわりに、OID モニターはデータベースへの接続を繰り返し試行します。そのため、データベースが起動すると、OID モニターは Oracle Internet Directory のサーバー・インスタンスを再起動できます。

したがって、データベースが使用不可の場合は、OID モニターを適切にシャットダウンできません。ユーザーは、特定のオペレーティング・システムの適切なメカニズムを使用して、OID モニターのプロセスを強制的に停止する必要があります。

データベースが長時間停止した状態の場合、OID モニターは、データベースの再起動時に他の Oracle Internet Directory のサーバー・インスタンスを再起動できません。ユーザーは、OID モニターのプロセスを強制的に停止し、データベースが再起動した後に再起動する必要があります。

SSL 対応および非 SSL 対応の両 LDAP ポートでリスニングできる Oracle ディレクトリ・サーバー・インスタンス

以前のバージョンの Oracle Internet Directory とは異なり、2 つの個別のインスタンスは不要です。

不完全なバルク・ロード操作からの回復

バルク・モードで bulkload.sh を使用したロードに失敗した場合は、次のオプションを使用すると、ディレクトリを元の状態にリストアできます。

```
bulkload.sh -connect connect_string -recover
```

ただし、このオプションを使用しても、索引は作成されません。索引を再作成するには、次のオプションを使用します。

```
bulkload.sh -connect connect_string -index.
```

Oracle9i Database Server リリース 9.2 に対して実行するディレクトリ・サーバーでプラグイン機能がサポートされない

Oracle Application Server 10g (9.0.4) では、次のプラグイン機能が Oracle9i Database Server リリース 9.2 に対して実行するディレクトリ・サーバーでサポートされていません。

- Windows NT ドメインの外部認証プラグイン。
- プラグイン定義の一部としてディレクトリ・サーバーに接続するための、OID PL/SQL PLUGIN API として提供される LDAP_PLUGIN パッケージの simple_bind_s() ファンクション。

ref 属性に値が設定されていると ROOT DSE を変更できない

ルート DSE エントリの `ref` (参照) 属性が空白以外の値に設定されていると、ルート DSE エントリの変更が、この属性内で参照されるディレクトリ・サーバー上で試行されます。`ref` 属性が空白以外の値に設定されている場合に、ルート DSE エントリの変更を元のサーバー上で実行するには、`managedDSA` 制御を渡す必要があります。制御を渡すには、`ldapmodify` の `-M` オプションを使用します。

中断されたバルク・ロード操作のロールバック

`bulkload.sh` 操作が中断された場合、ディレクトリ管理者は、新規の `-recover` フラグを使用してディレクトリを元の状態にリストアできます。ディレクトリが空でない場合は、ロールバック後にすべての索引を再作成する必要があります。索引を再作成するには、次のオプションを使用します。

```
bulkload.sh ... -index
```

構成に関する問題と回避策

この項では、Oracle Internet Directory の構成に関する問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- リリース 9.0.2 からのアップグレード後に必要なグループ・コンテナに対する ACL ポリシーの設定
- Oracle Internet Directory が重複した `authpassword` ベリファイアを生成する
- インストール時にルート DSE 直下の DN をデフォルトの識別管理レルム DN として選択しないこと
- 部分レプリケーションでは依存しているネーミング・コンテキストを変更できない
- ファンアウト・レプリカに対する Oracle Application Server Single Sign-On のデプロイ
- パスワード・ポリシーによる要求時に Oracle Internet Directory セルフ・サービス・コンソールを使用してパスワードを変更する
- 部分レプリケーションから除外できない必須属性
- 完全に指定されていないアクセス権が「アクセス権付与」になる
- パスワードのヒントを本番 Oracle Internet Directory に移行できない
- Oracle Internet Directory ユーザー編集時の「Constraint Violation」エラー

リリース 9.0.2 からのアップグレード後に必要なグループ・コンテナに対する ACL ポリシーの設定

Oracle Internet Directory をリリース 9.0.2 からリリース 9.0.4 にアップグレードする場合、次の ACL ポリシーをレルム内のグループ・コンテナに対して設定する必要があります。ACL ポリシーによって、グループ `cn=Common Group Attributes, cn=groups, Oracle_Context_DN` の各メンバーに、プライベート・グループとパブリック・グループ（つまり、`orclIsVisible` が設定されていないか、または `TRUE` または `FALSE` に設定されているグループ）に対する参照、検索および読み取りのアクセス権を許可する必要があります。ACL の詳細は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』の第 17 章の「グループ・データを管理するためのデフォルトの権限」の項を参照してください。

「共通グループ属性」グループは、OracleAS Portal でプライベート・グループおよびパブリック・グループを問い合わせるために使用します。ACI はグループ・コンテナに対して追加する必要があります。`Realm DN` をレルムの DN に、`DN of groups container in the realm` を適切なグループ検索ベースに変更します。

```
dn: DN of groups container in the realm
changetype: modify
add: orclaci
orclaci: access to entry filter=(!(orclisvisible=false)) by group="cn=Common Group Attributes,cn=groups, cn=Oracle Context, Realm DN" (browse)
orclaci: access to attr=(*) filter=(!(orclisvisible=false)) by group="cn=Common Group Attributes,cn=groups,cn=Oracle Context, Realm DN" (search, read)
```

```

orclaci: access to entry filter=(orclisvisible=false) by group="cn=Common Group
Attributes,cn=groups,cn=Oracle Context, Realm DN" (browse)
orclaci: access to attr=(*) filter=(orclisvisible=false) by group="cn=Common Group
Attributes,cn=groups, cn=Oracle Context, Realm DN" (search, read)

```

Oracle Internet Directory が重複した authpassword ベリファイアを生成する

ルート Oracle コンテキストの製品共通エントリの commonUserSearchBase 属性の値がレルム Oracle コンテキストの同じ属性の値と重複している場合、レルムのユーザーに対して重複した authpassword ベリファイアが生成されます。そのため、共通製品エントリ (cn=common,cn=products,cn=OracleContext) の commonUserSearchBase 属性を移入する必要はありません。

インストール時にルート DSE 直下の DN をデフォルトの識別管理レルム DN として選択しないこと

Oracle Internet Directory のインストール時に、Oracle Installer では、デフォルトの識別管理レルムのデフォルト値を提示します。このデフォルト値またはカスタマイズした値のいずれかを選択できます。ただし、ルート直下の DN (レベル 1 の DN) を選択すると OracleAS Single Sign-On の構成で問題が発生します。

部分レプリケーションでは依存しているネーミング・コンテキストを変更できない

Oracle Internet Directory ノード内の特定のネーミング・コンテキストから、ファンアウト・レプリケーション・ノードに部分レプリケーションを構成している場合は、ソース・ノードのこれらのネーミング・コンテキスト・エントリの名前は変更しないでください。

ファンアウト・レプリカに対する Oracle Application Server Single Sign-On のデプロイ

Oracle Internet Directory のノード内の特定のネーミング・コンテキストから、他のファンアウト・レプリケーション・ノードに部分レプリケーションを構成した後、OracleAS Single Sign-On をこれらのノードの一部またはすべてに対して個別に構成できます。レプリケーション・ノードに対して OracleAS Single Sign-On をデプロイするには、次の手順を実行します。

- レプリカ・ノード上のデータベースのデータベース登録エントリを検出します。

```
$ORACLE_HOME/bin/ldapsearch -h replica host -p port -D cn=orcladmin
-w super user password -b "cn=oraclecontext" -s one "objectclass=orclbdbserver" dn
```

これにより、Oracle Internet Directory に登録済のデータベースすべての DN リストが `cn=short database name,cn=oraclecontext` の形式で返されます。レプリカ・ノードの基礎となるデータベースに対応する DN を検索します。

- レプリカ・ノードの ReplicaID を識別します。レプリカ・ノードの ReplicaID は、次のレプリカ・ノードのルート DSE エントリから取得します。

```
$ORACLE_HOME/bin/ldapsearch -h replica host -p port -D cn=orcladmin
-w super user password -b "" -s base "objectclass=*" orclreplicaid
```

- レプリケーション構成の DN を変更します。次のようにファイル `repid.ldif` を作成します。

```
dn: orclreplicaid=ReplicaID from Step 2, cn=replication configuration
changetype: modify
replace: seeAlso
seeAlso: DB registration DN from Step 1
```

- 次のように、`ldapmodify` を使用して LDIF ファイル `repid.ldif` をレプリカ・ホストにアップロードします。

```
$ORACLE_HOME/bin/ldapmodify -h replica host -p port -D cn=orcladmin
-w super user password -v -f repid.ldif
```

パスワード・ポリシーによる要求時に Oracle Internet Directory セルフ・サービス・コンソールを使用してパスワードを変更する

Oracle Internet Directory 10g (9.0.4) では、初回ログイン後にパスワードの変更を要求できます。ユーザーは、Oracle Internet Directory セルフ・サービス・コンソールの「パスワードの変更」画面を使用して、パスワードを変更する必要があります。他のメカニズムを使用すると、パスワード変更要件を満たさず、次のログイン時にも同じようにパスワードの変更を要求される場合があります。

部分レプリケーションから除外できない必須属性

部分レプリケーションを使用すると、レプリケーションから特定の属性を除外できます。除外するには、除外対象の属性を `cn=NamingContext` エントリの `excludedAttributes` 属性に追加します。ただし、必須属性を除外すると、レプリケーションは失敗します。

除外できない属性は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』で指定されています。この中には、ユーザー定義のオブジェクト・クラス定義では必須とみなされない属性も含まれています。たとえば、`cn` が 1 つ以上のユーザー定義のオブジェクト・クラス定義のオプション属性であっても、部分レプリケーションから除外できません。

完全に指定されていないアクセス権が「アクセス権付与」になる

各タイプのディレクトリ・アクセスに対するアクセス制御情報を各 DIT のルート DSE に追加することにより、ディレクトリ・データへのアクセスが適切に解決されます。適切な解決とは、要求されたリソースへのアクセスを拒否するか、アクセス権限を付与するかのどちらかです。このようなトップレベルのポリシーがない場合、Oracle Internet Directory 内に格納されたリソースへのアクセスは、ACI による決定が「未解決」となります。詳細は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』の第 14 章を参照してください。ACI による決定が「未解決」の場合、Oracle Internet Directory では、要求されたリソースへのアクセス権が付与されます。

パスワードのヒントを本番 Oracle Internet Directory に移行できない

Identity Management 再関連付けのための Oracle Internet Directory のデータ移行手順実行時に、パスワードのヒントが含まれるユーザー・エントリを本番の Oracle Internet Directory に移行できません。`add.log` ファイルに次のエラー・メッセージが書き込まれます。

```
=====
"DSA Unwilling to perform" while adding the user entry
```

Oracle Internet Directory の移行を可能にする手順は、次のとおりです。

1. `migrate.ldif` ファイルを更新し、失敗したユーザーについては、`orclpasswordhintanswer` 属性を削除します。
2. `ldapaddm` コマンドを再実行し、ユーザーを本番 Oracle Internet Directory に追加します。
3. ユーザー・エントリを更新し、パスワードのヒントを再設定します。

パスワードのヒントの回答を忘れた場合は、次の処理を実行します。

1. Oracle Internet Directory のスーパー・ユーザーは、Oracle Directory Manager でユーザー・パスワードを再設定する必要があります。
2. ユーザーは、エンド・ユーザー・ログインを使用して DAS にサイン・インします。
3. 「change password」タブをクリックして、パスワードとパスワードのヒントの回答を再設定します。

Oracle Internet Directory ユーザー編集時の「Constraint Violation」エラー

OracleAS Metadata Repository を AL32UTF8 キャラクタ・セットを使用する Oracle 10g Database にロードした場合、ユーザーやグループを編集したり、Oracle Internet Director で認証管理レルムを作成しようとするとエラーが表示される可能性があります。ユーザーの編集には既存ユーザーの属性の編集も含まれます。

エラーの 1 つは `oidldap*.log` ファイルに記録されます。次のようにになります。

```
2004/03/01:13:15:49 * ServerWorker:4 * ConnID:0 * OpId:150 * OpName:modify
[gsldah_AddModtoChgLog] While adding Entry
cn=test01,cn=users,dc=us,dc=oracle,dc=com in change log table, ORA-1483 :
ORA-01483: invalid length for DATE or NUMBER bind variable.
```

画面に次のエラーが表示される場合もあります。

```
LDAP: error code 19 - Constraint Violation
```

これらのエラーは断続的に発生します。

回避策としては、しばらく待ってから再度ユーザーの編集を行います。

アップグレードに関する問題とアップグレードの準備作業

この項では、Oracle Internet Directory のアップグレードに関する問題とアップグレードの事前作業について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- アップグレード前に参照する [Oracle Metalink Note](#)
- 認証前のパスワードの変更またはリセット
- アップグレード前の Oracle Internet Directory のパスワードの確認
- リエントラントでないアップグレード手順
- `orcladmin` ユーザーがデフォルトのレルムに存在している必要がある
- レプリカのアップグレード後の変更ログ・エントリのページ

アップグレード前に参照する Oracle Metalink Note

Oracle Internet Directory をリリース 9.0.2.3.0 からリリース 9.0.4 にアップグレードする場合は Oracle Metalink Note 263073.1 で説明されているパッチを適用する必要があります。次のサイトにアクセスしてください。

<http://metalink.oracle.com>

認証前のパスワードの変更またはリセット

Oracle Internet Directory リリース 9.0.2.x から Oracle Internet Directory10g (9.0.4) にアップグレードし、Oracle Internet Directory LDAP サーバーに対して SASL DIGEST-MD5 認証を使用する場合は、認証の前に既存ユーザーのすべてのパスワードを変更またはリセットする必要があります。

アップグレード前の Oracle Internet Directory のパスワードの確認

アップグレード前のチェックとして、Oracle Internet Directory のスーパー・ユーザーのパスワードが『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』および『Oracle Application Server 10g インストレーション・ガイド』に定義されている標準に準拠していることを確認してください。

Oracle Internet Directory データベース・スキーマのパスワードは、アップグレード時に Oracle Internet Directory のスーパー・ユーザーのパスワードと同じ値に設定されます。

定義されている標準にパスワードが従っていない場合は、次の手順でパスワードを再設定できます。

1. LDIF ファイル supwd.ldif を作成します。各行エントリの後は改行します。

```
dn:
changetype: modify
replace: orclsupassword
orclsupassword: <new password e.g. welcome1>
2. ORACLE_HOME/bin/ldapmodify -h <oid host> -p <non SSL port> -
-D <OID superuser DN> -w <OID superuser password> -v -f supwd.ldif
```

リエントラントでないアップグレード手順

Oracle Database リリース 9.2 を OracleAS Metadata Repository 9.0.4 にアップグレードするときに問題が発生する場合があります。ただし、アップグレード手順はリエントラントではありません。つまり、いずれのアップグレード・ツールも再実行はできません。そのインストールをアップグレードすると破損が生じます。

アップグレードの実行前に Oracle Database リリース 9.2 をバックアップすることをお薦めします。

orcladmin ユーザーがデフォルトのレルムに存在している必要がある

orcladmin ユーザーがデフォルトのレルムに存在していない場合は、Oracle Internet Directory のアップグレードは、Oracle Internet Directory の Upgrade Assistant 使用時に失敗します。

アップグレードの実行前に、次の LDAP 問合せを実行して、orcladmin ユーザーが存在しているかどうかをチェックする必要があります。

1. デフォルトのサブスクリーバ DN を取得します。

```
ORACLE_HOME/bin/ldapsearch -h <oid host> -p <non-ssl port> -D <OID superuser>
-w <OID superuser password> -b "cn=common,cn=products,cn=oraclecontext" -s base
"objectclass=*" orcldefaultsubscriber
```

2. ユーザー・ニックネームおよびユーザー検索ベース属性を取得します。

```
ORACLE_HOME/bin/ldapsearch -h <oid host> -p <non-ssl port> -D <OID superuser>
-w <OID superuser password> -b
"cn=common,cn=products,cn=oraclecontext,<default subscriber DN>" -s base
"objectclass=*" orclcommonnicknameattribute orclcommonusersearchbase
```

3. orcladmin ユーザーを検索します。

```
ORACLE_HOME/bin/ldapsearch -h <oid host> -p <non-ssl port> -D <OID superuser>
-w <OID superuser password> -b "<user search base DN>" -s sub "<user nickname
attribute>=orcladmin"
```

最後の ldapsearch コマンドで何も戻されない場合は、次の手順で Oracle Internet Directory に orcladmin ユーザーを作成する必要があります。

1. orcl.ldif という名前の ldif ファイルを次の内容で作成します。

```
dn: cn=orcladmin, <User_Search_Base>
changetype: add
uid: orcladmin
mail: orcladmin
givenName: orcladmin
cn: orcladmin
sn: orclAdmin
description: Seed administrative user for subscriber.
objectClass: top
objectClass: topobjectclass: personobjectclass:
organizationalPersonobjectClass: inetorgpersonobjectClass:
orcluserobjectClass: orcluserV2
```

```
objectclass: person
objectclass: organizationalPerson
objectClass: inetorgperson
objectClass: orcluser
objectClass: orcluserV2
```

2. 次のコマンドを実行します。

```
OIDbin$ldapadd h <oid host> -p <non-ssl port> -D <OID superuser> -w <OID
superuser password> -v f orcl.ldif
```

レプリカのアップグレード後の変更ログ・エントリのページ

この注記はディレクトリ・レプリケーション・グループ (DRG) の一部である Oracle Internet Directory にのみ適用されます。

DRG のレプリカを 9.0.4.0.0 または 9.0.4.1.0 から 9.0.4.2.0 へアップグレードすると、スキーマ・エントリ (cn=subschemasubentry) およびカタログ・エントリ (cn=catalog) が変更されます。レプリケーション・グループ内の別のノードにレプリケートされた場合、これらの変更は失敗します。理由は別のノードがアップグレードされたときにすでに同じ変更が行われているからです。

この失敗を回避するには、レプリケーション・サーバーによって変更が伝播される前に、次の手順によって変更をページします。

1. ページが必要な変更ログを識別するには、ODS ユーザーとして次の SQL を実行します。

```
select chg_no from ods.asr_chg_log where lower(target_dn) in ('cn=subschemasubentry',
'cn=catalogs') and retry_cnt = -1;
```

2. 変更ログの番号を確認したら、hiqpurge.sh ツールを使用してページします。

行を削除するのに SQL DELETE コマンドを使用しないでください。ods.asr_chg_log テーブルはデータベース・レプリケーションによって使用中です。

管理に関する問題と回避策

この項では、Oracle Internet Directory の管理に関する問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- 部分レプリケーションでネーミング・コンテキストのルート・エントリを変更する ldapmoddn を処理できない
- 特権ユーザー・アカウントのロック解除
- Real Application Cluster またはラックマウント・モードでのディレクトリ・レプリケーションおよび Directory Integration and Provisioning Server インスタンスの再起動
- Oracle Internet Directory のサーバーを起動できるのは Oracle Internet Directory ソフトウェアをインストールしたオペレーティング・システム・ユーザーのみ
- ODS データベースのユーザー・パスワードは oidpasswd ツールによってのみ変更可能
- Oracle ディレクトリ・サーバーを SSL モードでのみ使用すると Application Server Control でポート・ステータス情報が表示されない
- oidctl フラグ引数が原因でレプリケーション・サーバーが起動に失敗することがある

部分レプリケーションでネーミング・コンテキストのルート・エントリを変更する ldapmoddn を処理できない

部分レプリケーションでは、ldapmoddn を使用してネーミング・コンテキストのルート・エントリを変更することはできません。

特権ユーザー・アカウントのロック解除

Oracle Identity Management には、2つの異なるタイプの特権ユーザーがいます。これらの特権ユーザー・アカウントは両方とも、特定のパスワード・ポリシーがアクティブ化されるとロックされます。

最初のタイプの特権ユーザーは、DN `cn=orcladmin` を持つスーパー・ユーザーで、デフォルトの識別管理レルム内の特別ユーザー・エントリとして表されます。この特権によって、ディレクトリ管理者は DIT の変更および Oracle Internet Directory のサーバー構成の変更を実行できます。スーパー・ユーザー (`orcladmin`) のアカウントがロックアウトされた場合（不正なパスワードによるバインドが何回も試行された結果）、Oracle Internet Directory のリポジトリに対する DBA 権限を持つ管理者は、`oidpasswd` ツールによってそのアカウントをロック解除できます。`orcladmin` アカウントをロック解除するには、次のコマンドを実行します。

```
oidpasswd unlock_su_acct=TRUE
```

第2タイプの特権ユーザーは、レルム固有の権限を付与されているユーザーで、レルム内のユーザーとグループの作成や削除などの機能および Oracle Delegated Administration Services に関する機能すべてを管理します。このアカウントは、DN `cn=orcladmin, cn=users, realm DN` を持つエントリで表されます。シングル・スーパー・ユーザー・アカウントの場合と異なり、各レルムごとに独自のレルム固有の権限を付与されているユーザーがいます。レルム固有の権限を付与されているアカウントをロック解除する場合、管理者は、Oracle Directory Manager を使用してアカウントのパスワードを変更します。

Real Application Cluster またはラックマウント・モードでのディレクトリ・レプリケーションおよび Directory Integration and Provisioning Server インスタンスの再起動

1次ノードで実行中のディレクトリ・レプリケーション・サーバー (`oidrep1d`) または Directory Integration and Provisioning Server (`odisrv`) のいずれか（あるいは両方）が失敗した場合、2次ノードの OID モニターでは、これらのプロセスを5分後に2次ノードで起動します。ただし1次ノードが再起動された場合、これらのサーバーは、1次ノード上で自動的に再起動しません。

通常モードでの停止は、フェイルオーバーとして扱われません。すべてのプロセスが正常に停止された場合、2次ノードで稼働中の OID モニターは、これらのプロセスを5分後に2次ノードで起動しません。さらに、障害が発生した場合と同様、1次ノードが再起動された場合、これらのサーバーは1次ノード上で自動的に再起動しません。

Oracle Internet Directory のサーバーを起動できるのは Oracle Internet Directory ソフトウェアをインストールしたオペレーティング・システム・ユーザーのみ

Oracle Internet Directory のサーバー（ディレクトリ・サーバー、ディレクトリ・レプリケーション・サーバーおよび Directory Integration and Provisioning Server のデーモン）を起動できるのは、Oracle Internet Directory ソフトウェアをインストールしたオペレーティング・システム・ユーザーのみです。

ODS データベースのユーザー・パスワードは `oidpasswd` ツールによってのみ変更可能

ODS データベースのユーザー・パスワードを変更する場合は、`oidpasswd` ツールを使用する必要があります。他の方法で ODS データベースのユーザー・パスワードを変更すると、Oracle Internet Directory インスタンスは起動できなくなります。

Oracle ディレクトリ・サーバーを SSL モードでのみ使用すると Application Server Control でポート・ステータス情報が表示されない

1つ以上の Oracle ディレクトリ・サーバーを SSL モードでのみ使用している場合、Application Server Control では、これらのサーバーのポート・ステータス情報が表示されません。

oidctl フラグ引数が原因でレプリケーション・サーバーが起動に失敗することがある

oidctl への最後のフラグ引数が数値以外の場合、OIDMON では OIDREPLD の起動に失敗することがあります。たとえば、次のコマンドは oidctl への最後の引数として数値以外の値を持っています。

```
oidctl server=oidrepld configset=1 instance=1 connect=inst1 flags="-p 3000 -m false" start
```

回避策として、フラグの配列を変更して最後の値が数値になるようにします。以下に例を示します。

```
oidctl server=oidrepld configset=1 instance=1 connect=inst1 flags="-m false -p 3000" start
```

ドキュメントの誤り

この項では、Oracle Internet Directory のドキュメントの誤りについて説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [init\\$ORACLE_SID.ora のパラメータは、データベース起動時に自動的にロードされない](#)
- [Oracle Internet Directory による 1 つのサーバー・インスタンスでの SSL モードと非 SSL モードのサポート](#)
- [属性を除外するためのコンテンツ・ルールがこのリリースではサポートされていない](#)
- [StopOdiServer.sh ツールの構文](#)
- [自動ポートストラップ用のレプリカの構成についての追加情報](#)
- [表 A-37 「プロビジョニング・サブスクリプション・ツールのパラメータ」の誤り](#)
- [『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』の補足事項](#)
- [『Oracle Internet Directory アプリケーション開発者ガイド』の「Oracle Internet Directory サーバー・プラグインの開発」の章の誤り](#)
- [レプリケーションの章は『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』の付録を参照すること](#)

init\$ORACLE_SID.ora のパラメータは、データベース起動時に自動的にロードされない

データベースの起動時に init\$ORACLE_SID.ora を明示的に指定しないかぎり、データベースでは起動時に、データベース初期化パラメータを spfile\$ORACLE_SID.ora から読み込みます。したがって、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』でデータベース・パラメータの変更が指定されている場合は必ず、後続のデータベースの再起動時に init\$ORACLE_SID.ora ファイルを明示的に指定する必要があります。

Oracle Internet Directory による 1 つのサーバー・インスタンスでの SSL モードと非 SSL モードのサポート

『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』では、同じホスト上で SSL クライアントと非 SSL クライアントの両方をサポートしようとする場合は、2 つの別々のサーバー・インスタンスを構成する必要があると記述されていますが、これは誤りです。リリース 9.0.4. では、Oracle Internet Directory によって、1 つのサーバー・インスタンスで SSL と非 SSL の両方のモードがサポートされます。

属性を除外するためのコンテンツ・ルールがこのリリースではサポートされていない

『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』では、エントリから属性を除外するためのコンテンツ・ルールを使用できると記述されていますが、これは誤りです。この機能は、このリリースの Oracle Internet Directory ではサポートされていません。

StopOdiServer.sh ツールの構文

付録 A 「LDIF およびコマンドライン・ツールの構文」の「StopOdiServer.sh ツールの構文」の項に示されている StopOdiServer.sh ツールのパス名に誤りがあります。

正しいパス名は次のとおりです。

```
$ORACLE_HOME/ldap/odi/admin/stopodiserver.sh
```

使用方法は次のとおりです。

```
$ORACLE_HOME/ldap/admin/stopodiserver.sh
[ -LDAPhost LDAP_server_host ]
[ -LDAPport LDAP_server_port ]
[ -binddn super_user_dn (default cn=orcladmin) ]
[ -bindpass bind_password (default=welcome) ]
-instance instance_number_to_stop
```

自動ブートストラップ用のレプリカの構成についての追加情報

『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』の自動ブートストラップ用のレプリカの構成手順の説明でいくつかの追加情報が抜けていました。25-25 ページの「タスク 3: 自動ブートストラップを行うためのレプリカの構成」の項で、更新するレプリカ・エントリのステータスの指定およびステータスが更新されるノードについての記載が抜けていました。

正しい説明は次のとおりです。

自動ブートストラップ機能を使用するには、次のように、コンシューマ・ノードのコンシューマのレプリカ・サブエントリの `orclreplicastate` 属性を 0 に設定します。

- サンプル・ファイル `mod.ldif` を、次のように編集します。

```
Dn: orclreplicaid=<consumer replica's unique replica identifier>
cn=replication configuration
changetype:modify
add:orclreplicastate
orclreplicastate: 0
```

- `ldapmodify` を使用して、レプリカのサブエントリの `orclreplicastate` 属性を更新します。

```
@ ldapmodify -D "cn=orcladmin" -w administrator_password -h <host of consumer
replica> -p <port> -f mod.ldif
```

表 A-37 「プロビジョニング・サブスクリプション・ツールのパラメータ」の誤り

『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』の表 A-37 に記載されている `event_subscription` の項目には誤りがあります。正しくは次のとおりです。

表 23-1 プロビジョニング・サブスクリプション・ツールのパラメータ

名前	説明	操作	必須 / オプション
<code>event_subscription</code>	DIP がこのアプリケーションに通知を送信する必要があるイベント。この文字列の書式は、「[USER]GROUP]:[対象のドメイン]:[DELETE] ADD]MODIFY(<カンマで区切られた属性名のリスト>)」です。異なる値を持つパラメータを複数回リストに含めると、複数の値を指定できます。デフォルト設定はありません。	作成 / 修正	アウトバウンド・イベントの場合のみ必須

『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』の補足事項

『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』には、次の有用な情報が記載されていませんでした。

- 25-22 ページの「LDAP ベースのレプリカのインストール」の項に、「構成オプションの選択」画面ですべての選択を解除するという手順がありますが、その理由が示されていませんでした。この手順を実行する理由は、他のコンポーネントを配置する前にレプリケーションをインストールして構成する必要があるからです。
- 同じセクションで、Wallet を作成するコマンドラインの後に、なぜ Wallet が必要なのかについての説明がありませんでした。理由は、Wallet にはポートストラップの目的で Oracle Internet Directory に接続する際に使用するレプリケーション・サーバー ID が含まれているからです。

『Oracle Internet Directory アプリケーション開発者ガイド』の「Oracle Internet Directory サーバー・プラグインの開発」の章の誤り

表 5-2 「操作ベースと属性ベースのプラグイン・プロセージャのシグネチャ」で、IN パラメータ列に示されている、いくつかの呼び出しコンテキストに対する値に誤りがあります。次のように変更してください。

- 「ldapadd 前」に対する IN パラメータ列の値は Ldapcontext、DN、Entry してください。
- 「ldapadd 時」の値は Ldapcontext、DN、Entry してください。
- 「ldapadd 時（ただし、デフォルト・サーバーの動作を置換）」の値は Ldapcontext、DN、Entry してください。
- 「ldapadd 後」の値は Ldapcontext、Add result、DN、Entry してください。

「plugin」というインスタンスはすべて「plug-in」に変更してください。

レプリケーションの章は『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』の付録を参照すること

LDAP ベースのレプリケーションを構成するユーザーは、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』の 25 章で説明するように、『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』の「Infrastructure サービスの変更における補助手順」も参照してください。

24

Oracle Delegated Administration Services

この章では、Oracle Delegated Administration Services (DAS) および Oracle Internet Directory セルフ・サービス・コンソールの問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 一般的な問題と回避策
- 構成に関する問題と回避策
- 管理に関する問題と回避策
- ドキュメントの誤り

一般的な問題と回避策

この項では、Oracle Delegated Administration Services に関する一般的な問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- パスワード・ポリシーによる要求時に Oracle Internet Directory セルフ・サービス・コンソールを使用してパスワードを変更する
- リリース 9.0.2 および 9.0.4 で Oracle Delegated Administration Services の構成権限でレルムの値を編集できない
- メンバーが指定されていないロールが「ユーザーの作成」および「ユーザーの編集」の「ロールの割り当て」セクションに表示されない
- グループ所有者が同じセッションで作成されたグループを編集できない
- Oracle Internet Directory を再起動すると DAS セッション・エラーが返される

パスワード・ポリシーによる要求時に Oracle Internet Directory セルフ・サービス・コンソールを使用してパスワードを変更する

Oracle Internet Directory 10g (9.0.4) では、初回ログイン後にパスワードの変更を要求できます。ユーザーは、Oracle Internet Directory セルフ・サービス・コンソールの「パスワードの変更」画面を使用して、パスワードを変更する必要があります。他のメカニズムを使用すると、パスワード変更要件を満たさず、次のログイン時にも同じようにパスワードの変更を要求される場合があります。

リリース 9.0.2 および 9.0.4 で Oracle Delegated Administration Services の構成権限でレルムの値を編集できない

リリース 9.0.2 および 9.0.4 のアップグレードでは、レルムの値を編集できるのは orcladmin ユーザーのみです。他のユーザーは、Oracle Delegated Administration Services の構成権限を付与されていても、この値を編集できません。これは、他のユーザーにはユーザー検索ベース、ユーザー作成ベース、グループ検索ベースおよびグループ作成ベースを読み込むための十分な権限がないためです。回避策は、これらのコンテナに対する ACL を変更し、匿名参照アクセスを有効化することです。

メンバーが指定されていないロールが「ユーザーの作成」および「ユーザーの編集」の「ロールの割り当て」セクションに表示されない

回避策：ロールには 1 つ以上の一意のメンバーを含める必要があります。これによって、ロールは「ユーザーの作成」ページと「ユーザーの編集」ページの「ロールの割り当て」セクションに表示されるようになります。

ロールに一意のメンバーを追加する場合、LDIF ファイルの構文は次のようにになります。

```
dn: DN_of_role_entry
changetype: modify
add: uniquemember
uniquemember: DN_of_member_entry
ファイルを変更するには、次のコマンドを発行します。
```

```
ldapmodify -p oid_port -h oid_host -D "cn=orcladmin" -w admin_password -v -f file_name.ldif
```

グループ所有者が同じセッションで作成されたグループを編集できない

グループの作成後、グループの所有者は同じセッションでグループを編集できません。回避策：ログアウトしてブラウザを閉じて、再度ログインします。

Oracle Internet Directory を再起動すると DAS セッション・エラーが返される

Oracle Internet Directory を再起動した場合、すでにログインしている DAS セッションがエラーを返すか、すべての検索に対してエントリを返さなくなります。

この問題を回避するには、次のいずれかの手順を実行します。

- DAS セッションからログアウトし、Oracle Internet Directory が正常に再起動したら再びログインします。
- Oracle Internet Directory が再起動したら、DAS を再起動します。

構成に関する問題と回避策

この項では、Oracle Delegated Administration Services の構成に関する問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [個別のホストへの Oracle Delegated Administration Services のデプロイ](#)
- [デフォルトのレルム管理者に必要な構成権限がない](#)
- [Oracle Delegated Administration Services を構成して 9.0.2 から 9.0.4 にアップグレードされた Oracle Internet Directory のインストールに対して実行](#)
- [Oracle Internet Directory リンクのアクセス時の OracleAS Single Sign-On ログイン・エラー](#)

個別のホストへの Oracle Delegated Administration Services のデプロイ

個別の Oracle ホームに Oracle Delegated Administration Services を構成する場合は、スタンダード・インストールを実行します。このインストールを実行するには、Identity Management のインストール・タイプを選択し、「構成オプション」画面で「Delegated Administration Service」を選択します。

関連項目：『Oracle Application Server 10g インストレーション・ガイド』
を参照してください。

デフォルトのレルム管理者に必要な構成権限がない

Oracle Internet Directory セルフ・サービス・コンソールにログインする場合、デフォルトのレルム管理者にはユーザーの作成または DAS 構成の変更に必要な権限がありません。回避策は次のとおりです。

1. Oracle Directory Manager で、レルムの `cn=userpassword, cn=attributes, cn=User Configuration, cn=Attribute Configuration, cn=DAS, cn=Products, cn=OracleContext, DN` にナビゲートします。
2. 前述のエントリを選択し、`orcldasviewable` の値を 0 に変更します。
3. 「適用」を選択します。
4. Oracle Internet Directory セルフ・サービス・コンソールを再起動します。

Oracle Delegated Administration Services を構成して 9.0.2 から 9.0.4 にアップグレードされた Oracle Internet Directory のインストールに対して実行

リリース 9.2 からリリース 9.0.4 にアップグレードした Oracle Internet Directory のインストールに対して Oracle Delegated Administration Services 10g (9.0.4) を実行するには、次の手順を実行します。

匿名参照アクセスを許可するには、コンテナ `cn=users, realm DN` および `cn=groups, realm DN` に対する ACL を変更します。

Oracle Internet Directory リンクのアクセス時の OracleAS Single Sign-On ログイン・エラー

Oracle Enterprise Manager を使用して DAS を構成した後、Oracle Enterprise Manager または OracleAS Portal から「Oracle Internet Directory Self Service Console」リンクをクリックすると、OracleAS Single Sign-On ログイン・エラーが発生する場合があります。DAS URL に構成されているホスト名が短縮ホスト名であるのに対して、ias.properties ファイルの VirtualHostName プロパティで使用されているホスト名が完全修飾ホスト名である場合に、このログイン・エラーが発生する可能性があります。

ログイン・エラーを回避するには、DAS URL のホスト名を VirtualHostName プロパティと同じ値に変更します。これを行うには、次のコマンドを実行します。

```
> dn: cn=OperationURLs,cn=DAS,cn=Products,cn=OracleContext
> changetype: modify
> replace: orcldasurlbase
> @ orcldasurlbase: http://<VirtualHostName>:7777/
```

管理に関する問題と回避策

この項では、Oracle Delegated Administration Services の管理に関する問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- Oracle Internet Directory セルフ・サービス・コンソールの「Unified Messaging Voicemail PIN」フィールドのラベルの誤り
- 特権ユーザー・アカウントのロック解除
- 1 つの DNS ドメインで Oracle Delegated Administration Services を、別の DNS ドメインで OracleAS Portal を実行

Oracle Internet Directory セルフ・サービス・コンソールの「Unified Messaging Voicemail PIN」フィールドのラベルの誤り

Oracle Collaboration Suite のユーザーがセルフ・サービス・コンソールを使用して、自分のパスワードを変更する場合、ユーザーのボイスメール PIN 番号に関連付けられたフィールド名が「EmailServerContainer」と誤って表示されます。この問題を解決するには、次の方法を使用します。

1. Oracle Directory Manager を使用して、DN (cn=orclpwdverifierconfig, cn=EmailServerContainer, cn=Products, cn=OracleContext, cn=subscriber realm) のエントリにナビゲートします。
2. このエントリを選択します。
3. 「プロパティの表示」で「すべて」を選択します。
4. 表示名のテキスト・ボックスに「Voicemail PIN」と入力します。
5. 「適用」を選択します。

特権ユーザー・アカウントのロック解除

Oracle Identity Management には、2 つの異なるタイプの特権ユーザーがいます。これらの特権ユーザー・アカウントは両方とも、特定のパスワード・ポリシーがアクティビ化されるとロックされます。

最初のタイプの特権ユーザーは、DN cn=orcladmin を持つスーパー・ユーザーで、デフォルトの識別管理ルーム内の特別ユーザー・エントリとして表されます。この特権によって、ディレクトリ管理者は DIT の変更および Oracle Internet Directory のサーバー構成の変更を実行できます。スーパー・ユーザー (orcladmin) のアカウントがロックアウトされた場合（不正なパスワードによるバインドが何回も試行された結果）、Oracle Internet Directory のリポジトリに対する DBA 権限を持つ管理者は、oidpasswd ツールによってそのアカウントをロック解除できます。orcladmin アカウントをロック解除するには、次のコマンドを実行します。

```
oidpasswd unlock_su_acct=TRUE
```

第2タイプの特権ユーザーは、レルム固有の権限を付与されているユーザーで、レルム内のユーザーとグループの作成や削除などの機能および Oracle Delegated Administration Services に関する機能すべてを管理します。このアカウントは、DN `cn=orcladmin,cn=users,realm DN` を持つエントリで表されます。シングル・スーパー・ユーザー・アカウントの場合と異なり、各レルムごとに独自のレルム固有の権限を付与されているユーザーがいます。レルム固有の権限を付与されているアカウントをロック解除する場合、管理者は、Oracle Directory Manager を使用してアカウントのパスワードを変更します。

1つの DNS ドメインで Oracle Delegated Administration Services を、別の DNS ドメインで OracleAS Portal を実行

1つのドメインで Oracle Delegated Administration Services を実行し、別のドメインで OracleAS Portal を実行する場合は、『Oracle Application Server Portal 構成ガイド』の「OracleAS Portal と Oracle Internet Directory の関係」の項に記載されている説明に従ってください。

ドキュメントの誤り

この項では、Oracle Delegated Administration Services のドキュメントの誤りについて説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [オンライン・ヘルプに誤って記載されている識別管理レルムの編集方法](#)
- [「ロールの構成」画面のオンライン・ヘルプが表示されない](#)

オンライン・ヘルプに誤って記載されている識別管理レルムの編集方法

Oracle Internet Directory セルフ・サービス・コンソールのオンライン・ヘルプには、検索された特定レルムを変更するには、検索結果ページからレルムを選択して「続行」を選択するように説明されていますが、これは誤りです。検索結果ページを使用すると、選択したレルムを表示できますが、変更はできません。レルム構成を変更するには、「構成」タブを選択して変更を入力した後、「実行」を選択します。レルムの構成設定を表示し、変更する手順は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』の第31章「Oracle Internet Directory セルフサービス・コンソール」を参照してください。

「ロールの構成」画面のオンライン・ヘルプが表示されない

Oracle Internet Directory セルフ・サービス・コンソールの「ロールの構成」ページ（「ユーザー・エントリの構成」タスクのステップ5）には、ページの上部と下部にヘルプ・アイコンがあります。このアイコンをクリックすると「要求されたトピックを見つけることができませんでした」というエラー・メッセージが表示されます。

25

Oracle Directory Integration and Provisioning

この章では、Oracle Directory Integration and Provisioning に関する問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 構成に関する問題と回避策
- 管理に関する問題と回避策

構成に関する問題と回避策

この項では、Oracle Directory Integration and Provisioning の構成に関する問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- Directory Integration and Provisioning Assistant を使用する前にプロパティ・ファイルにエンコードを指定
- Oracle Directory Manager による Directory Integration プロファイルの作成時に ACI が正しく設定されない
- デフォルトの識別管理レルムの位置をサード・パーティ・ディレクトリ・ドメインにあわせる
- Directory Integration and Provisioning Server のインストール後のステータス
- 2 つの Oracle Internet Directory プラグイン機能が、Oracle Internet Directory リリース 9.2 からアップグレードした後サポートされない

Directory Integration and Provisioning Assistant を使用する前にプロパティ・ファイルにエンコードを指定

次のようなファイルの場合には、LDIF で使用するエンコードを指定する必要があります。

- サード・パーティ・ディレクトリのユーティリティを使用して生成されたファイル。
- NLS データを含むファイル。
- 異なるプラットフォームで処理されるファイル。

これは、Directory Integration and Provisioning Assistant では、ファイルは生成されたシステム上で処理されるものとデフォルトで想定しているためです。

エンコードは、ブートストラップの実行に使用する構成プロパティ・ファイルの `odip.bootstrap.srcenc` プロパティを使用して指定します。詳細は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』の第 32 章の「Directory Integration and Provisioning Assistant」を参照してください。

Oracle Directory Manager による Directory Integration プロファイルの作成時に ACI が正しく設定されない

Oracle Directory Manager の類似項目の作成機能を使用してプロファイルを作成する場合、ACI が適切にコピーされません。回避策は次のとおりです。

LDIF ファイル `profileacl.ldif` を次のように作成します。

```
dn: orclODIPAgentName=<Profile Name>,cn=subscriber profile,cn=changelog subscriber, cn=oracle
internet directory
changetype: modify
replace: orclaci
orclaci: access to attr = (*) by group="cn=odisgroup,cn=odi,cn=oracle internet directory"
(read,write,search,compare)
orclaci: access to entry by group="cn=odisgroup,cn=odi,cn=oracle internet directory"
(browse,proxy)
```

このファイルを次のようにアップロードします。

```
$ORACLE_HOME/bin/ldapmodify -h <OID host> -p <OID port> -D <OID superuser> -w <OID superuser
password> -v -f profileacl.ldif
```

デフォルトの識別管理レルムの位置をサード・パーティ・ディレクトリ・ドメインにあわせる

Oracle Identity Management インフラストラクチャを後でサード・パーティ・ディレクトリと同期化する目的でインストールする場合は、デフォルトの識別管理レルムの位置をサード・パーティ・ドメインにあわせます。たとえば、使用しているサード・パーティ・ドメインが `sales.acme.com` の場合は、Oracle の識別管理レルムのルートを `dc=sales, dc=acme, dc=com` に配置します。

インフラストラクチャがすでにインストール済で、指定したレルムがサード・パーティ・ディレクトリ・ドメインと一致していない場合は、そのレルムをすでに使用しているかどうかに応じて、次の 2 つのオプションがあります。

- このインフラストラクチャに対してその他の中間層をインストールしていない場合は、インフラストラクチャを再インストールして正しいデフォルトのレルムの位置を選択します。ユーザー・オブジェクトとグループ・オブジェクトが DIT に正しく格納されていることを確認する場合は、<http://otn.oracle.co.jp> にある「Customizing Identity Management Realms Based on Deployment Requirements」を参照してください。
- 位置をあわせないでレルムをすでに使用している場合は、<http://otn.oracle.co.jp> にある「Customizing Identity Management Realms Based on Deployment Requirements」の指示に従ってください。

関連項目： Oracle Internet Directory とサード・パーティ・ディレクトリの統合に関する詳細は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』の第 VII 部を参照してください。

Directory Integration and Provisioning Server のインストール後のステータス

Oracle Internet Directory がインフラストラクチャとともにインストールされた後にのみ、OID Configuration Assistant は Directory Integration and Provisioning Server を起動します。Oracle Directory Integration and Provisioning のスタンドアロン・インストールでは、OID Configuration Assistant はサーバーを登録するのみで、起動はしません。

これは、Directory Integration and Provisioning Server の 2 つのインスタンスに同じインスタンス番号または同じ構成設定番号を付けることができないという制限があるためです。

Directory Integration and Provisioning Server の最初のインスタンスは、常にインスタンス番号 1 と構成設定番号 0 を使用して起動されます。その後、このサーバーの別のインスタンスが別のインストールで起動された場合は、同じようにインスタンス番号 1 と構成設定番号 0 が使用されます。その結果、このインスタンス番号と構成設定番号がすでに使用されているため、2 番目のインスタンスはエラーになります。

ただし、Directory Integration and Provisioning Server は登録されているため、インスタンスを手動で起動することはできます。手動で起動するには、スクリプト `$ORACLE_HOME/bin/odisrv` を使用します。スクリプトを実行する際、起動するサーバー・インスタンスに、現在実行中の他のインスタンスと同じインスタンス番号または構成設定番号が指定されていないことを確認してください。

2 つの Oracle Internet Directory プラグイン機能が、Oracle Internet Directory リリース 9.2 からアップグレードした後サポートされない

Oracle Application Server10g (9.0.4) では、次のプラグイン機能が Oracle9i Database Server リリース 9.2 に対して実行するディレクトリ・サーバーでサポートされていません。

- Windows NT ドメインの外部認証プラグイン。
- プラグイン定義の一部としてディレクトリ・サーバーに接続するための、OID PL/SQL PLUGIN API として提供される LDAP_PLUGIN パッケージの `simple_bind_s()` ファンクション。

管理に関する問題と回避策

この項では、Oracle Directory Integration and Provisioning の管理に関する問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- Real Application Cluster またはラックマウント・モードでのディレクトリ・レプリケーションおよび Directory Integration and Provisioning Server インスタンスの再起動
- Real Application Clusters および Directory Integration and Provisioning Service の使用
- Windows 同期化レルムで必要なユーザー・スキーマ
- 選択したオブジェクト・タイプの Active Directory から Oracle Internet Directory への同期化
- Oracle Internet Directory から Active Directory へのパスワードの同期化
- 特殊文字を含むグループ名を Microsoft Active Directory と同期化できない

Real Application Cluster またはラックマウント・モードでのディレクトリ・レプリケーションおよび Directory Integration and Provisioning Server インスタンスの再起動

1 次ノードで実行中のディレクトリ・レプリケーション・サーバー (oidrepld) または Directory Integration and Provisioning Server (odisrv) のいずれか (あるいは両方) が失敗した場合、2 次ノードの OID モニターでは、これらのプロセスを 5 分後に 2 次ノードで起動します。ただし 1 次ノードが再起動された場合、これらのサーバーは、1 次ノード上で自動的に再起動しません。

通常モードでの停止は、フェイルオーバーとして扱われません。すべてのプロセスが正常に停止された場合、2 次ノードで稼働中の OID モニターは、これらのプロセスを 5 分後に 2 次ノードで起動しません。さらに、障害が発生した場合と同様、1 次ノードが再起動された場合、これらのサーバーは 1 次ノード上で自動的に再起動しません。

Real Application Clusters および Directory Integration and Provisioning Service の使用

次の使用例を考えてみます。

- Oracle Internet Directory が Real Application Clusters (RAC) モードで構成されています。
- Directory Integration and Provisioning Server が別のノードで Oracle Directory Integration and Provisioning 専用インストールの一部として実行中です。
- Directory Integration and Provisioning Server を実行している対象の Oracle Internet Directory ノードに障害が発生します。

この使用例では、Directory Integration and Provisioning Server は、他の RAC 対応の Oracle Internet Directory ノードの 1 つに実行を透過的に切り替えることができません。その結果、Directory Integration and Provisioning Server も中断するため、\$ORACLE_HOME/bin/odisrv スクリプトを使用して手動で起動する必要があります。

Windows 同期化レルムで必要なユーザー・スキーマ

Microsoft Windows 接続のデプロイでは、識別管理レルム内のユーザーは、ローカルで（つまり、Oracle Internet Directory に対して）認証される必要があります。これに対し、他のレルムのユーザーは、Microsoft Active Directory によって認証される必要があります。外部認証プラグインは、識別管理レルムに対してのみ構成される必要があります。つまり、このレルムのユーザーは Microsoft Active Directory に対して認証されます。

このような識別管理レルム内のすべてのユーザーには、オブジェクト・クラス orclADUser で定義した属性を含める必要があります。このオブジェクト・クラスには Windows の認証に対して必要な属性が含まれています。Microsoft Active Directory で作成され、Oracle Internet Directory に同期化されたすべてのユーザーには、デフォルトでこれらの属性が設定されています。これは、Microsoft Active Directory では、デフォルトでこれらの属性が作成されるためです。一方、Oracle Internet Directory で作成され、Microsoft Active Directory に同期化されたこのような識別管理レルム内のユーザーは、適切に構成されていないかぎり、デフォルトで正しいスキーマを継承しません。

正しいスキーマの継承は、次の複数の方法で達成できます。

デフォルトでは、レルム内のどの事前シード済ユーザーにも `orclSAMAccountName` 属性は移入されません。したがって、この属性をレルムの下の `orcladmin` に移入する必要があります。

選択したオブジェクト・タイプの Active Directory から Oracle Internet Directory への同期化

ユーザー・エントリを Microsoft Active Directory から Oracle Internet Directory に同期化するとき、特定のオブジェクト・タイプのみを同期化する必要がある場合は、接続されたディレクトリの検索フィルタを適切に移入してください。たとえば、ユーザーおよびグループ情報に対する変更を同期化し、コンピュータ情報に対する変更は同期化しない場合は、この属性の値を次のように設定する必要があります。

```
SEARCHFILTER=(|(objectclass=group)(&(objectclass=user)(!(objectclass=computer)))
```

この属性を更新するには、Oracle Directory Manager または Directory Integration and Provisioning Assistant を使用します。

Oracle Internet Directory から Active Directory へのパスワードの同期化

Oracle ディレクトリ・サーバーを使用すると、SSL モードおよび非 SSL モードの両方でパスワードを変更できますが、Microsoft Active Directory では SSL モードでのみパスワードを変更できます。したがって、Oracle Internet Directory から Microsoft Active Directory へのパスワードの同期化を実行できるのは次の場合のみです。

- Oracle ディレクトリ・サーバーがサーバー認証 SSL モードで実行中の場合。
- Directory Integration and Provisioning Server が同じモードで Microsoft Active Directory に接続されている場合。

関連項目：『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』の第 43 章
「Microsoft Windows 環境との統合」

特殊文字を含むグループ名を Microsoft Active Directory と同期化できない

Active Directory の `samaccountname` 属性には特殊文字を使用できません。その結果、Oracle Internet Directory が Active Directory のグループ名の真のソースであり、グループ名（`cn` 属性にある）に特殊文字が含まれている場合、エクスポートによる同期化は失敗します。これは、Oracle Internet Directory `cn` 属性が Microsoft Active Directory の `samaccountname` 属性にマップされるためです。ユーザー・エントリの場合は、次のような回避策があります。マッピング構成ファイルで、特殊文字を含まない他の属性を Microsoft Active Directory の `samaccountname` 属性にマップします。

ただし、グループの場合、`orclGroup` オブジェクト・クラスには、`cn` 以外に `samaccountname` にマップできる必須属性はありません。このため、Microsoft Active Directory にエクスポートする場合は、Oracle Internet Directory のグループ名に特殊文字を使用することはできません。

26

Oracle Application Server Certificate Authority

この章では、Oracle Application Server Certificate Authority (OracleAS Certificate Authority、OCA) に関する問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 構成に関する問題と回避策

構成に関する問題と回避策

この項では、OracleAS Certificate Authority の構成に関する問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- OracleAS Single Sign-On 登録時に誤った URL が表示される
- Netscape ブラウザを使用する場合のエラー・メッセージ

OracleAS Single Sign-On 登録時に誤った URL が表示される

OracleAS Single Sign-On への OCA の登録時に、次の URL が表示されます。

`https://<hostname>:<portno>/`

この場所で使用できるサービスはないため、「Page Not Found」エラーが発生します。

正しい URL は次のとおりです。

`https://<hostname>:<portno>/oca/user`

Netscape ブラウザを使用する場合のエラー・メッセージ

OCA とともに Netscape 4.7x ブラウザを使用すると、場合によって次のエラー・メッセージが表示されることがあります。

「セキュリティ・ライブラリで、不適切なフォーマットの DER エンコード・メッセージが検出されました」

このメッセージは、OCA 証明書が発行されたときに、印刷できない文字またはその他の特殊文字が証明書の DN に含まれていて、発行側では Netscape で処理できない特殊な文字を使用したことを示します。

この問題を回避するには、使用できる印刷可能文字のみを DN に使用するサーバー証明書を再発行します。OCA 証明書 DN に使用できる文字は、次のとおりです。

- 小文字および大文字の英字（スペース文字を含む）
- 0 ~ 9 の数字
- + ' , - . / : = ? の文字（アンダースコアは含まない）

27

Oracle Enterprise Manager

この章では、Oracle Enterprise Manager に関する問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 一般的な問題と回避策
- ドキュメントの誤り

一般的な問題と回避策

この項では、Oracle Enterprise Manager Application Server Control に関する一般的な問題とその回避策について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- 同一ホスト上での複数のアプリケーション・サーバーの管理時に複数のブラウザ・ウィンドウを使用
- OC4J メトリックを収集するための Oracle HTTP Server の実行
- 仮想ホストに IP とポートの複数の組合せは入力できない
- OracleAS Web Cache 管理ポート用プロトコルと統計ポート用プロトコルの一致
- JAZN 構成時にサポートされないパス情報
- OC4J アプリケーションのデプロイ時に発生する参照エラー
- OC4J の「セキュリティ」ページでユーザーを追加した後は OC4J の再起動が必要
- ブラウザ・ウィンドウに表示される「SMISession has been invalidated」エラー
- 地域および言語オプション設定と NLS_LANG パラメータ
- 新規作成した仮想ホストのアクセス・ログがログ・ビューアで使用できない
- ログ・ビューアでの XML ログ・ファイルの表示に関する問題
- Oracle Application Server 9.0.2 または 9.0.3 の削除後に発生する Oracle Application Server 10g Application Server Control に関する問題
- Application Server Control のパフォーマンス・ノート
- Oracle HTTP Server リスナー・ポートが重複してリストされる
- プロパティを Oracle Application Server クラスタ内の OC4J インスタンスに適用した際に誤解を招くおそれのあるエラー・メッセージ
- アプリケーション・サーバー・インスタンスの Metadata Repository を変更した際の不明な Oracle ホーム・エラー
- コマンドラインから実行した管理タスクが Application Server Control のページに反映されない
- Internet Explorer 5.5 を SSL モードで使用した場合の問題
- OracleAS ProcessConnect または Oracle Workflow コンポーネント用のスキーマ・パスワードの変更はサポートされない
- Infrastructure のインストールで Home インスタンスはデフォルトで使用不可
- スタンドアロン・バージョンの OracleAS Forms Services および OracleAS Reports Services の「Infrastructure」ページの使用
- HTTP Server の拡張プロパティを Netscape Navigator で編集するときのエラーと制限
- Enterprise Manager を使用して WAR アプリケーションを再デプロイする際の回避策
- ログ・ファイルのタイムスタンプが正確でない
- 「Web Cache 管理」ページへのリンク時にページが表示されないエラー
- Oracle Application Server 10g (9.0.4) を使用するコンピュータでの Enterprise Manager Grid Control 10.1.0.2 Management Agent の削除
- OC4J インスタンスの追加時または削除時のエラー
- Application Server Control において OracleAS Web Cache を管理および機能監視するための Cookie の有効化
- Macintosh ブラウザを使用してパフォーマンス・チャートを表示する際および Identity Management を構成する際の問題
- Macintosh ブラウザを使用する際の進捗ページの問題
- ログ・ページからのデータのポスト

同一ホスト上での複数のアプリケーション・サーバーの管理時に複数のブラウザ・ウィンドウを使用

Application Server Control 内で構成を変更する場合、ブラウザではユーザーが編集中のセッションの状態を追跡します。たとえば、ユーザーが「終了」または「適用」をクリックするまで、画面上の構成ウィザード内でユーザーが行った変更およびユーザー位置を追跡します。

1 つのホスト上に複数の Application Server インスタンスをインストールしている場合に、そのホスト上で OC4J インスタンスを管理するために 2 つ以上のブラウザ・ウィンドウを開くと、ブラウザの状態に問題が発生する場合があります。構成の変更中にウィンドウ間を切り替えると、予測不可能な動作が起きる場合があります。たとえば、セッションが異常終了したというメッセージがブラウザに表示されることがあります。

この問題を回避するためには、新しいブラウザのインスタンスをデスクトップから起動し、元のブラウザ・セッションから開いたすべての新規ウィンドウを閉じます。

Netscape 7 を使用している場合は、追加のブラウザ・ウィンドウ用に新規の Netscape プロファイルを作成する必要があります。

OC4J メトリックを収集するための Oracle HTTP Server の実行

アプリケーション・サーバーで OC4J インスタンスのパフォーマンス・メトリックを収集するには、アプリケーション・サーバー・インスタンスの Oracle HTTP Server を起動して実行している必要があります。Oracle HTTP Server のコンポーネントが停止すると、OC4J メトリックは収集されなくなり、Application Server Control で使用できなくなります。

仮想ホストに IP とポートの複数の組合せは入力できない

Application Server Control では、Oracle HTTP Server の httpd.conf 構成ファイルの仮想ホスト・ディレクトリに複数の IP アドレスの組合せを入力する機能はサポートしていません。

つまり、Application Server Control を使用して Oracle HTTP Server インスタンスを管理する場合、httpd.conf ファイルに次の組合せ以外は入力しないでください。

```
<VirtualHost 1.2.3.4:5678 >
  ...
</VirtualHost>
```

OracleAS Web Cache 管理ポート用プロトコルと統計ポート用プロトコルの一致

Oracle Application Server Web Cache には、2 つのポートが用意されています。1 つは管理ポートで、Web Cache Manager にアクセスするために使用します。もう 1 つのポートは、Web Cache のパフォーマンス統計を収集するために使用します。

Oracle Application Server Web Cache のプロトコルを変更する場合は、管理ポート用と統計ポート用に同じプロトコルを使用する必要があります。2 つのポート用のプロトコルが一致しない場合、Application Server Control はパフォーマンス・メトリックを収集できず、Web Cache ターゲットのホーム・ページで Web Cache Manager へのリンクが正常に機能しません。

JAZN 構成時にサポートされないパス情報

OC4J のセキュリティでは、ユーザー・マネージャを使用して、J2EE アプリケーションにアクセスするユーザーとグループを認証および認可します。アプリケーションのユーザーとグループの指定に使用できるユーザー・マネージャの 1 つに、JAZN ユーザー・マネージャがあります。

Enterprise Manager Application Server Control を使用すると、JAZN ユーザー・マネージャをアプリケーションに関連付けるように指定できます。Enterprise Manager の「アプリケーションのデプロイ：ユーザー・マネージャ」ページを使用すると、アプリケーションで JAZN XML 構成または JAZN LDAP 構成のいずれかを使用するように指定できます。

Enterprise Manager を使用して XML ベースの JAZN 構成を指定する場合は、次の行を orion-application.xml ファイルに入力します。

```
<jazn provider="XML" location=".//jazn-data.xml" />
```

Enterprise Manager を使用して LDAP ベースの JAZN 構成を指定する場合は、次の行を `orion-application.xml` ファイルに入力します。

```
<jazn provider="LDAP" default-realm="sample_subrealm" />
```

一部のアプリケーションでは、`jazn.xml` ファイルへのパスを入力して JAZN 構成を指定しますが、Enterprise Manager ではこのタイプの JAZN 構成をサポートしていません。このタイプの JAZN 構成は、`orion-application.xml` ファイルでは、次のように指定します。

```
<jazn config="jazn.xml"/>
```

このタイプの JAZN 構成を `orion-application.xml` ファイルに手動で指定した場合は、「Enterprise Manager OC4J Security」ページを使用できなくなります。あるいは、このページを正常に使用できたように見えても、後で問題が発生する場合があります。

ユーザー・マネージャを使用して J2EE アプリケーションのユーザーとグループを指定する方法については、『Oracle Application Server Containers for J2EE セキュリティ・ガイド』を参照してください。

OC4J アプリケーションのデプロイ時に発生する参照エラー

Application Server Control を使用して OC4J アプリケーションのデプロイを試行すると、次のエラーが表示されることがあります。

```
Deployment failed: Nested exception
Root Cause: Lookup error: javax.naming.NoPermissionException: Not allowed to
look up java:comp/ServerAdministrator, check the namespace-access tag setting
in orion-application.xml for details;
```

このエラーは、デフォルトの OC4J アプリケーションのユーザー・マネージャに、ユーザー `admin` およびグループ `administrators` が含まれていない場合に表示されます。

デフォルト・アプリケーションのユーザー・マネージャのユーザーとグループを表示または定義する手順は、次のとおりです。

1. アプリケーションのデプロイに使用した OC4J インスタンスの OC4J ホーム・ページにナビゲートします。
2. 「**アプリケーション**」をクリックすると、選択した OC4J インスタンスにデプロイされたアプリケーションのリストが表示されます。
3. 「**アプリケーション**」ページの上部に表示される「**デフォルト・アプリケーション名**」をクリックします。

Enterprise Manager に、デフォルト・アプリケーションの OC4J アプリケーション・ホーム・ページが表示されます。

4. ページを下にスクロールして、「**セキュリティ**」をクリックします。

Enterprise Manager の「**セキュリティ**」ページにグループとユーザーのリストが表示されます。

OC4J の「セキュリティ」ページでユーザーを追加した後は OC4J の再起動が必要

OC4J の「セキュリティ」ページで変更を行った後、その変更を有効にするには OC4J インスタンスを再起動する必要があります。たとえば、「[OC4J アプリケーションのデプロイ時に発生する参照エラー](#)」で説明するように、`admin` ユーザーおよび `administrators` グループを追加する場合は、手順の最後に OC4J インスタンスを再起動する必要があります。

ブラウザ・ウィンドウに表示される「SMISession has been invalidated」エラー

ブラウザ・ウィンドウに次のエラー・メッセージが表示される場合があります。

The SMISession has been invalidated. Resolution: Please close the current SMISession, start another one and reapply the actions

この問題を解決するには、タイムスタンプの右にある「**データを更新**」アイコンをクリックするか、ブラウザを閉じて再び開き、新規セッションを起動します。このエラーは、複数のユーザーが 1 つの

Enterprise Manager Application Server Control 上で競合する構成アクションを同時に実行すると発生します。

地域および言語オプション設定と NLS_LANG パラメータ

Oracle Application Server のインストール時、アカウントの言語設定がシステムのデフォルト言語と一致していることを確認してください。NLS_LANG パラメータは、言語設定に基づいて Windows レジストリに自動的に定義されます。

インストール後はシステムのデフォルト言語を変更しないでください。変更すると、NLS_LANG パラメータと言語設定が一致しなくなります。

新規作成した仮想ホストのアクセス・ログがログ・ビューアで使用できない

HTTP Server のログの名前、位置または作成に影響する操作を実行したとき（たとえば、HTTP Server の新規の仮想ホストを作成したとき）、ログ・ファイル・ビューアにその更新内容が反映されない場合があります。たとえば、新規作成した仮想ホストのログ・ファイルがログ・ビューアに表示されない場合があります。

この問題は、ログ・ファイル・ビューアが HTTP Server のログ・ファイルに関する情報をキャッシュしているために発生します。この問題を解決して現行のログ・ファイルを検出するには、「ログの表示」ページの「更新」アイコンを押してください。

ログ・ビューアでの XML ログ・ファイルの表示に関する問題

Internet Explorer のバージョン、およびアプリケーション・サーバーが実行されているサーバー・プラットフォームによっては、XML フォーマットで格納されているログ・ファイルを表示できない場合があります。

たとえば、「ログ・ファイル」ページでログ・ファイルの名前をクリックしたとき、Application Server Control によってエラーが表示され、ログ・ファイルの内容が表示されない場合があります。

この問題を解決するには、別のブラウザ、または別のバージョンのブラウザを使用して XML ログ・ファイルを表示してください。

Oracle Application Server 9.0.2 または 9.0.3 の削除後に発生する Oracle Application Server 10g Application Server Control に関する問題

特定の状況では、自動プロシージャを実行して Application Server 9.0.2 または 9.0.3 を削除すると、Application Server 10g ディレクトリ内のいくつかの構成ファイルが誤った情報で上書きされます。

Application Server 10g の Enterprise Manager 制御スクリプトが変更されると、その構成ファイルのバックアップが必要に応じて作成されます。このため、変更されたファイルをそのバックアップに置換することによって、この問題を解決できます。

該当する構成ファイルは次のとおりです。

```
$ORACLE_HOME/sysman/config/iasadmin.properties
$ORACLE_HOME/sysman/emd/targets.xml
$ORACLE_HOME/sysman/j2ee/config/jazn-data.xml
$ORACLE_HOME/sysman/webapps/emd/WEB-INF/config/consoleConfig.xml
```

それぞれの構成ファイルについて、複数のバックアップ・ファイルが存在する場合があります。バックアップには <original-file-name>.n (n は数字の 1 ~ 10) の書式で名前が付けられます。

最新のバックアップ・ファイルが 1、その直前のバックアップが 2 のように数字が付けられます。タイムスタンプをチェックするか、またはバックアップ・ファイルを調べて、最新の正しいバージョンのデータを判別する必要があります。ほとんどの場合、Application Server 9.0.2 または 9.0.3 を削除する前の最新のバックアップ・バージョンがこれに該当します。

構成ファイルをリストアする手順は、次のとおりです。

1. emctl コマンド (UNIX の場合) または「サービス」コントロール・パネル (Windows の場合) を使用して、Application Server Control を停止します。

2. 前述の構成ファイルを削除するか、または名前を変更します。
3. 正しいバージョンと判断したバックアップ・ファイルをコピーします。
4. Application Server Control を起動します。

Application Server Control のパフォーマンス・ノート

次のパフォーマンス・ノートを使用すると、特定の使用状況で Oracle Enterprise Manager Application Server Control のパフォーマンス全体を改善できます。

Internet Explorer および Netscape Navigator 7.0 でのデプロイ・パフォーマンス

Microsoft Internet Explorer または Netscape 7.0 を使用して OC4J アプリケーションをデプロイしようとすると、ファイルのアップロードにかなり長い時間（たとえば、45MB の .ear ファイルの場合で 10 分。Netscape 7.1 の場合は 15 秒）かかることがあります。これは、OC4J デプロイメント・ウィザードのパフォーマンスに直接影響を与えます。

Netscape Navigator を使用している場合は、Netscape 7.1 にアップグレードしてください。

Internet Explorer を使用している場合は、この問題に対応している次の Microsoft Knowledge Base Article を参照してください。

<http://support.microsoft.com/default.aspx?scid=kb;en-us;329781>

大規模な OC4J アプリケーションのデプロイの問題

大規模なアプリケーション（50MB を超える EAR または WAR ファイル）をデプロイする場合は、DCM デーモンのデフォルト構成では不十分です。このような大規模アプリケーションをデプロイしようとすると、メモリー不足エラーになります。

この問題を解決するためには、Application Server Control を使用して、次の手順で DCM デーモンの java ヒープを増やします。

1. Application Server Control の Application Server ホーム・ページにナビゲートします。
2. 「プロセス管理」をクリックして、opmn.xml ファイルを編集します。
3. DCM デーモンの構成セクションの場所を特定して、次の文字列を java-parameters データ・タグの値セクションに追加します。

-Xmx<nnn>MB

次に例を示します。

-Xmx128M

4. ファイルを保存します。

エージェントのメモリー・エラー

Oracle Application Server には、Application Server Control の監視データを収集する Oracle Management Agent が組み込まれています。Management Agent が、Application Server メトリックの収集中にメモリー不足になった場合は、Management Agent 内で実行中の JVM に使用可能なメモリー（デフォルトは 64M）を増加できます。

emd.properties ファイル内で、agentJavaDefines プロパティに -Xmx<nnn>M（たとえば、-Xmx128M）修飾子を付加して、Management Agent JVM に使用可能な java ヒープの量を増加できます。修飾子を認識させるには、Management Agent を再起動する必要があります。

emd.properties ファイルは、次のディレクトリにあります。

```
(UNIX) $ORACLE_HOME/sysman/config/
(Windows) $ORACLE_HOME/sysman/config/
```

追加のパフォーマンス・ノート

Application Server Control 内の各ページに対してキャッシュされたメトリック（デフォルトで収集され、エージェント・メモリーに格納されたメトリック）を取得するには、Application Server Control を起動する前に環境変数 EM_OC4J_OPTS を次のように定義します。

```
-Doracle.sysman.refreshFlag=true
```

Application Server Control が起動、停止およびその他のアクションを待機するように処理中のページを無効にするには、Application Server Control を起動する前に環境変数 EM_OC4J_OPTS を次のように定義します。

```
-Doracle.sysman.eml.util.iAS.waitForCompletion=true
```

Application Server ホーム・ページの opmn で管理されていないコンポーネントに対するステータスとホスト関連メトリックを取得するために、タイムアウト（デフォルトは 2 秒）の時間を長くするには、Application Server Control を起動する前に環境変数 EM_OC4J_OPTS を次のように定義します。

```
-Doracle.sysman.ias.ApplicationServerObject.timeout=true
```

Oracle HTTP Server リスナー・ポートが重複してリストされる

Application Server Control の「Port」ページで、Oracle HTTP Server 診断ポートを指定した Oracle HTTP Server リスナーについて、余分な Oracle HTTP Server リスナー行が重複してリストされる場合があります。この問題は、opmn.xml ファイルを変更した後に OPMN の再ロード操作を実行すると発生します。ポートが重複してリストされる問題は、通常、新規の OC4J インスタンスを作成したときに発生します。

Oracle HTTP Server を再起動すると、重複した行は表示されなくなります。

プロパティを Oracle Application Server クラスタ内に OC4J インスタンスに適用した際に誤解を招くおそれのあるエラー・メッセージ

OC4J の「サーバー・プロパティ」ページで Oracle Application Server クラスタ内に OC4J インスタンスに変更を適用すると、「クラスタ間でサーバー・プロパティが適用されました。」というメッセージが常に表示されます。実際は、環境変数、ポート、アイランドおよびアイランド・プロセス数の変更は、現在管理されている現行の OC4J インスタンスにのみ適用され、クラスタ内の他の OC4J インスタンスには適用されません。このページの他の値（Java オプションなど）はクラスタ間で適用されます。

クラスタ間で適用される値についての情報は、ページの上部にヒントとして表示されます。ただし、確認メッセージは不適切な場合があります。

アプリケーション・サーバー・インスタンスの Metadata Repository を変更した際の不明な Oracle ホーム・エラー

Application Server Control の「Infrastructure」ページから、中間層で使用する Metadata Repository を変更できます。Metadata Repository を変更後、次のエラーが表示される場合があります。

```
Error retrieving information of database managed cluster. Cluster Manager
initialization failure Root Cause: Unknown Oracle_Home:
"/private/iasinst/OraHome1". Resolution: Please refer to the base exception for
resolution, or call Oracle support.
```

この問題を回避するには、「Change Database Managed Cluster」ウィザードの最後のページにあるチェック・ボックスを確認します。デフォルトでは、バックアップおよびリカバリのためにこのチェック・ボックスが選択されています。ただし、バックアップやリカバリ以外の理由で Metadata Repository を変更する場合は、このチェック・ボックスの選択を解除する必要があります。

選択を解除せずに Metadata Repository を変更した場合、このエラーを回避するには、「Change Database Managed Cluster」ウィザードを再度実行して元の Metadata Repository に戻します。次に、再度「Change Database Managed Cluster」ウィザードを実行して、Metadata Repository を適切なデータベースに変更し、ウィザードの最後のページにあるチェック・ボックスの選択を解除します。

OracleAS Infrastructure のインストールを実行する場合、「home」というラベルが付いた OC4J インスタンスはデフォルトで使用可能です。ただし、Oracle Application Server の J2EE and Web Cache、Portal and Wireless または Business Intelligence and Forms のインストールを実行する場合、「home」というラベルが付いた OC4J インスタンスはデフォルトで使用不可になります。これは、正常な動作です。

コマンドラインから実行した管理タスクが Application Server Control のページに反映されない

管理または構成の変更 (dmctl コマンドラインの applyarchiveto コマンドを含む) が Application Server Control の外部で発生した場合、Application Server Control のキャッシュが消去されるまでその変更は反映されません。キャッシュを消去するには、タイムスタンプの右にある「データを更新」アイコンをクリックするか、ブラウザを閉じて再び開き、新規セッションを起動します。

Internet Explorer 5.5 を SSL モードで使用した場合の問題

Application Server Control を SSL モードで使用すると、Internet Explorer 5.5 の使用時に問題が断続的に発生する場合があります。

たとえば、J2EE アプリケーションをデプロイするとき、「500 - 内部サーバー・エラー」というメッセージが表示される場合があります。また、Oracle HTTP Server の再起動を要求するページなどの確認ページに応答した直後に、次のエラーが発生する場合があります。

Error: Processing already completed

この問題を解決するには、新しいバージョンの Internet Explorer にアップグレードするか、または Microsoft Knowledge Base Article 265369 を参照して SSL タイムアウト値を増やしてください。

OracleAS ProcessConnect または Oracle Workflow コンポーネント用のスキーマ・パスワードの変更はサポートされない

Oracle Application Server 9.0.4 では、Application Server Control は OracleAS ProcessConnect または Oracle Workflow Metadata Repository のスキーマ・パスワードの変更をサポートしません。

Infrastructure のインストールで Home インスタンスはデフォルトで使用不可

OracleAS Infrastructure のインストールを実行するとき、「home」というラベルが付いた OC4J インスタンスはデフォルトで使用不可です。ただし、Oracle Application Server の J2EE and Web Cache、Portal and Wireless または Business Intelligence and Forms のインストールを実行する場合、「home」というラベルが付いた OC4J インスタンスはデフォルトで使用可能になります。これは、正常な動作です。

スタンドアロン・バージョンの OracleAS Forms Services および OracleAS Reports Services の「Infrastructure」ページの使用

スタンドアロンの Oracle Forms および Oracle Reports Server 10g をインストールして Application Server Control を起動し、「Infrastructure」プロパティ・ページを表示すると、ページの「Metadata Repository」セクションに次のエラーが表示されます。

Error retrieving information of default metadata repository. Unable to establish secure connection to Oracle Internet Directory Server

さらに、ページの「識別管理」セクションに「構成」ボタンが表示されます。Infrastructure のこれらのコンポーネントは、スタンドアロンの Oracle Forms および Oracle Reports Server 10g のインストールには適用されません。このため、エラー・メッセージを無視して、「構成」ボタンはクリックしないでください。

HTTP Server の拡張プロパティを Netscape Navigator で編集するときのエラーと制限

Netscape Navigator 4.79 を使用して、HTTP Server の「拡張サーバー・プロパティ」ページから開いたファイルへの変更を適用したり元に戻すと、次のエラーが発生する場合があります。

A network error occurred while Netscape was receiving data
(Network Error: Connection aborted)

さらに、「拡張プロパティ」ページで編集している構成ファイルの内容は、Netscape の検索機能を使用して検索できません。

このエラーを回避するには、サポートされているバージョンの Microsoft Internet Explorer を使用してください。

Enterprise Manager を使用して WAR アプリケーションを再デプロイする際の回避策

Application Server Control の「OC4J アプリケーション」ページで、EAR ファイル（ファイル・タイプが .ear のアプリケーション）および WAR ファイル（ファイル・タイプが .war の Web アプリケーション）をデプロイできます。

Enterprise Manager を使用して WAR ファイルをデプロイするには、「OC4J アプリケーション」ページで「WAR ファイルのデプロイ」をクリックします。これによって、WAR ファイルのデプロイ処理が開始されます。

最初に WAR ファイルをデプロイすると、Enterprise Manager はデプロイ・ツールを起動します。このツールによって、WAR アプリケーションは、デプロイの前に J2EE アプリケーション（.ear ファイル）にラップされます。Enterprise Manager が WAR ファイルをデプロイするために作成する .ear ファイルには、アプリケーション・モジュールが記述された application.xml ファイルが含まれます。.ear ファイルにはアプリケーション名が付けられます。デプロイ・ツールを使用して手順を進めるときに、この名前を指定します。WAR アプリケーションをデプロイすると、新しいアプリケーション（.ear ファイル）の名前が「デプロイ済アプリケーション」表に表示されます。

WAR ファイルは、Enterprise Manager を使用してデプロイした後、「OC4J アプリケーション」ページでアプリケーション（.ear ファイル）を選択し「再デプロイ」をクリックしても、再デプロイできません。

Enterprise Manager を使用して WAR ファイルを再デプロイするには、最初にアプリケーションをアンデプロイして、次の手順に従ってアプリケーションを再度デプロイしてください。

1. 「OC4J アプリケーション」ページの「デプロイ済アプリケーション」表で、WAR ファイルがラップおよびデプロイされたアプリケーション（.ear ファイル）を選択します。
2. 「アンデプロイ」をクリックします。
3. 「WAR ファイルのデプロイ」をクリックします。デプロイ・ツールで、アプリケーション名として、WAR ファイルがラップおよびデプロイされたアプリケーション（.ear ファイル）に対して最初に指定した名前を指定します。

WAR アプリケーションをデプロイすると、Web アプリケーション（.ear ファイル）の名前が「デプロイ済アプリケーション」表に表示されます。

ログ・ファイルのタイムスタンプが正確でない

オペレーティング・システムによって表示されるログ・ファイルのタイムスタンプ（Application Server Control Console のログ・ビューアにも表示される）は、必ずしも常に正確ではありません。ログ・ファイルには最新のログ・メッセージが含まれますが、オペレーティング・システムによって表示されるタイムスタンプは、最後にファイルに書き込まれたメッセージより古い場合が多くあります。

「Web Cache 管理」ページへのリンク時にページが表示されないエラー

Application Server Control Console を使用して Oracle Application Server Web Cache を監視するとき、Application Server Control Console の「Web Cache」ページから「Web Cache Manager administration」ページに直接リンクできます。

ただし、Microsoft Internet Explorer 6.0 を使用しているとき、「Web Cache Manager」ページに接続しようとすると次のエラーが発生する場合があります。

The page cannot be displayed

このエラーは、Microsoft Internet Explorer 6.0 のセキュリティ更新の 1 つを使用してシステムを更新した後に発生します。

次の手順に従って問題を回避します。

1. エラーがブラウザに表示された場合は、すぐに、Internet Explorer ブラウザの「アドレス」フィールドの URL を調べます。
2. URL から次のテキスト文字列を削除します。
administrator:badpassword@
3. [Enter] を押し、プロンプトが表示されたら Web Cache 管理者アカウントの資格証明を入力します。

Oracle Application Server 10g (9.0.4) を使用するコンピュータでの Enterprise Manager Grid Control 10.1.0.2 Management Agent の削除

Enterprise Manager Grid Control 10.1.0.2 Management Agent を、Oracle Application Server 10g (リリース 9.0.4) のインスタンスが 1 つ以上あるコンピュータにインストールしている場合は、Management Agent を安全に削除するためにいくつかの処理を実行する必要があります。

Oracle Application Server 10g が Management Agent より前にインストールされている場合は、Management Agent のインストールおよび構成フェーズ時に自動的に検出されます。Grid Control Console を使用すると、Management Agent が常駐するホストで一連のターゲットとしてリストされるアプリケーション・サーバー・インスタンスを確認できます。

さらに、Application Server Control Console から集中管理を明示的に構成した場合、または Grid Control Console の「Application Server」サブタブで「追加」ボタンをクリックして Oracle Application Server 10g インスタンスを検出した場合は、Management Agent を削除するとき、次の手順に従ってください。

1. Management Agent を削除する前に、次の手順に従って Grid Control Console から Application Server 10g インスタンスを削除します。
 - a. Grid Control Console で、「ターゲット」を選択し、「Application Server」を選択します。
 - b. 削除するインスタンスを選択して、「削除」をクリックします。
 - c. 処理を確認して、操作が完了するまで待機してください。

注意： アプリケーション・サーバー・インスタンスのすべてのサブターゲットが削除されるまで、待機する必要があります。「管理サービス」タブの「Deleted Targets」をクリックすると、この非同期操作の進捗状況をチェックできます。削除対象のすべてのターゲットが削除されるまで待機してください。

2. ホスト上のすべての Oracle Application Server 10g インスタンスでこの操作が完了した後、Management Agent を削除できます。

すでになんらかの方法で Management Agent を削除している場合は、<AS_HOME>/sysman/emd ディレクトリの centralagents.lst ファイルから <AGENT_HOME> エントリを削除してください。<AGENT_HOME> が最後のエントリの場合は、centralagents.lst ファイルを削除できます。この操作は、Oracle Application Server 10g インスタンスごとに実行する必要があります。この手順を実行しないと、OC4J インスタンスの作成または削除など、Oracle Application Server 10g の構成を変更するときにエラーが発生する場合があります。

OC4J インスタンスの追加時または削除時のエラー

Oracle 管理エージェント（管理エージェント）リリース 10.1.0.2 を Oracle Application Server 10g、リリース 9.0.4 のインスタンスが 1 つ以上あるコンピュータにインストールした場合、後でその Oracle Application Server インストールにおいてコンポーネントの構成を変更するとエラーが発生する場合があります。たとえば、インストール後に OC4J インスタンスを作成したり、Oracle Application Server コンポーネントを構成した場合などです。

管理エージェントを Oracle Application Server 10g が存在するコンピュータにインストールすると、リンクが作成され、インストールされた Oracle Application Server のコンポーネントを管理エージェントが監視できるようになります。

Oracle Application Server コンポーネントを既存の Oracle Application Server 10g インストールに対して変更または追加した場合には、その変更内容が管理エージェントに伝えられます。ただし、変更内容が管理エージェントに伝えられない場合があり、Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control (Application Server Control) に例外がレポートされます。

この問題を回避するには、/bin サブディレクトリにある管理エージェントのホーム・ツリーの次の 2 つのファイルを編集する必要があります。

1. emctl.bat ファイルで PATH 変数を設定する文の後に次の行を追加します。

```
cd %EMDROOT%
```

2. emtgtctl.bat ファイルで %EMDROOT%¥bin¥emtgtctl.exe %* 文の直前に次の行を追加します。

```
PATH=%ORACLE_HOME%¥perl¥5.6.1¥bin¥MSWin32-x86;%ORACLE_HOME%¥bin;%EMDROOT%¥bin;%ORACLE_HOME%¥jdk¥jre¥bin¥server;%ORACLE_HOME%¥oui¥lib¥win32;%PATH%;%SystemRoot%;%SystemRoot%¥system32
```

Application Server Control において OracleAS Web Cache を管理および機能監視するための Cookie の有効化

Application Server Control を使用している場合、OracleAS Web Cache を管理および機能監視するためには Web ブラウザの Cookie を有効にする必要があります。Cookie を有効にする方法の詳細は、Web ブラウザのオンライン・ヘルプを参照してください。

Macintosh ブラウザを使用してパフォーマンス・チャートを表示する際および Identity Management を構成する際の問題

Macintosh コンピュータで Apple Safari ブラウザを使用している場合は、Application Server Control Console を使用して、Application Server 中間層インストールの Identity Management 構成を構成および変更できません。

具体的には、Application Server Control Console の「Infrastructure」ページの「ID 管理」セクションで「構成」をクリックしたときに、問題が発生します。Identity Management ホストのホストおよびポートを入力できますが、ウィザードの次のページが表示されません。

また、Application Server のホームページのパフォーマンス・チャートが Macintosh ブラウザでは正しく表示されません。該当箇所にはチャートのかわりに小さい疑問符が表示されます。

この問題を回避するには、次の手順を実行します。

1. 「サービス」コントロール・パネルを使用して、Oracle ホームの Application Server Control を停止します。
2. 修正するアプリケーション・サーバー・インスタンスの Oracle ホームにある次の構成ファイルを、テキスト・エディタを使用して開きます。

```
%ORACLE_HOME%¥sysman¥j2ee¥config¥emd-web-site.xml
```

3. ファイル内で次のエントリを探します。

```
<!-- The default web-app for this site, bound to the root -->
<default-web-app application="em" name="default" />
<web-app application="em" name="emd" root="/emd" load-on-startup="true" />
```

4. <web-app> タグに次の引数を追加します。

```
shared="true"
```

たとえば、次のとおりです。

```
<!-- The default web-app for this site, bound to the root -->
<default-web-app application="em" name="default" />
<web-app application="em" name="emd" root="/emd"
load-on-startup="true" shared="true"/>
```

5. 変更内容を保存し、em-web-site.xml ファイルを閉じます。

6. 「サービス」コントロール・パネルを使用して、Oracle ホームの Application Server Control サービスを起動します。

Macintosh ブラウザを使用する際の進捗ページの問題

Application Server Control で新規 OC4J インスタンスの作成などの操作を実行している際に、Enterprise Manager に進捗ページが表示されることがあります。これは、操作が進行中であることを示しています。

Macintosh コンピュータで Apple Safari ブラウザを使用している場合は、操作の完了後にも進捗ページが表示され続けます。その結果、操作の確認ページが表示されません。

この問題を解決するには、EM_OC4J_OPTS 環境変数を次の値に設定して、Application Server Control を再起動します。

```
-Doracle.sysman.emSDK.eml.util.iAS.waitForCompletion=true
```

ログ・ページからのデータのポスト

Application Server Control のセキュリティを構成した後、「ロギング」ページのフォーム・データの更新に関する問題が断続的に発生する場合があります。これらの問題は、Microsoft Internet Explorer ブラウザで、セキュリティ更新プログラム 832894 (MS04-004) または修正プログラム 821814 をインストールした後に発生することがあります。Microsoft Internet Explorer には、HTTPS Web ページでのフォームの使用に関する既知の問題があります。これらの更新に関する問題は、「ログ・リポジトリの検索」ページの「拡張検索」機能で確認されています。

この問題を回避するには、Microsoft Q831167.exe パッケージおよび Microsoft 社が推奨する他の関連パッチをダウンロードします。

関連項目 :

<http://support.microsoft.com/default.aspx?kbid=831167>

ドキュメントの誤り

この項では、ドキュメントおよびオンライン・ヘルプの既知の誤りについて説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [setupinfo.txt ファイルの位置の誤り](#)

setupinfo.txt ファイルの位置の誤り

setupinfo.txt ファイルには、Application Server Control へのアクセスで使用できる URL およびポート番号に関する情報、および Oracle Application Server に関するその他の情報が格納されています。

オンライン・ヘルプ・トピック「Oracle Enterprise Manager Application Control の表示」では、Application Server をインストールした後のこのファイルの位置が誤って記述されています。このファイルの正しい位置は次のとおりです。

`$ORACLE_HOME/Apache/Apache/setupinfo.txt`

